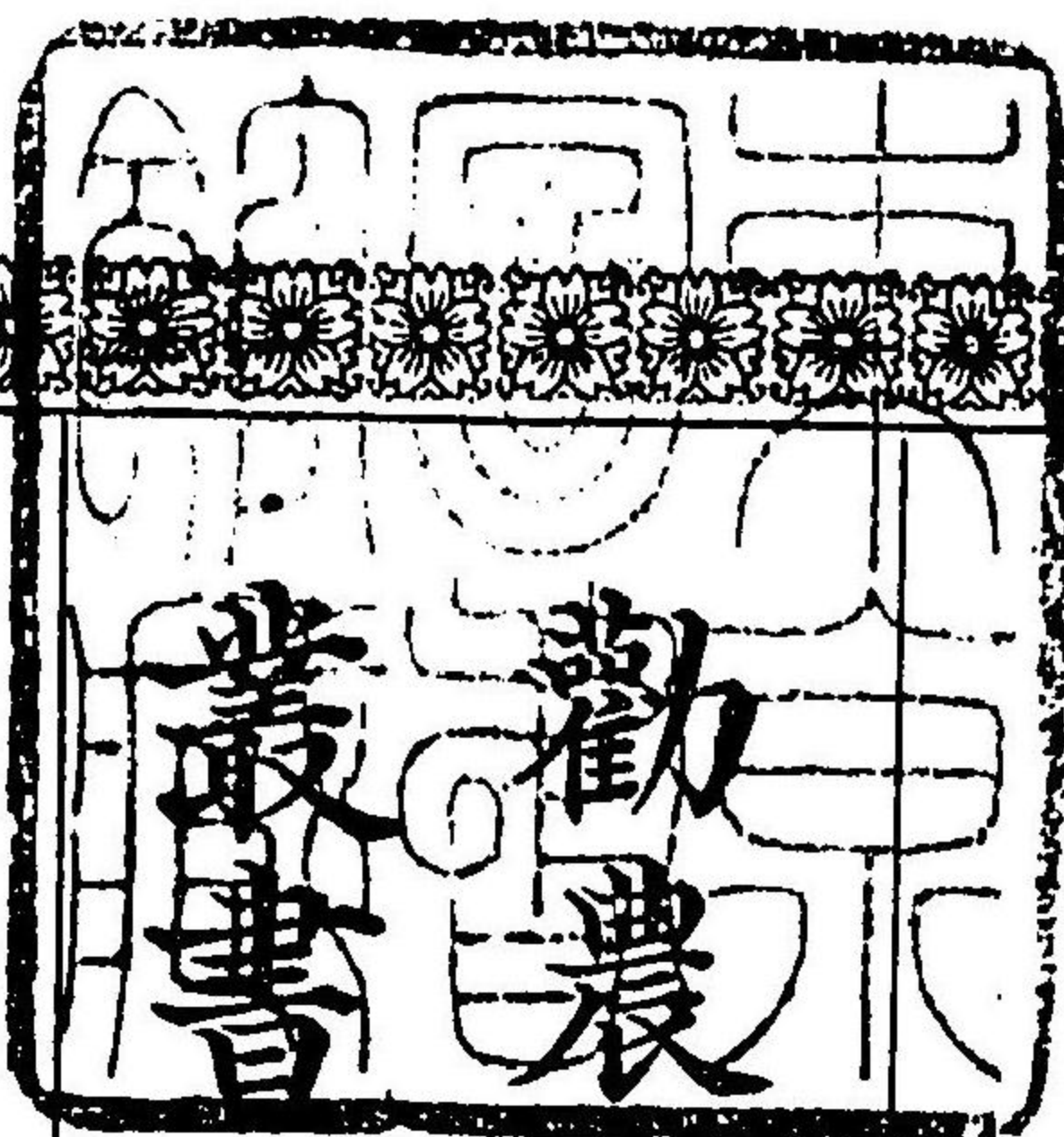


明治十九年

月廿三日內務省贈付

故人土屋又三郎著



# 耕稼春秋

農書肆

有隣堂發





勸農書 耕稼春秋卷五

稻勘辨

中打

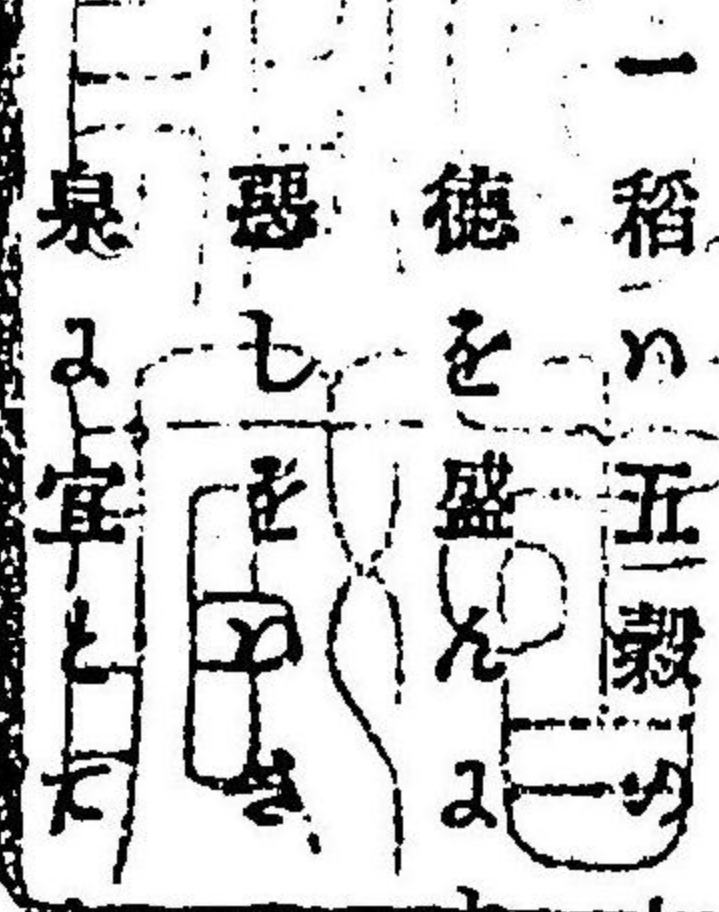
菊収

大麥小麥勘辨

雜事



耕稼 稻勘辨



一稻の五穀の中にて極く貴物也大陰の精よて水と合く其徳を盛んすといふく水よりて生長する故土地の善悪しき水をみ云すして先水を専する事也又稻の江泉の宜しき上流水有か又の泉地考なと有て水のかけ引自由よて早にも絶す又洪水などの災もなく殊に村里の濁水の流を清る地と第一とする也稻の種早稻中稻晩稻美悪色々其品多しといへ共我石川郡四拾年來よ三度改見るよ凡稻の名の九十色程よして百よ満事なし惣して稻の名の所よ寄て替る故品多しと諸人思ふ事尤なり味よく實多をゑらひて作るへし其上風虫などにもさの



み痛ます其所の土に相應して利分を憎れるを考て可用  
 必しも前々より其所より作り來りて此外の求ふらすと  
 一編は思ふへからすたねのよしわし相應不相應にて過  
 分の損徳有事諸書に委しく記し置り稻の柳も生すとて  
 揚柳の榮ゆる歳か稻のよきもの也本朝にても農民の世  
 話に梅田枇杷麥共云也考みるに此説大拙たかわす早稻  
 の大形四月上旬頃より植る物也年により中旬などに植る  
 事も有或の郡或の村に寄て二三日より七八日も遅早在  
 加州にて能美郡國府村古濱村近邊の第一とやし是小松  
 の梯一里程川上あり此外段々遅々に植る早稻の植て七  
 十五日程にてのまゆ穂は出る夫より十四五日にて穂出  
 揃物也又夫より廿三三日にて天氣次第早稻蒔とる苗を

植く以上百十日程にて米は成物也

- 一中稻は四月植て九十日程よりはしり穂出く夫より廿一
- 二日程にて出揃物也又夫より廿七八日おて蒔取物也是  
 苗を蒔て百三十八九日にて米は成物なり
- 一晚稻四月中旬植て百日程にてはしり穂出て十七八日  
 にて穂出揃廿七八日大に運物の三十日にて能實入也天氣  
 を少々見合稻蒔物也惣して粃の種の春彼岸中日は池へ  
 漬池は廿日程置是苗代の所より委く有種池へ漬ての日數  
 貳百十日程にて晚稻蒔物なり
- 一田植る時分の事種蒔て三十三日を苗役と云然共近年と  
 苗役をまゝす廿七八日にて各々植る也村々わけ植初る  
 事并表田共ふ二三日亦の六七日の遅速は有へし何れも田



畠共少早をよしとす惣して稻は限らず草の類は節の氣  
 先立て生る物成故時をねくる、は損あり時をかくる  
 稻は後の手入を尽しても十分の實なし殊におろき稻  
 の秋颯の災有時分能植たる稻の莖すくやかましてかぶ  
 大く穀しけく穂糊の皮うすく糝なし畚く米多く減らす  
 時をかくる、稻の莖よわく糠厚く万災多し必天の時を  
 失ふへからず儲芸る事は苗を植付て十日計過ればよく  
 ありつく物也其時は草はいまふ目よみへねども早草  
 の根の土中おはひこる也上の農人は見へざるも芸り中  
 の見へて後芸り見へても又どらざるは下の農人と云な  
 り去り一番艸を植付る後十五六日廿日計までとり夫  
 より又やかてとるを報効といふて相つゝさ油断せずと

る事也取残したる草同く根有て手風は觸て却てはひこ  
 る苗を妨事甚し頓て間もなく取尽せり重て生る草は苗  
 におされぬ菜へ兼る其隙は苗思ひの儘はふとる物也夫  
 より段々四番迄も芸るへし後よ草なきとてやむ事なか  
 れ稻は浮根浮葉とて無用の根葉がわきよはひこる物也  
 是を其儘おけは精か脇よぬけて實あしき故是をもかく  
 り去へし右は論る如く惣して物の實を立根の精より生  
 る事なれり實を取物は何も立根の先にこやしよく行わ  
 たる養を専とし立根のよが土に當らざる様よすへし上  
 の日よよく當りたる細土もども底よ入て立根はよあ  
 ひて思ひの儘よはひこり其精を以て上よつよく發生す  
 る心得是實を求る第一の工夫也脇根はいか程榮へはひ



こりても其精氣皆枝葉の榮と成迄よてさして實りの益  
 よはならぬと心得へし古は水田の中をも鋤よて打かト  
 りかさあざりて芸る事も有といへ共近代は手よく委し  
 かくかさあざる第一田ひゑを懸よぬき去よしくはなし又  
 云稻よむら枯虫氣する事ハ尤年の豊凶よよるといへ共  
 田のこなし疎かよて塊有又と糞むら有て毒氣其間よ滯  
 り此病を生る事有と知るへし農書よ大塊の間よ秀苗な  
 しと云てあらか塊の間ようるのしき苗ハ生立ぬ物也  
 と云土よく和せざる故也春より二三度犁かやし干かさ  
 ざるよ糞を入犁おほひよくかさくたき植時分よ成るの  
 前方よ水よしかけかさならし十日十五日もして塊をわ  
 きけふれ糞と土と和合し土能熱し黒く成てよはひ有時

分植度物也水の懸引の事雨年の淺く旱年は深く堅田は  
 少し深く泥田ハ折々水を落して苗痛さる程よして苗の  
 根よ熱氣の通る心得する事も年よよりてハ指引有へし  
 所よよりて陰氣の強き田は水よ落す手立もなくて叶ぬ  
 事也凡深田の分ハかりそめよも天陽をかり用るとて春  
 耕すより干田よなるへきは云よ不及初終日よあつる心  
 得第一肝要の事也水深くして熱氣下迄通らされハ苗榮  
 ぬ物也然る故よ用水の自由成田ハ随分大水よ當る事を  
 嫌ふ陽氣の通る工夫よなすへし堅田植てより半日を水  
 なくてハ忽ち苗痛むもの也當時痛さる様なれ共實り必  
 あしくされと後よ蒔し穂前よりは水をはつし地を堅め  
 置青穂少よなくなり能く熟するを待て日和を考へて蒔



へし惣して田の水は益と限りなり益過れり田の水の皆落也稻の早き年の七月初も水落根の土かふけれり實も堅く成物也苧干事は堅田の其儘田は攤け干へし深田の干へき地なき所ならはさよかけて七日程はして稲入る惣して苧納る物は稻に限らず油斷なく水火の來ると防か如くいかよも速ますへし手廻しゆるくては多くの苦勞目前も空しく成事多し取分稻はいまさくたひれさる中も苧収むへし但霜も逢されは青米も有其上田もて能さらさずして早苧収る米は來夏損し出も付て甚減物也扱一霜二霜もあわせて苧るは久しく収置ても損せぬもの也堅田の米より沼田は米悪しけれと夏損せぬ物也

一稻穂も出る事二百十日もすきと出揃ひたる吉花心よく付花さく間二三日もして早くかたふく心よし惣して穂出かね二百十日過ても穂の揃ふ事見へすして段々も花らすき年の悪作也二百十日前後三四十日の天氣相第一也出來不出來は夏土用の天氣も有實入事の此節の天氣相の吉惡もて上中下有殊更土用四季同じと云共春の土用と必追て夏土用善惡有物也耕作善惡の品々有と雖表立所の土用なり春土用の内天氣能けれり沼田の土くさりかふ田の能干て出來よし天氣あしく曇かち又雨ふりかちの年の第一作も不出來のとなり考へ知るへきもの也

中打



一すては種を蒔苗と植て後農人の勤の田畠の草と去て其根を絶へし稂蒠とて苗も能似する草有此草は苗も先達て茂り榮へ暫時も去されぬ程なくはびこりて土地の氣をうばひ竊むゆへ苗を妨る事限りなし油断なく取去へし喻は草の主人のとく本より其所に在來もの也苗の客人の如脇よりの入人なれぬ大形の力を用ての悉くのろき去かたし其上能物の生立かたく悪しき物の榮へやすき世よの常の事なれぬ草の榮て五穀等と害するの甚速か成もの也此故は上の農人と草のなまた目も見へざるに中打し芸り中の農人の見へて後芸る也みへて後も芸らざるを下の農人とす是艸は天地の咎人也

一畠物の苗生じて馬の耳の如成時分中打するともいふ也

苗一二寸土を生出さる時時中の高下土むら有をバかきならし芸りぬきたる草を取田おれぬ苗の根の下は踏こみ畠ならば畔の高き所は攤げおきかれて後植物の根のきぬよせ置て土をおほひ又其上よりも糞をかくれぬ枯たる草腐りつふれて土よく肥るもの也是をきおふと云なり古より耘えん耔じのくさきり草おほふとて苗の根に枯たる艸かやをねはひおく事也

一農業全書云り五穀其外も中打する事小鋤と吉とするとて鋤熊手の類もく細かよかぢり懸けんようつ事也大鋤も宜じからず尤物もより時よる事なれ共強てあらく中打する事ことよからぬ事也唯草の根と懸けんも打さりて苗の根もあらく當るへからず小鋤の草と去のみあらず地懸



よして穀多く糠うすく米欠事なし委しく中打する事十  
 へんなれの米を得るとく糝なく實多しと古より云り又  
 曰春の中打の地と起し夏は草を削殺しからすと心得へ  
 し是一の習也又春の取分温氣の在時中打すへし夏とい  
 へども六月以後七月の温も觸るも苦しからず春しゆり  
 たるよ中打すれば地かたまりて苗痛物也夏の苗しけり  
 て日を見る事なし夫故よまめるといへともかさまる事  
 なくさのみ妨どちす又夏の熱氣強くして底迄乾たる  
 に中打深くすれば苗痛事あり又云黍粟の類の苗のま  
 畦の高き所とひとしからざる時早中打一へんし又五七  
 日して報鋤とて頓て打事也其後又一へん以上三遍程よ  
 し人手間なき者の止へし餘力有者の秀く後も一へんか

るく打たるかよしと農業全書よ有但てまど大豆は二遍  
 よしてやむへし亦中打の始の第一遍の深きを好まずさ  
 らくと軽く打二へん目の深くすへし三遍目よりの次第  
 よ浅かよしのかんとあれの初の一へんの草のめたゝん  
 とすると削殺し二へんめの深く打事の植物のまた立根  
 計にてわき根は菜ぬ間よ底の塊をも打碎き根底の氣能  
 めくるためなるへし三遍の時の早脇根やうやくはひこ  
 る故深く強く打は苗痛事有然る故よ如斯漸々よ浅く打  
 事なりよかさ中打する度毎に干たる細土の底よ入る  
 植物の細根是よ思ひ合て菜へはひこる心得する事肝要  
 也惣して田畠中打度々すれの植物能生長し實も宜舖物  
 也其上物よより度々根本を土をかけて猶以よし然共加



州の堅田は二へん沼田の一過なり島方の物より二通する也

蒔収

一種を稼うりと云とら斂とらを種しよと云種斂しよの年中の始終也春つゆ力耕し秋獲収る事の暫も油断なく偏に盜賊を防き守か如風雨のためよろこなれ零落せん事と片時も忘るへからず

一稼の農事の本種もとの農事の末なり本かなくして末重く前ゆるくして後急成事は其利なき事也春の秋の収の多かかん事を願ひ、則春の耕しを懇よし怠るへからず春の勤委けれの秋の實りより利あらん事壺中の物と取る如くなり

一借又秋の蒔収は物悉く能實のりて日秋を能見定誠より火

を救か如く精力を盡し務働き暫しも油断なく刈ぬへし只一時の風雨より年中の苦勞を空しくする事も有る夜を日は付く蒔収へし耕作の習ひて蒔収て場より入されの安堵のならぬ物也其上苗を植より稻取入る中より自然地震有る必生物よからず物不足する事章なり其年の豊凶の極も必獲取る日ならての不定故災もなく蒔収るの誠より大きな幸此上もなき事なれりよるこひて先所の氏神へ手向祭るへし則天地の萬物を生立る氣も人の受る氣も本二つなき理りなれと入愛れば天もうれへ人悦へり天も悦ふ程なり然り天地の人を育ためよ儲る穀物と事故なく蒔収ぬるの難有仕合也と丹誠を尽して祝悦樂むへし夫人事の實より天地の感應有事の形の影



のまゝかひ聲のひゞきも應ずるか如く速なる事なれば  
 正直を専よし怠なく勤むれり其外徳も隠ひ福を得る事  
 うたかふ所もあらず然共凡人のならばしの淺間敷の欲  
 むいたゝきなく其分限を辨す妄りも貪る心のみ深して  
 天のあたへを不足と計うれふるは是誠も天道もさかふ  
 理りもて災を招く道ありされは人々貧富を天も任せ其  
 職分を能勤て天人力を樂むへし殊更農人は春の耕し夏  
 の芸りも力と尽し時至りぬる秋の収をゆゑんて苜取  
 へしまた植るは万陽氣を以植苜物と陰氣も成て収る理  
 ゑて植付事は一日もはやく時先立を吉とす陽氣のす  
 る故也苜収るは遅く能熟して一日二日も遅とよしと  
 す陰氣はかくるは故かり去とも麥と苜の初り先少し

青穂とましまして苜はとよなくての終は梅雨の恐れ有跡  
 の耕しも又時よかくれて段々夏秋の芸りまでかくるは  
 事なれり片時も油断すへからず簞笠を着ても苜取へし  
 大麥小麥勘弁

一大麥の秋蒔て夏熟す四時の氣を受蓄穀の尽る時分出來  
 て民の食と助けゆき新穀の出來るまでの助と成されり  
 稻も次て五穀の中もて貴き物也此故も聖人は是を重ん  
 春秋も稻と麥との損毛をば書せたまへり實も近世靜  
 監もて民多くなりぬ麥作の勤疎かならば食物乏かるへ  
 きも都鄙是と作る事専成故麥の多き事甚も古も勝れり  
 されは今民の養の助と成事是も續く物なし實もめくた  
 き穀物也麥と惣して田ならばしつけなき堅田よし弱く



薄き地の大麥よよからず悪し其種よ色く數多き物也若  
 障り有て未よ蒔植るならば必灰こゑ馬糞などの能よへ  
 と多く蓄置肌糞と能致し種おほひを厚しおけハ雪霜よ  
 痛すして春よかりて榮ゆる物也眞糞馬屋こへ何れも灰  
 こへはよし取分小麥よ灰を以こおほはされハ寒氣よい  
 たむ物かり五畿内東海道は麥作大分よして宜舖町人ま  
 て朝夕食とす北國の麥と違ひ地宜しく天氣能故か麥の  
 皮も薄く春はやくよはやく白むものなり  
 一 小麥地の拵其外大麥よ替る事あり大麥より少し遅く蒔  
 所も有同蒔時も同し小麥田ハ大麥田より遅蒔物也小麥  
 蒔地はさのみ肥たるを好まず若すゞれて肥たる地よ肌  
 糞を多く用れハ根くさり出來過る事も有專灰こへと以

て植へし温氣を好み底の土よあけて作る事を好て高く  
 かわきて輕き土よ宜しからず春よもかりて修理の遅は  
 實りよからず其上春穂よ出て實る時分地の堅く引まむ  
 る事と好て根の土乾うつけたるを嫌ふ物也小麥之取わ  
 け念を入種とゑらふへし種惡しけれハ生兼る物也まし  
 りかく實りよきを夏の土用よ能干糞虫くひをよよく去へ  
 し是又種二三色有物也能く土地の相應を撰て作るへし  
 又風烈しき所よハ穂もからも強く實の落さると撰て作  
 るへし又云麥を蒔地ハかりそめにもまめり氣のつよき  
 時ハ耕し蒔へからず當年地かままりて麥の盛長あしき  
 のみあらず來年の稻迄出來よからず但小麥ハ少まめる  
 氣の時蒔よるか實り吉又小麥跡田蒔るもの也田に小麥



て植へし温氣を好み底の土とわけて作る事を好て高く  
かわきて輕き土に宜しからず春も亦りて修理の遅は  
實りよからず其上春穂も出て實る時分地の堅く引えむ  
る事と好て根の土乾うつけたるを嫌ふ物也小麥と取わ  
け念を入種とゑらふへし種惡しけれは生兼る物也まし  
り亦く實りよきを夏の土用は能干糞虫くひをよく去へ  
し是又種二三色有物也能く土地の相應を撰て作るへし  
又風烈しき所は穂もからも強く實の落さると撰て作  
るへし又云麥を蒔地のかりそめにもえり氣のつよき  
時の耕し蒔へからず當年地かままりて麥の盛長あしき  
のみあらず來年の稻迄出來よからず但小麥は少えゆる  
氣の時蒔さるか實り吉又小麥跡田瘠るもの也田に小麥



を作る事の所よりて遠慮をへし小麥のから田に入は  
毒なる故也かふをも土きはよりつめて蒔まにまてかく時  
田は有麥かふをかき去へし惣して小麥の大麥よりこへ  
少分入第一灰をへよし石川郡にて松住近邊の小麥の上  
也

雑事

一宮崎氏農業全書云り茂木の本は豊艸なく大塊の間は  
美苗なし茂る木の本はうるのしき草なく荒塊の間に  
は見事成苗は生たゝんもの也と云是田島は草多塊有な  
から物植べからざる事を云り耕を深くし日と合せ細か  
よかき細土と糞と和し熟するを専する也かくの如く  
能地をよなして植れば大形の日照をわひてもさのみ痛

ます色くのくせさいなんものかれ全く損毛して手を空  
しくする程の事のあき物也是兼て養手入よき故也

一海邊又の潟端潮入所の田地又の川端川除其圍年々丈夫  
よ土手を築圍を能し少破の時は肝煎組合頭相談して春  
初又の秋稻蒔前百姓透の時分修理すへし大破よ及ふ時  
の其十村御奉行へ斷御普請を乞へし川除第一の義也入  
川有時川端の百好川除よ懸り隙を費迷惑する事口傳有  
一潮は稻よの大成毒也苗より蒔前まで潮さしての損る物  
也又潮寄明成物よて川ぬるけれの氷底を潮登る物也其  
潮登る時川の中へわら筋を下しわらをなむるよ心大き  
よ盤のやし淺野川の才川より流ぬるよ故大野川口より  
潟の内へ潮のはる事度よ也此時の必稻苗損して潟端損



亡有之者也惣して瀉廻りの照年植物植出水高き時の立毛不足すといふまかれども河北の瀉の深し切岸の心にて水干の時も植出す事なし越中瀉能州瀉の日干の時植出す所有と見へたり田へ潮入所翌年迄作毛よからず農業全書よ潮入所の蠶豆又の木綿等作て前の年の潮氣をぬいて其次よ稻と作りてよしと書す去共此國にと左様の事いならざるもの也

一山岸畑塚野原などよ何よても植おかす屋敷近邊まへきもなくうつけたる村などに漆桑茶其外樹木を取品よを植さすへし若又禿桑漆楮或の麻染あいか様の類を作り出す所の者へ相談すへし尤地心よよりて相應せざる事有へけれども大形心を付べきもの也

一百姓大小とも屋鋪よ竹を持さると萬事に用る事のかくるものなれば少つゝ成共竹を植へき也但屋敷の西北の方然へき東南を開て西北を閉れり夏すゝしくして冬あたゝか成地西北能故よ草木も能實る也又西北をあけて東南をふさげり夏あつくして冬寒し地面かすけて作り物の實入少なし其外野山よ餘計有ば大竹から竹まの竹敷を澤山にのやせば末く地普請等よつかひてよし其上百姓居屋敷よ植る木の善惡によつて家廻りの畠必出來善惡甚よ違有もの也

一我一年關東へ趣よ百姓の語る千石の村有山又は草蒔場もなく本より山野なくして薪なけれり下畑下ゝ畑をつよし蒔種を蒔一度植れり年を追て次第に茂り毎年蒔取



雜穀のかたよ交薪よ用ゆ少し成共本田をつぶす事ハ宜しからすと雖品よより如斯然間夏成の年貢不足故よ一村男女ととよ廷と織せ次第よ鍛練夕なるまでよ十二三枚程宛織出し是を賣夏成年貢を拵る由其一村の藁不足して近邊のわら迄かい取廷織となれば諸事考可有之者也

一凡木と植所の深山幽谷の土地厚く深く尤肥たる地を吉とす高き岡ハ是よ次り若ハ平地にても土地よ宜き木を計て栽へし古より唐の書ハ十年の謀ハ樹を植るよありと云り又木栽る者ハ用を十年の後よ期て植て十年計も過れハ必用よ立物なりと見へたり本朝よても杉檜松桐檜其外ふとりやすき木を肥地よ植れハ十年の内外よ

て必小材となる物也薪よする雜木ハ四五年を過して用よ立物也或ハ桑漆茶楮等の四木又ハ柿梨桃栗杯の菓樹ハ子とらへ或ハ接木よして二三年を過して實を結ふ物也凡有用の材木菓實の樹木よ至る迄能其地味を知らずしてば心力を盡て植るといへども益おしと見へより一或ハ家廻り或ハ田畠の畔よ木を植常よ屋敷廻りよ植るよも西北の風寒と防ぎ東南の暖かある和氣を蓄へ陽氣の内よ滯る心得して栽ぬれハ其内よ作る物の成長も早く能榮へ土地も漸肥て燒土も變して後ハ良田と成へし假令肥良の土地よても西北の風寒つよき所高みハ和氣を吹さまして田畠に糞し養を用ても其氣を吹ちらす故作り物よ悪しケ様の村ハ免圖りの時十村ハ必村ハの



土地は氣とつくへし  
 一百姓屋鋪廻り木を植るは多徳有風寒をふせくのみあ  
 らず盜賊の防となる或は隣家の火災のへたて共成枝葉  
 の薪の絶間を助えん木の間に伐て材木として落葉  
 の殊は田島の糞は能物也菓樹を西北の方植竹は東北  
 の隅は植て根を東南の方にひかするは常の事也と云り  
 家宅を初て造り營む時は杉檜などの良木を植て後年破  
 損のためは備へ置へし是のみならず國は良材四木等の  
 財となる物多ければ夫々の工人職人集りて色々の器物  
 を作り出し或は商人其器物を交易し諸民のすきわひ有  
 りよりて老人又は弱かたわ者または寄所なき孤獨の者  
 迄も各其細工等の手つゝい勤ふ付て寒し衣食を費す事

かく尤飢饉のちんをも遁れ安し其上賣買の道も廣く成  
 て民富み國豊は成謀事田島は續ては山林と専らする者  
 也されは深山の道路をなりかたき山中とも無用の惡木  
 等とてらひ除き世の助となるよき材木をえりひてうへ  
 立ぬれはいゆとなく榮長して人遠き奥山よても伐て出  
 すは造作まけせずして近き所の雜木は其利潤劣らす  
 まして太山は川流も有事なれは運送の宜を計て空く  
 れくへからす前々より此のかりとあき故は人里遠き奥  
 山は雜木計多して古今用となさるる所多しと見へたり  
 是の山中改て運送の造作まけせぬ良木を植まはしき  
 事なり然とも末世は百姓渡世せわしければ其日の事ま  
 てよかゝはり下百姓はならぬもの也借山の喩は土地の



中よて肉の如の所よて神靈の氣もあつまりて氣厚き故よ生長する草木も平地よりゆるるし是を人の身よ譬れ山脊よて肉厚く平原の腹の如くよて肉薄し去の海邊近き平地よ勝れさる大木のなき事と地の薄き故也と云り次よ日本の俗よ仕置と云こととはと國家の政をするよ後年の事と前よ委しておしとかり兼て仕置事也と云り去の中庸に凡事豫すれの則立あらかしめせされの則すたると云前よ定めぬ則つまつかす事前よ定めぬ苦ますと云り萬の人事も前よ計らすして其功成かたし其上種藝の事ハ四木三草と始として前より其國所よ多伐る木少伐木有來るものなれぬ夫を取立相續て絶間なく多植たらんの手の下より則用よ立理り又山中よ穀

物を作れぬ鹿鳥とにそこなわれ利を失ふ事多し農人其所の惡きあらぬしよまたかひて利潤なく地にあぬ穀物をまゐて作る誤りも所よ有事也必土地の宜きを能とかりて四木等を初とし品よ委く考て利の多き草木を栽へし地の道の種をとを貴ひて五穀よ次てわ秋春の間竹木を植生立おきて夏秋よ伐事は定る法也と云り四木の桑漆茶楮三草の麻藍紅花是也

一百姓其分限より多く田畠よ作る事甚よ惡し是鹿抹よ成第一也加州一國農人一人よ沼田所の七反堅田は五反作る是大方也然共山方濱方かせき有所の右圖りより一二反程減作る前よ云三ヶ國よて耕作の仕様三段のかわり有又加州一國の内よて江沼郡能美郡の沼田多農業初る



事石川郡河北郡より早し然共秋蒔取事の植付の日限程早からず郡國よりて作早く仕付れば稻に虫付其外悪し越後の國は越中信州の間有て植付の遅く蒔取事の早しと見へより我農業全書を度く試み田畠耕作手入數年宮崎安貞四拾年來在郷に住居し農夫より親み種々の業種の利其外變易評尋心を盡して書を集其利分明成事と記農人より其利をかして天下の諸民に教て其功有事を多記かけり誠より其心さしの甚た深き事其感多し然共耕作の事の國郡庄鄉村々よりて其品一様ならず民はどかく常より勤なれて利を得事迄より心さしたとひ其利多しと雖常より仕おれざる事いいたさるもの也然共百人より四五人も耕作に心を入れ色々手立をかへ或は宜鋪異様

成事と求植試る百姓有考へし

一畠物苗と取て余畠へ植移は午の後よし暑天の時も夕方に近し頼て夜氣の露を受けていたます畠物は物より強き物の其當坐より糞をして吉植物よりて一日の違よて生つさ生長甚善惡有又秋蒔收時の能實入を見てむさと遅がらぬ時蒔取て吉惣して農人のこよみを見て土用入專等の前より考植物手入等工夫夜中よてを勘辨する事肝要也稀成事を前より定工夫の萬事よあれども取分農人の昨今明日の天氣の考疎しぬれ一時の風雨よ數月の苦勞を忽ち空しくする事多し必油斷すへからず物毎進の陽也後の陰也農業も軍事の心有なりと云り進されの勝利少なし日月の天よめぐりて瞬する間も滞るゆみ



なき理を目當として寸陰も怠るへからず殊も耕作種藝の事、直も天道の福と専ら祈る事なれ、怠惰して朝も日よれくれて起、大切至極なる光陰を辨す、今日の日の又なき理を打わすれて偏も怠り、おちに不淨なる氣立、よて農業と、いとなめ、其心違るを以て天道のめぐみ、ももれい、何となく田畠も瘠われ、年とへ月を重ね、災彌増し、よ有て飢寒のうれへ、よせまり、後々父子夫婦もはなれ、よ成終、よ人に何かはれの身と、おちふれ、貧苦の悲しみ、やむ時なく、然は、心あらん、農民は、必後のうれへを思ひて、豫め防へし、天の時に、まゝかひ一寸の光陰をも、大切よおしみて、農業よ身と、やゆし、心を用る事、慎怠事なかれ

一 飢饉年の作をは、智有人は、夏の中よも、早見及ふへし、尤七

月末八月初よは、儲よみゆる物也、去共民の愚成者よて、其年なみ五穀の色を見て、飢饉を語り、早く身持を引替て、勤事を知らず、先秋の實り出来ぬれ、悦いさみて、春のさゝん、餓死すへき事をも、辨す、心よ任せ、飲み食ひ万の物を用よ、またかひ求る、故春の蓄たらずして、年明れば、頼て、飢る者多し、然、秋よ至り、凶年の作見へ、農の惣司さる、人心よ用て、詳よ察し、民よ能く、さとし、導きよく、春の餓死を救ふ、心懸肝要也

一 其國の物を以て、其國の諸用を調る様よと、心何かひの所、有とみへたり、尤成事也、急よ、いからすとも、年をつみ、心を用ひたらば、大抵の物、其國の産を以て、事たるやうあるへし



一加越能三ヶ國御國の内中里は田方の村々并大川の双方有之田方の村兩所我三十年來御用之節度々是と考みるは難易大違有里中の四時百姓心安し先年御改作の初上ケめの節大川の端野河原等有所其分免は圖込て手上は極る事相違なし然は川端は川除洪水の節は晝夜惣百姓男女出て水を防ぎ水増て叶かさき時の田地并家へ水つき家流損毛可有所其古考る者曾てあし大川洪水の刻田地へ打向川度と切れて家なかし或は田地へ石砂入土目悪く成且又春秋の中入川すれば苗こへを流し又麥菜種は限らす惣して田畠植物を損し余村はなき水下人足と出し目にあやうきを見百姓迷惑す其上一ヶ村之定へ二三度も入川すれば能地も忽惡地と成て或は免五

つ六つの上地所も二免程必ず地目劣り其上川崩して御檢地入ば田地へり百姓持高より人數餘り彌百姓難義仕所は度と有ヶ様は所は支配の十村常と眼を付て百姓と慈み随分退轉無之様に御檢地或は見立をねかひ惣與中とい分て常と心を付肝要とすへし御郡惡作の刻は申及ばそ里中と違見立を願ふへきものなり川除少分の損しよても見立の刻里中余村と同事に思ふ事十村不届千萬也去り川端の里中より損多き事章なり其外川除御普請等入百姓難儀の事口傳有川端宜き事少しあれと納所のさろくもある事多なし十村兼と能心得へき者也



農務書 耕稼春秋卷六

田名

田地割

一ヶ村定成檢地法

三ヶ國斗代

知行町間圖

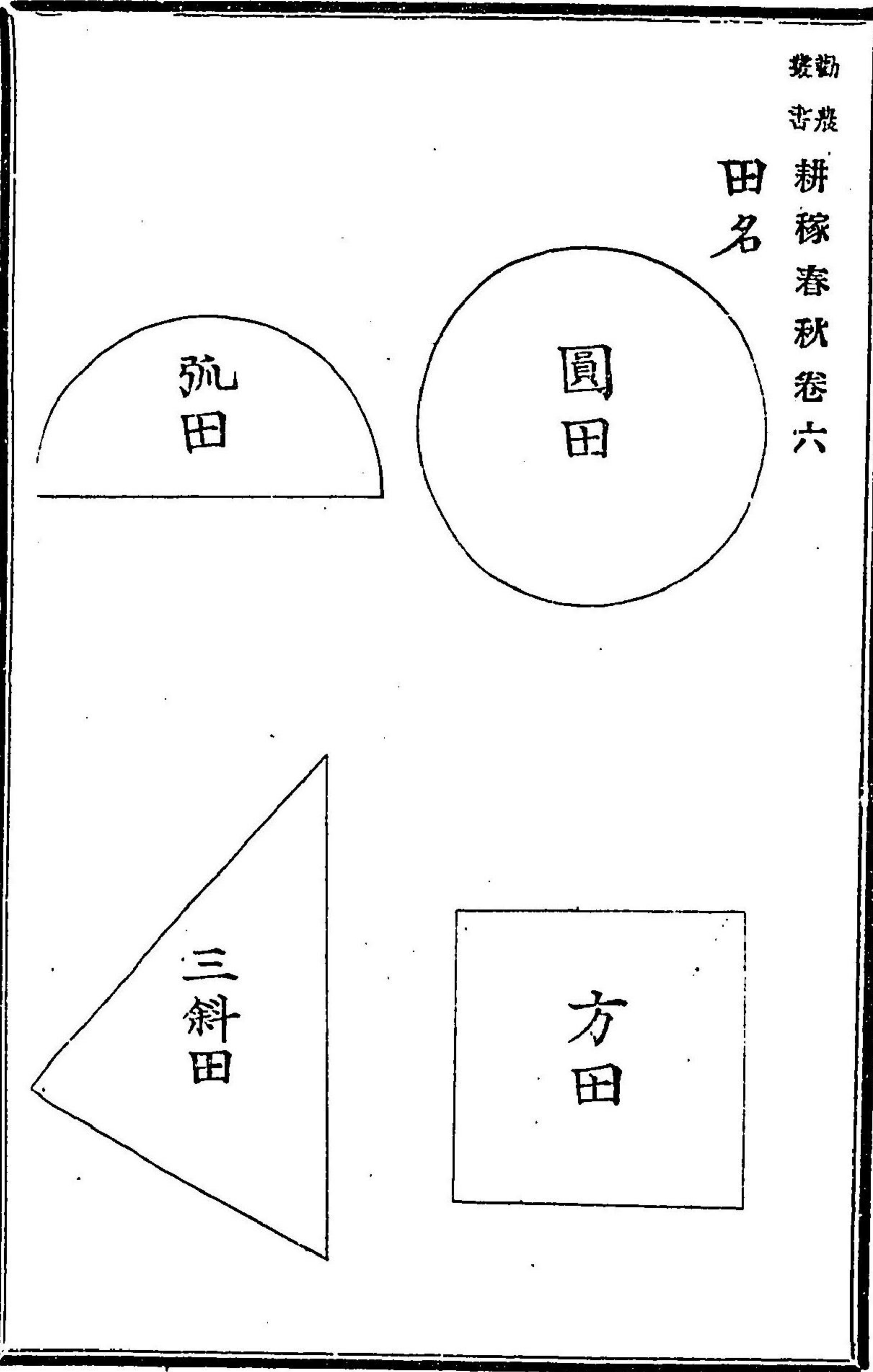
石川郡稻惣名

農人入用中勘

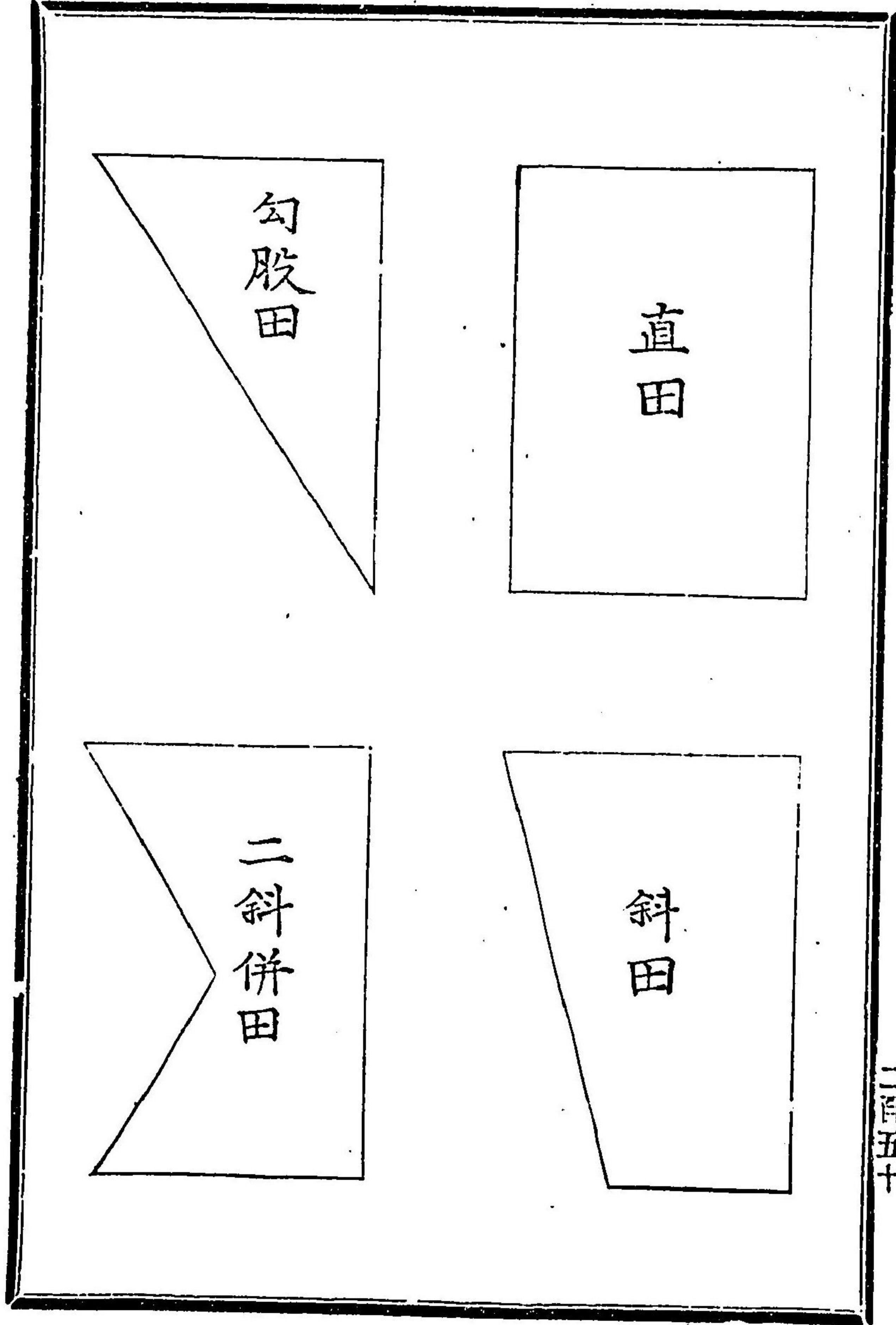
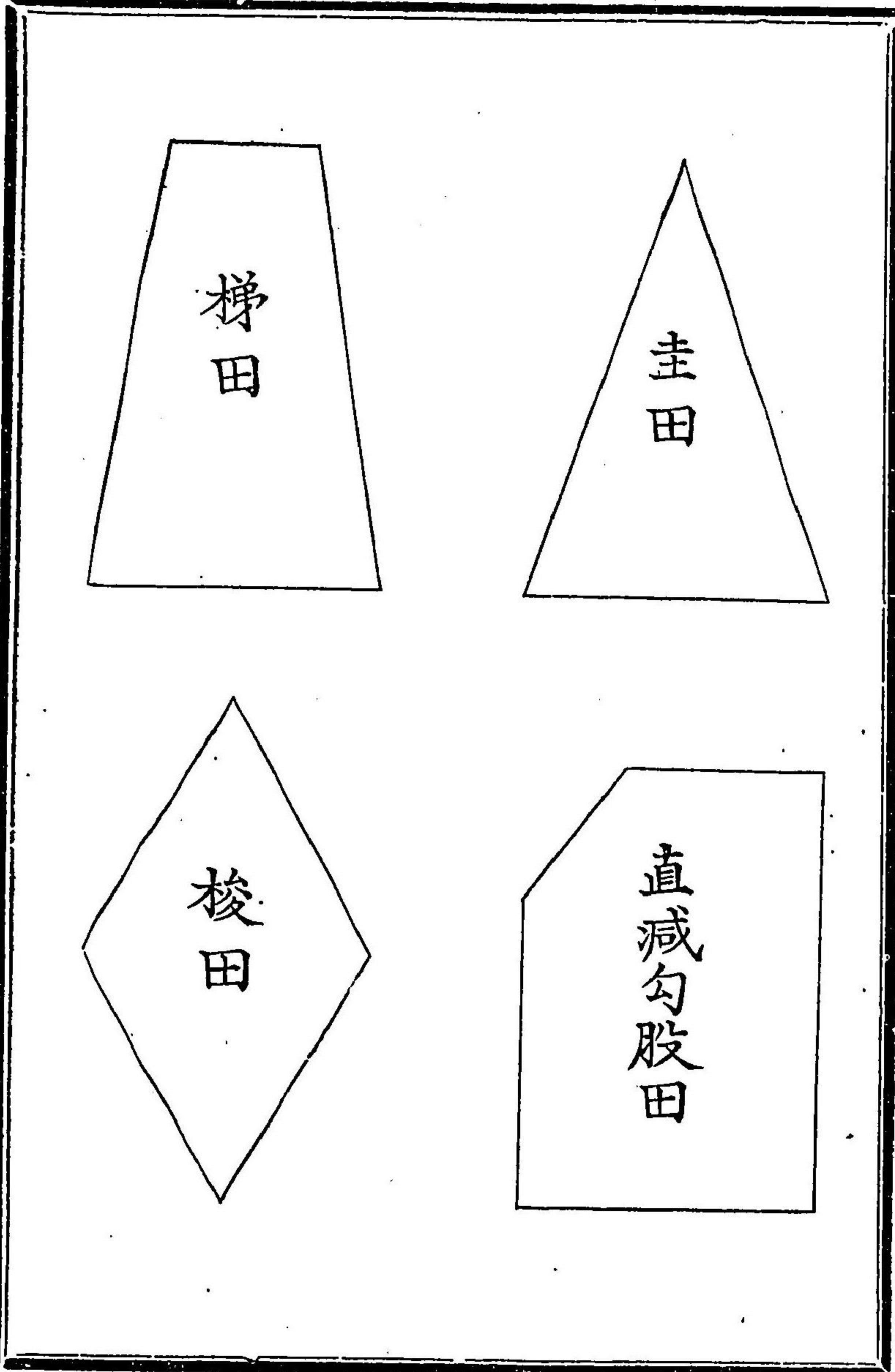


農勸書 農耕稼春秋卷六

田名

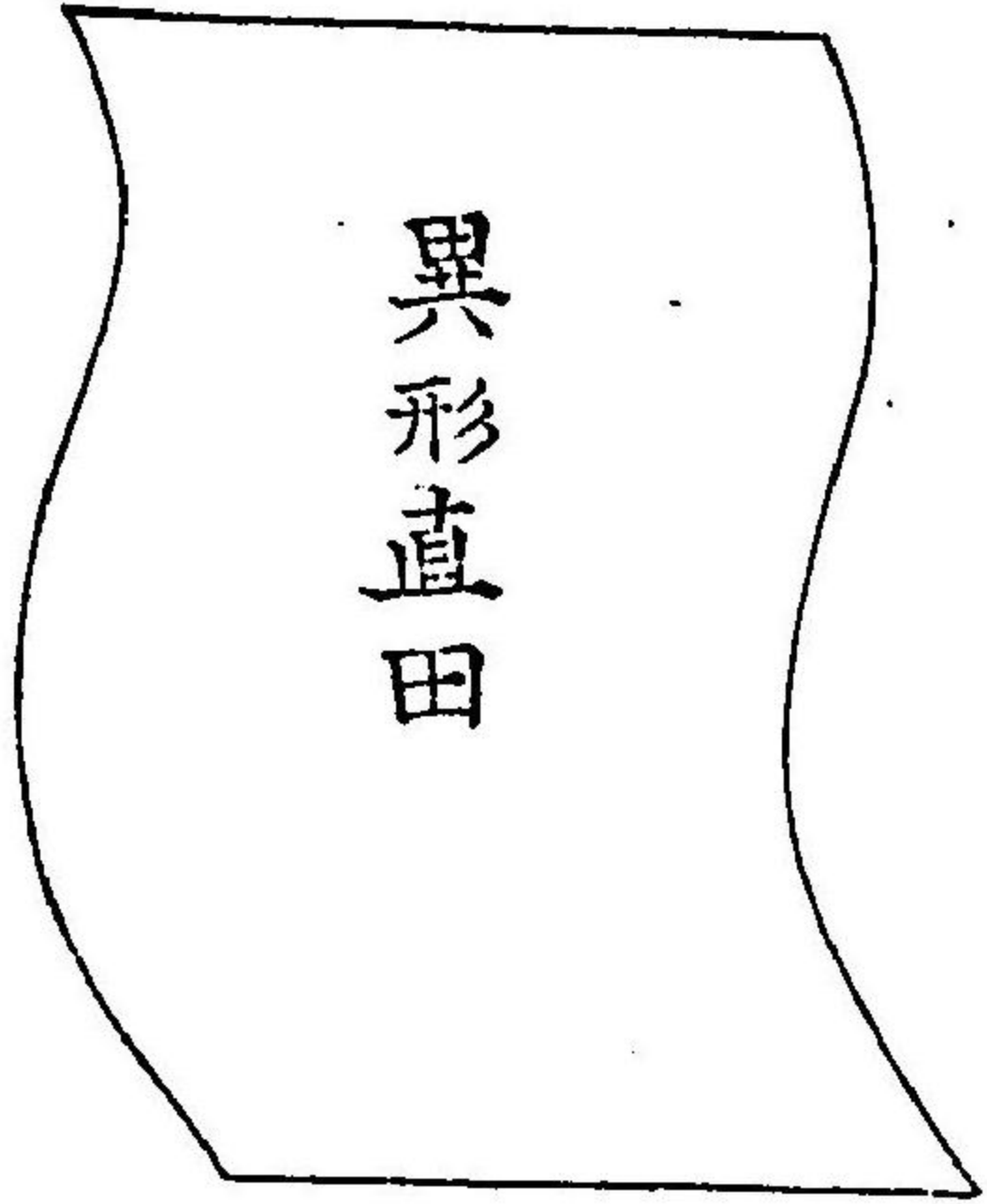








異形直田



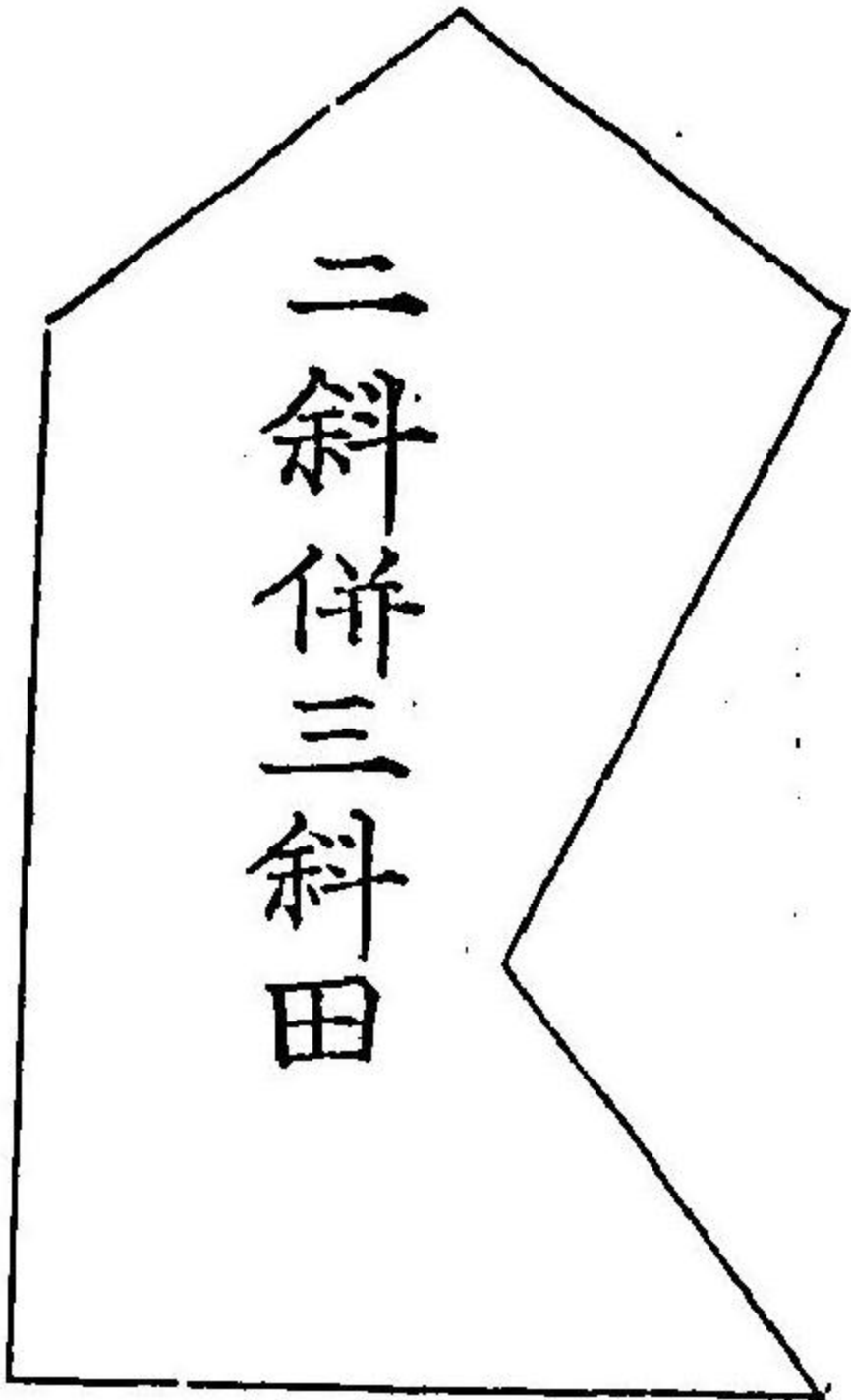
圭併三斜田



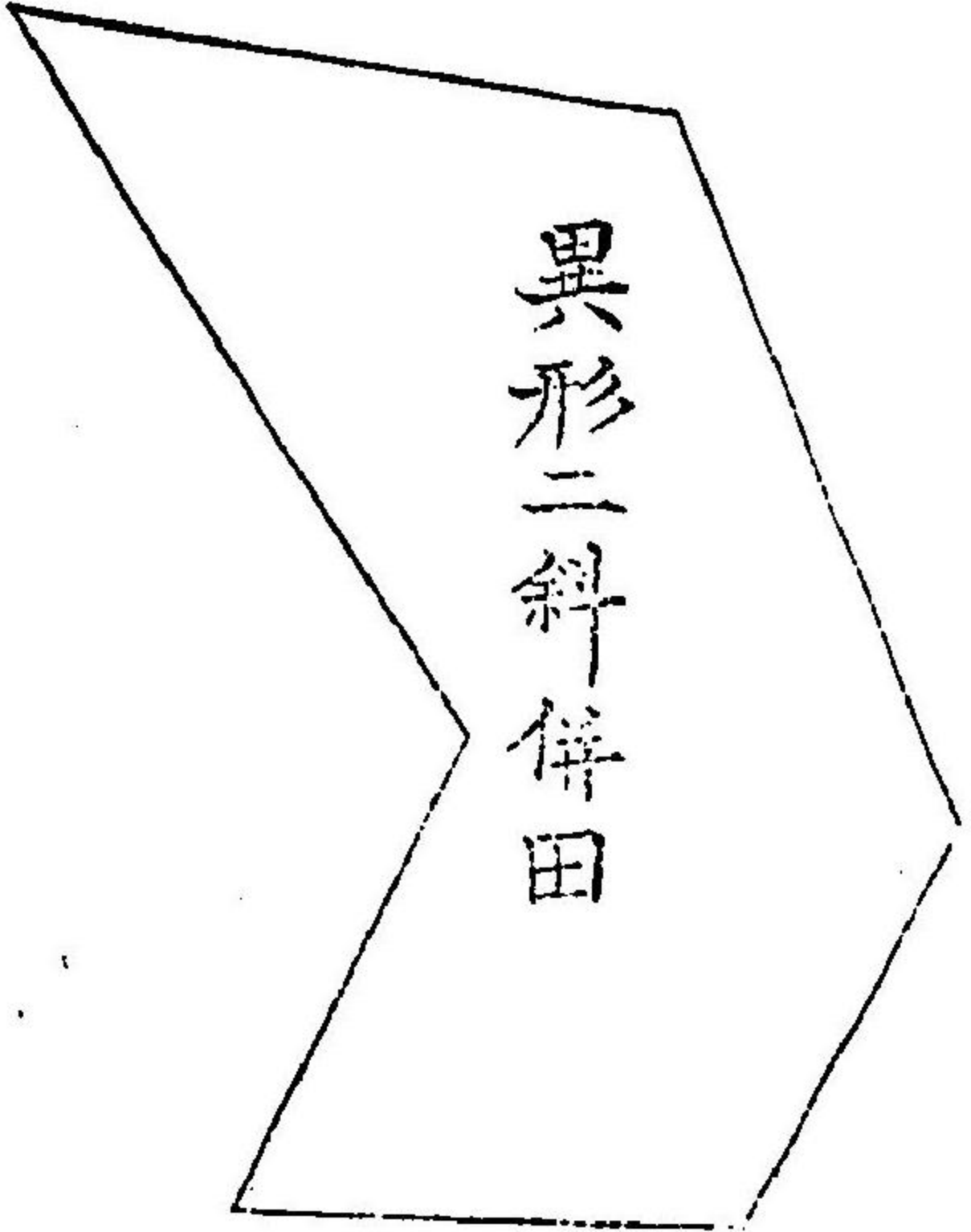
三斜併田



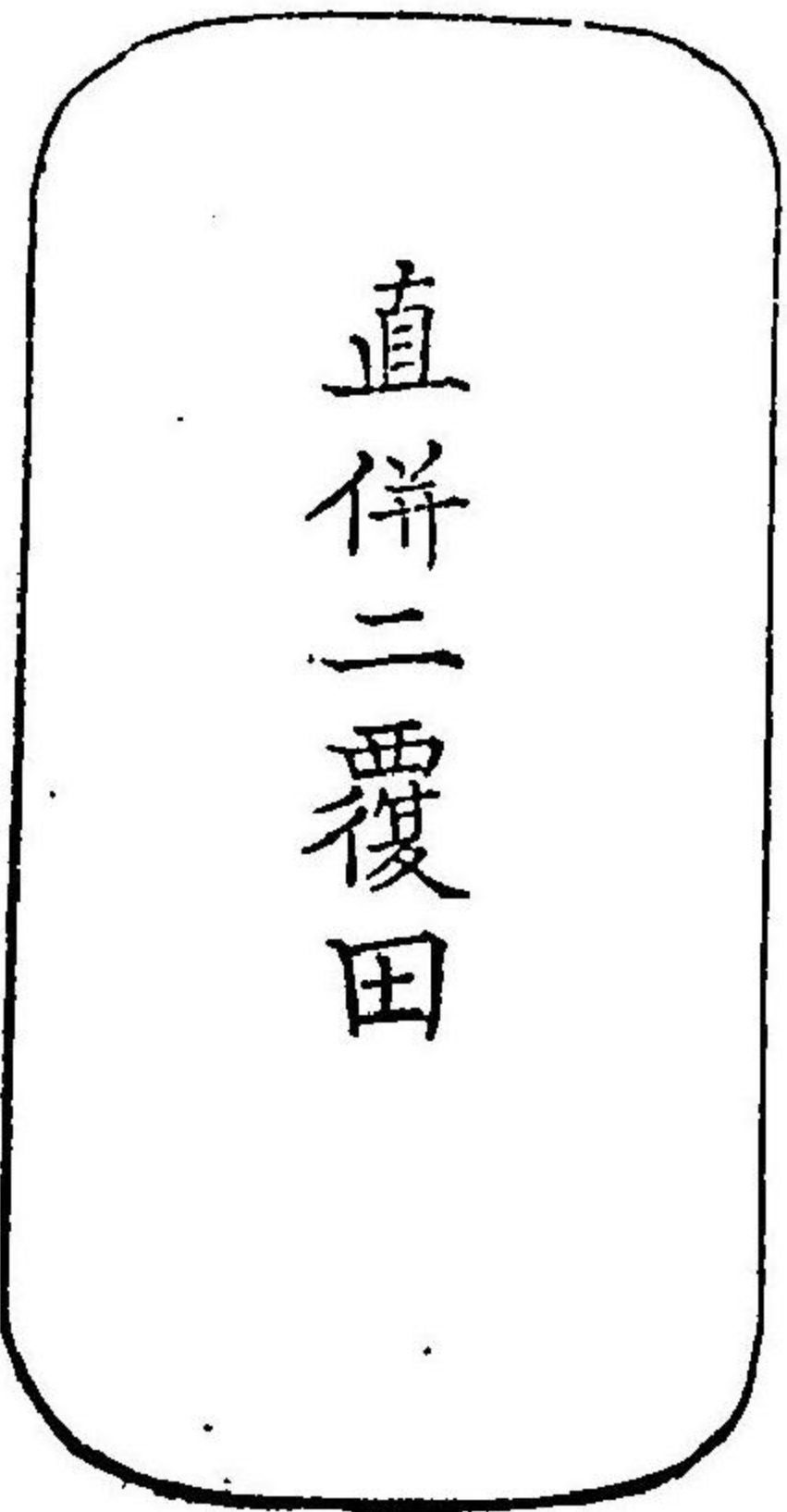
二斜併三斜田



異形二斜併田



直併二覆田

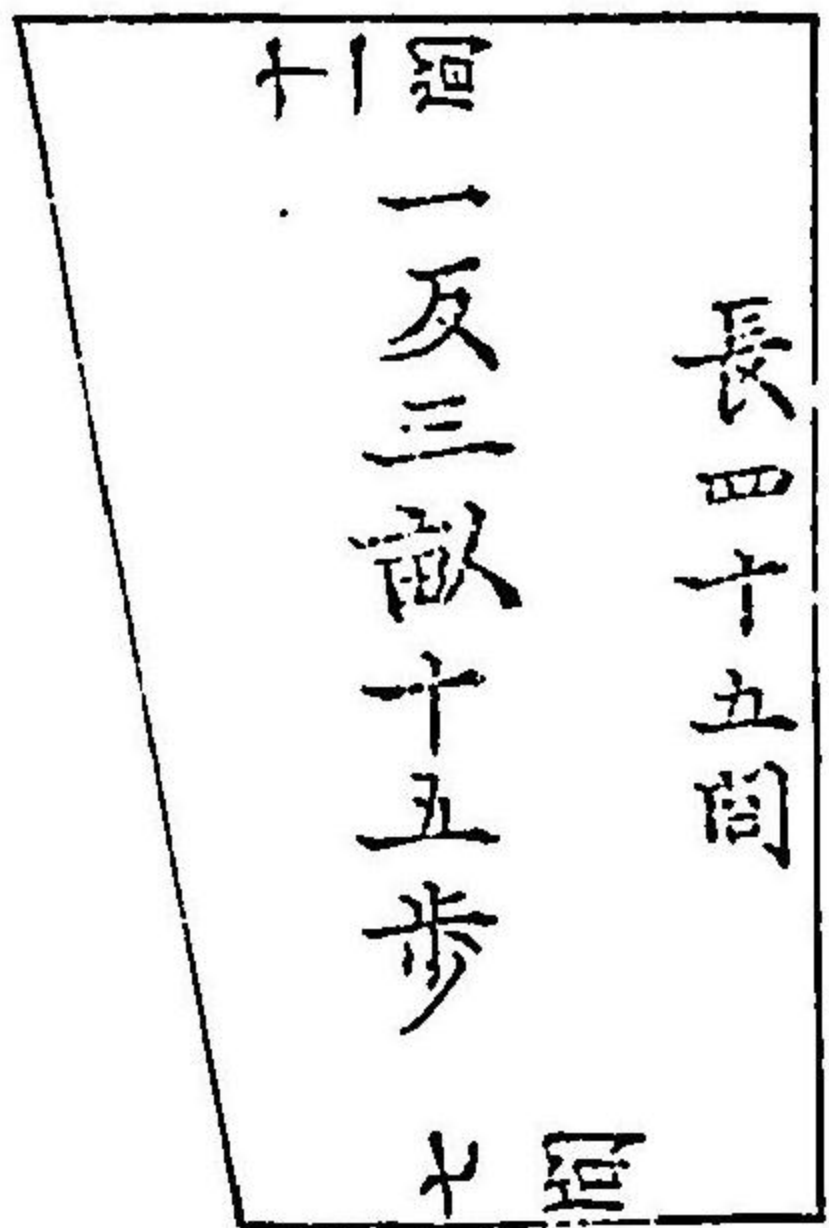


凡農業の漢朝炎帝神農天の時を觀て朱耜を始て起民よ  
 教て農事興れり秋津洲農の初は神代卷云  
 天照太神保食神の腹中に稻生て水田の種子と成天の狭  
 田長田を植てより農業始ると云り此十八品は田の形容  
 の大概を記す方圓の天地の容なり故に方田を本とす田

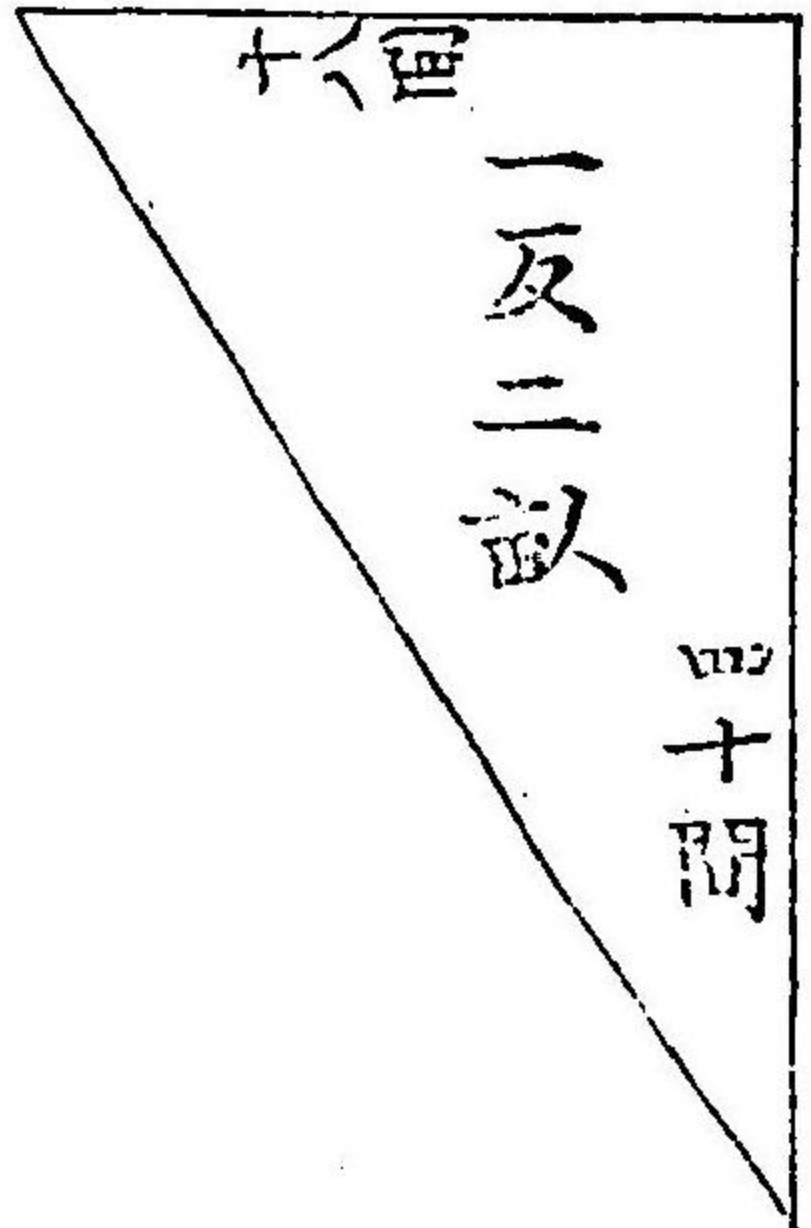


形品、有地に又高抵ありての田、水を持事なし是、依て田の其地の廣狹を撰ます田一反を或の二枚或の三四枚地の平等、應して田の疇を立る又業ともひて云時、田の疇、又付て田植、芒り修理をする田の基盤の目、或の井字の如し四方直ともひて修理する故、田方を本とす正、欲祈社稷、神可祭宇賀神、神代云稻魂謂之、宇賀美陀磨云

田地檢地算法

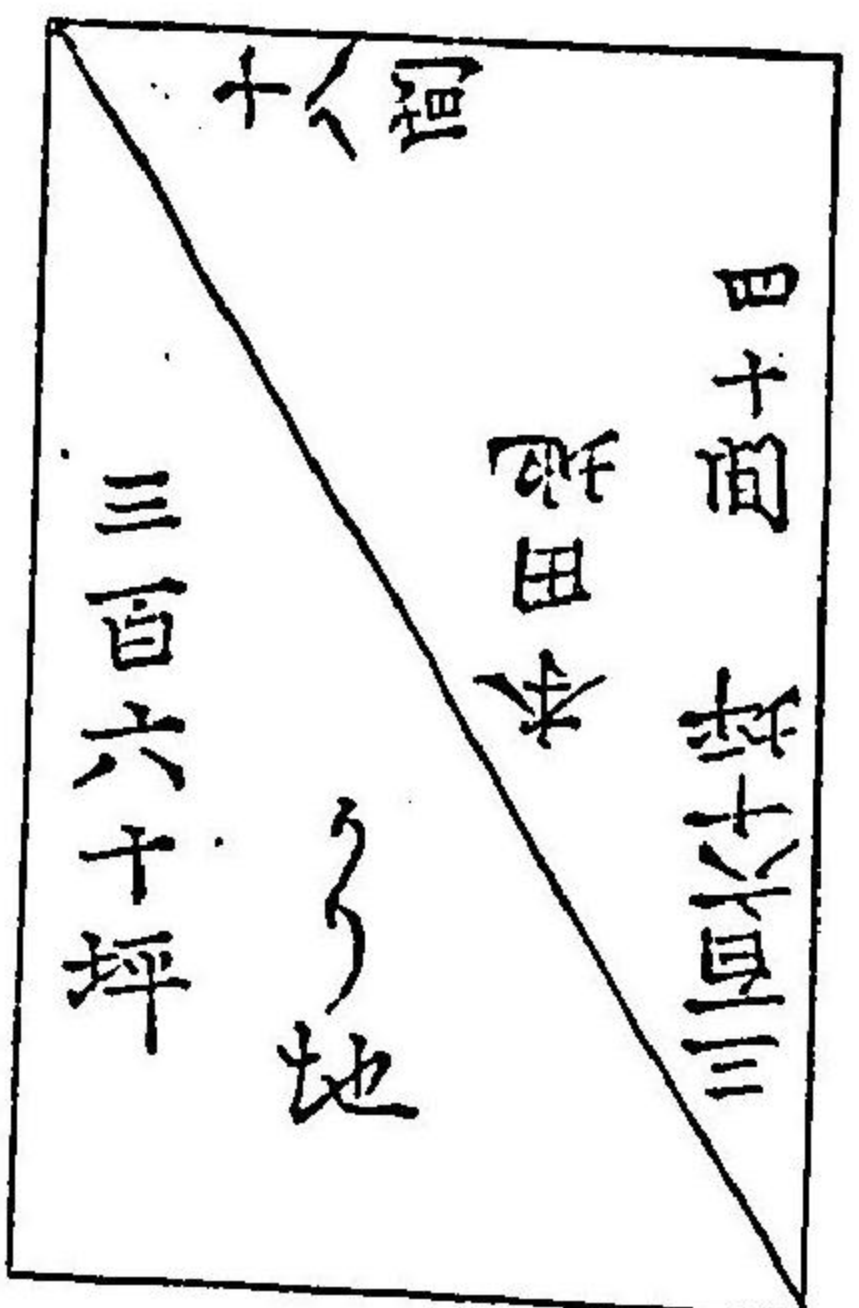


是の十一間、又七間置合、二、割の九間と成、是に長四十五間をかくれ、の四百〇五坪と成、これと田の法三に割、一反三畝十五歩と成る、なり

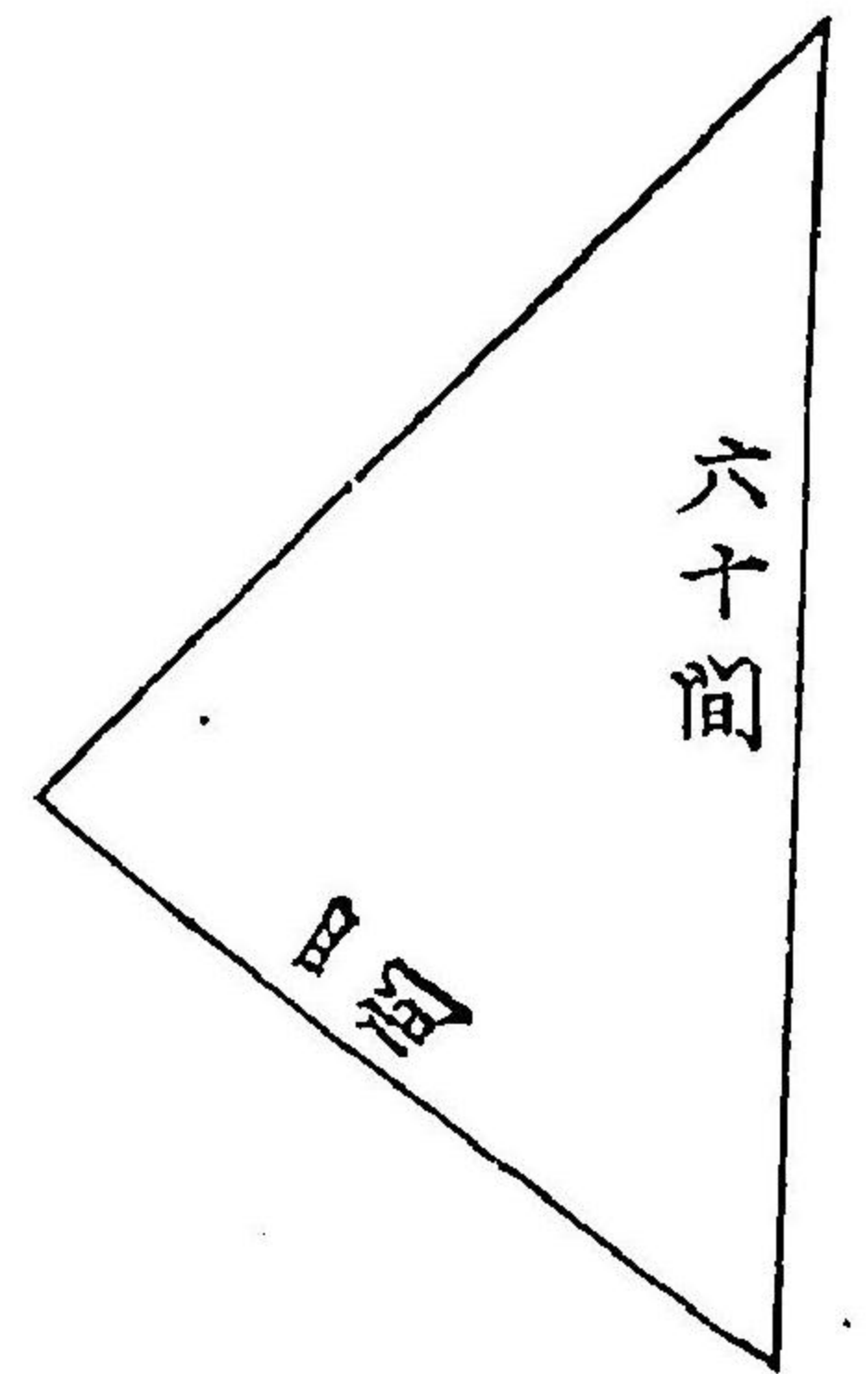


是の十八間に四十間をかくれ、の七百二十坪と成、是を二に割、の三百六十坪と成、これを田の法三をもつて割、一反二畝と成也





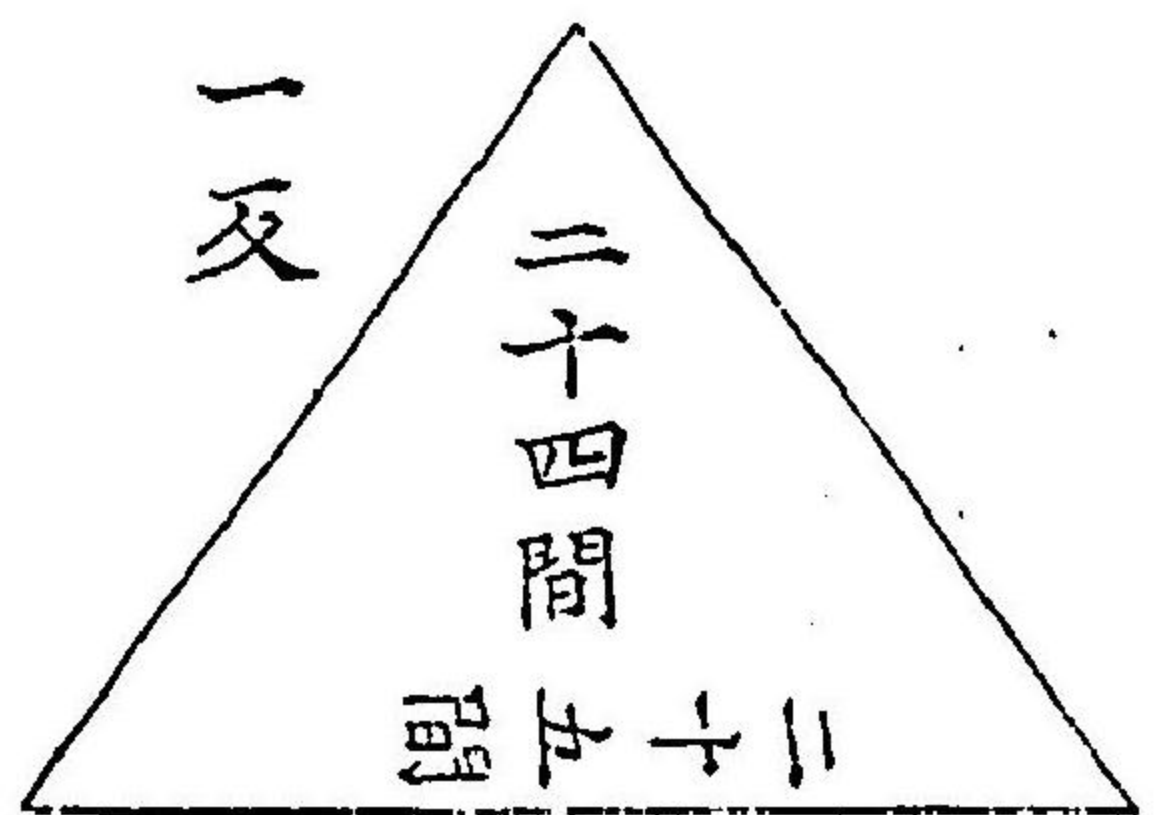
右十八間に四十間を掛け二ツに  
割事の如此四角にとればなき地  
を一とい打こびよよめて二ツよ  
割とまゐるへし



是の四間を二ツよ割の二間と成  
是よ六十間をかくれば百二十坪  
と成是を田の法三ツよ割の四畝  
とまゐるゝあり



是の六間よ貳間置合二ツよ割の四  
間と成是よ六十間とかくれの二百  
四十坪と成これを田の法三よ割の  
八畝とまゐるゝ也



是の二十五間を二ツよ割るれよ二  
十四間をかくれの三百坪と成是よ  
田の法三よ割の一反也



四十間

三反九畝六步

八間

是の三十間より四十間をかけ千貳百坪と成是を右より別より置又かり八間あり六間かけ四十八坪と成これより二つより割二十四坪を右千貳百坪の内より引残り千七百七十六坪有是を田の法三に割也

指渡

十六間

是の十六間を両方より置かけ二百五十六坪と成是より〇七九をかくれば二百〇二坪二分四厘と成是を田の法三より割れば六畝二十二步二分四厘と成る也

六畝二十二步二分四厘

百八里百五十六

五反九畝十步

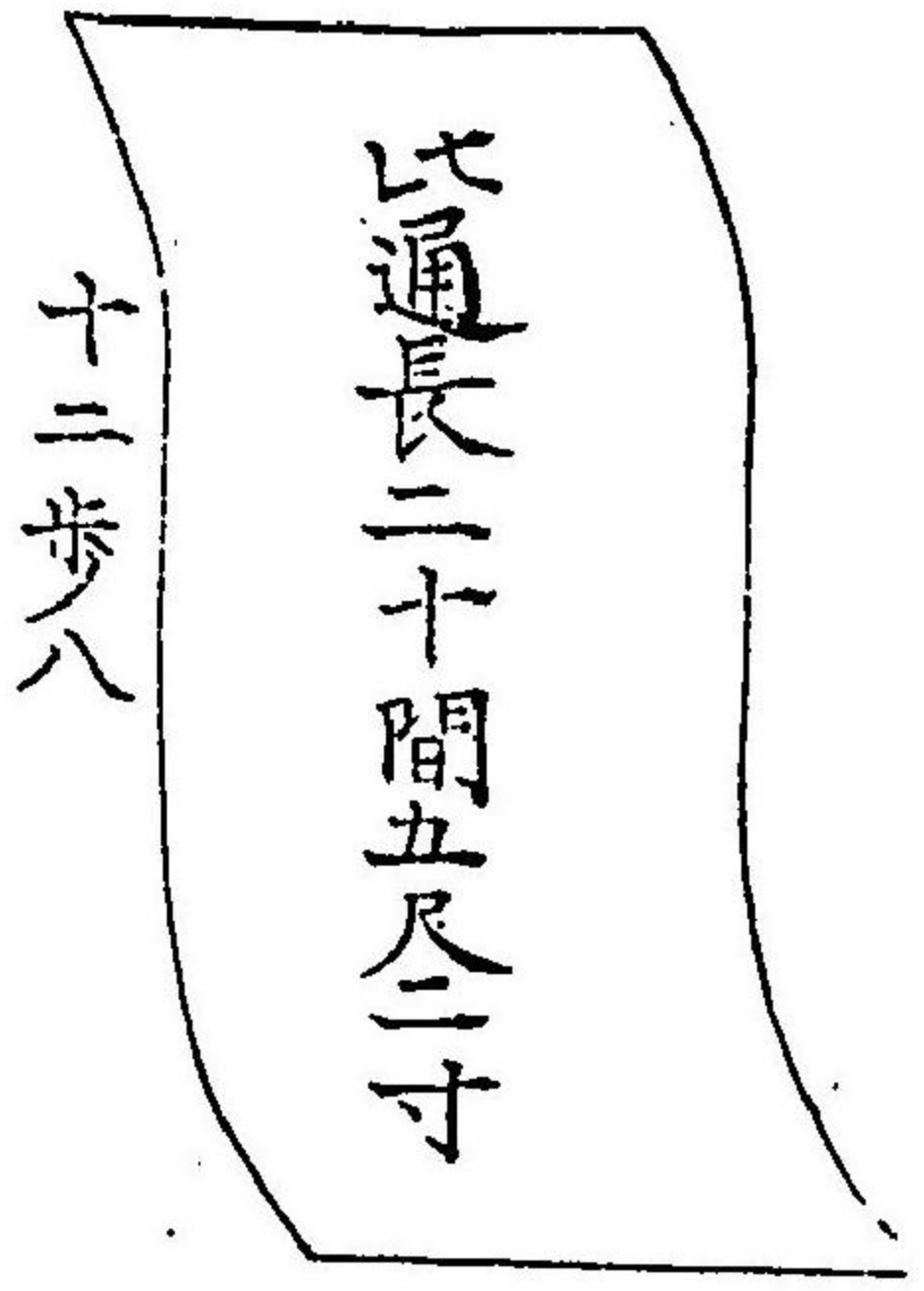
是の百五十間兩より置かけ合二万二千五百坪と成是より〇一二六四より割れば千七百八十坪と成是を田の法三をもちて割れば五反九畝十步と成

三畝十六步五分六厘

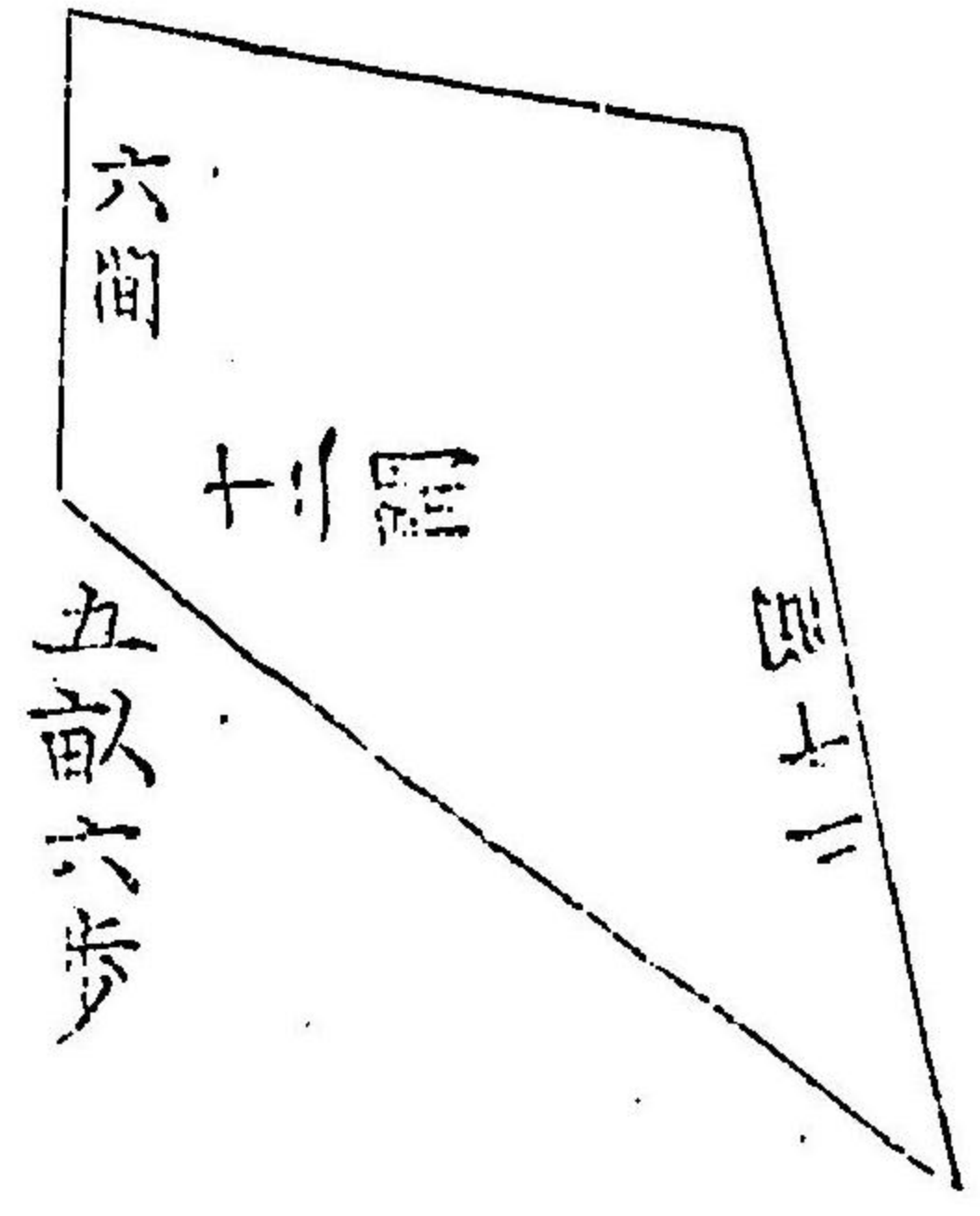
四十坪

是の長十五間に幅八間をかけ百二十坪と成右より別に置又八間兩方より置かけ合定法二一をかくれば十三坪四四と成是程右二十坪の内引の残り百六坪五六有是を田の法三より割れば三畝十六步五分六厘と成也

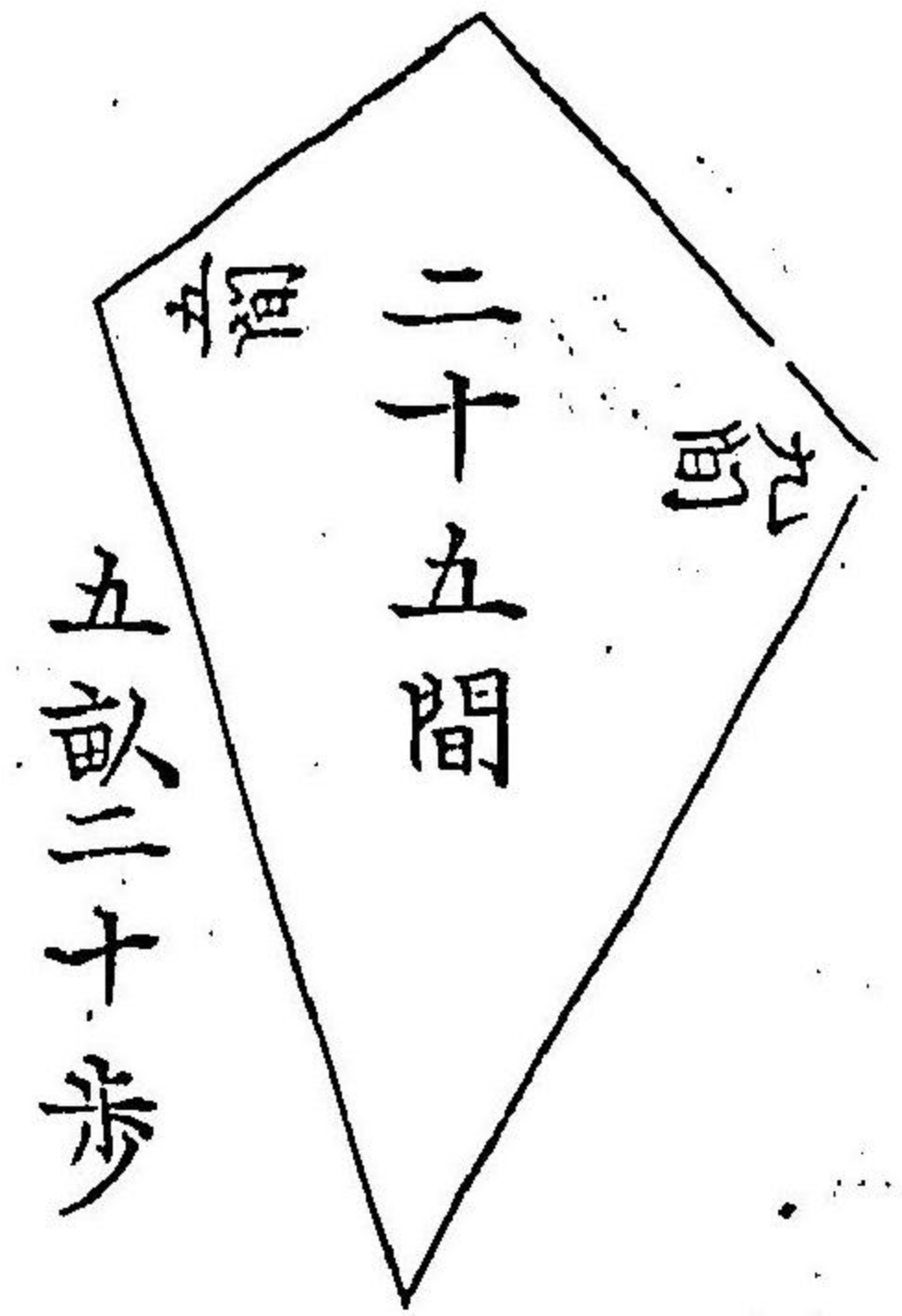




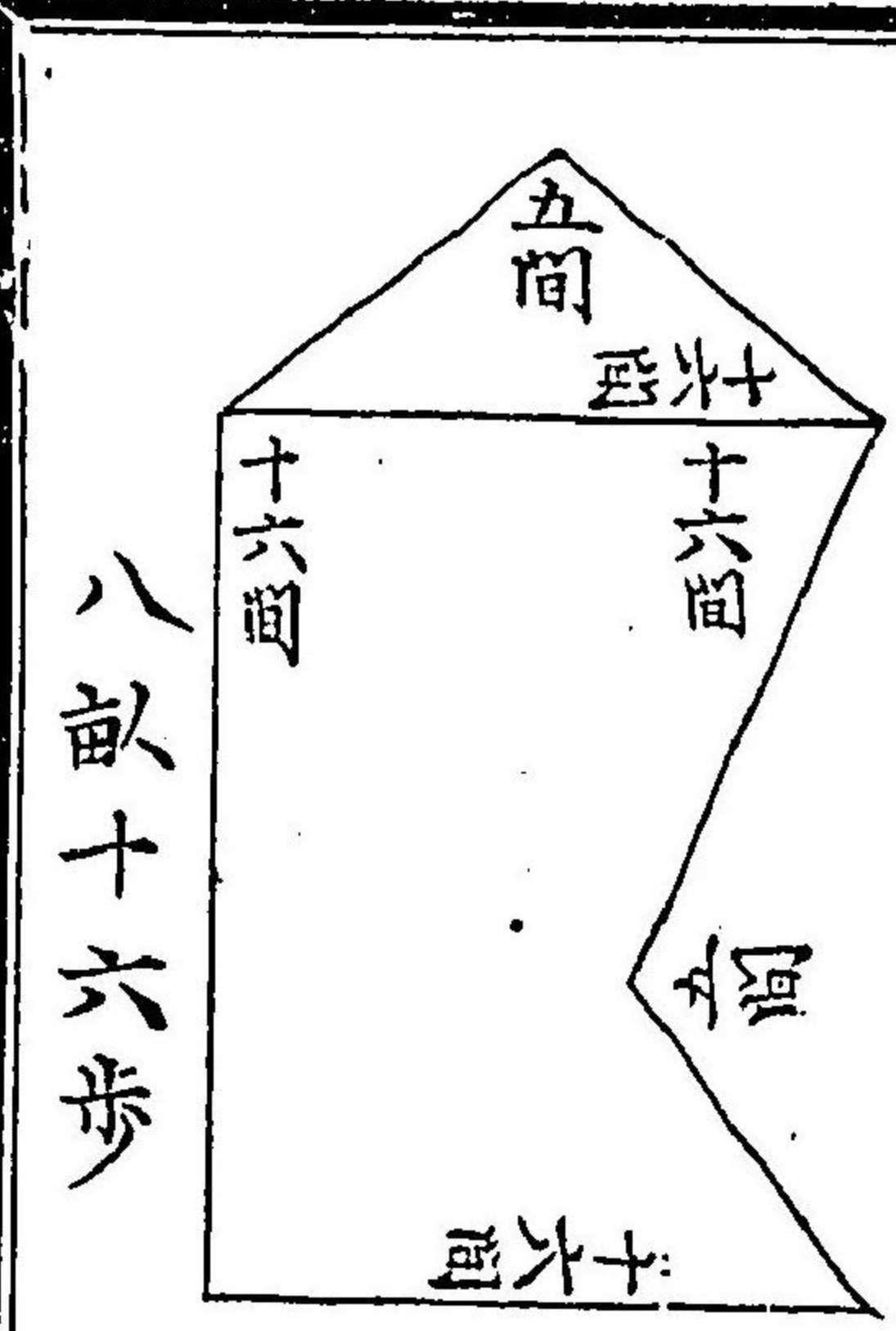
是ハ二十間五尺貳寸と置二十間計  
 六五とかけ十三丈五尺二寸と成  
 是に四尺とかくれハ五四〇八と成  
 是を平坪の法〇四二二五を以て割  
 ハ十二歩八とある也



是ハ二十間ハ六間合二十六間有  
 此ハ十二間をかくれハ三百十二坪  
 と成是を二ツハ割ハ百五十六坪是  
 を田の法三ハ割ハ五畝六歩とある  
 也

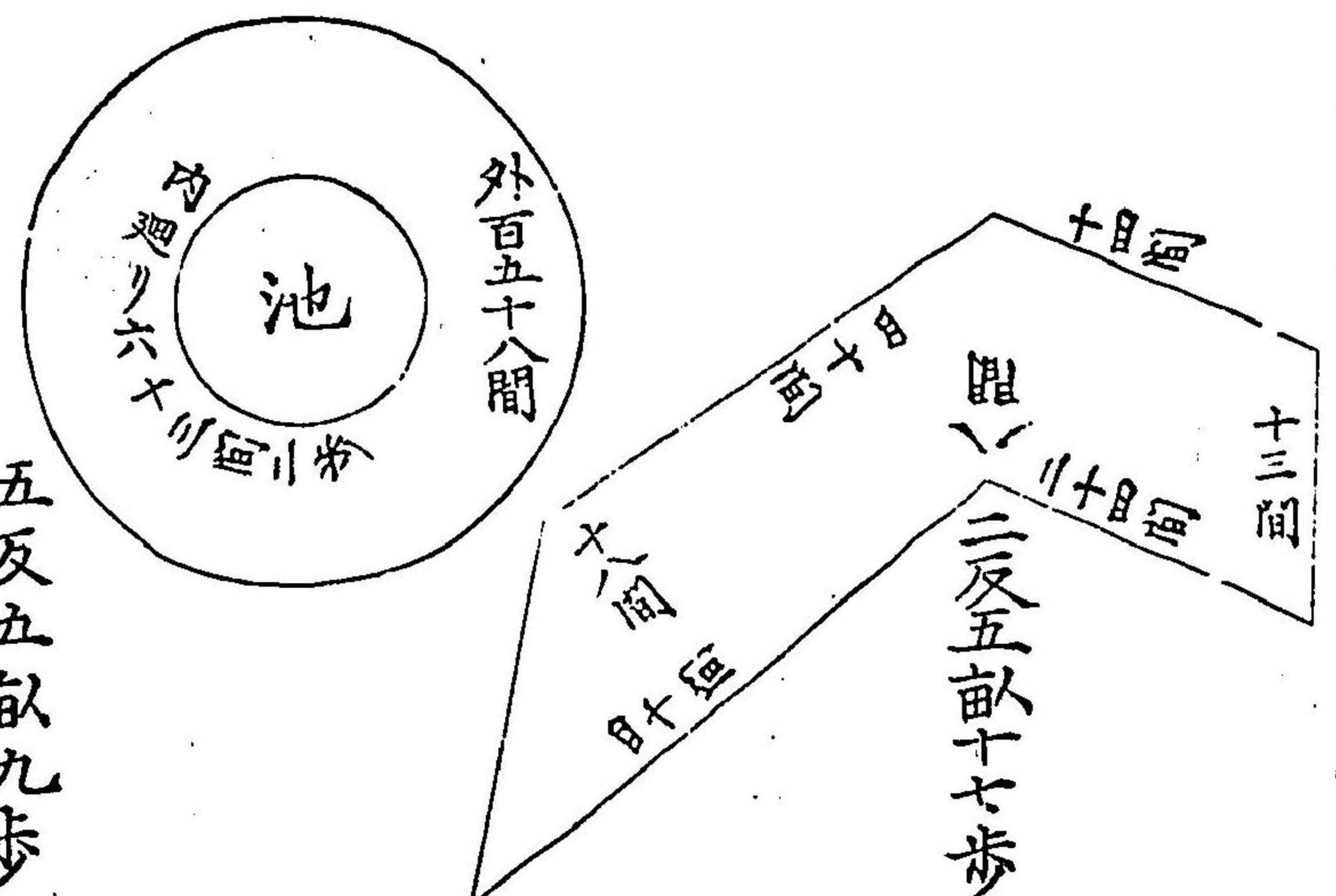


是ハ九間ハ五間置合十四間是ハ  
 二十五間とかくれハ三百五十坪  
 と成是を二ツハ割ハ百七十五坪  
 と成これハ田の法三ハ割ハ五畝  
 二十歩とあるなり



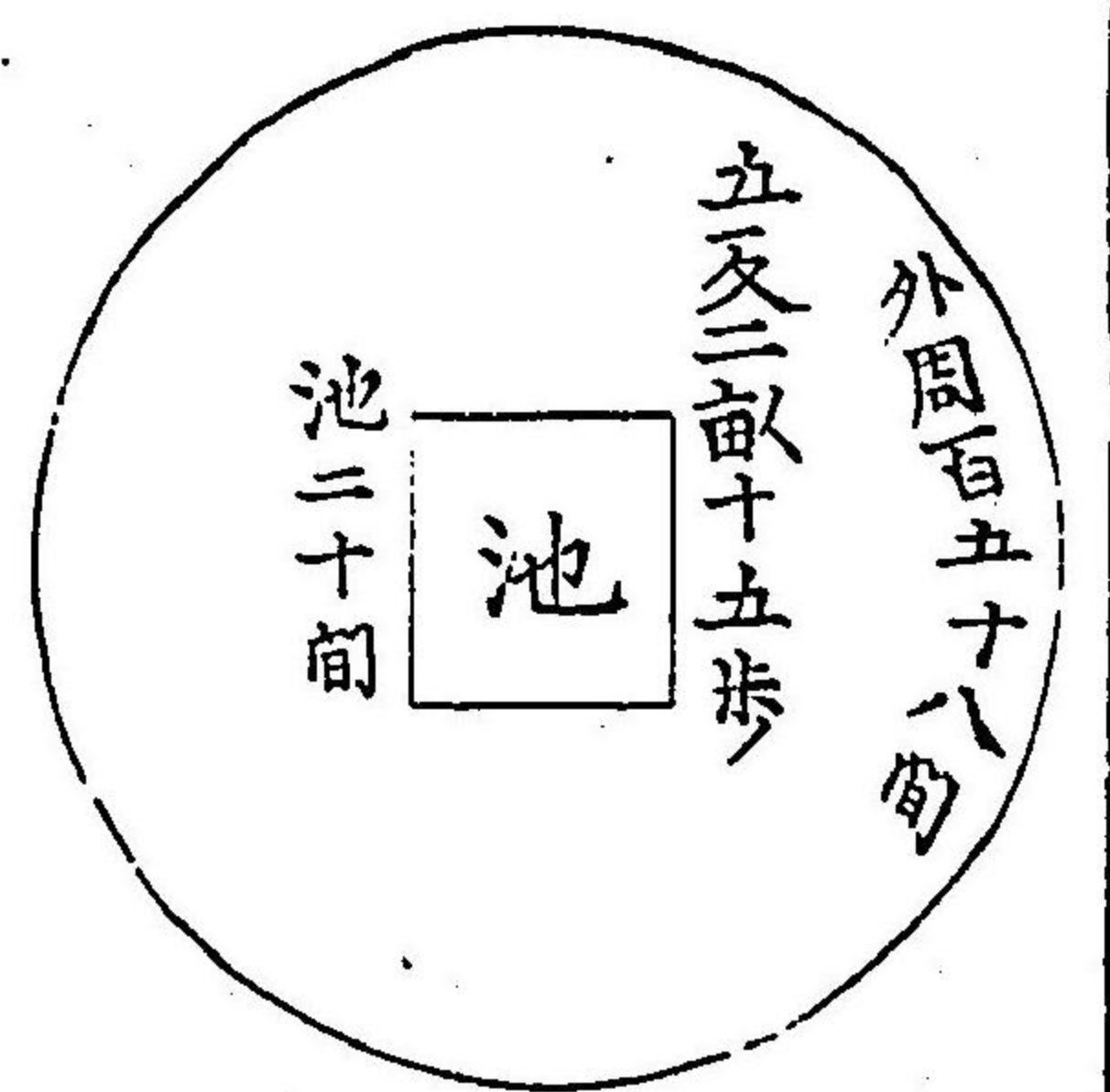
是ハ十六間ハ置かけ二百五十  
 六と成これハ田の法三ハ割ハ八  
 畝十六歩と成あり



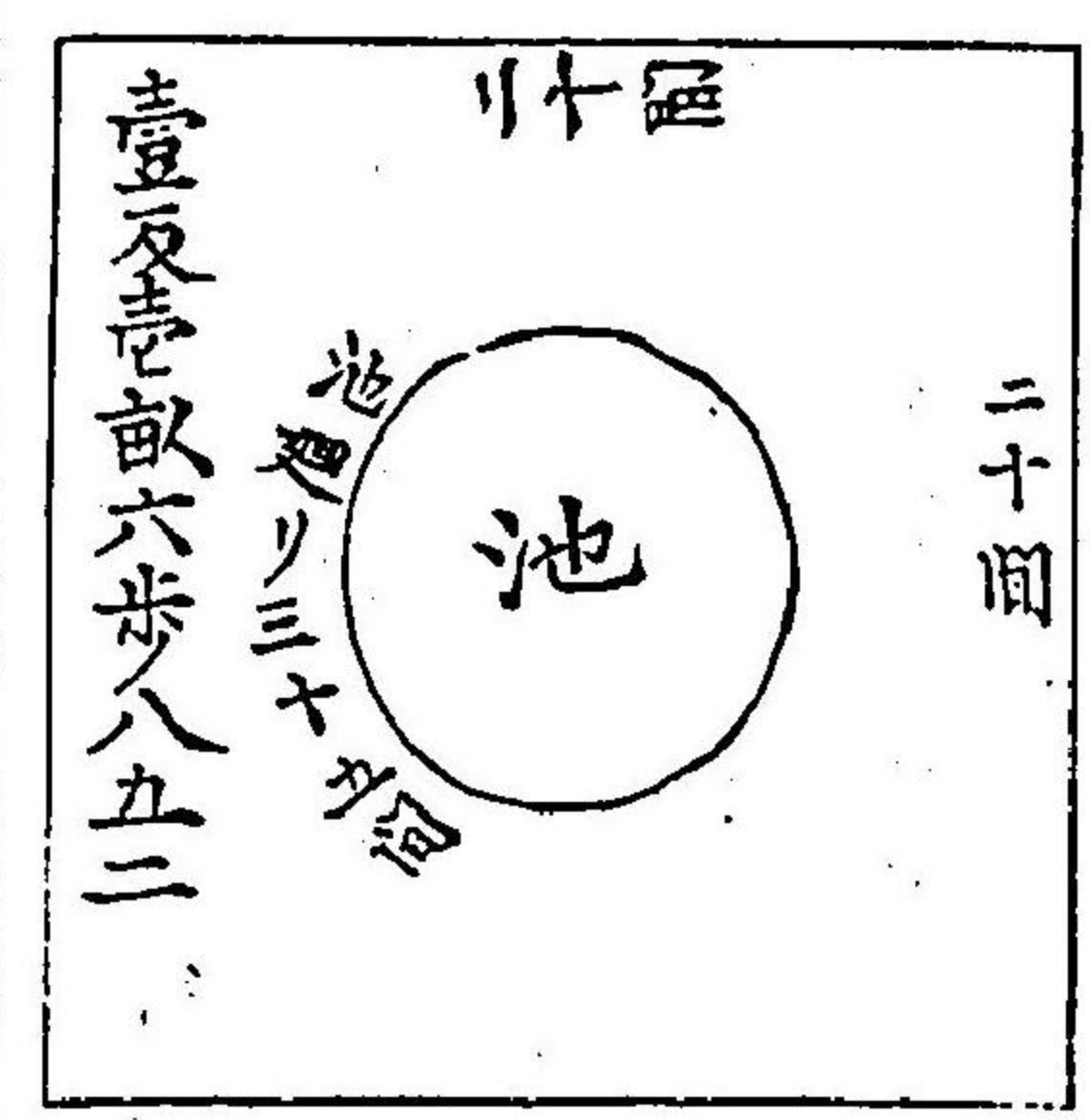


五反五畝九步

是ハ先十八間ハ八間を置合二  
十六間是ハ四十間をかくれハ  
千四坪と成右ハ別ハ置又二十  
四間ハ十四間を加ハ三十八間  
是ハ十三間をかくれハ四百九  
十四坪右ハ合千五百三十四坪  
有是を二ツハ割ハ七百六十七  
坪と成是を田の法三ハ以て割  
ハ二反五畝十七歩と云ル也  
是ハ外周百五十八間ハ自乗シ  
て得ル内を内周六十三間二分を  
自乗して得ル數ハ引二万〇九  
百六十九歩七六と成を實とし  
て十二六四を法として除之千  
六百五十九歩と成を田の法三  
ハ割ハ五反五畝九歩と云ル也



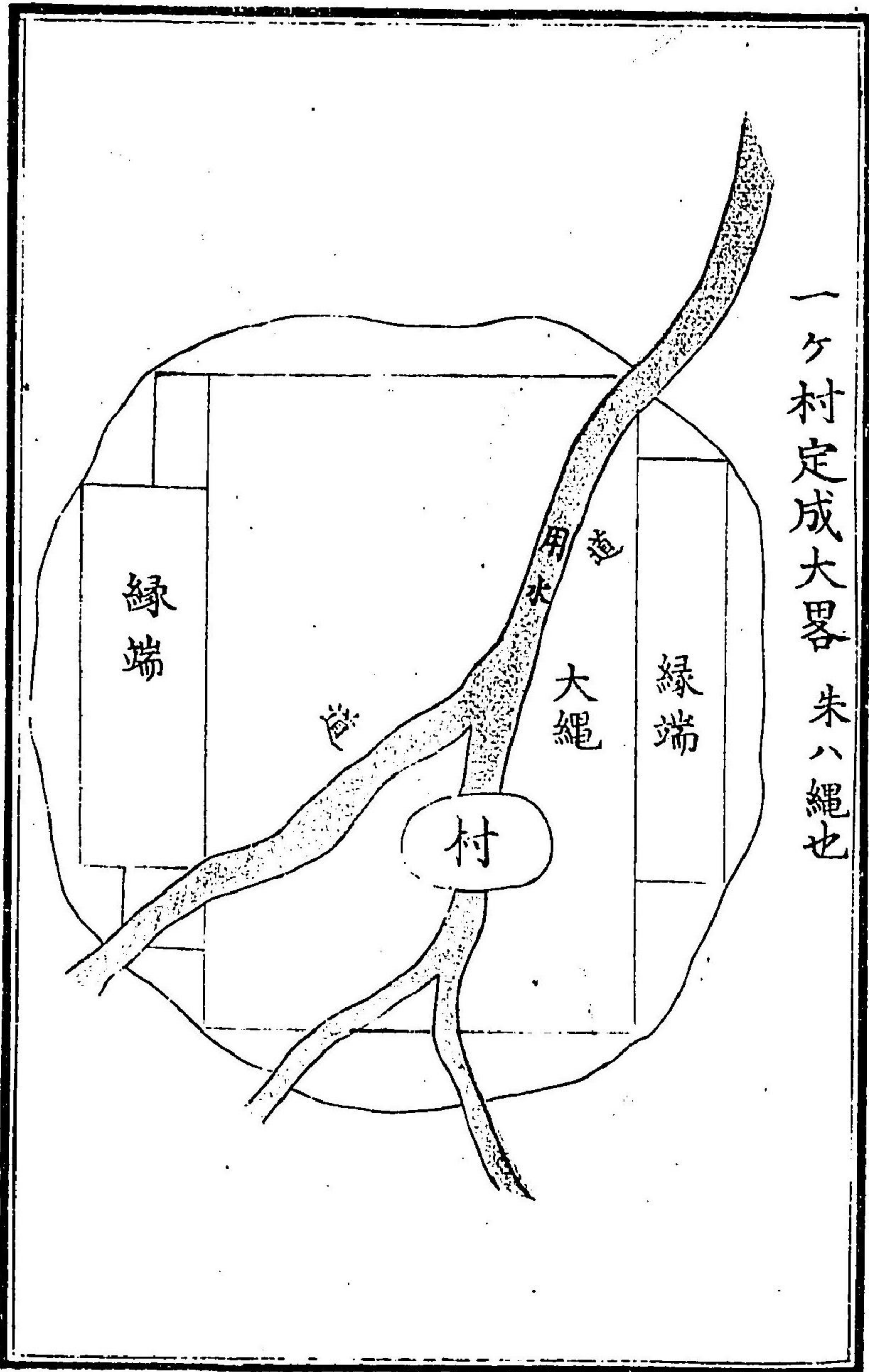
是ハ外周百五十八間自乗して得數を  
實ハして十二六四ハ除之千九百七  
十五歩と成内を池の方二十間を自乗  
して得ル數を引殘て千五百七十五歩  
と成ハ田の法三ハ割ハ五反二畝十  
五歩と云ル也



是ハ外二十間に二十間ハかけ合れハ  
四百歩と成又池廻リ二十五間を三一  
六ハ割ハ七間九歩壹厘一三ハ成是  
と二ハ懸合れハ六十二歩五厘八八ハ  
成是ハ七九をかけれハ四十九歩四厘  
四四ハ成ハ右四百歩の内ハ引殘て  
三百五十五歩五厘五六有を田の法三  
ハ割ハ壹反壹畝六歩八五二と云ル也

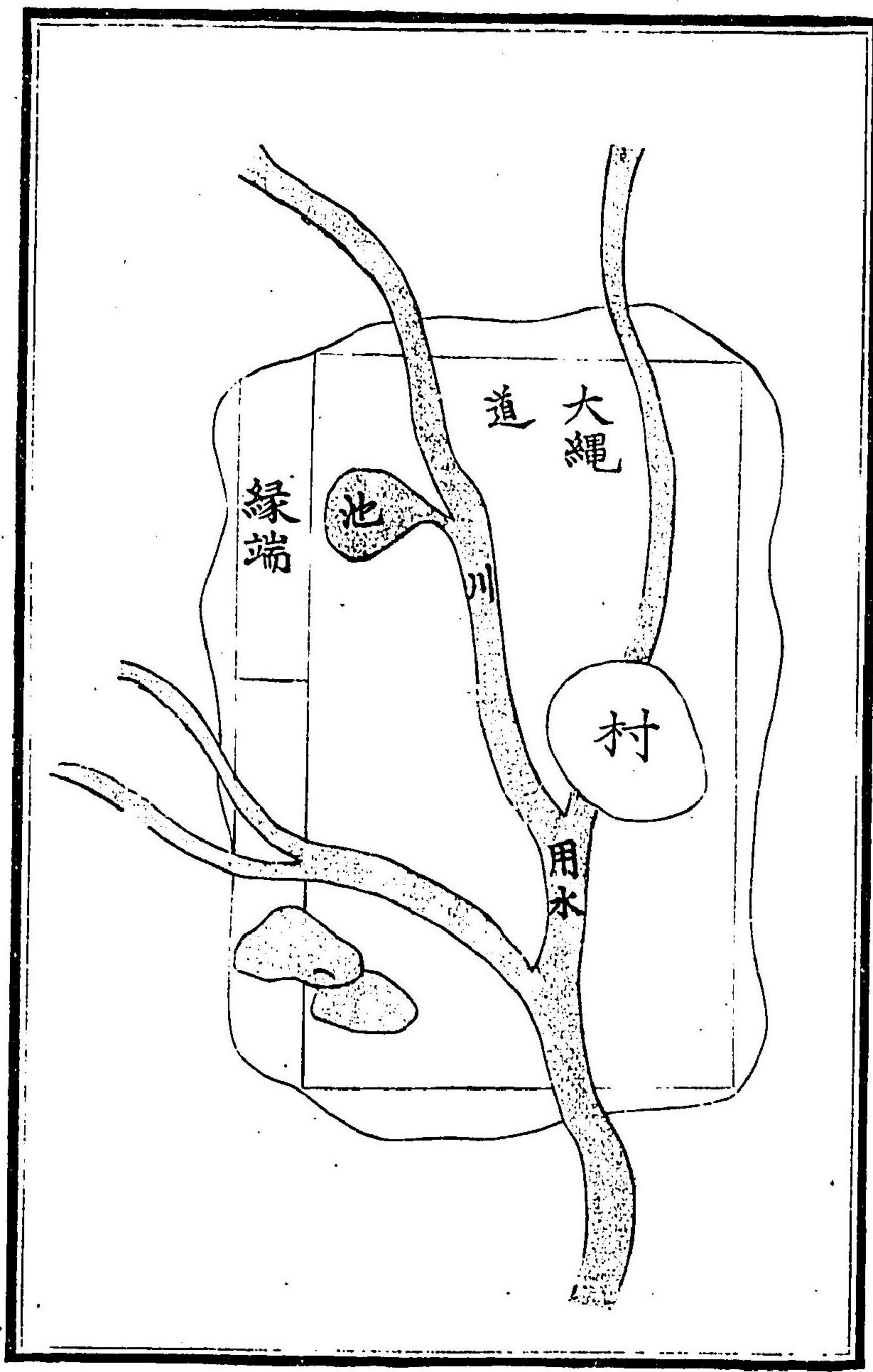


一加越能三州の御改作の刻村々惣百姓田地割ありて其以後  
 無斷田地割致さぬ御格也然れ共故有て御檢地入又は入百姓  
 又有所の何時によらす斷の土地割する格也然の一ヶ村の田地  
 割と碁盤割と云たどへり千石の村百姓四十人有時闌二十本  
 として闌一本は高五拾石宛の歩を割渡す也惣して田地割の  
 春永き年いたさゝれり耕作の手間有闌取の上田を二番割  
 とし中田の頭まで打立置上中下類地惣百姓寄合闌一本宛  
 地目の損徳を考闌段々取物也但闌の面歩平均不足の時引  
 田といふて中田水懸り宜敷田七八反も除置闌歩不足は切渡  
 すもの也田打立歩高少分にて闌は結へり以の外損徳あるもの  
 也不殘打立上中下闌取すれり高下あしされとも闌一度とこれ  
 の耕作新發のつかへる我ゆへ闌四五度も取てより

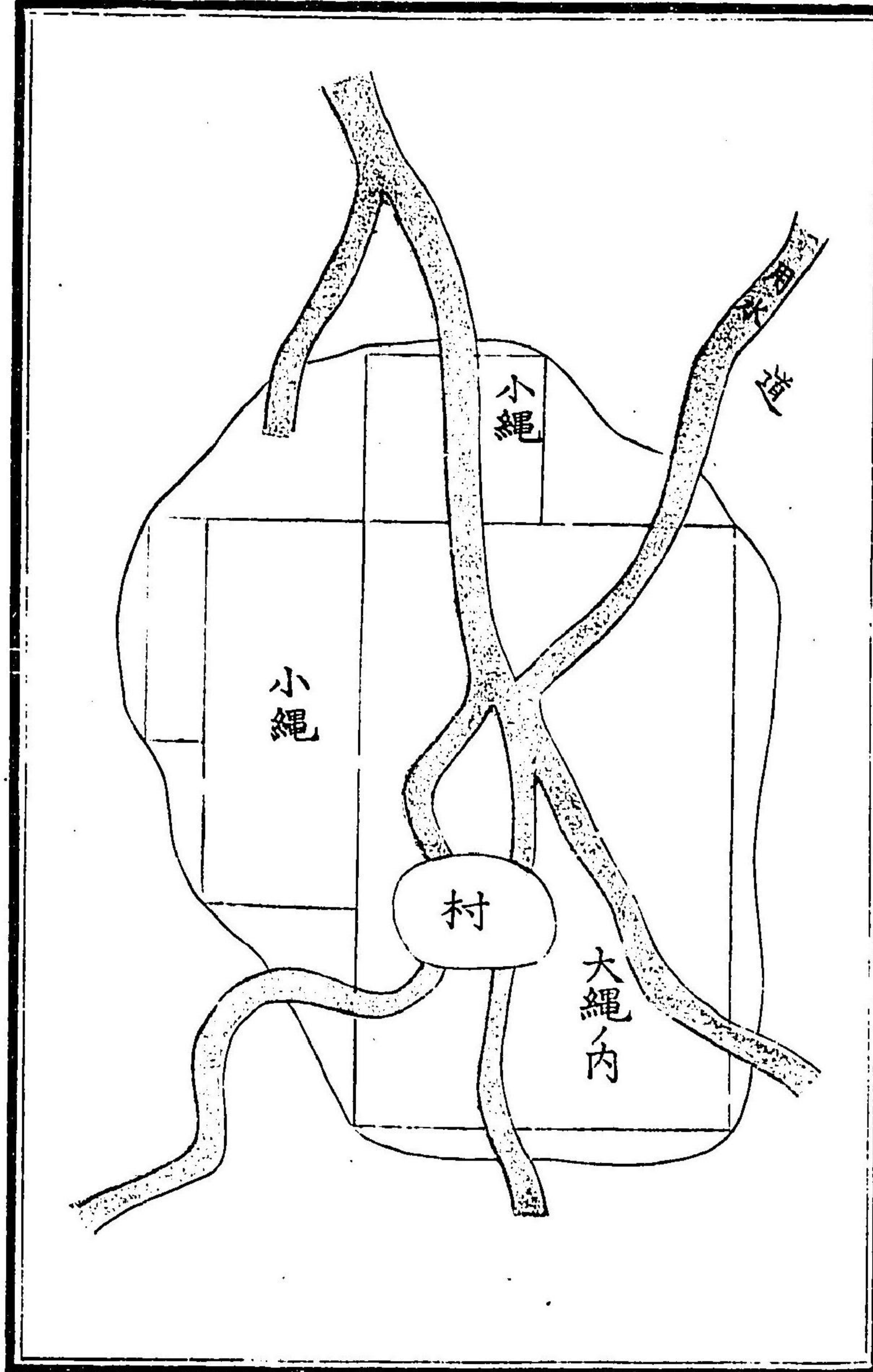


一ヶ村定成大畧 朱ハ繩也

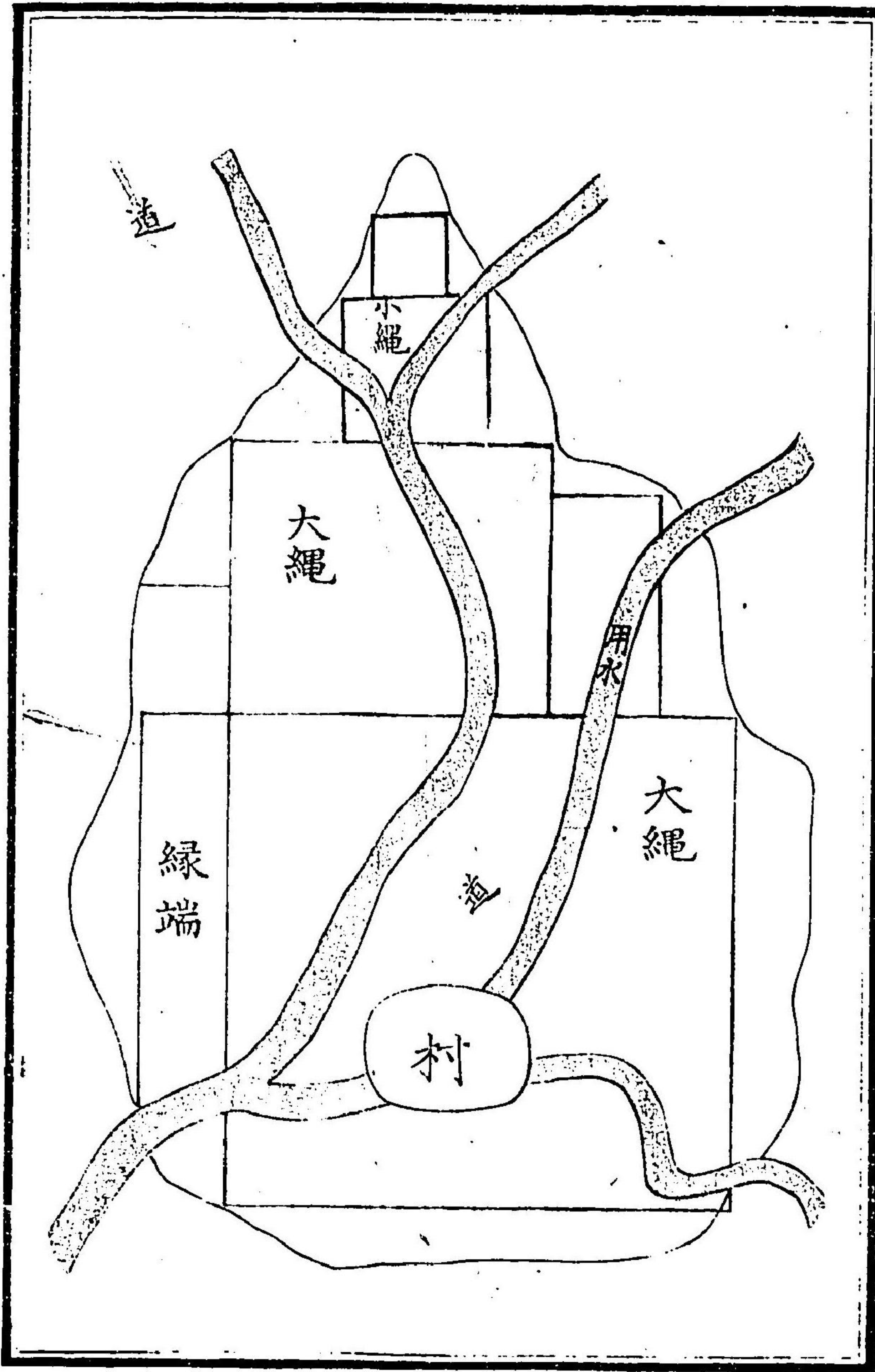




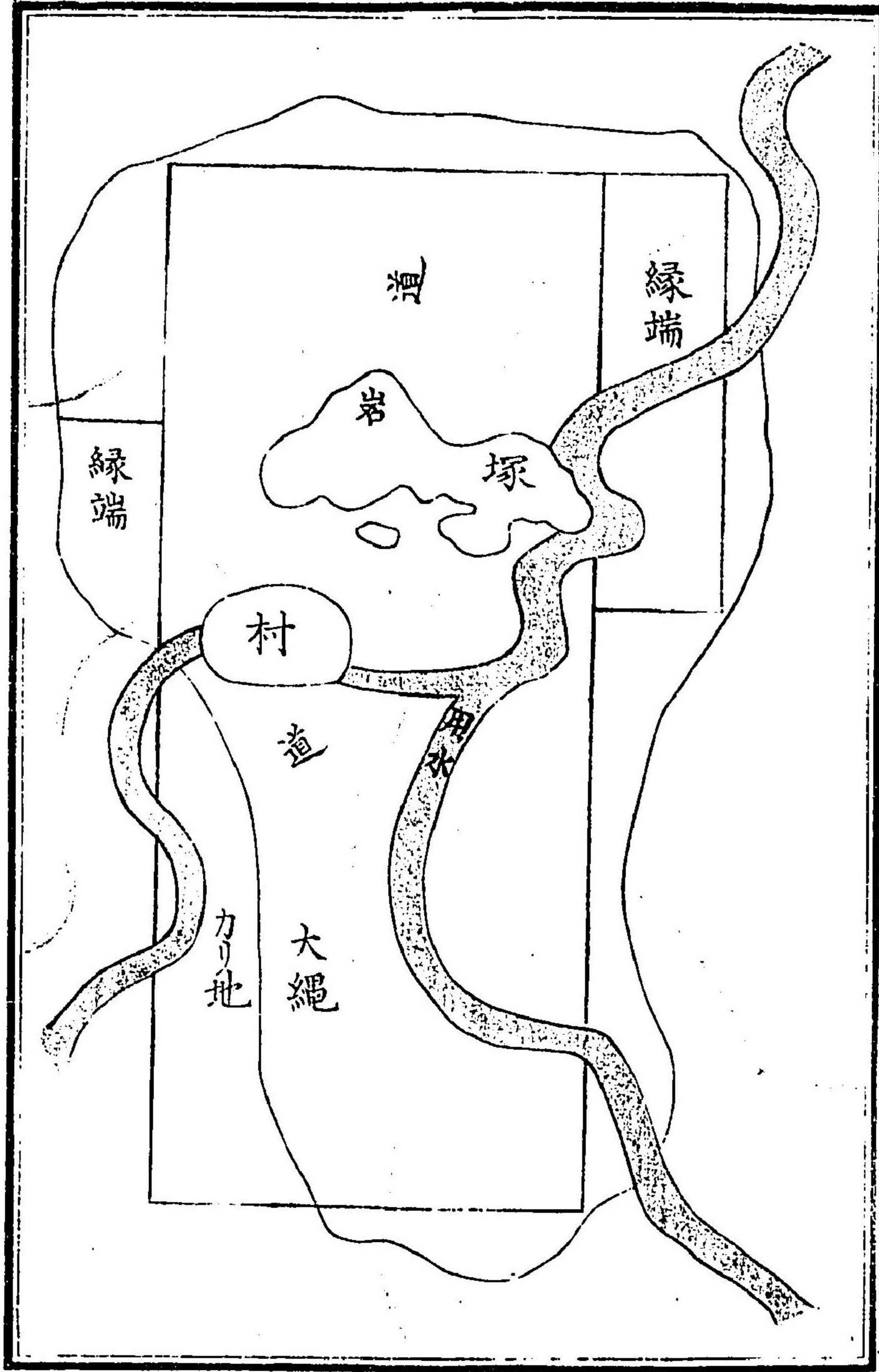




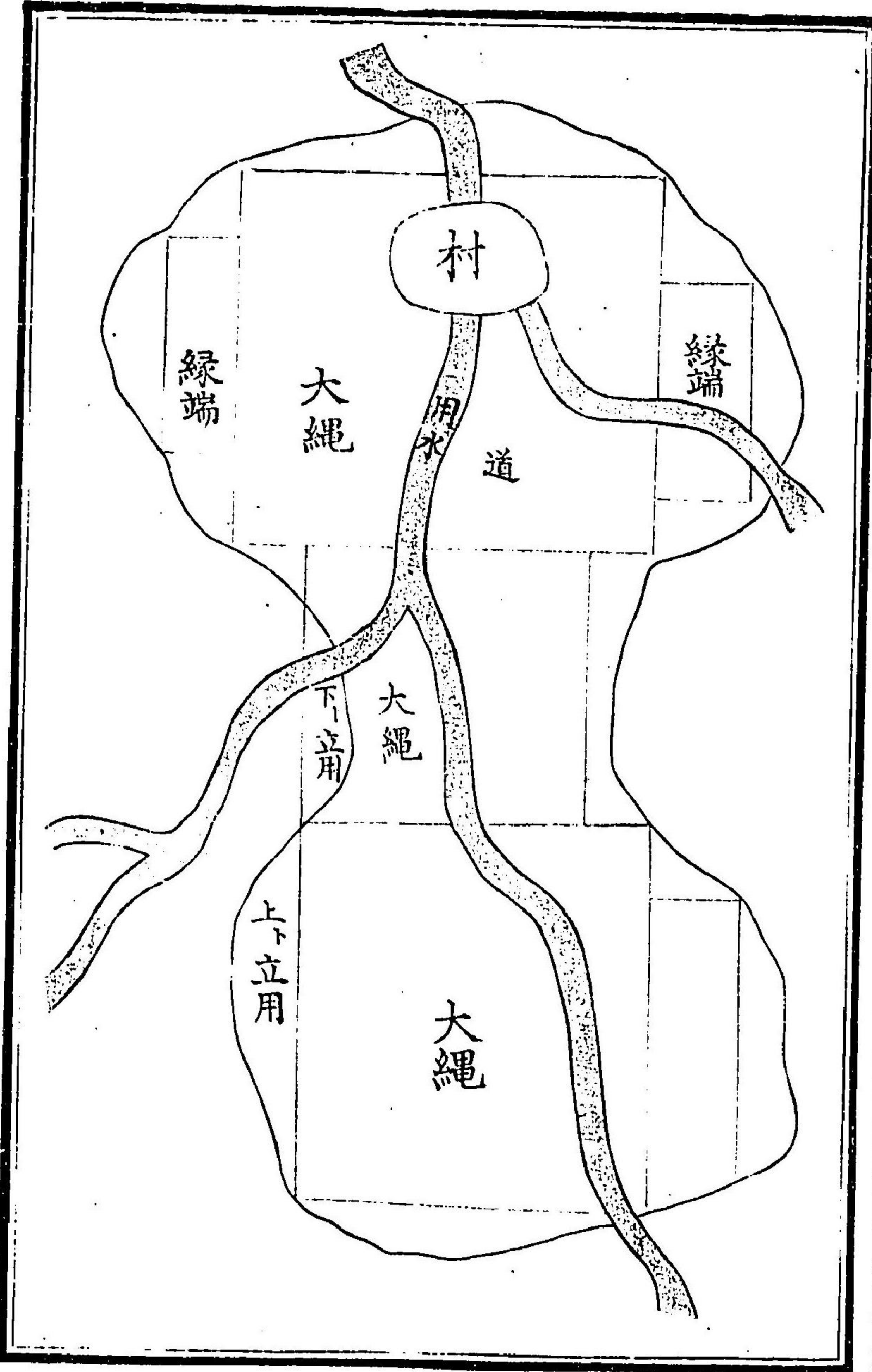














凡此六品は村々定成大概を記一ヶ村惣高廻し御檢地の  
割は御奉行一人又足輕貳人宛召連其所へ出檢地村の給  
圖と取本村并定境村々百姓不殘誓詞よて翌日定廻りし  
て境目并繩目等見届吟味の上竿打格也改作初より御檢  
地所へ他郡の御扶持人十村御奉行一人又一人宛指添島  
打役するもの也御檢地引物其外御定書兩通有大繩の内  
又江道用水石塚神社廟所かと皆引物又成故又惣打立  
の内抜き物又ある御格則一ヶ村抜物帳別又有物也

○

三ヶ國斗代

加州

河石  
北川  
郡部

一三百歩

一反



能州 四郡

此斗代壹石五斗

但田百歩ハ草高五斗也一步メ付五合宛

一三百歩

一反 加州 能美郡 江沼郡

此斗代壹石七斗

但田百歩ハ草高五斗六升六合六夕六才也一步メ付

五合六夕六才宛石川河北郡の斗代壹石五斗メ當テ

ハ百歩メ八十八歩二厘三毛七當ル也然ハ一割三歩

三厘増

一三百六拾歩

一反 越中四郡

此斗代壹石五斗

但田百歩ハ草高四斗壹升六合六夕六才也一步メ付

四合壹夕六才加州能美郡江沼郡壹石七斗の斗代と  
越中の斗代壹石五斗と并六十歩の歩過と平均ハ三  
割六歩越中の徳也又石川郡河北郡并能州四郡とは  
二割越中の徳也

一加州石川郡河北郡能州羽咋郡鹿島郡鳳至郡珠洲郡六郡  
と越中礪波郡射水郡新川郡姉負郡四郡草高百石定め五  
つよて定納違田地百歩メ付米四升六合三夕三才越中の  
徳

能州四郡加州石川郡河北郡草高百石に付田地貳萬歩  
越中四郡草高百石メ付田地貳萬四千歩

但高百石メ付田地四千歩宛越中四郡の徳  
草高百石ノ總四千歩ノ當  
一壹石八斗五升三合貳夕 定納口米 越中四郡徳米



一加州能美郡江沼郡二郡と石川郡河北郡能州四郡と草高百石定免五つよみ定納違田地百歩に付米三升七合七夕石川郡河北郡能州四郡の徳

能美郡江沼郡草高百石よ付田地一萬七千六百四十七歩石川郡河北郡能州四郡草高百石よ付田地貳萬歩

但高百石に付田地貳千三百五十三歩能美郡江沼郡

の損

草高百石ノ徳貳千三百五十三歩當

一八斗七升貳合貳夕六才石川郡河北郡能州四郡定納口米能州四郡徳米越

中四郡草高百石よ付田地二萬四千歩

能美郡江沼郡草高百石よ付田地一萬七千六百四十七歩當

但高百石よ付田地六千三百五十三歩引合越中四郡

の徳

草高百石ノ徳六千三百五十三歩當

一五石貳斗八升四夕

定納口米 越中四郡の徳米

一加州石川郡河北郡よて定免五ツ五歩の村田三百歩一反に米壹石五斗有時い是を歩効い云是中の村の中の田地出來も又中也

但一反よ稻三百束効を歩効と云壹歩の田よ米五合を中出來也

一御定六尺三寸竿をせめて田株の面と打時い一步の内よある稻株四方へ七株宛あり然は一步の株數四十九株有惣して田の植やう大方三ヶ國同事也其内新川郡い小坪よ植る故四方へ八株宛有然れい田一步の數六十四株あり



一 壹萬四千七百株 加州能州田三百步一反惣株數  
 但壹歩に四十九株宛  
 一 貳拾三萬五千二百莖 田三百歩一反の莖數  
 但莖平均十六筋中勘  
 一 三千六百七拾五把 但四株を平均一把とす  
 但一束の十二把宛  
 一 三百六束 但一束の十二把宛  
 一 貳千百拾六萬八千粒 一反の糶數 但十一粒に平均  
 此糶三石貳斗六升五合三夕 但田八夕八才  
 此糶米にして壹石六斗三升貳合六夕五才糶二ツ折の  
 格 但上拵米は程有壹升  
 米 但四合貳夕は程有壹升  
 一 六萬四千八百貳拾七粒 京升一升入糶數中勘  
 知行町間道程

十間四方 能州高ニノ五斗  
 一 百歩 右高ニノ五十石  
 百間四方 一 壹萬歩 右高ニノ五千石  
 千間四方 一 壹萬歩 右高ニノ五十萬石  
 壹万間四方 一 壹億歩 右高ニノ拾八石  
 一町四方〇六十間四方也 右高ニノ千八百石  
 一 三千六百歩 右高ニノ百貳万三千石  
 十町四方〇六百間四方也 右高ニノ百貳万三千石  
 一 三十六萬歩 右高ニノ百貳万三千石  
 道程一里四方〇二千六百六十間也 右高ニノ百貳万三千石  
 一 四百六千六百五十六萬歩 右高ニノ百貳万三千石  
 同十里四方〇二千六百間也 右高ニノ百貳万三千石  
 一 四億六千六百五十六萬歩 右高ニノ百貳万三千石  
 一 凡尊氏將軍の御治世文龜年中日本田地を御改其後天正  
 十八年又秀吉公御改被爲成又文錄二年に重て御改被成  
 一 統すると云ふ次る慶長十一年  
 東照權現様日本一統に御改と云則此時御定有之由又天



和二年御公領の御國郡所々御筭入御改と云  
 一 信長公御治世能美郡小松の城主丹羽五郎左衛門尉長秀  
 江沼郡大正持の城主山口玄蕃正弘被下置節能美郡八万  
 石江沼郡七万石何れも拾萬石の御軍役可相勤旨兩將願  
 ん依て御知行高増益分と郡中田地斗代と割掛出させ右  
 二郡は前に記如く加州石川郡河北郡能州四郡越中四郡  
 と引合斗代大分能美江沼兩郡は諸郡よりと過上是と依  
 て彼二郡百好今以難義  
 一 加州四郡能州四郡の天正年中秀吉公御治世御筭入と付  
 田地三百歩一反と極る由  
 一 越中四郡の其刻御筭不入依之右之通田地一反三百六十  
 歩と云惣して五畿七道の内其節御筭不入國々の田地一

反今以三百六十歩也

石川郡稻惣名 朱點の米有

早稻

屋よ岡	彌六早稻	ちつこ	松本共云
日の出	三浦	三納	
かけ餅	須の谷	赤早稻	
大唐早稻	示野	五々百餅	
孫左衛門	雀餅	神子早稻	
津輕	盆餅	ついあひき	
川原早稻	坊主早稻共云	彌六餅	へちばり共云
羽ひろ	わさくら共云	ぼらす	
新保	下林	江戸	



遅早稻

早大唐

中稻

ちく

石立彌六

礪波彌六

小崎

小彌六

赤彌六

藤四郎ちく共云

三七餅

稻泉

小白

柏野白

大佛餅

彌六餅共云

雀しらす

若狭彌六

大彌六

矢等彌六

太郎兵衛餅

京はやり

はな打

唐干餅

晚稻

そより

黒餅

赤餅

目黒

越後白

撰出し

よふし

しらか具手

三九郎

真手

石刻

岡倉

遅岡倉

遅藤四郎

よこれ

出来穂

高尾屋

犬のゑ餅

疇越餅 五々百共云

みの笠

大真手

忠繩 四ふしと云

ぬぎ黒

こさころ

大しろ

遅彌六

御坊餅

新保御坊餅

こされ餅

づら彌六

鹿島白

能登白

大穂

都合八十三色

寶永の頃御郡も作る稻を記憶して稻の名の所より替  
る故年々異名多なる撰出し少宛一試色に植るより異風有故に品を



多し御色計は郡々不残是を改め  
 石川郡中の里草高五百石斗の中の村よて草高五拾石所  
 持の中百姓持高不殘耕作するもの農人男女人馬里子給  
 銀糞入用の大圖

一四人 男内一人其身

壹人ハ中男給銀平均九拾五匁

平均ハ百貳拾目下人達者成者給銀  
 壹人ハ草苧童給銀平均四拾目

一貳人 女内一人妻

一馬一疋

代百七拾目

一三石六斗

馬所大豆時平均一日一分ハ升此宛内を引但

代下共女一拾人給銀但并七色の小道具  
 日但金銀二ヘ三は枚との馬へすあれども毎

一三百駄程

眞糞付米但一付升五合よりも一貳升迄に高ても有駄

代米五石貳斗五升

此代銀貳百六拾貳匁 但中勘石よ付五拾目宛

一三百六拾目

一九拾目

一貳拾五匁

壹貫三百六拾九匁

一七十程

一千七八百足

石川郡百姓夏作よ取物

一十七八俵より二十俵まで

菜種子

代銀四百目 但二十俵分石二付四拾目宛

油直千代下有勘  
 但度夫高打銀水  
 河荷并村掛米煎  
 余代其外高掛り共  
 米其十村掛り馬  
 修具代錄入用の年類々高道あ具り品々  
 収納之米并作喰糶共  
 蔵入又之并ハ上糶共  
 入枚入又之并ハ上糶共  
 五枚入又之并ハ上糶共  
 近の枚入又之并ハ上糶共  
 遠に杏入又之并ハ上糶共  
 分馬但一  
 石川郡百姓夏作よ取物  
 菜種子  
 代銀四百目 但二十俵分石二付四拾目宛



一拾五俵より貳拾俵迄  
大麥小麥共に  
右兩様百姓作取但麥の百姓給物也菜種子の中百姓下百姓年内より前銀取年貢にする也

耕稼春秋卷之七上

鋤鏡鉞  
田繩  
鋤胸懸  
田鞍  
胸懸  
土とさこ  
擔桶  
溜桶  
荷杖  
水替桶

槩  
田引手  
つくは繩  
鋪  
荷鞍  
牽綱  
鞍蓋  
野籠  
糞柄杓  
柄綱  
泥上

耙  
小引手  
鎌  
てんく  
鞞  
鞍繩  
馬桶  
筋  
棒  
捌  
ついと勢



熊手 手斧 大豆植庖丁 鶴嘴 杵 米麩 こい箸 箒 槌子 俵 ねこた 旅いつみ

山刀 白咽切手斧 麻葉落 田轡 摺臼 石臼 綿線 笑 楚機 槌 屏 手籠 田圃いつみ

斧 白目取 芋引金 白 柳蓑 ゆるわ 擡 編板 でふふ石 楚 馬いつみ 持籠

ふり持籠 手持籠 胸當 さいさ 阜月蔣 かし

之ね持籠 ばんどり ばか 脊當 鼠指 鳴子

引すり持籠 下襲 小手 ねこあゑ 土豹止



臼の目取

摺うすの目たつる物あり或は三分鑿よても目をたけり

大豆植庖丁

大豆小豆大角豆なとうゆるよ用る代銀三四分

麻の葉落

麻をかりて葉を落すものあり代銀三分或は四分

芋引金

芋のかわをおとす物なり代銀三分

田轡

代銀八分或は壹匁

鶴嘴 石廻し共云

代銀壹匁五分貳匁石地を堀物也

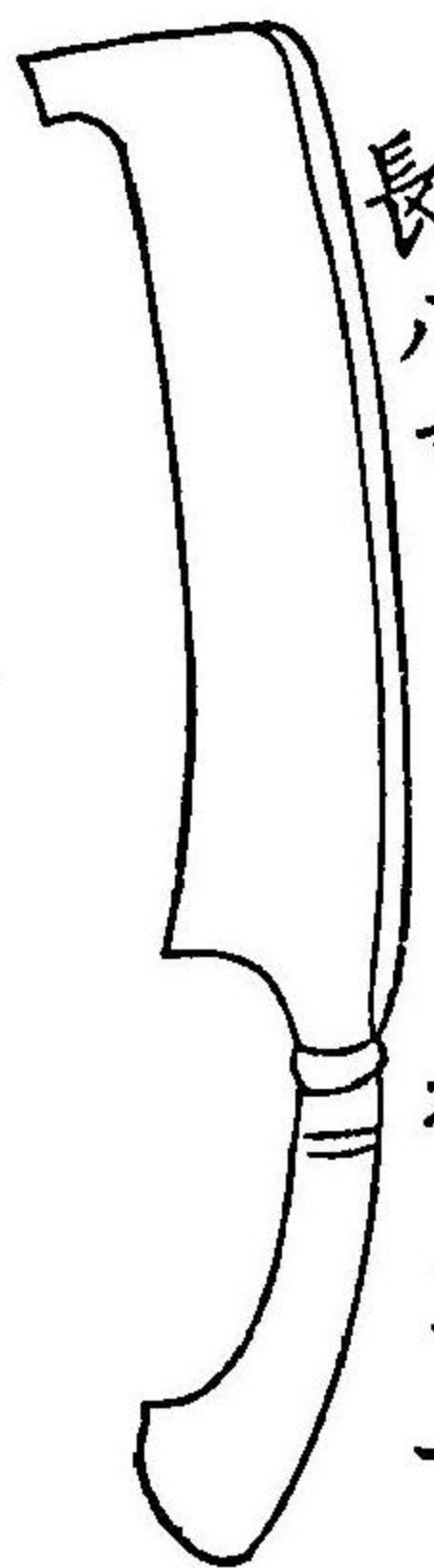


熊手



柄四尺

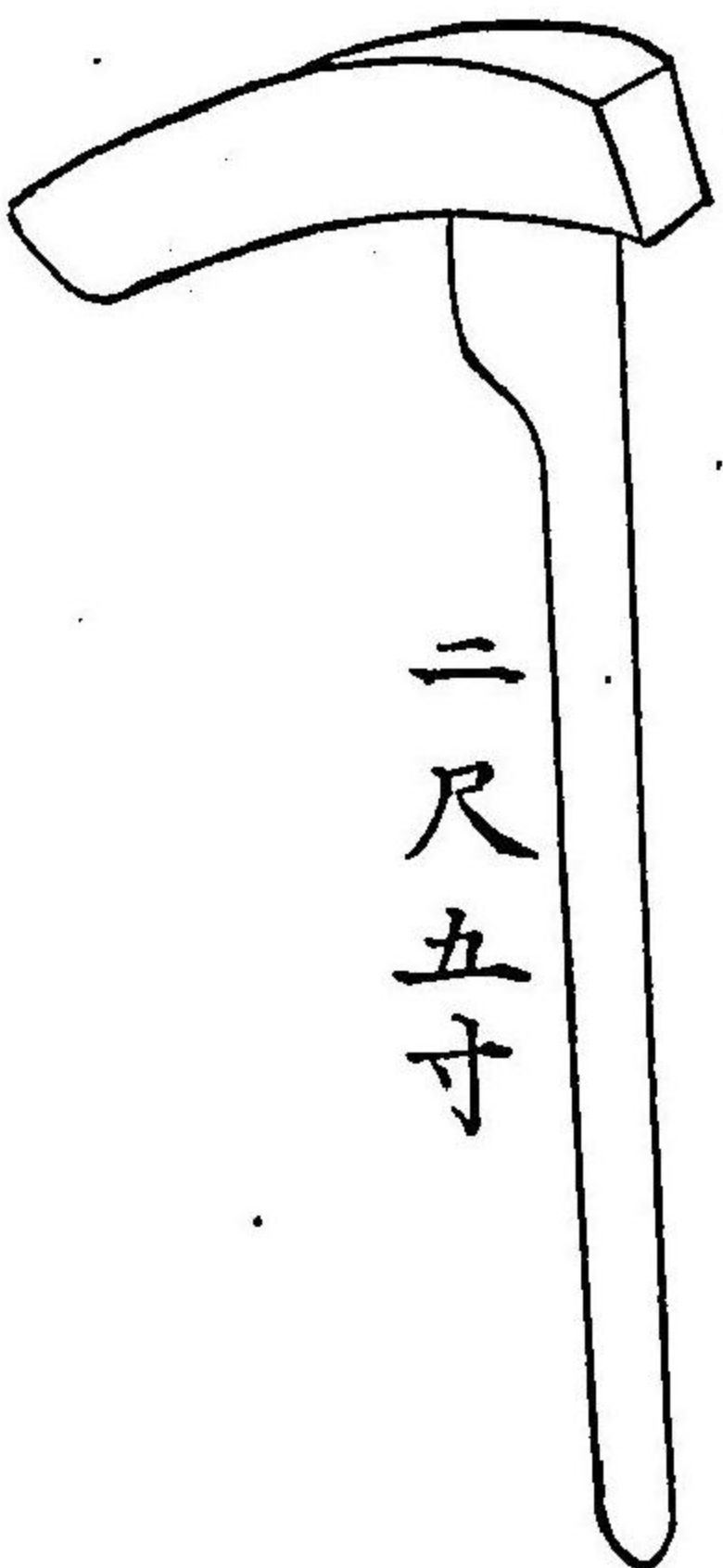
山刀



柄一束半

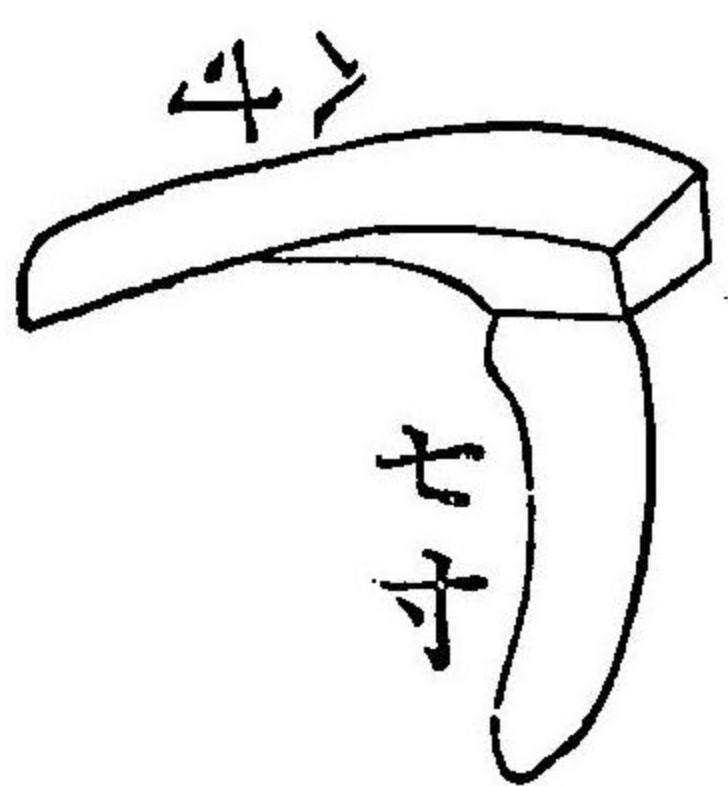
長八寸

斧



二尺五寸

手斧

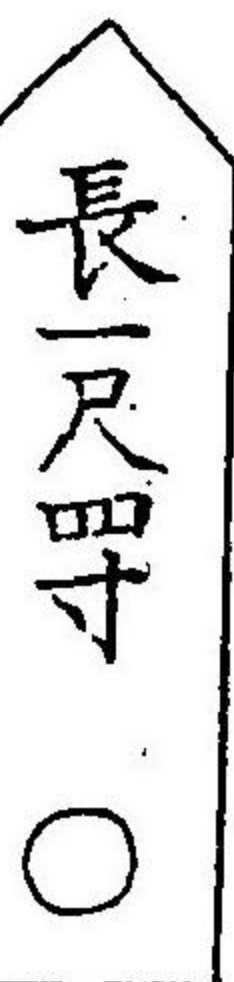


七寸

農勤書 農耕稼春秋卷七之上

鋤の事

鋤一柄鏡辨共代銀大概拾壹貳匁也鋤細工人一日よ一から作る鏡辨ハ鉄の鑄物ありからの具ねりは杉よりの草楨或は杉を用余の具は何木よてもかよ木を用



長一尺四寸

是を大粗鏡といふ鉄のおもさ六

百目あり代銀三匁三分

長一尺三寸

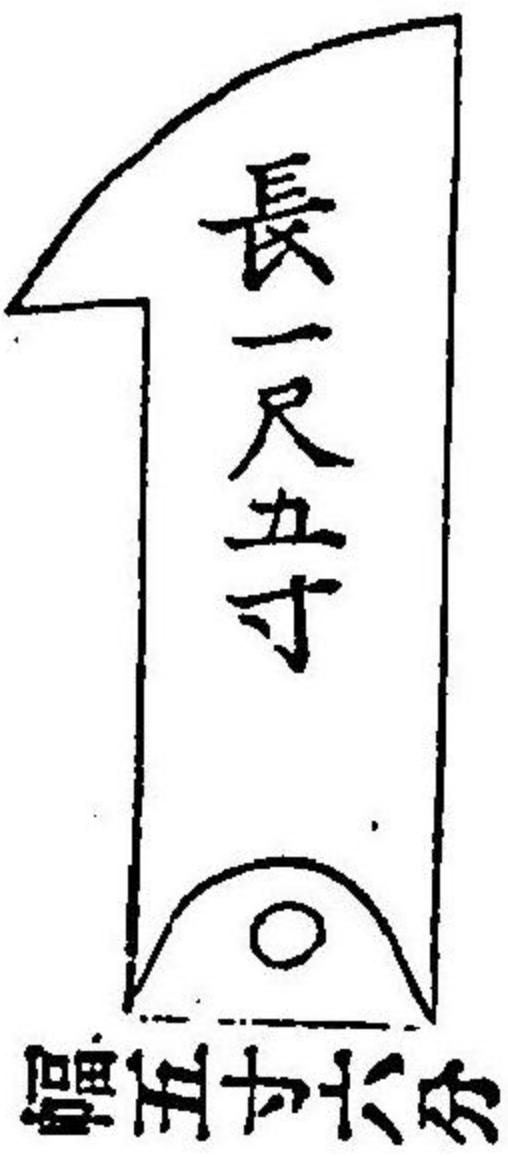


長一尺三寸

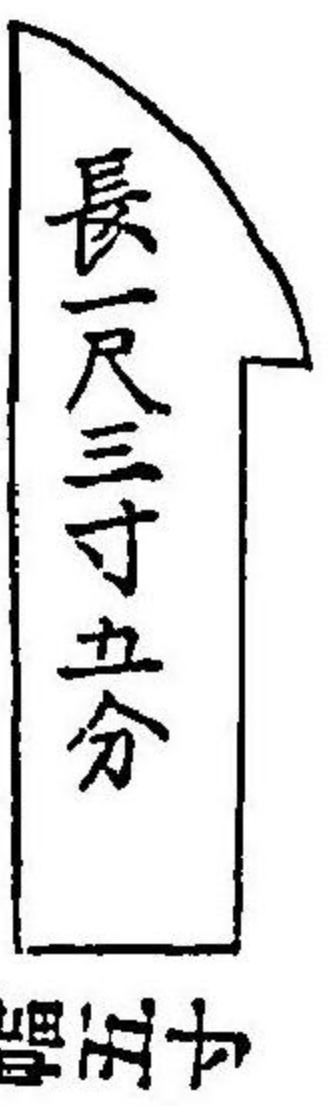
是を小粗鏡といふ鉄のねもさ四

百目あり代銀貳匁三分



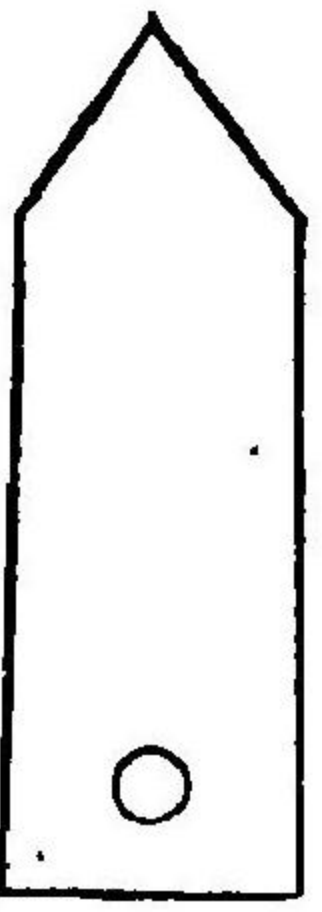


是を大ふま鏡といふ鉄のおもさ  
六百目あり代銀貳匁七分



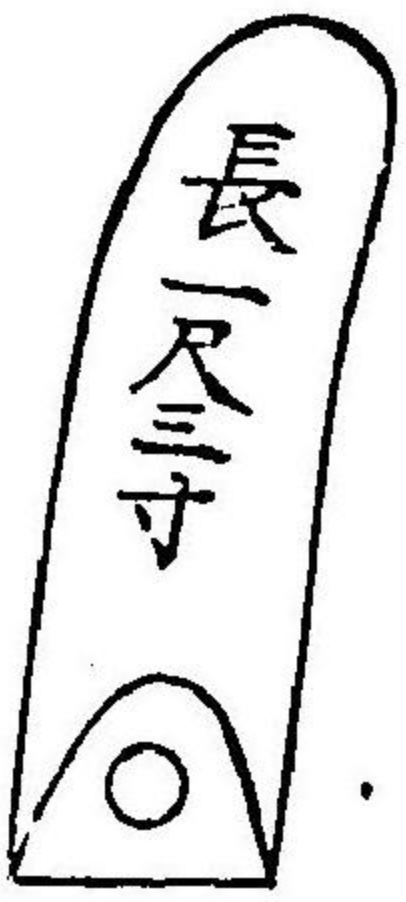
是を小ふこ鏡といふ鉄のおもさ  
四百目あり代銀壹匁八分貳匁三  
分

此ふこ鏡の地のあさき所も用る馬の不疲ものなり



是を乃反鏡といふ鉄のおもさ六  
百目あり代銀貳匁七分此さき加  
州の内ふてい大平村につかふ

寸尺右ニ同



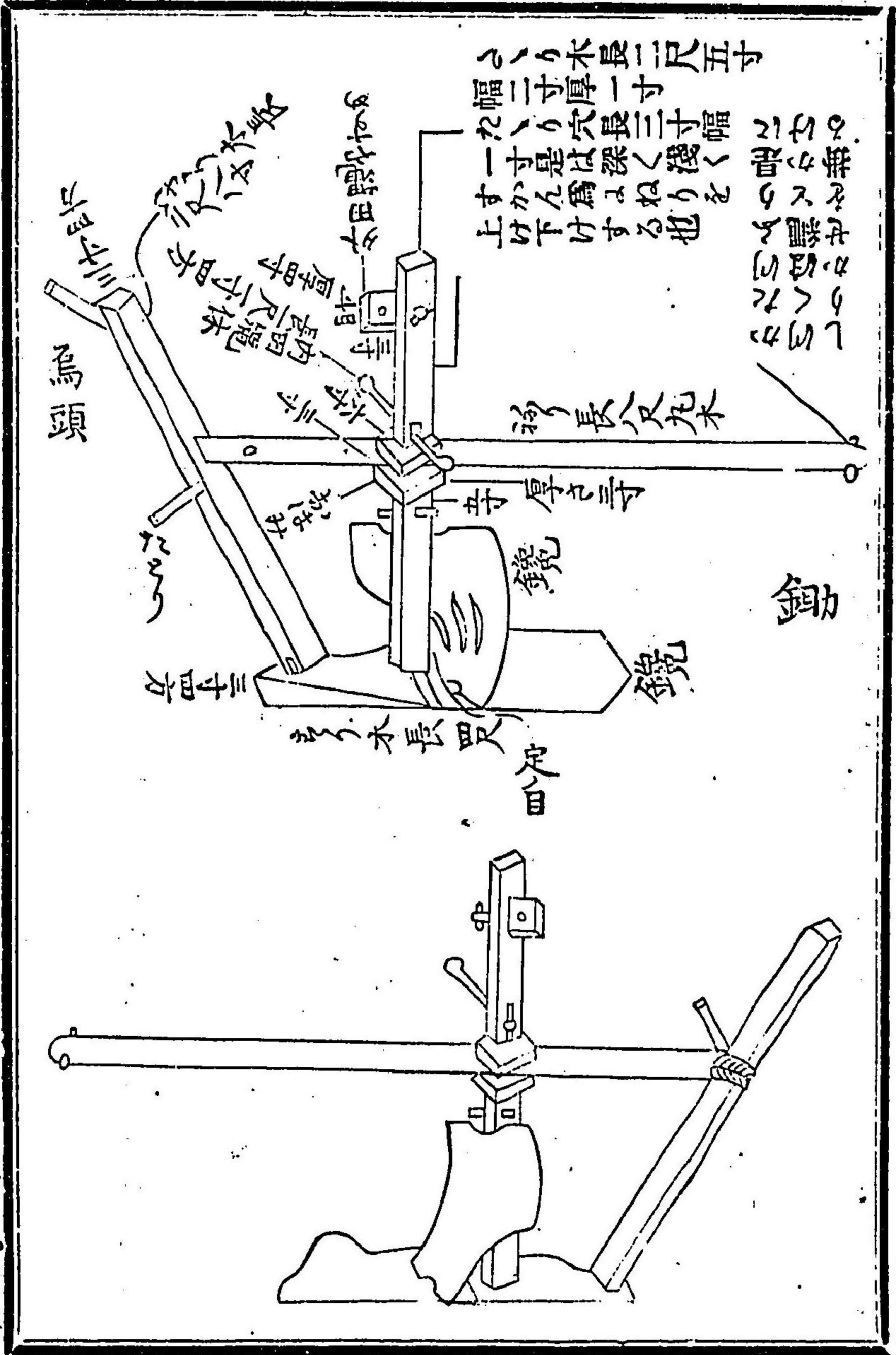
是を柳葉といふ鉄のおもさ三百  
五拾目代銀貳匁壹分此鏡は能登  
越中ふけかふ

右六色のとき先の先也

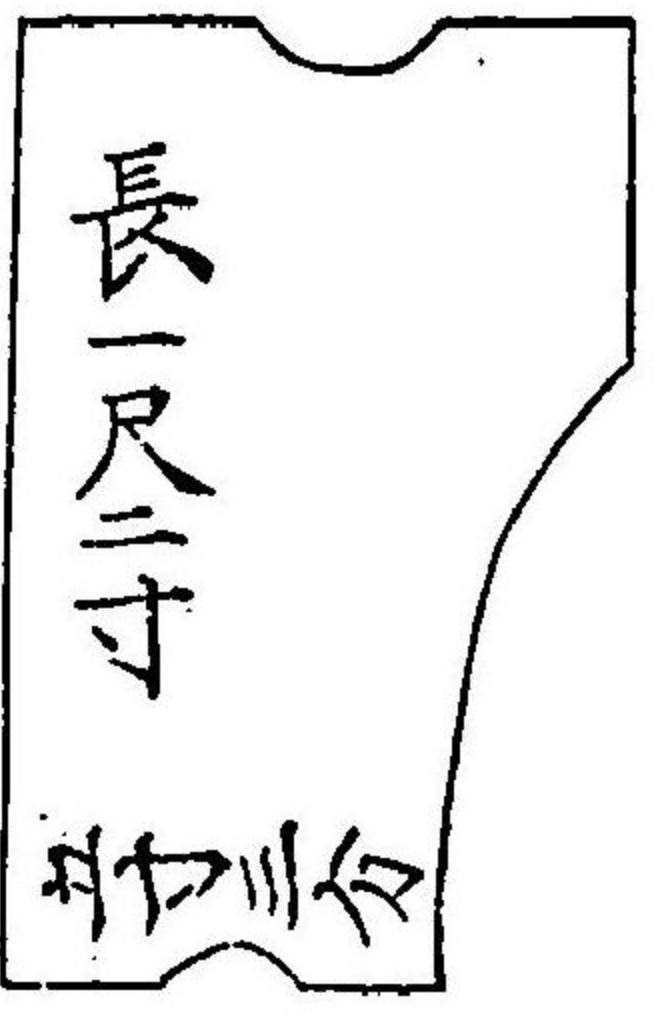
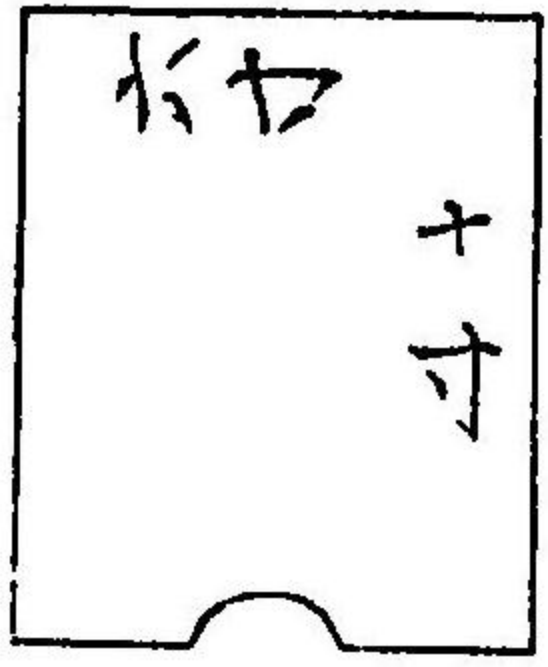


是を大辨といふ鉄のおもさ六百  
目あり代銀貳匁八分





用 癖の輕重の事地を淺く深く癖へき爲也沼には木のへらを  
 用 右三色はすきのへら也



是を半癖といふ鉄のおもさ貳百  
 目代銀壹匁三分是は木のへらよ  
 あつる也

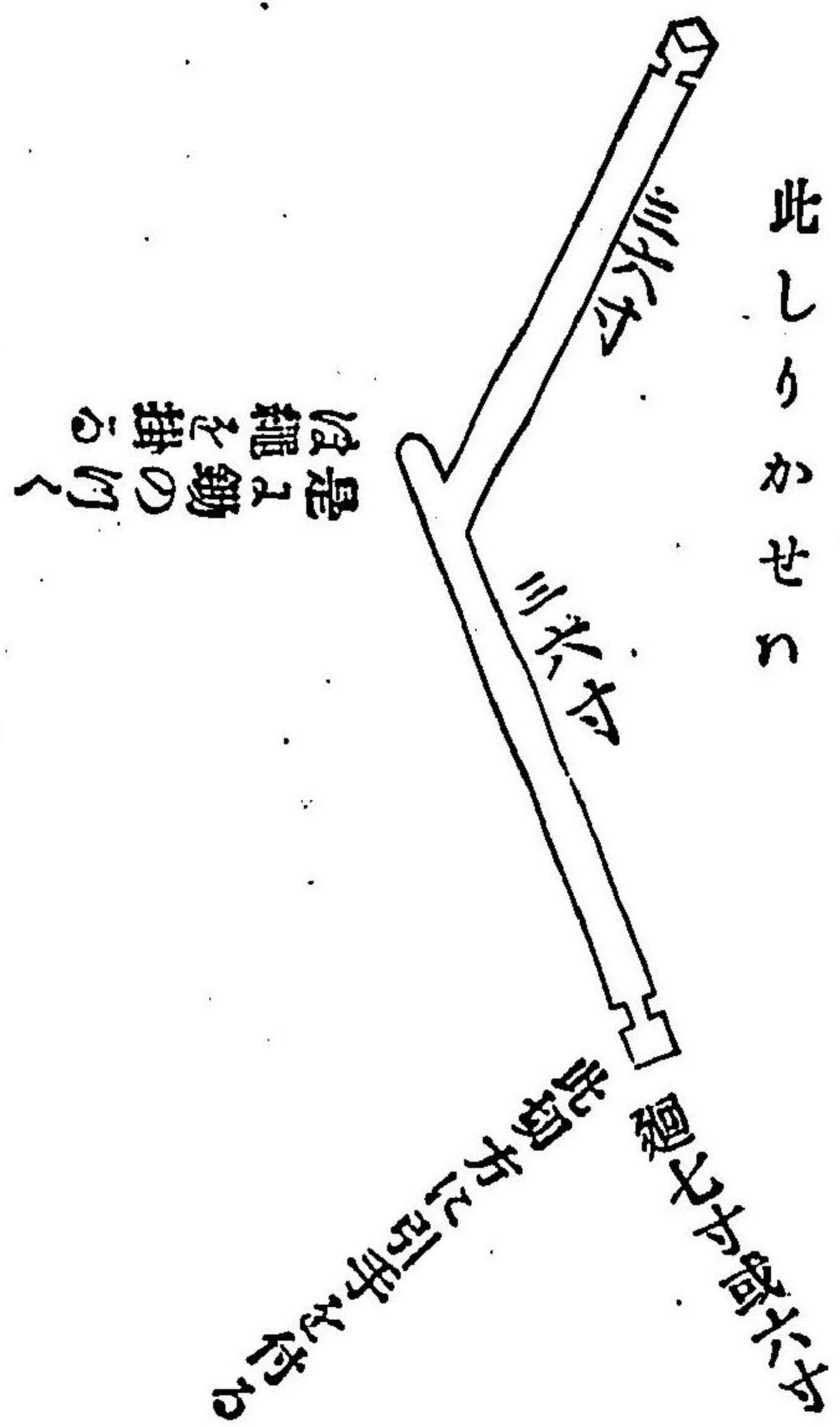
是を小癖といふ鉄のおもさ五百  
 目代銀貳匁七分



般木

しりかせの木の枝の曲りたると作る鋤よかくる物也馬把よの不掛

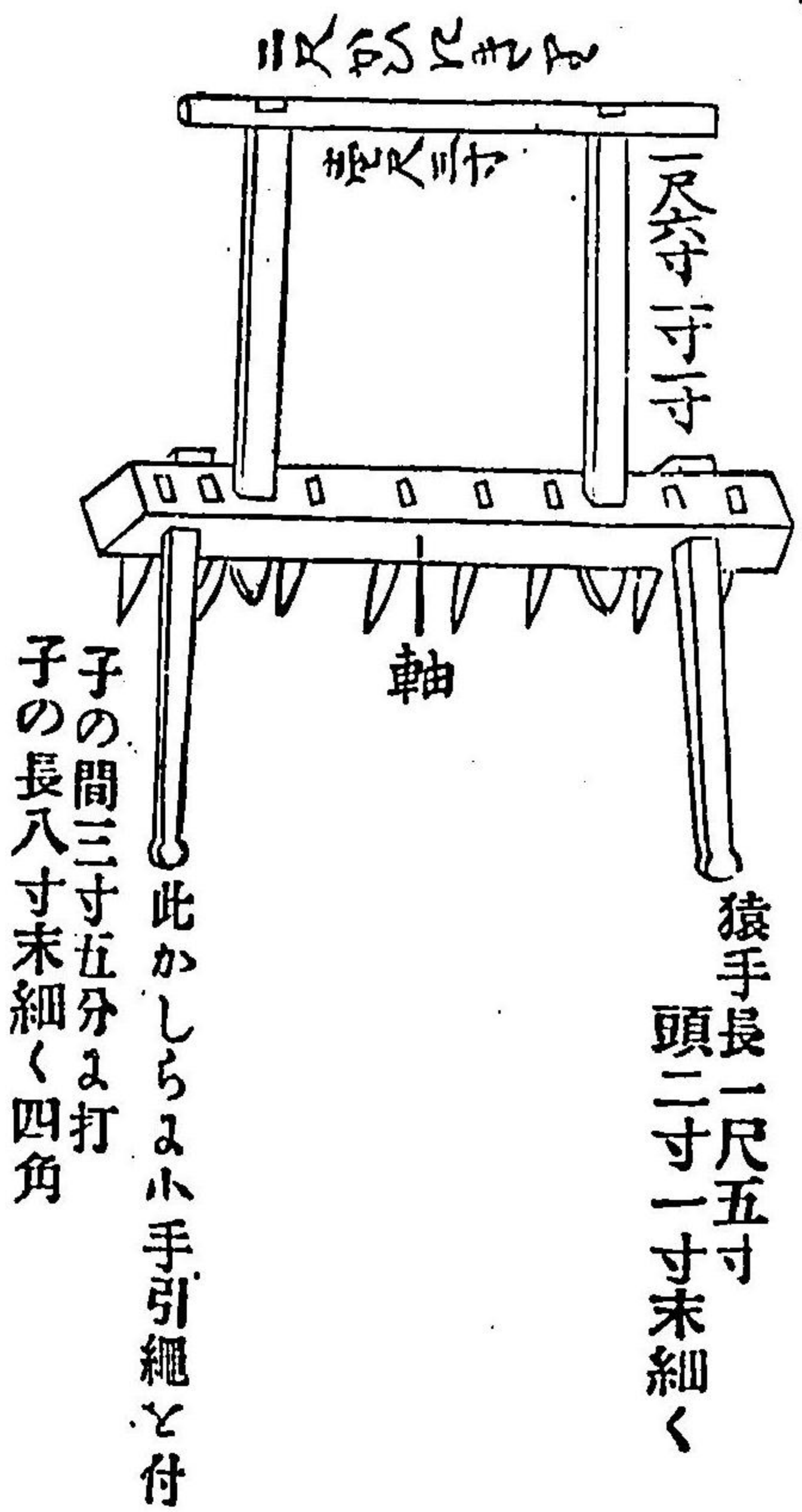
此しりかせの



馬把の事

馬把の子數八本也鉄のおりさ五百目又の五百三拾目よ作る代銀六匁重目は七匁也軸鳥居代銀貳匁より貳匁五分也軸は上の杉或楨也鳥居の何木よても用る

把





田繩

鋤馬の手繩三尋半馬把馬の手繩二尋半也ぬいこを正月池に廿日はと漬て後干て用

田引手

鋤馬の引手長一丈二尺馬把の八尺九尺也但田の廣狭よりて長短あり藁よて三ッ合よする

小引手

馬把の猿手よ付る長一尺藁よて二ッ合

鋤胸懸

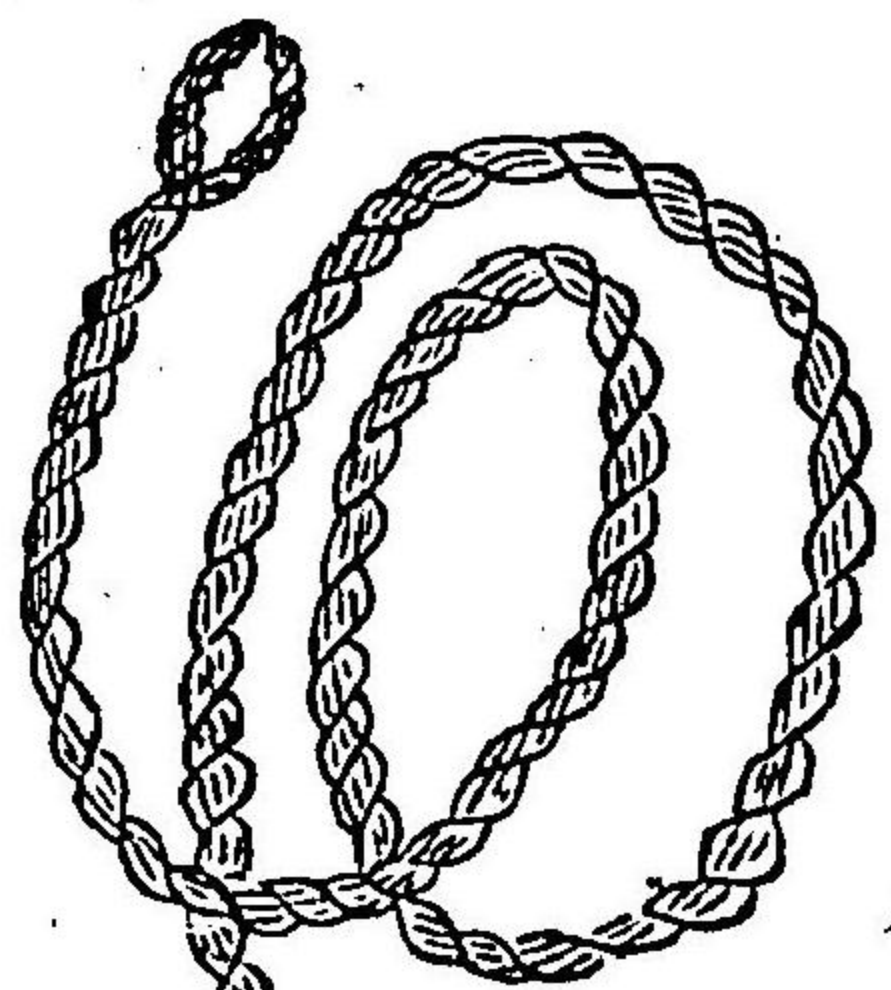
ぬいはと以乗鞍の腹帯の如く組て内よとさを當る

ゆくは繩

鋤のぬりよしりかせをつくる繩也大廻六寸余長さ五尺

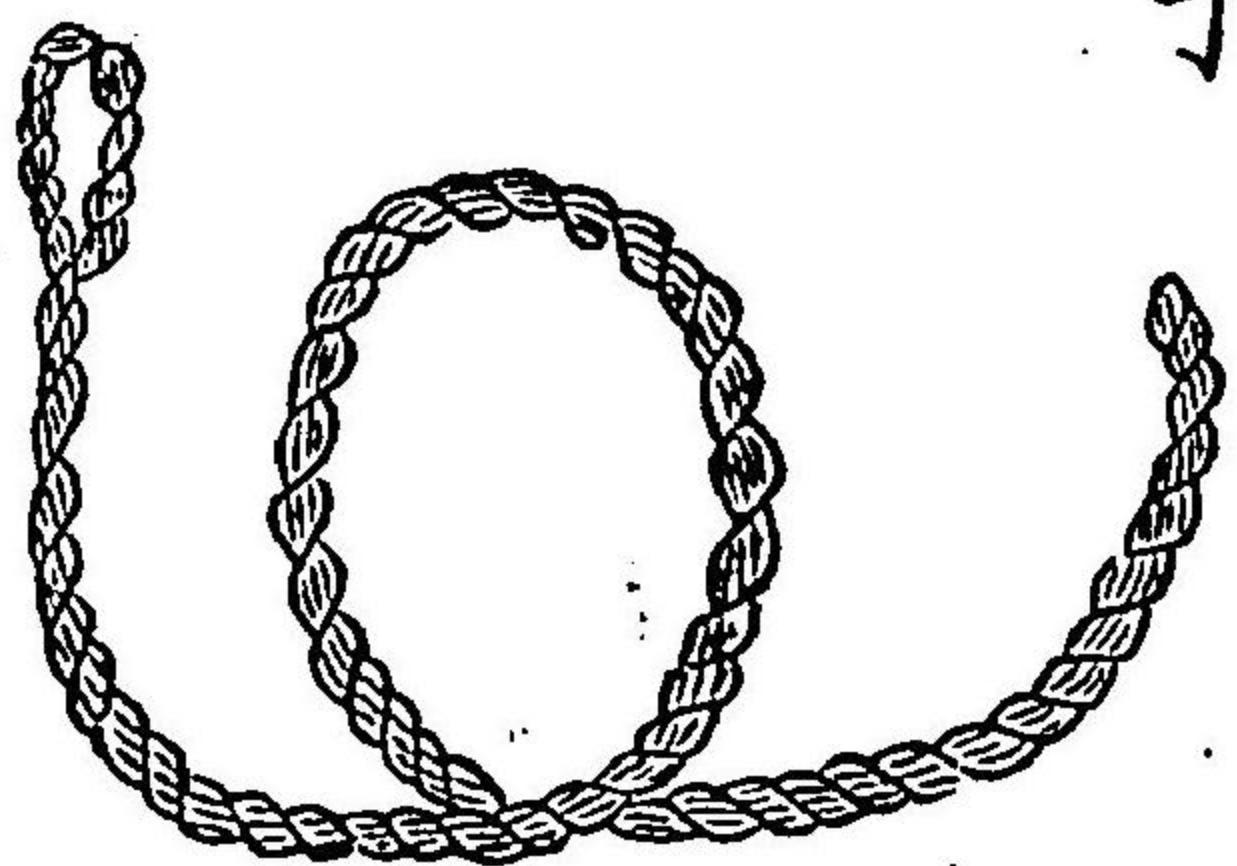
内本貳尺の打繩末の貳つよわりてなわよぬふ鋤よ付

田繩



如此二筋

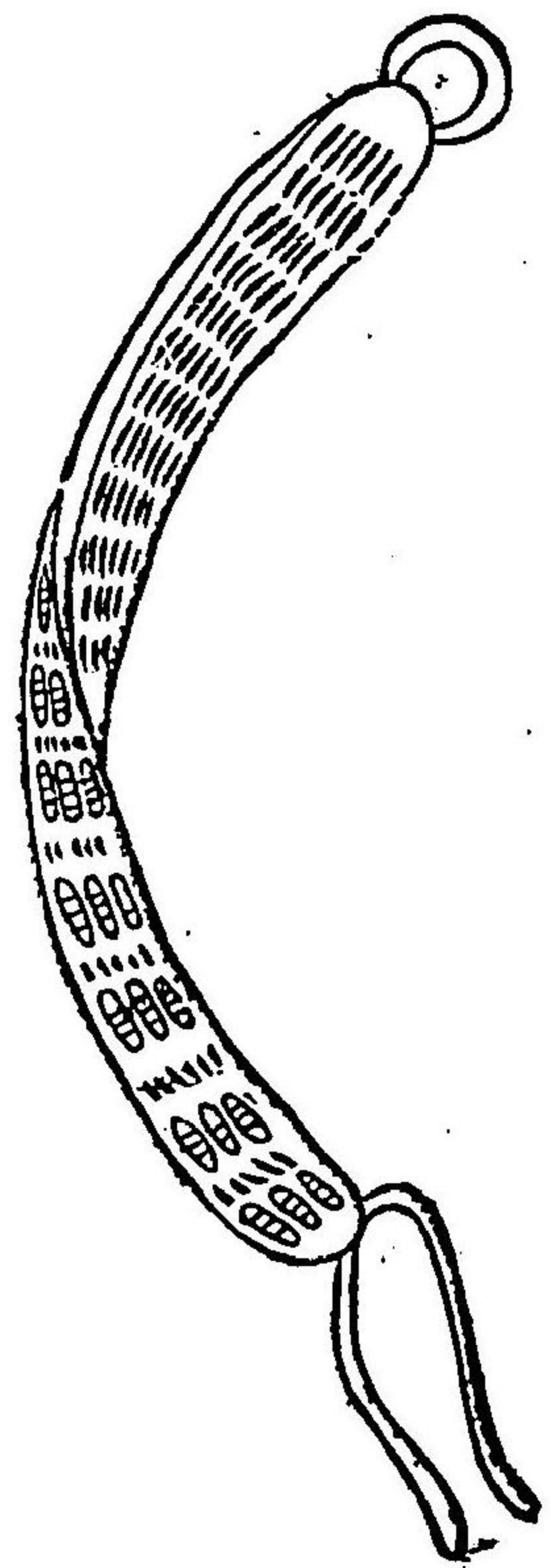
田引手



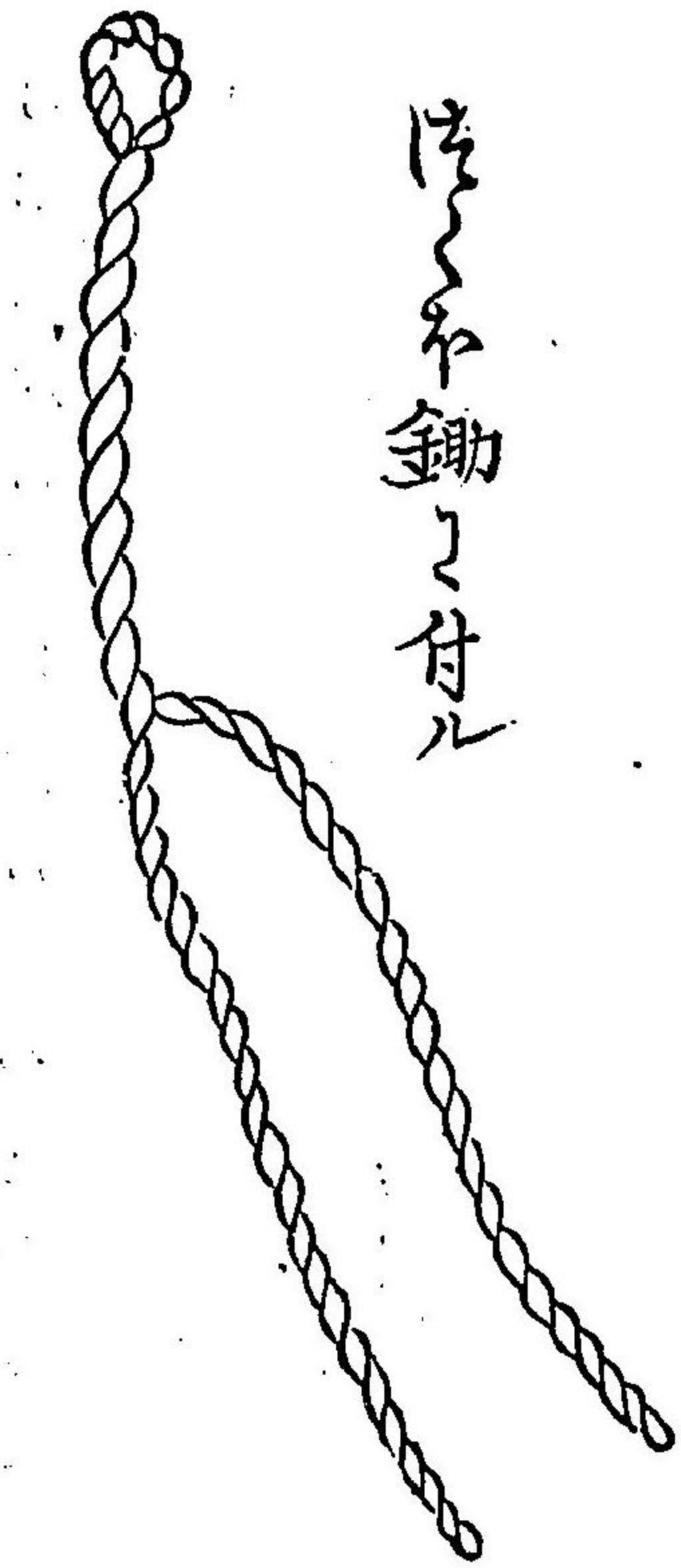
如此二筋



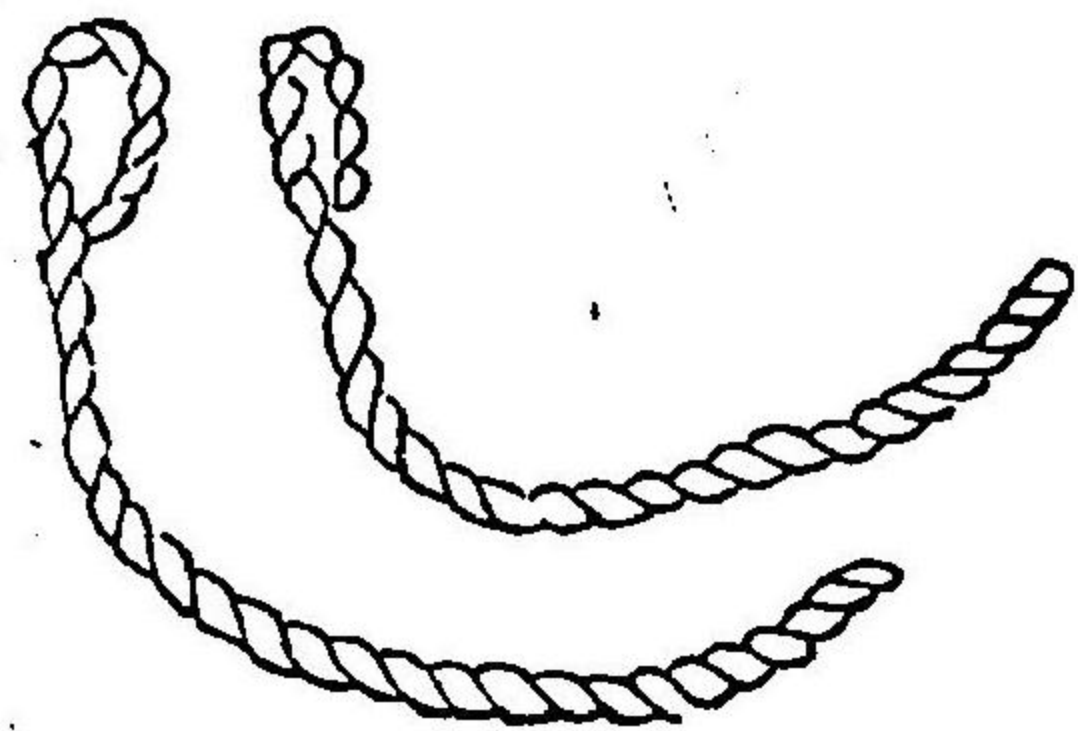
胸懸鋤又いまんくわ馬ふ付る



ほろろ鋤と付る



小手引まんくわ用



鎌

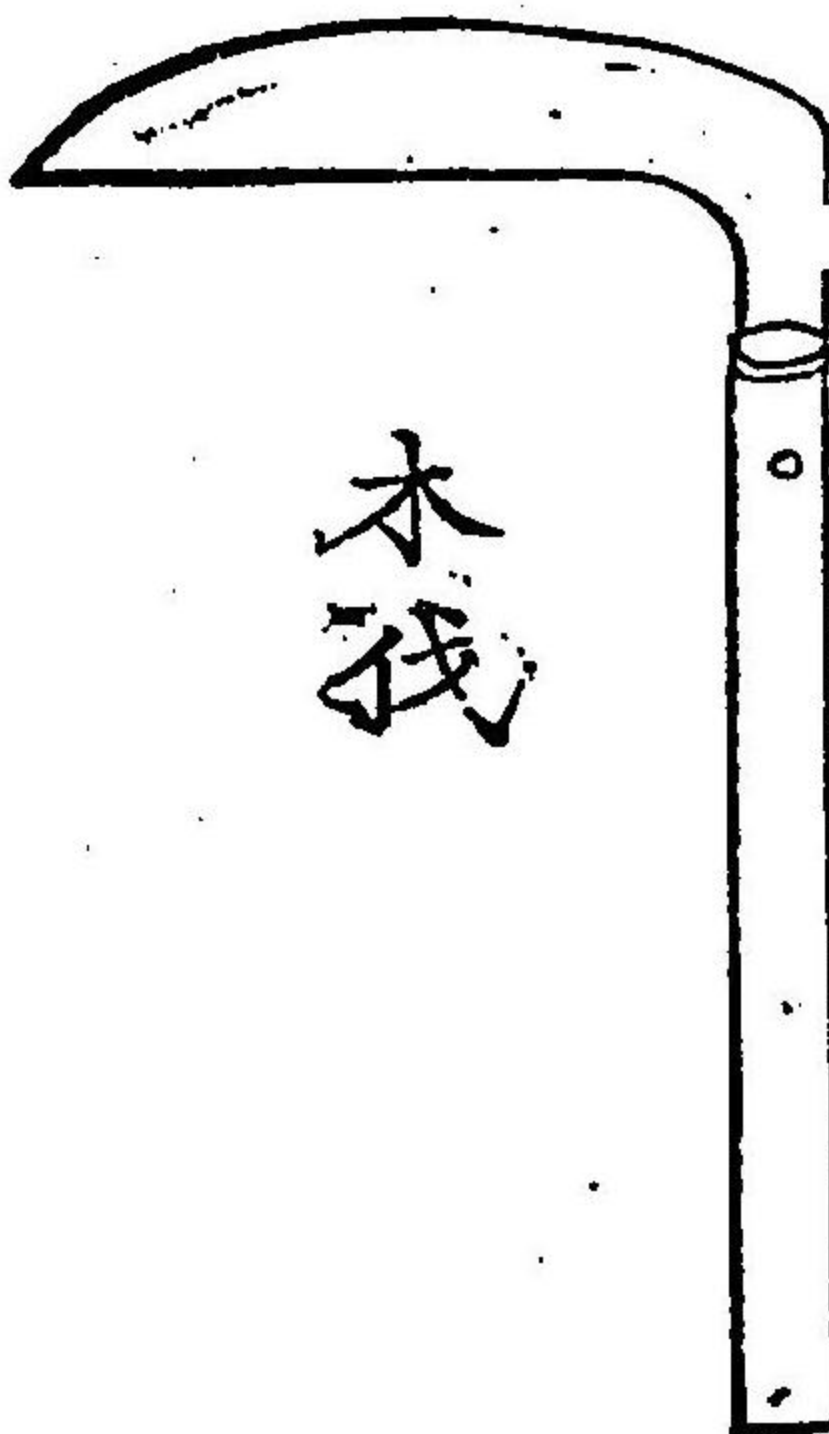
草薙鎌一丁代銀壹匁三分或ハ壹匁四分是第一山方共遣鎌也

木鎌一丁代銀壹匁五六分

鋸鎌一丁代銀五六分但なたよてもめとさきり刃を直おする也但古鎌を鍛治に遣してもめやきて切する  
櫛懸鎌代銀八分或壹匁壹分不耕以前此鎌よて稻の株を割也

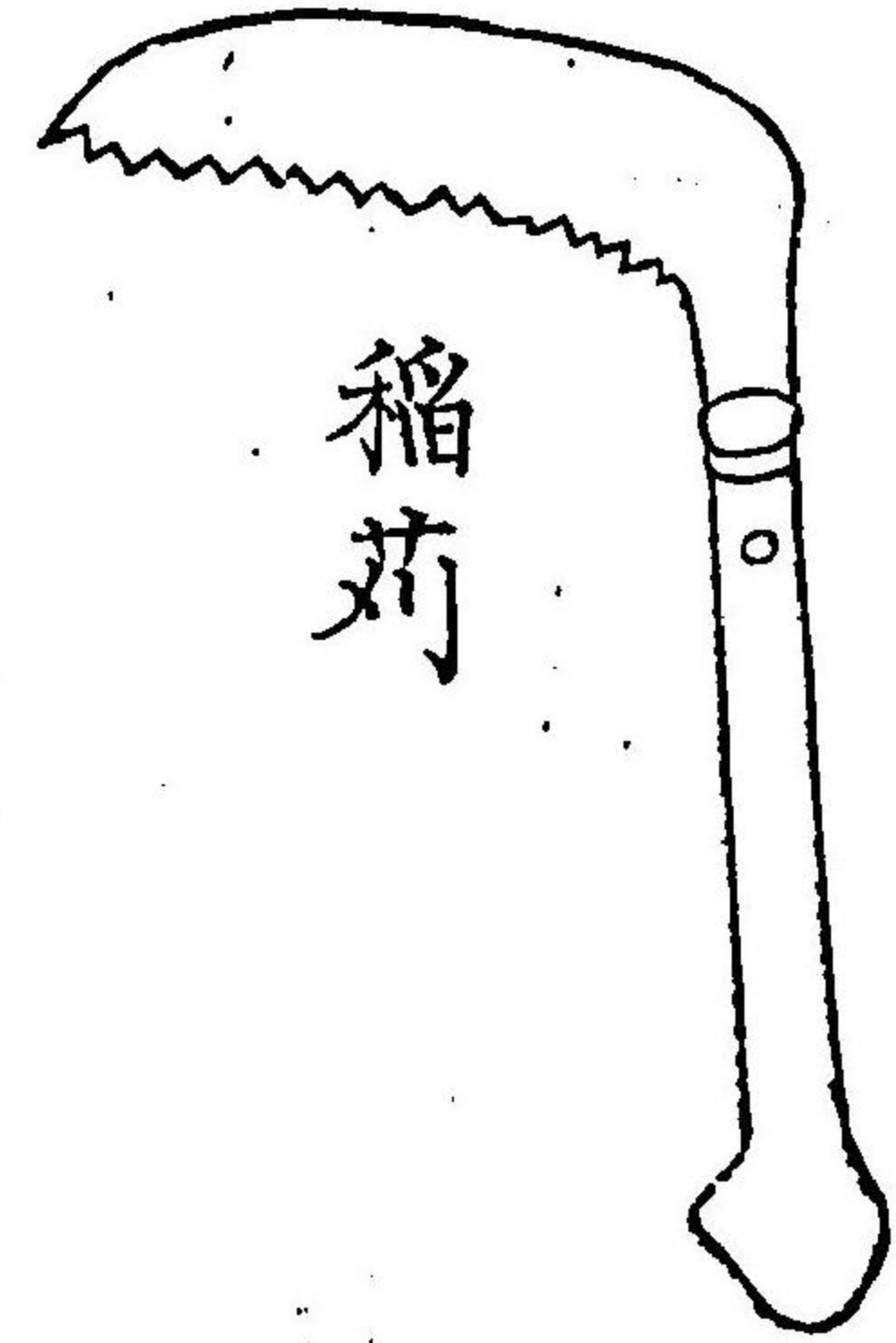


櫛懸

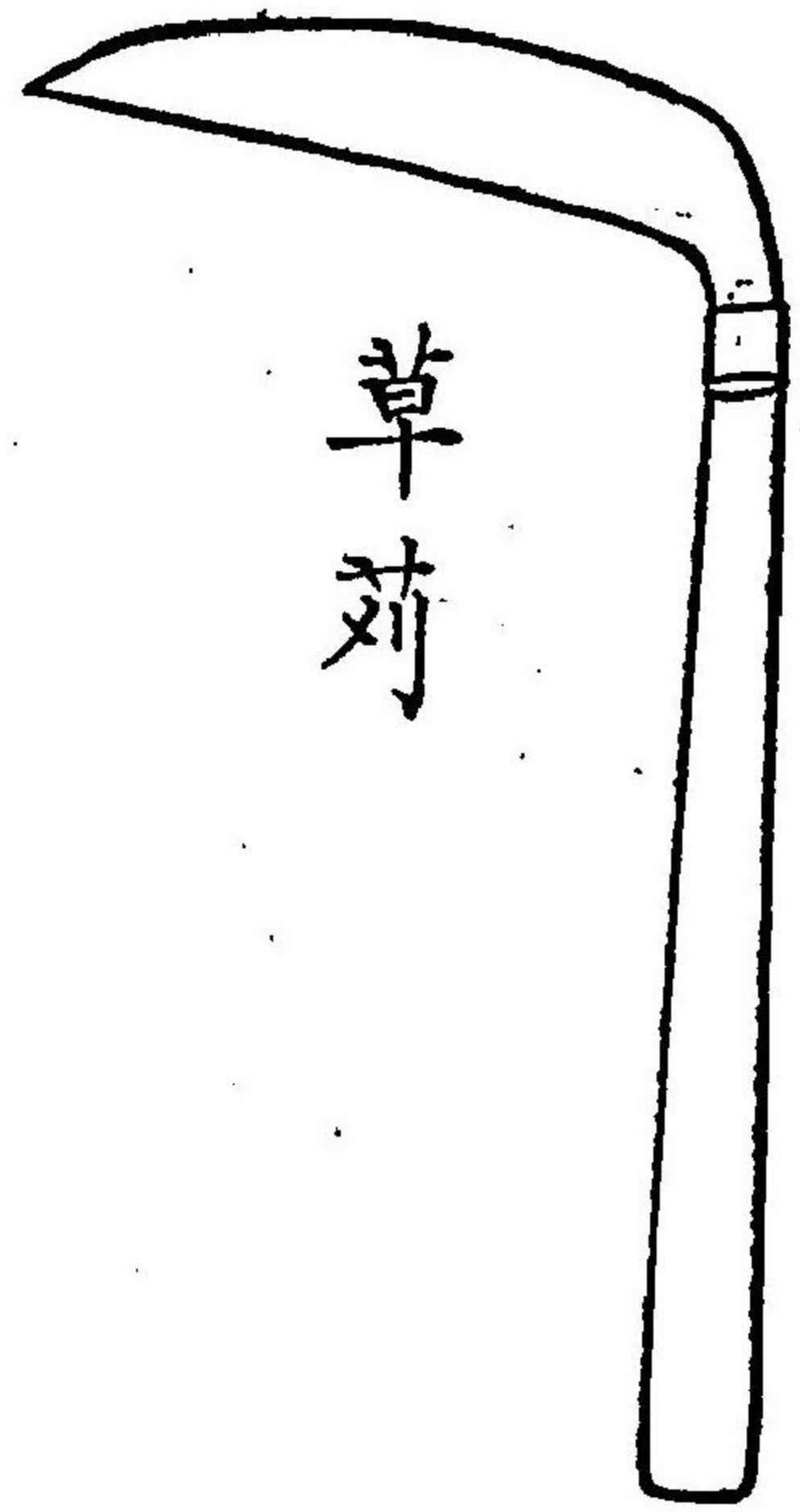


木枝



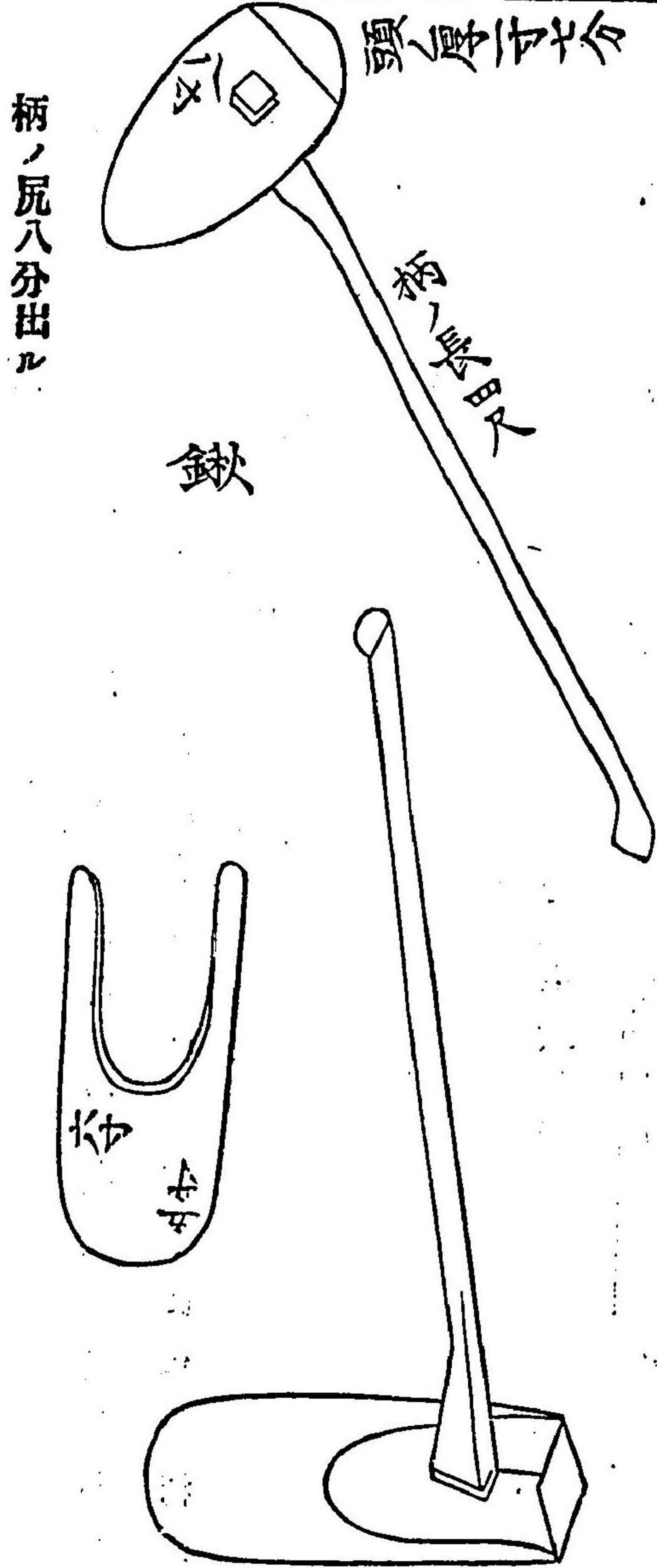


稲薙



草薙

鍬一丁のおもさ四百目より五百三拾目迄一丁の代銀七  
 匁より七匁五分迄鉄目より古くなりて焼直し先をか  
 くる也大先よかくるの賃四匁五分小先よかくるの三匁  
 五分の賃也新鍬の先を不懸を更鍬といふ柄はふなどい  
 ふ木を用仕込賃共よ八九分也鍬のなりよ先の狭の石地



鍬

柄ノ尻八分出ル

かふ先の廣さの地の淺よつかふ又土のねはさよわ柄を  
 かゝめて仕込なり惣して鍬の成并柄様子國郡よ寄て大  
 よ形違仕込或は大きくみ又少くみ或柄長短有



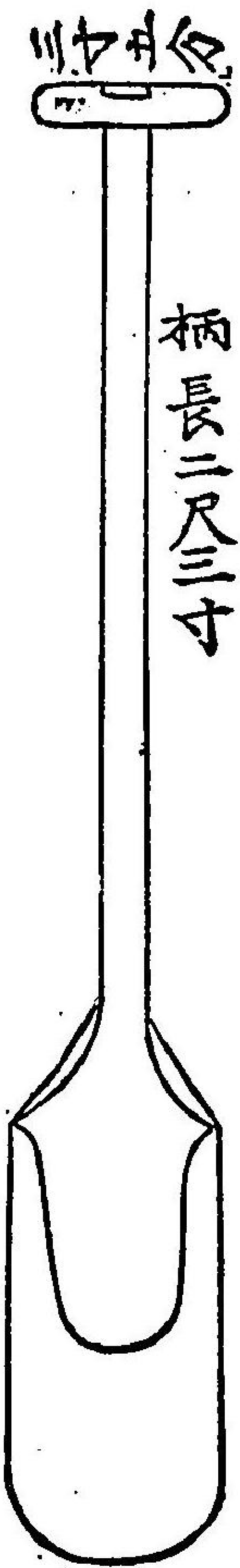
鍬

ふむとき鉄目三百目或は四百目代銀貳匁五分三匁あり  
右き鍬を焼直しても用る鍬よりは薄く直くに作る柄は  
ふな也代銀は九分也

鍬

柄長二尺三寸

先ノ寸歩鍬ニ同シ

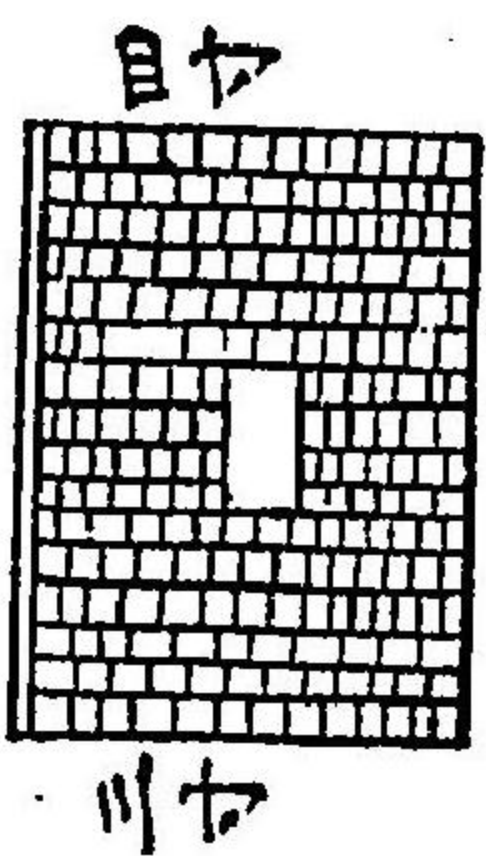


てんく又にていらとも云

ていくの鍬の柄は付る竹藤を以て組なり是の沼田を耕  
時鍬の柄はつけて水泥を除る物也

てんく

五寸

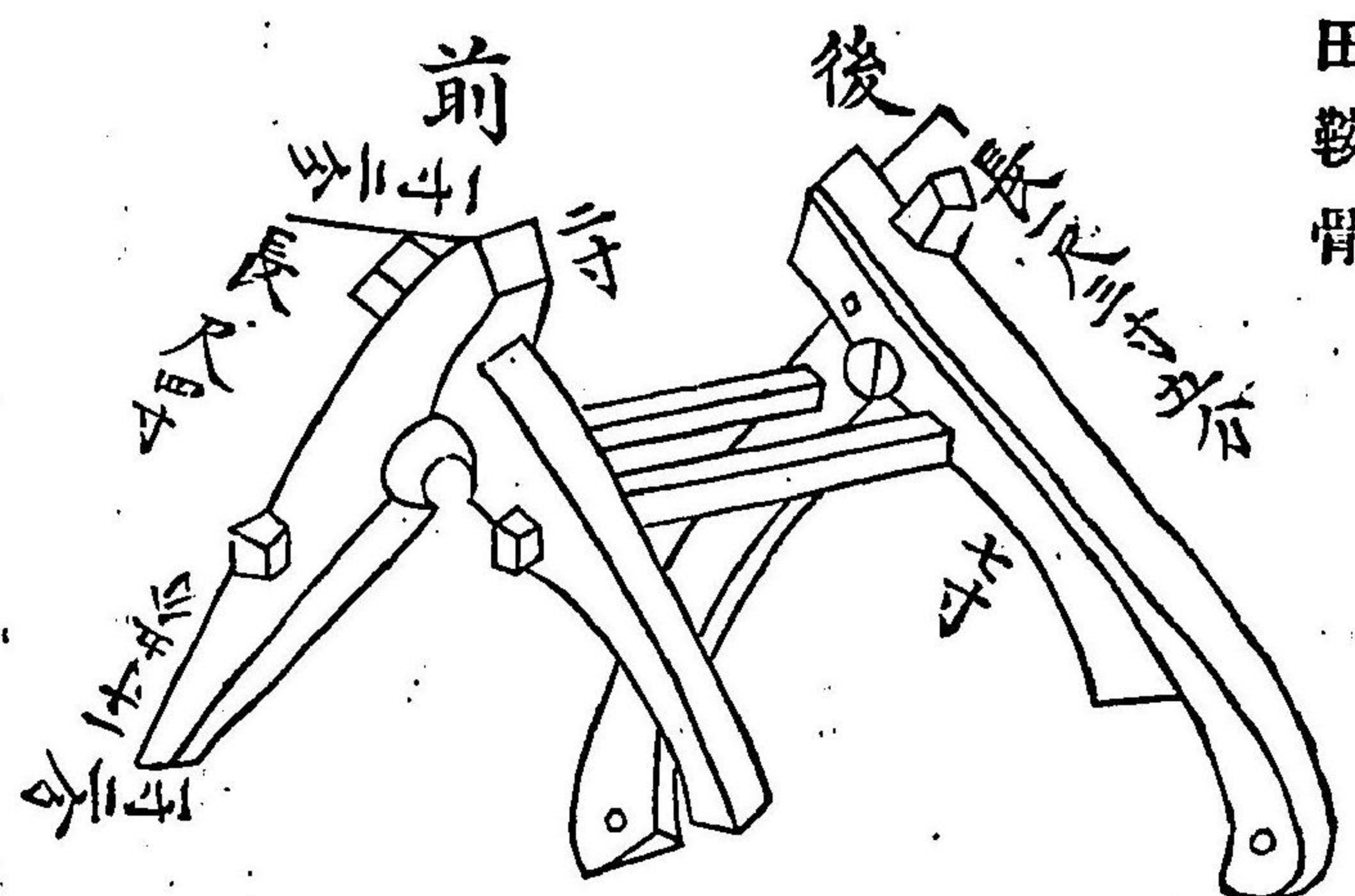


田鞍

鞍骨代銀壹匁なり堅木を以て作る下くらの藁にてねこ  
かいせあか當の如くくみ二重にしてあつるなり

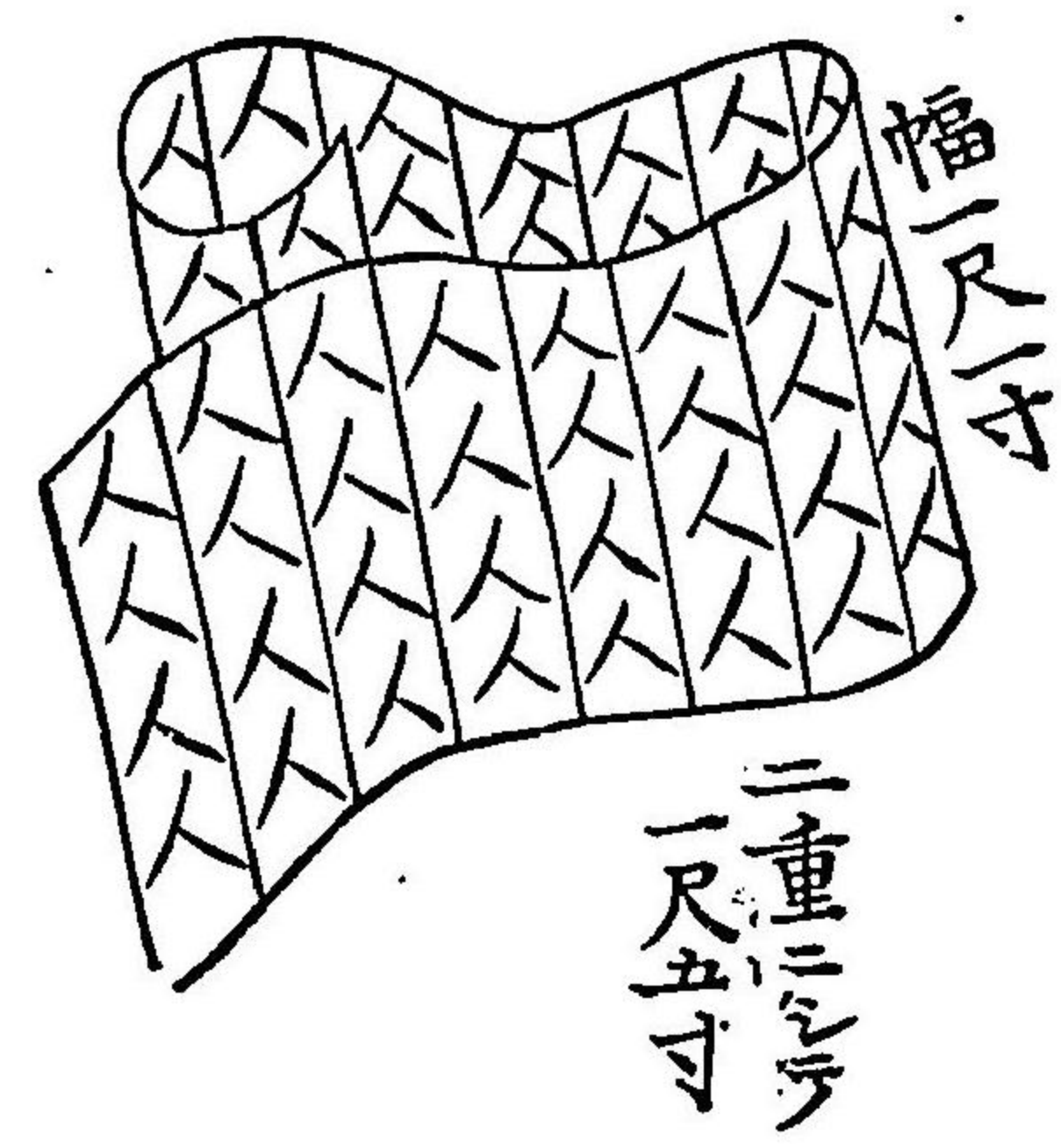


田鞍骨



引手を通す物也別としてなわにて付る  
五寸長

下鞍

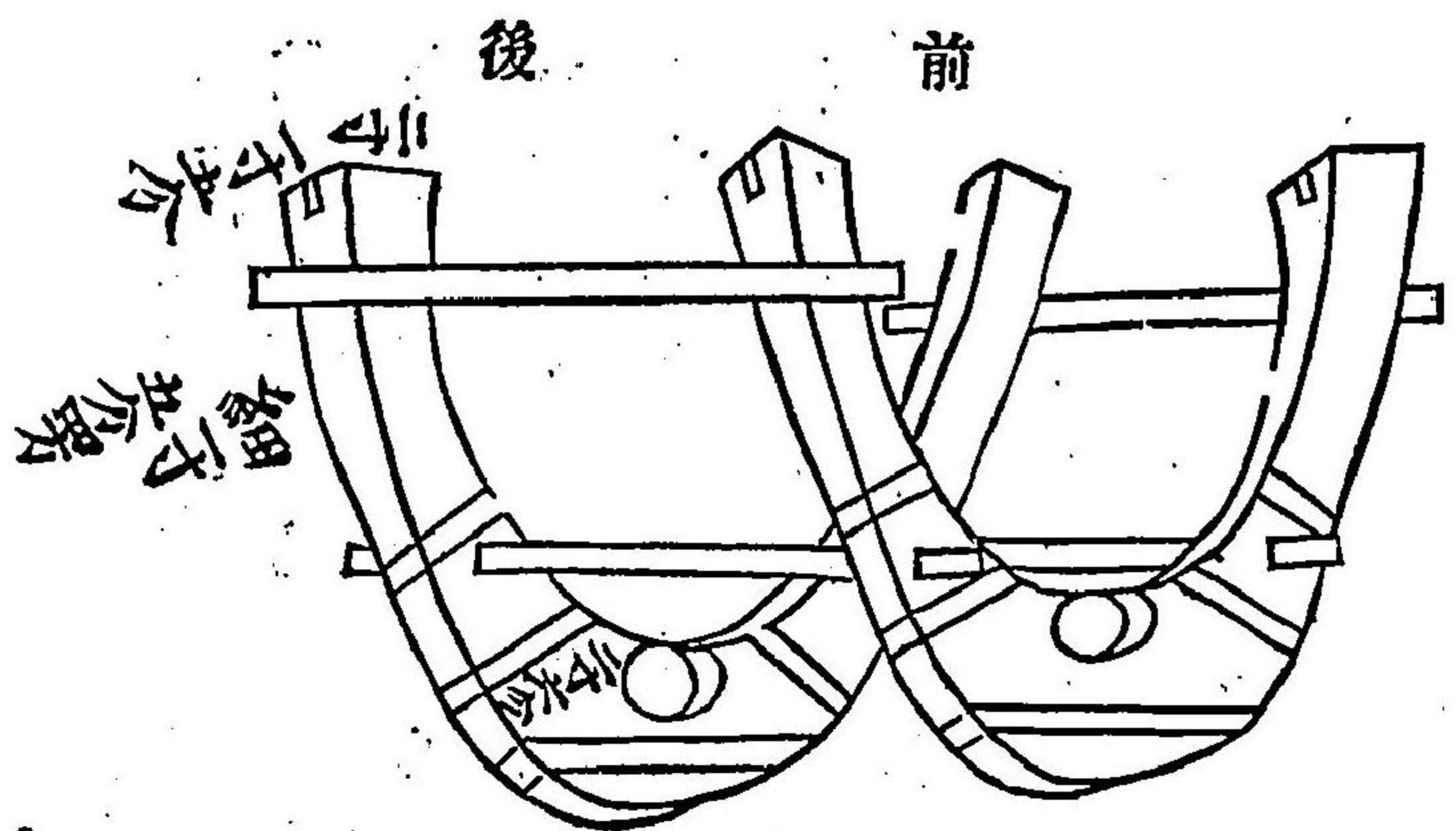


股の廣  
前一尺四寸  
後一尺四寸五分

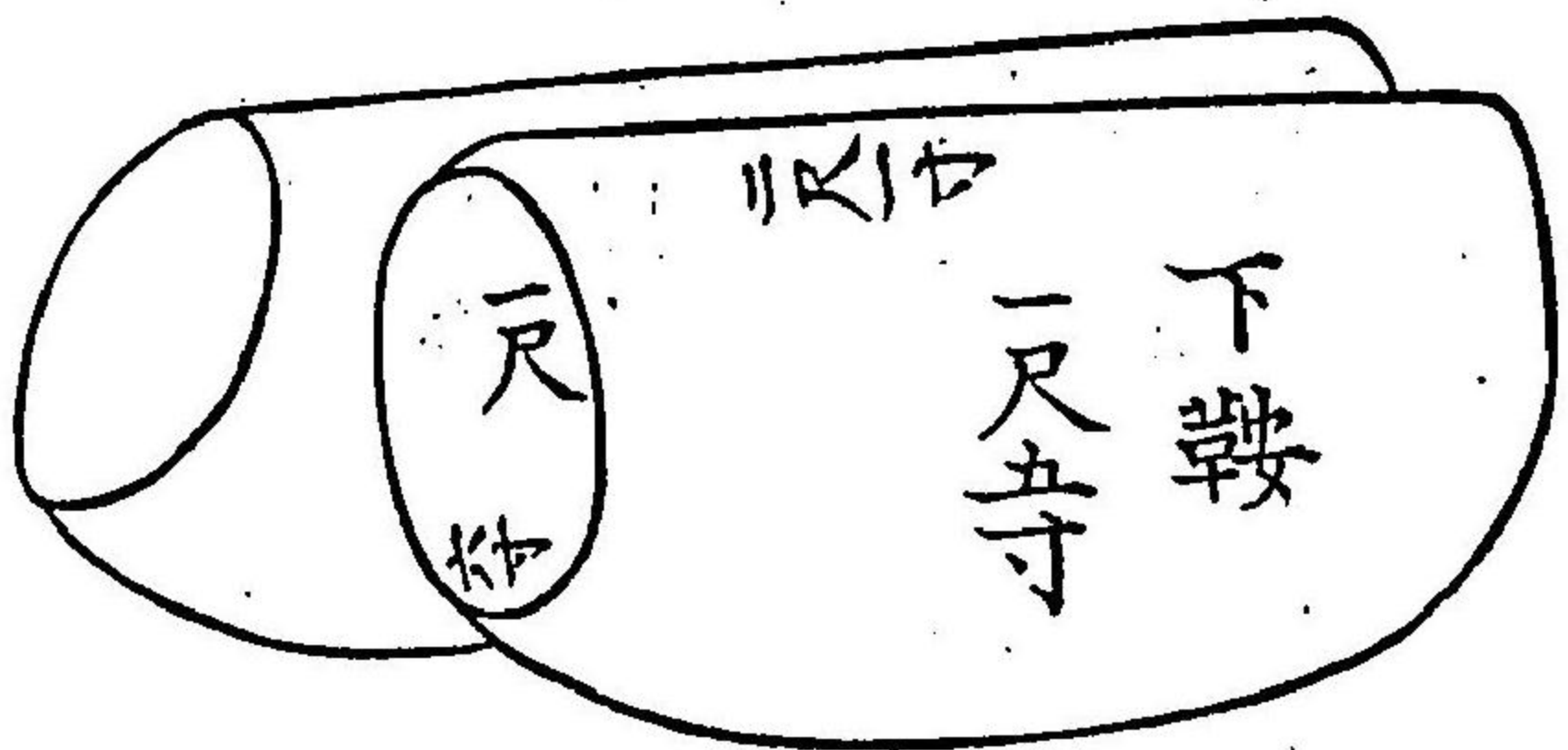
荷鞍

かみくらの骨輪かね八ッ輪かねを掛けて代銀七匁也下鞍の大麥わらをさゝみの表と以てゆゑむうへは木綿をあける也大麥わらはすくりて三尺繩に三匁入物也木綿の半つゝみ六尺九つゝみは壹丈入物なりたゝみのおもては一枚入る是常の包み様なり此外前かわと當て或の骨と漆よてぬりあするなり地鞍の骨代銀三匁五分山形は輪かねかけて五匁なり下くらゐ大むきわら二しめ入なり小むぎ二枚よくゆゑむ但内の方よわらのはかまをあつるあり





爪あり山形上也  
 前輪一尺六寸  
 後輪一尺七寸  
 兩輪の中間  
 上一尺  
 下八寸七分



股ノ廣サ  
 前一尺五寸  
 後一尺七寸

鞍

しりかひ皮きり代銀三匁五分四匁五分也

胸掛

みなかけ苧繩三ッ合也腹帯は乗鞍同事

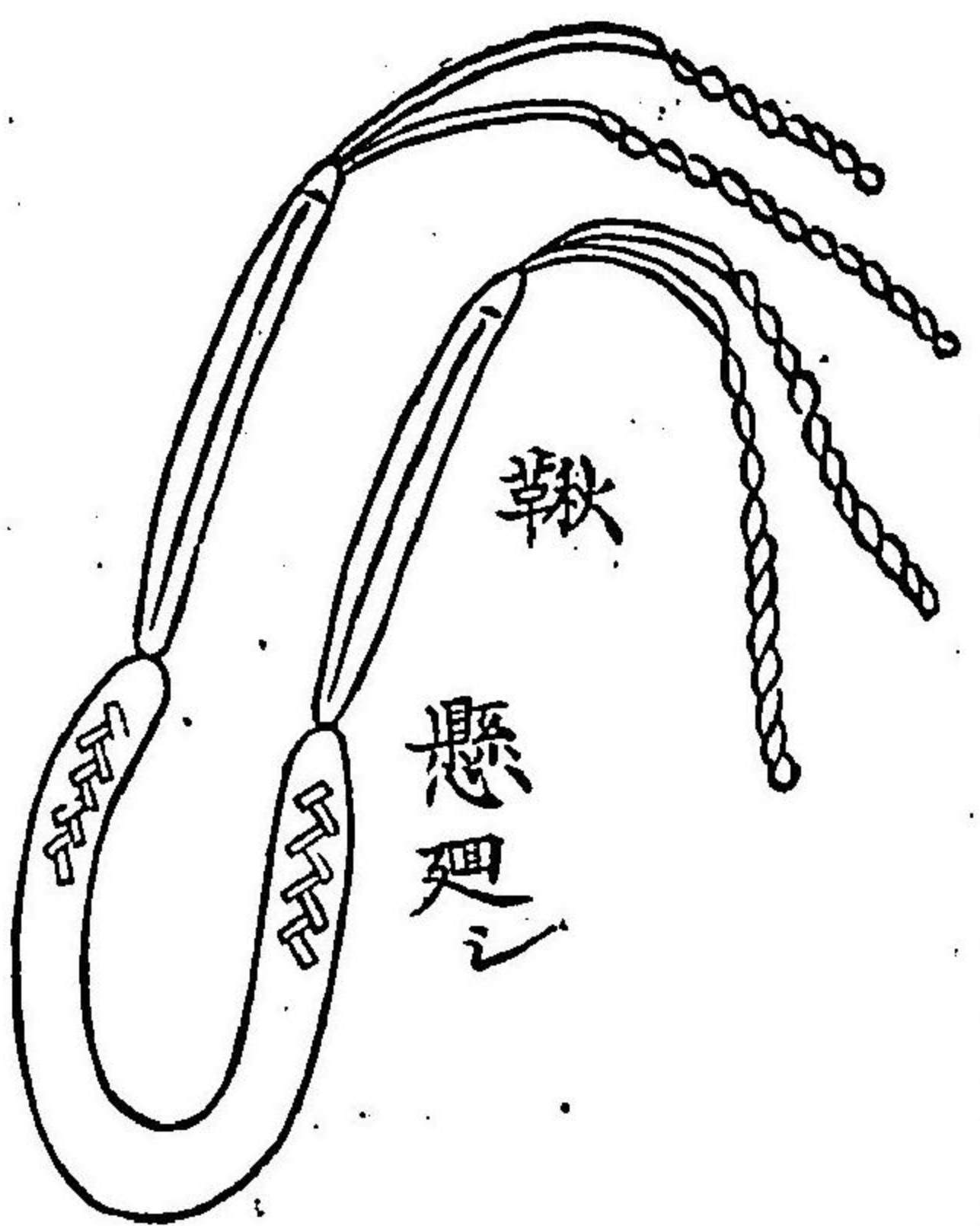
牽綱

長一尋半つけぬいはを三ッ合左打する或り苧もよし

鞍繩

つけぬいは三ッ合或り苧もくもするなり苧は二筋五  
 百目余入物なり但長五尋宿馬の七尋



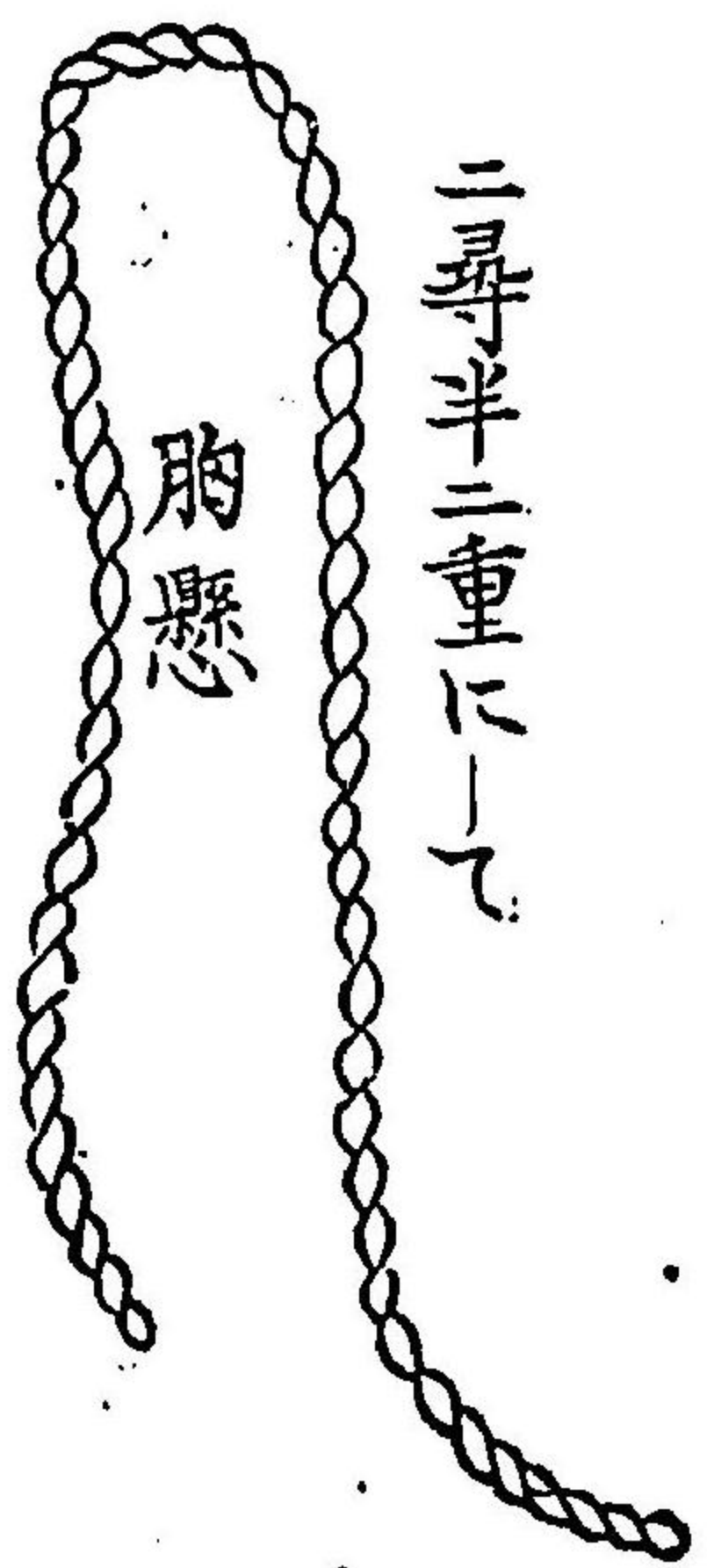


鞅

懸繩

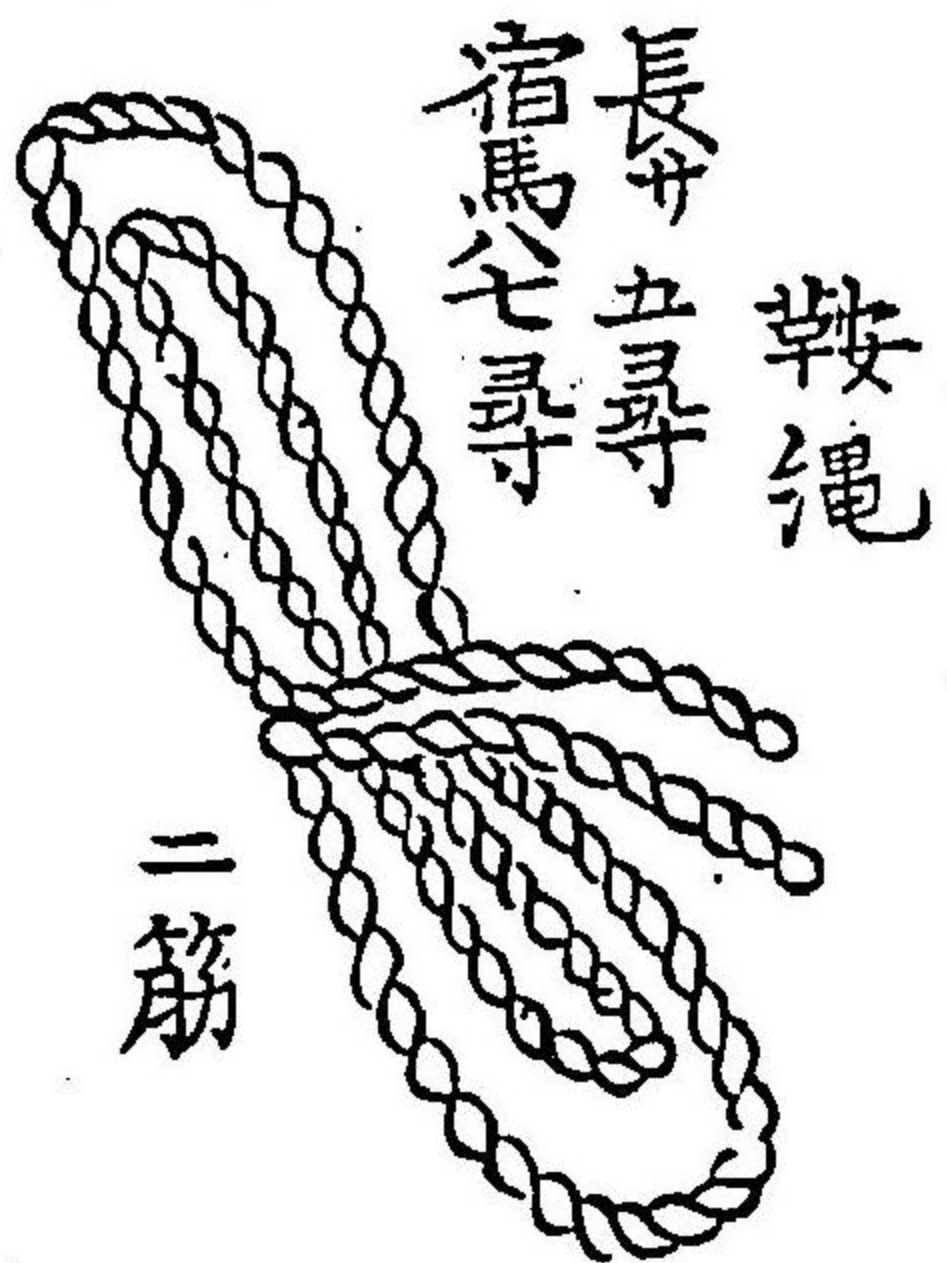


長一尋半  
牽繩



長一尋半二重

胸懸



鞍繩

長五尋  
宿馬七尋

二筋

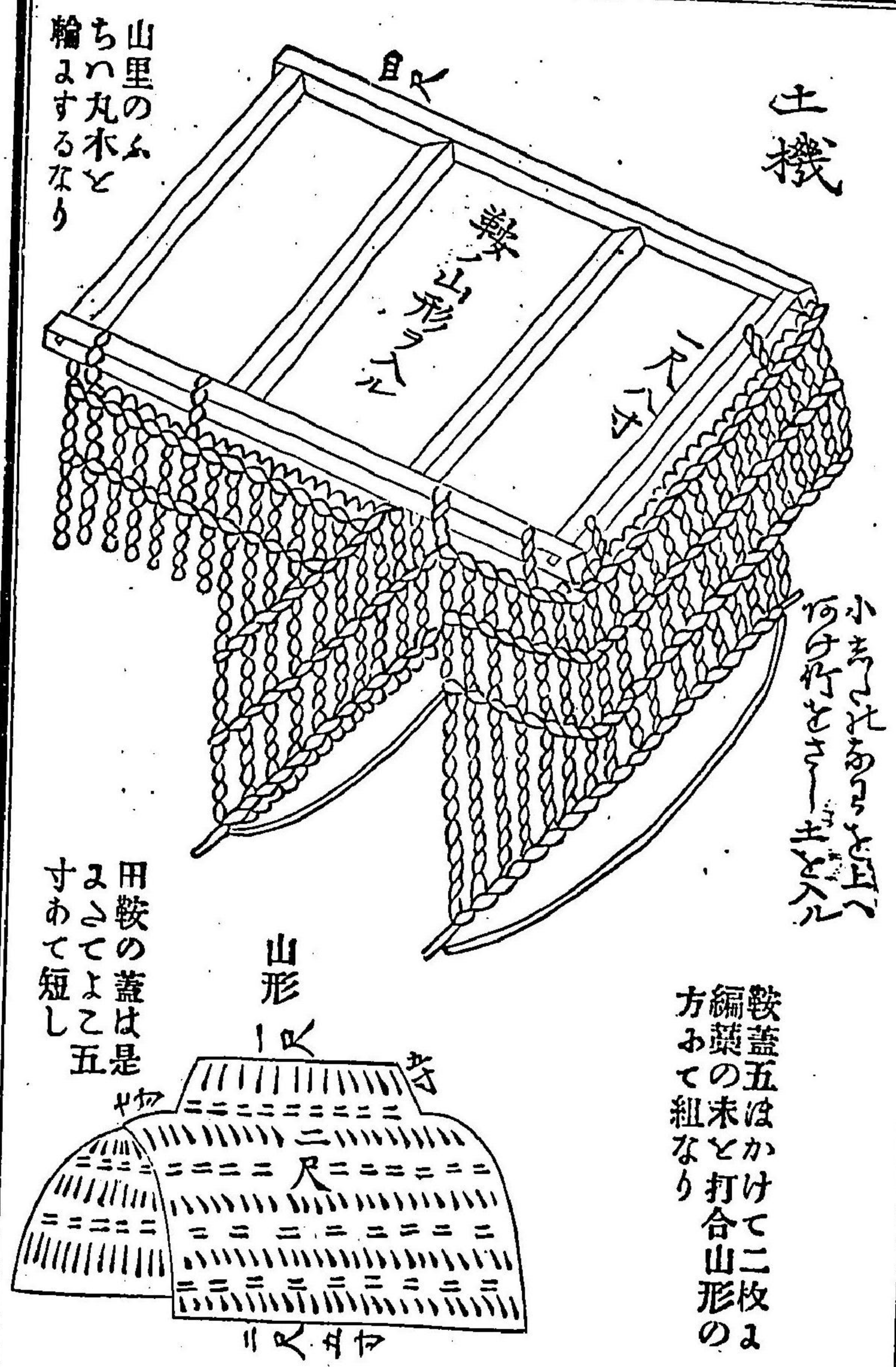
土とたこ

藁繩よて編みみち共二百五十尋入物也ふちの楨よて  
する也代銀壹匁或は壹匁五分なりふちの木山方は生木  
をまけてもする

鞍蓋

くらふたの鞍よ土をのけさるふめなりわらのかふの方  
を余てぬいは繩よてこもよあむなり又ちいさくこしら  
へて田鞍の雨はひよもする





鞍蓋五はかけて二枚の  
編葉の末と打合山形の  
方あて紐なり

田鞍の蓋は是より五寸あて短し

山形のふち丸木と輪まするなり

馬桶

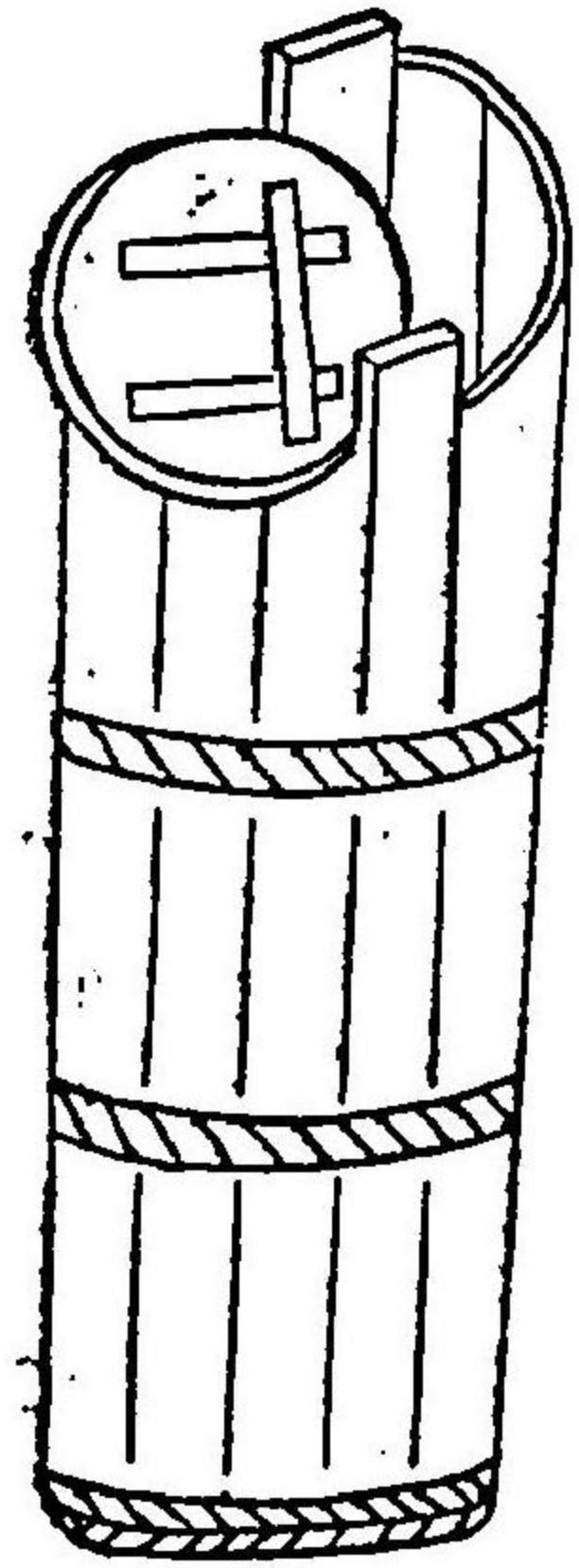
こへを入れて馬につくる桶なり一駄二つつけの代銀杉にて拾三匁楨よて九匁なり一駄よ四つつけの代銀杉よて十六匁楨よて拾三匁也

擔桶

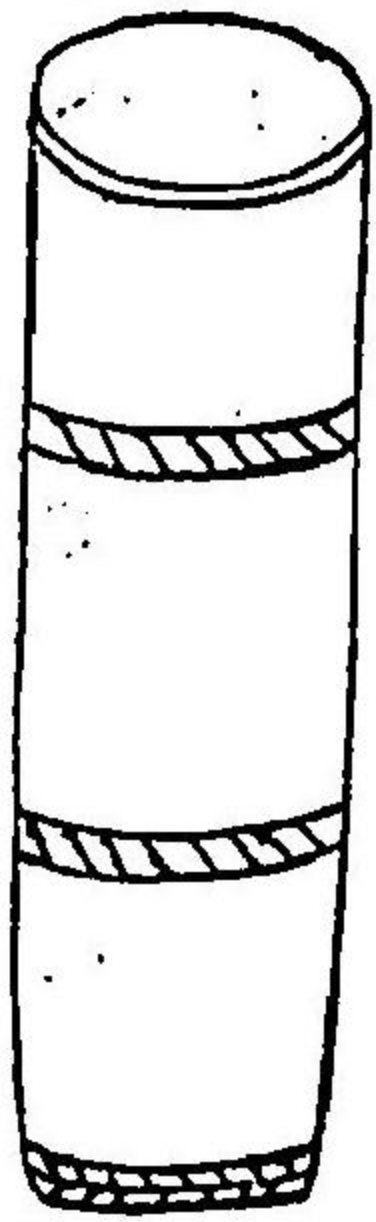
こへをよなふおけなり一番桶一荷代銀杉よて四匁五分楨よて三匁也二番桶一荷杉よて三匁五分楨にて貳匁五分なり三番桶一荷楨よて壹匁八九分あり



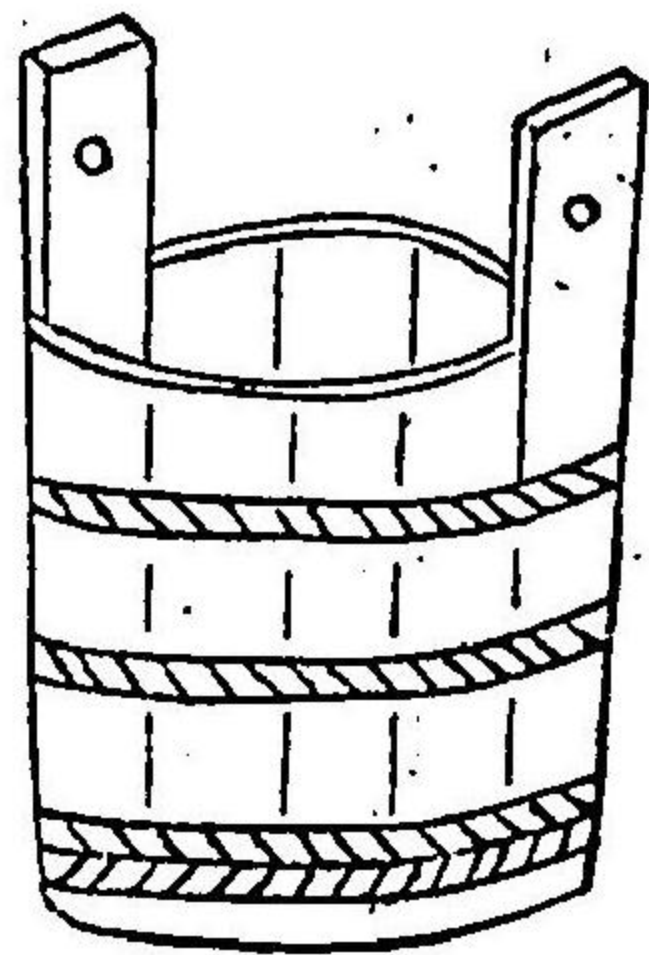
二ツ負ノ馬桶



四ツ負馬桶



擔桶



- 一番桶一尺二寸とうかへし
- 二番まで一寸おどり
- 二ツと一荷とす

野籠

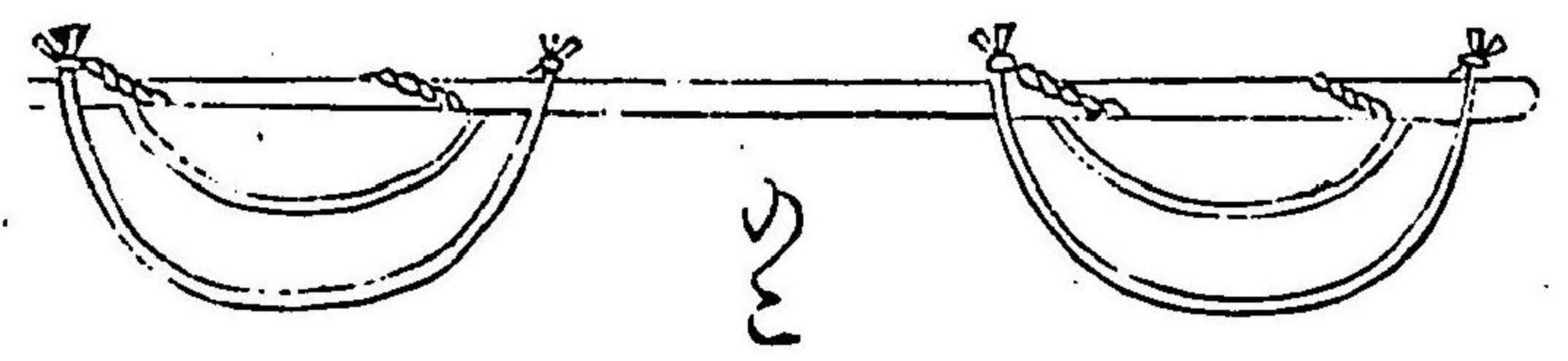
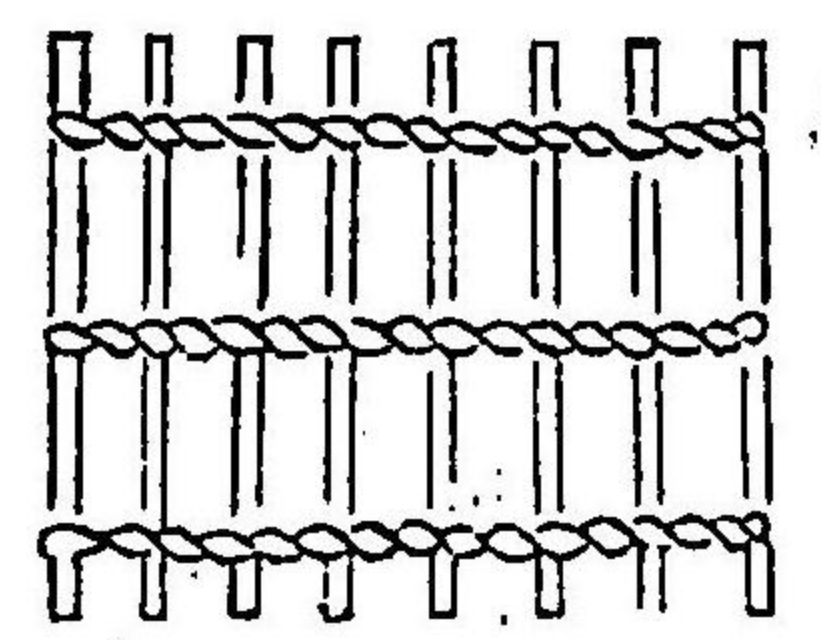
苗こゑ草などを田畠へ通ふもの也つゑのふとさの長四尺とかりあるを二本弓の如くなわととりて竹を二ツわりよして一尺五寸四方形よあみてあつる

簡かよつふりとも云

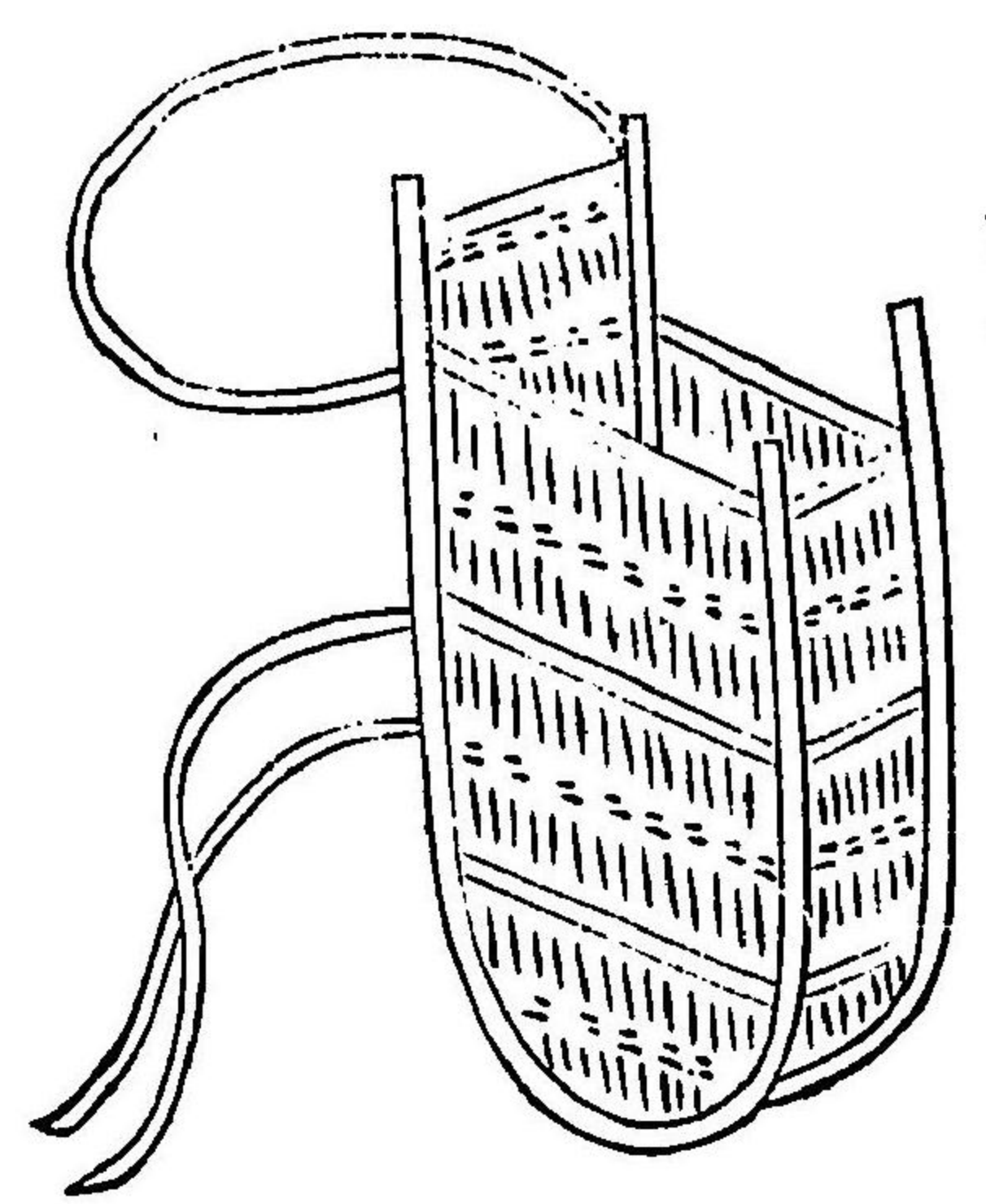
おひの山里よ用る丸木をはねよ曲て藤よあみてあつる是の坂なと足場のあしきよかつきてとこふもの也



一目  
あまのあひら



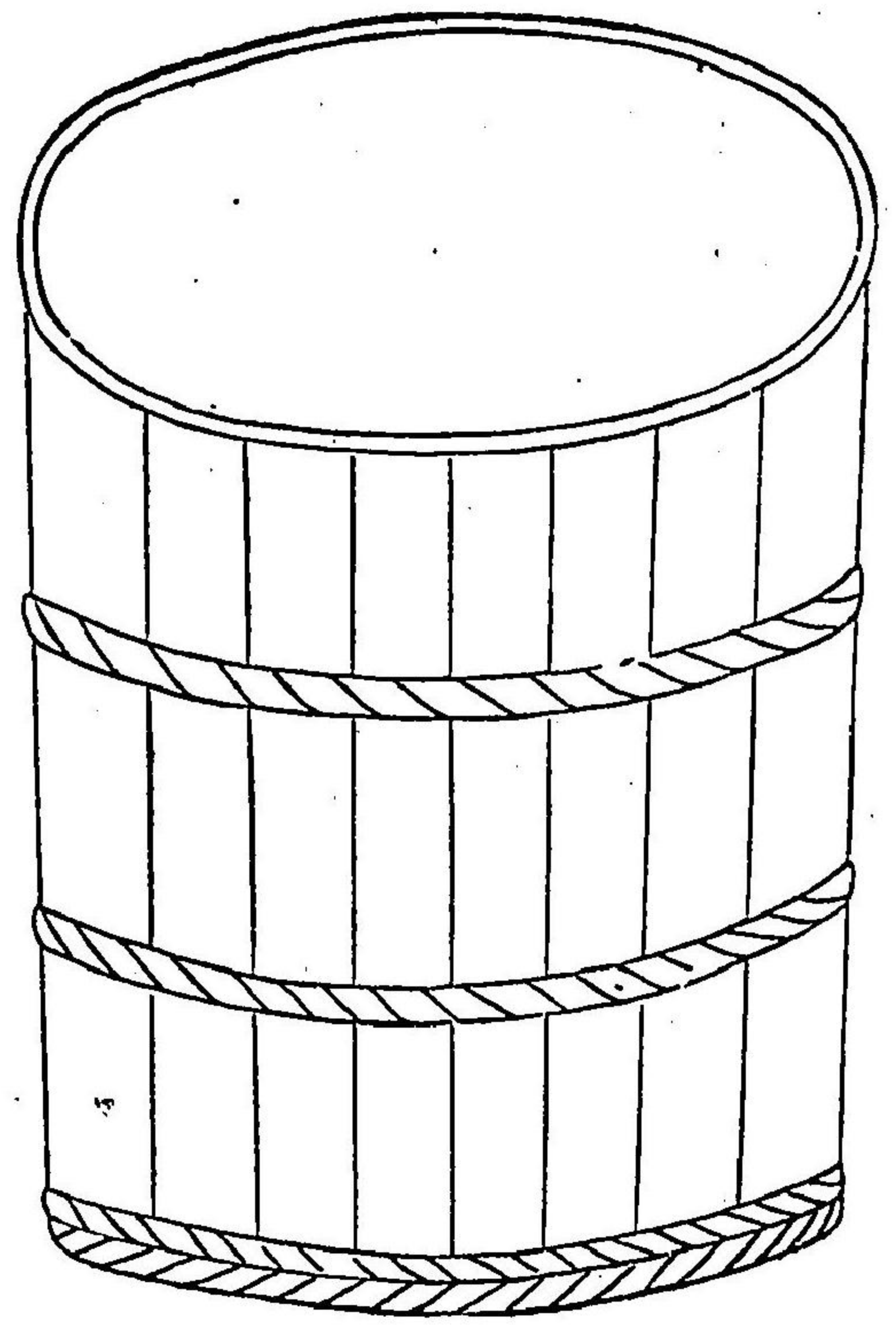
杖  
い



溜桶

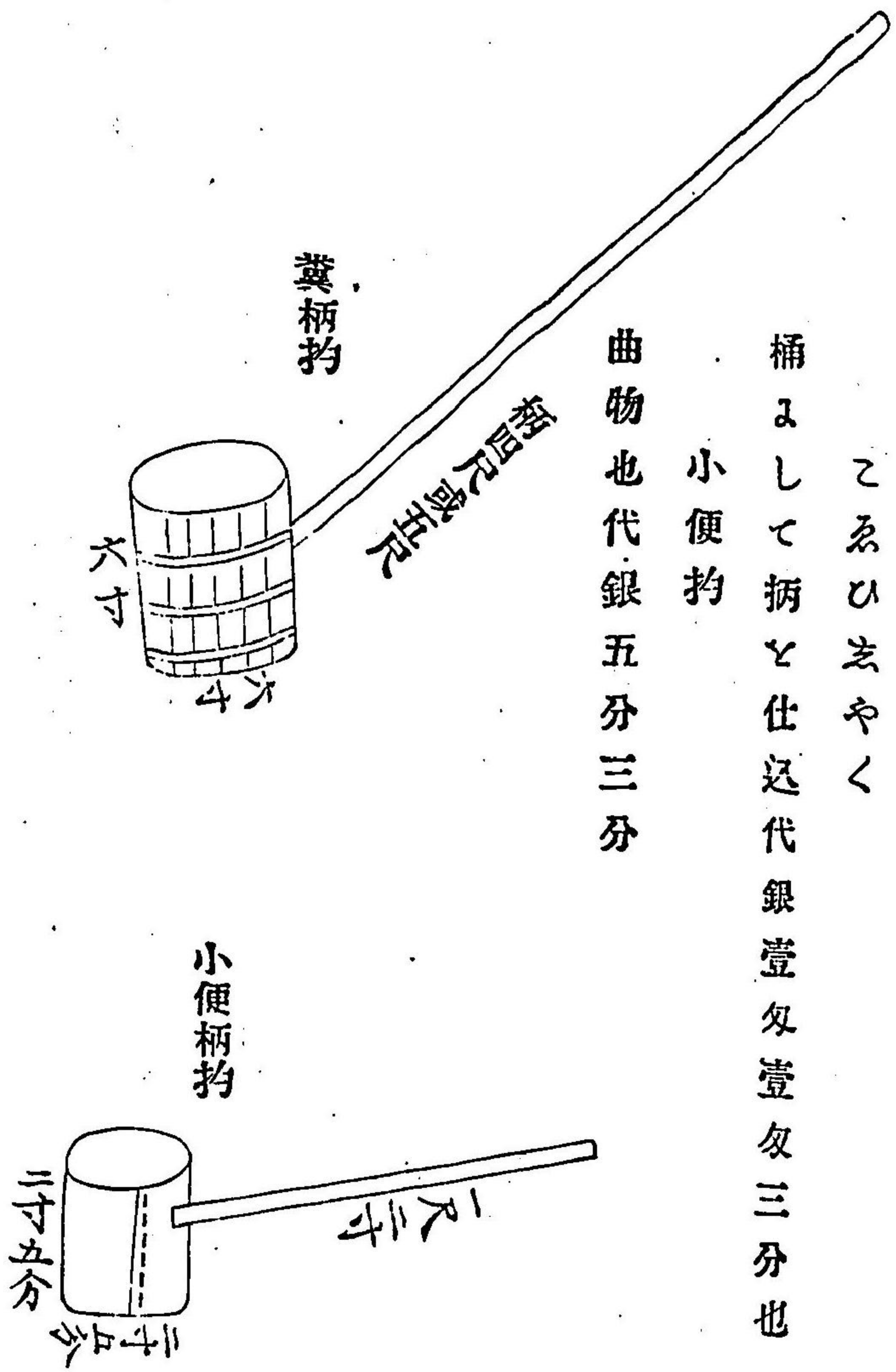
こゑを入置桶也

三尺物代銀拾匁十二荷入  
四尺物代銀貳拾匁四拾荷入  
五尺物代銀三拾六匁  
此外大百姓コハ六尺桶迄モ引木コテ仕ル





こゑひまやく  
桶よして柄と仕込代銀壹匁壹分三分也  
小便杓  
曲物也代銀五分三分

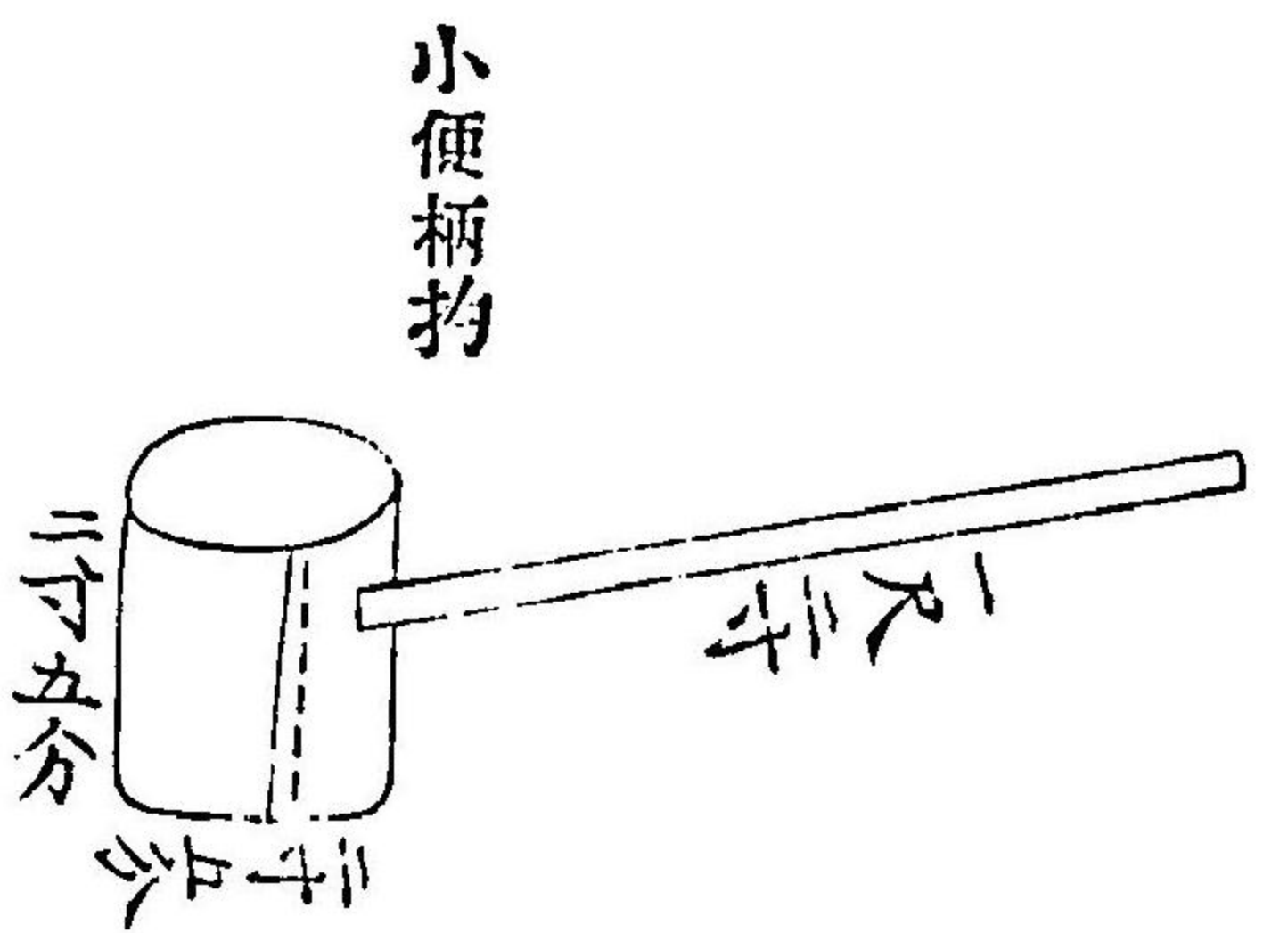
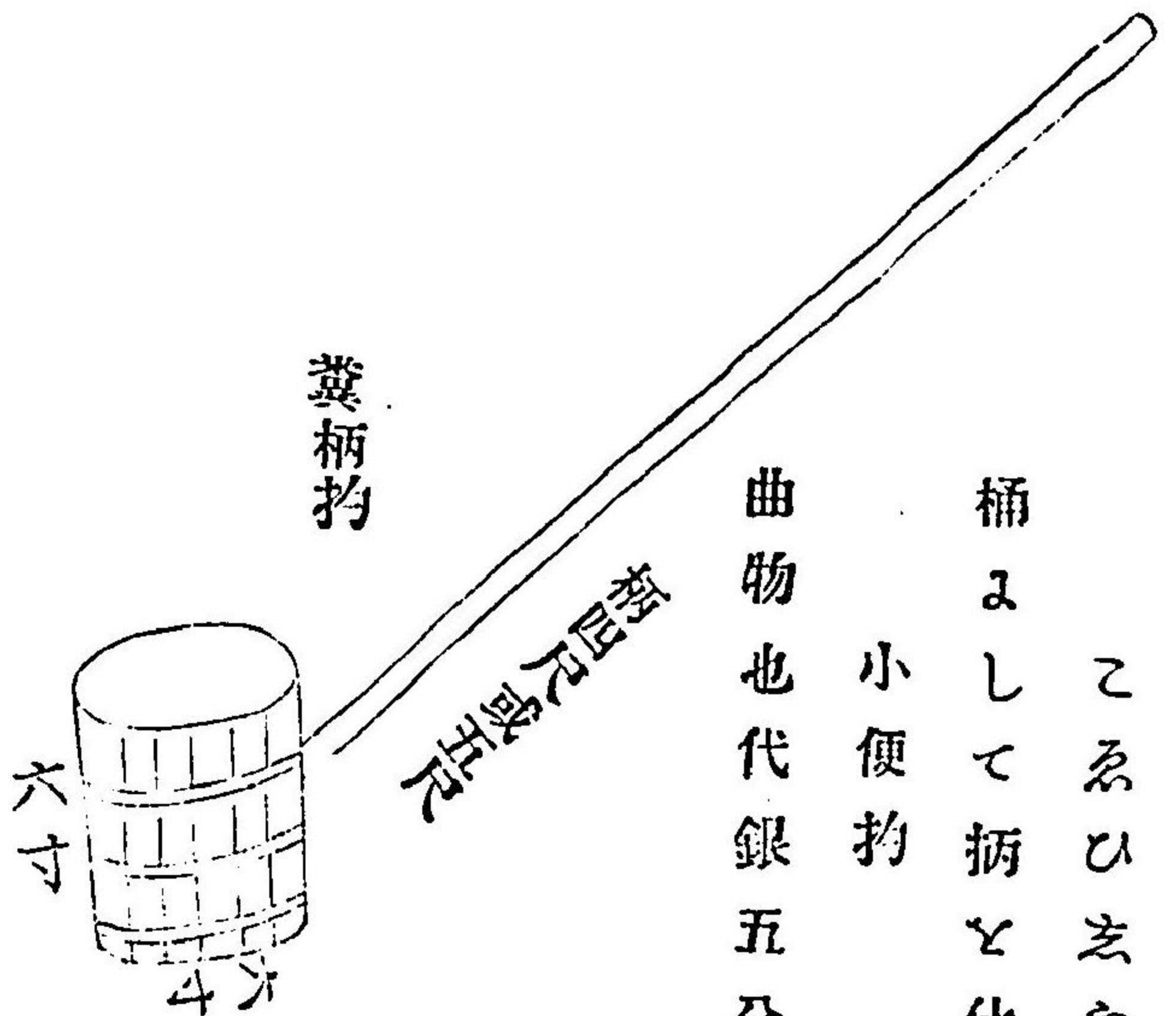


長八尺...  
 田子...  
 柄...  
 梅...  
 代銀...  
 用...  
 用...  
 用...





こゑひまやく  
桶よして柄と仕込代銀壹匁壹分三分也  
小便杓  
曲物也代銀五分三分



稻持棒

長八尺七尺五六寸或ハ楨の丸木や代銀ハ九分より壹匁壹匁壹分

田子棒 旅扱共云

柳ふなちしやなどを用る代銀七分より壹匁

荷杖

楨を四角よ削る或ハ丸木も用る代銀五分尻よ石突仕込

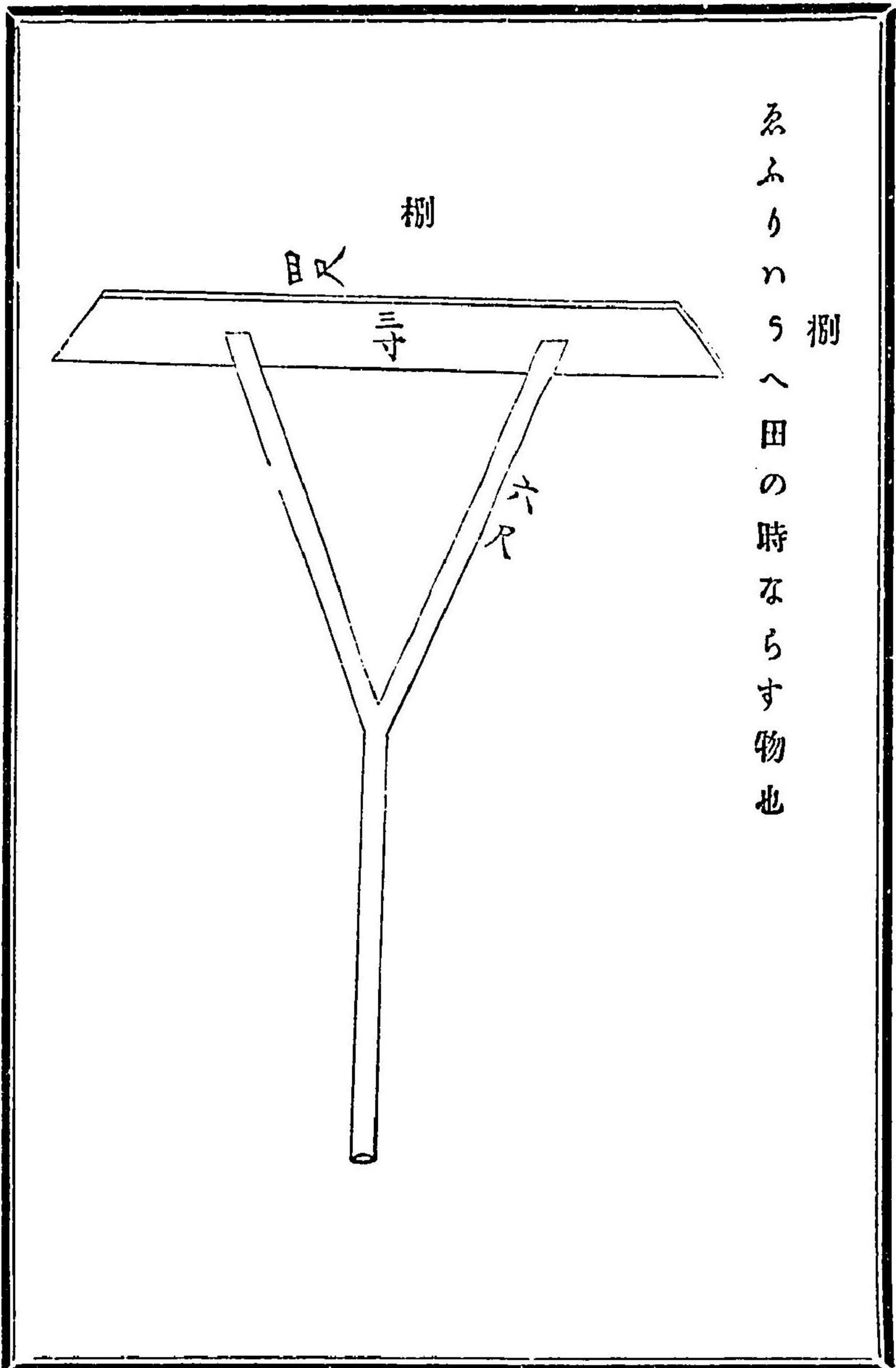
枴綱

わら繩をよとく二尋程よして用る

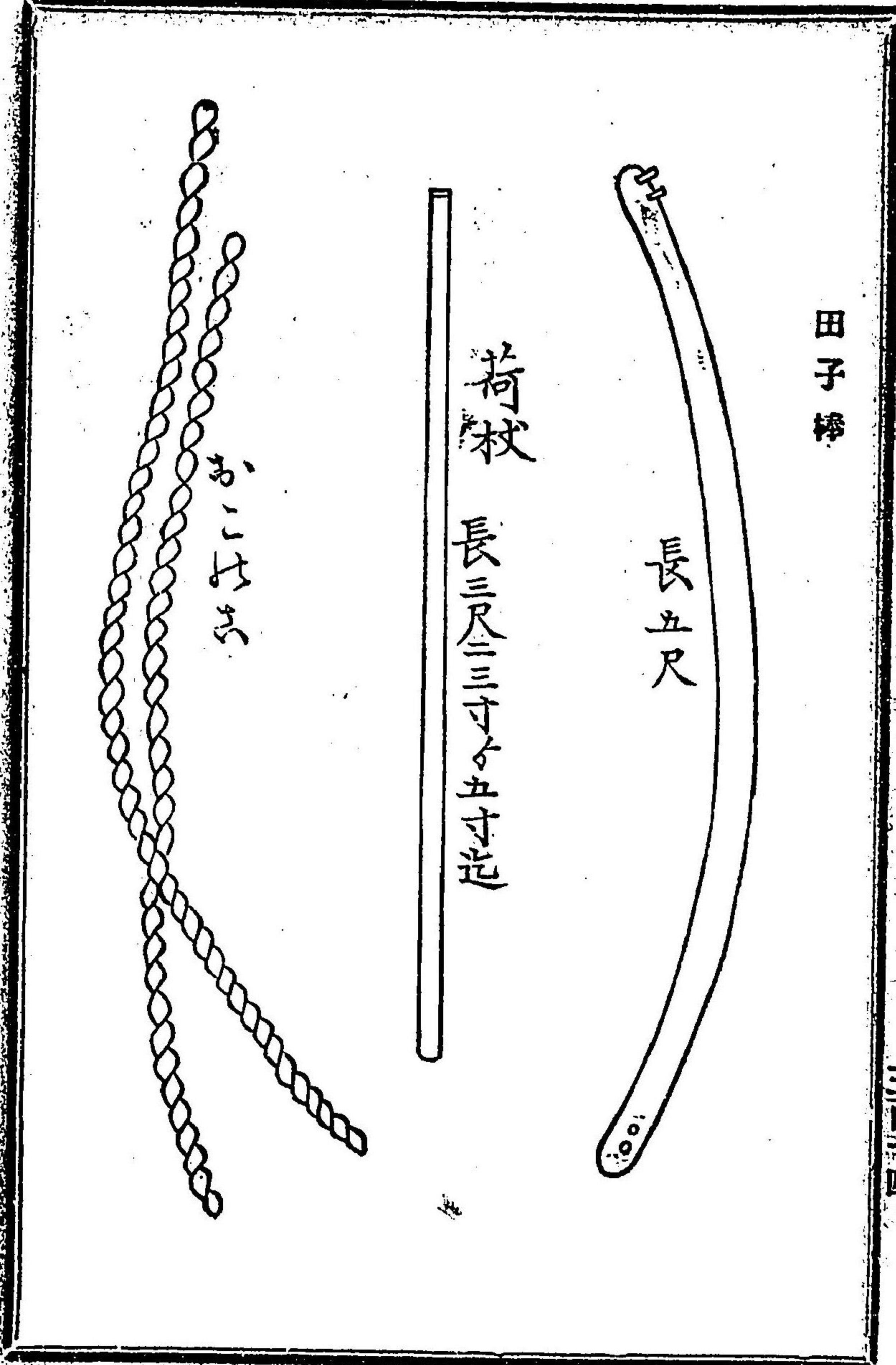
稻持棒

長八尺或ハ七尺五寸廻り六七寸

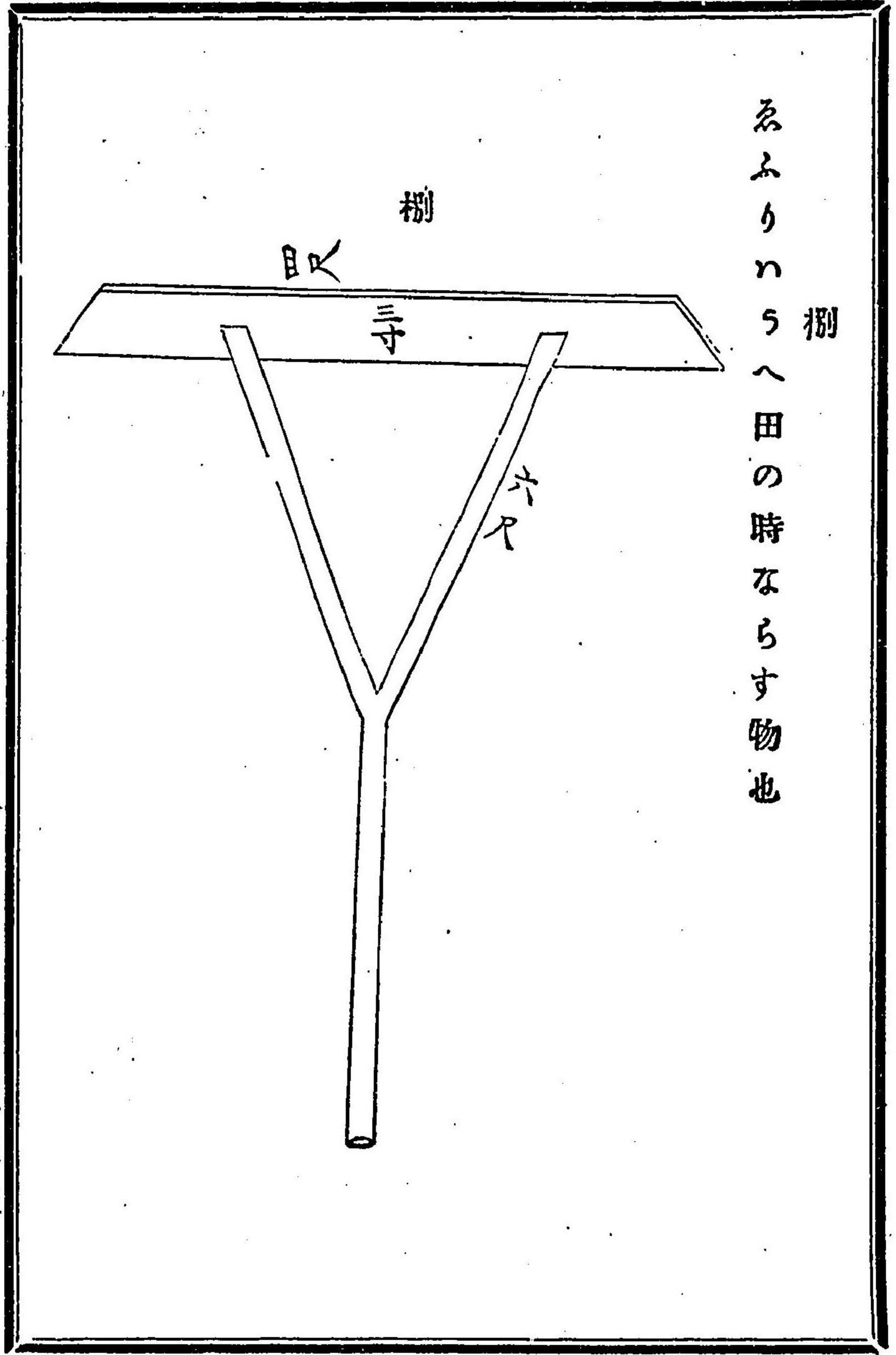




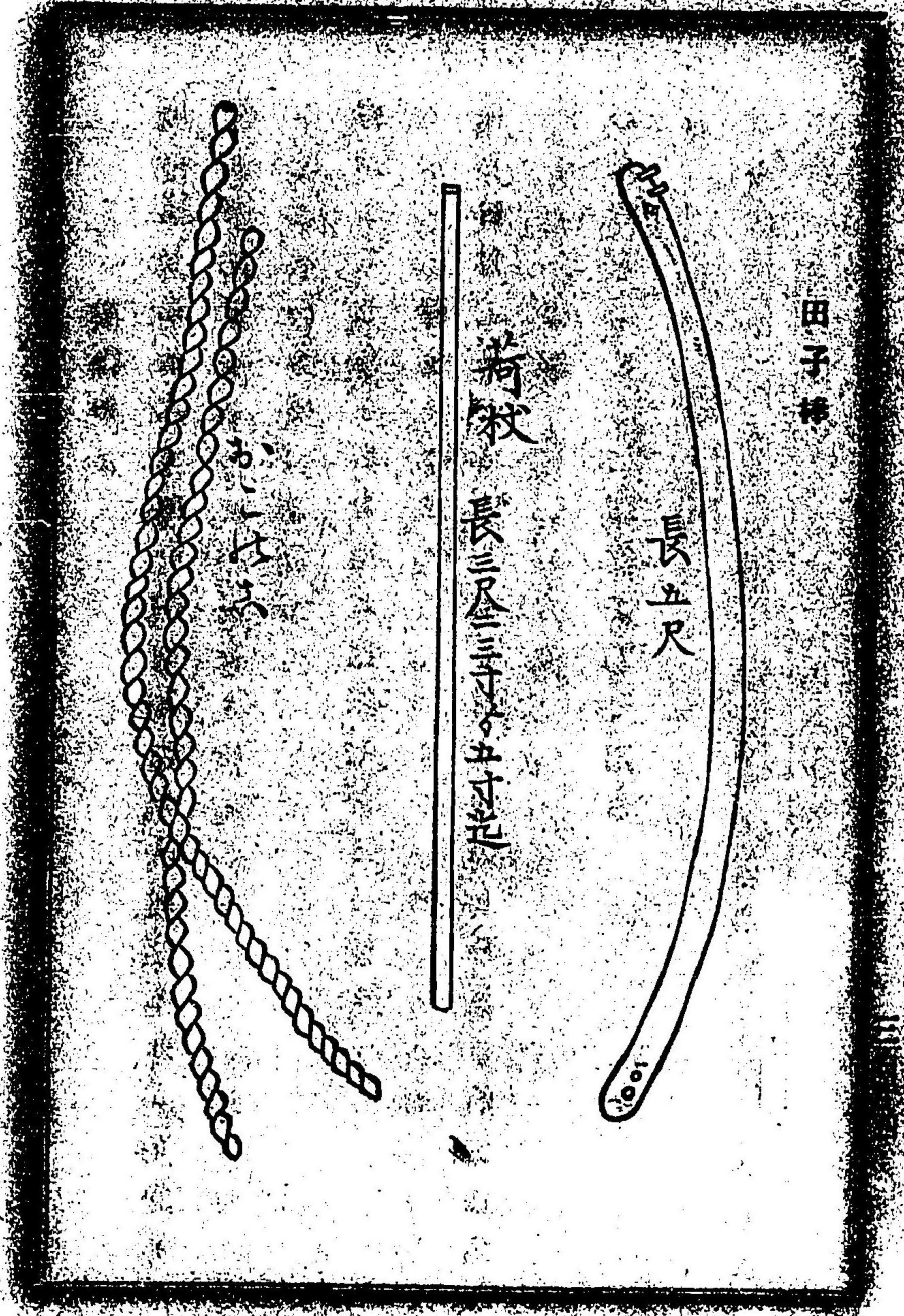
ふりりらへ田の時ならず物也







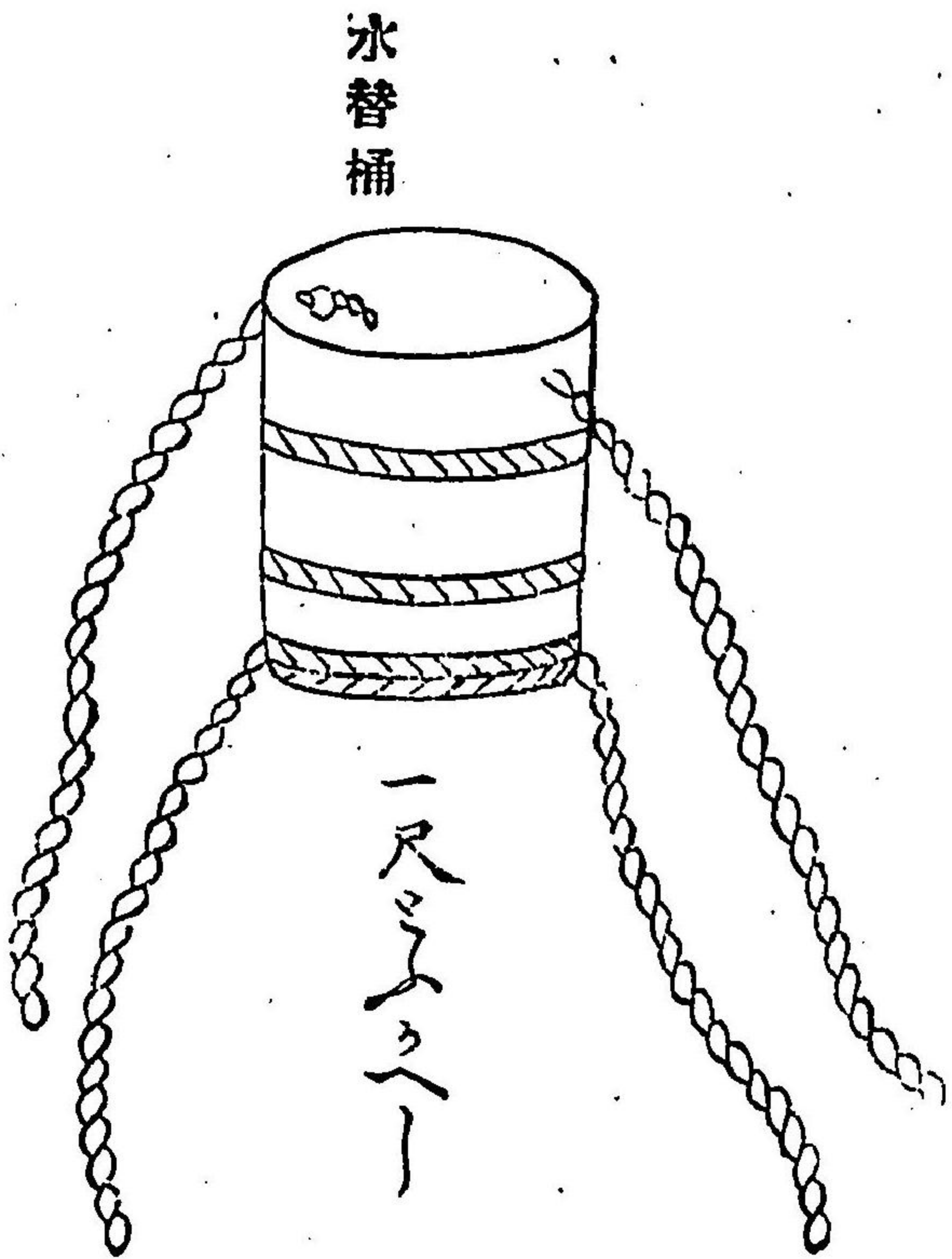
系ふりのうへ田の時ならず物也





水替桶

用水のよより悪しき所より水をあくるなり代銀壹匁四五分



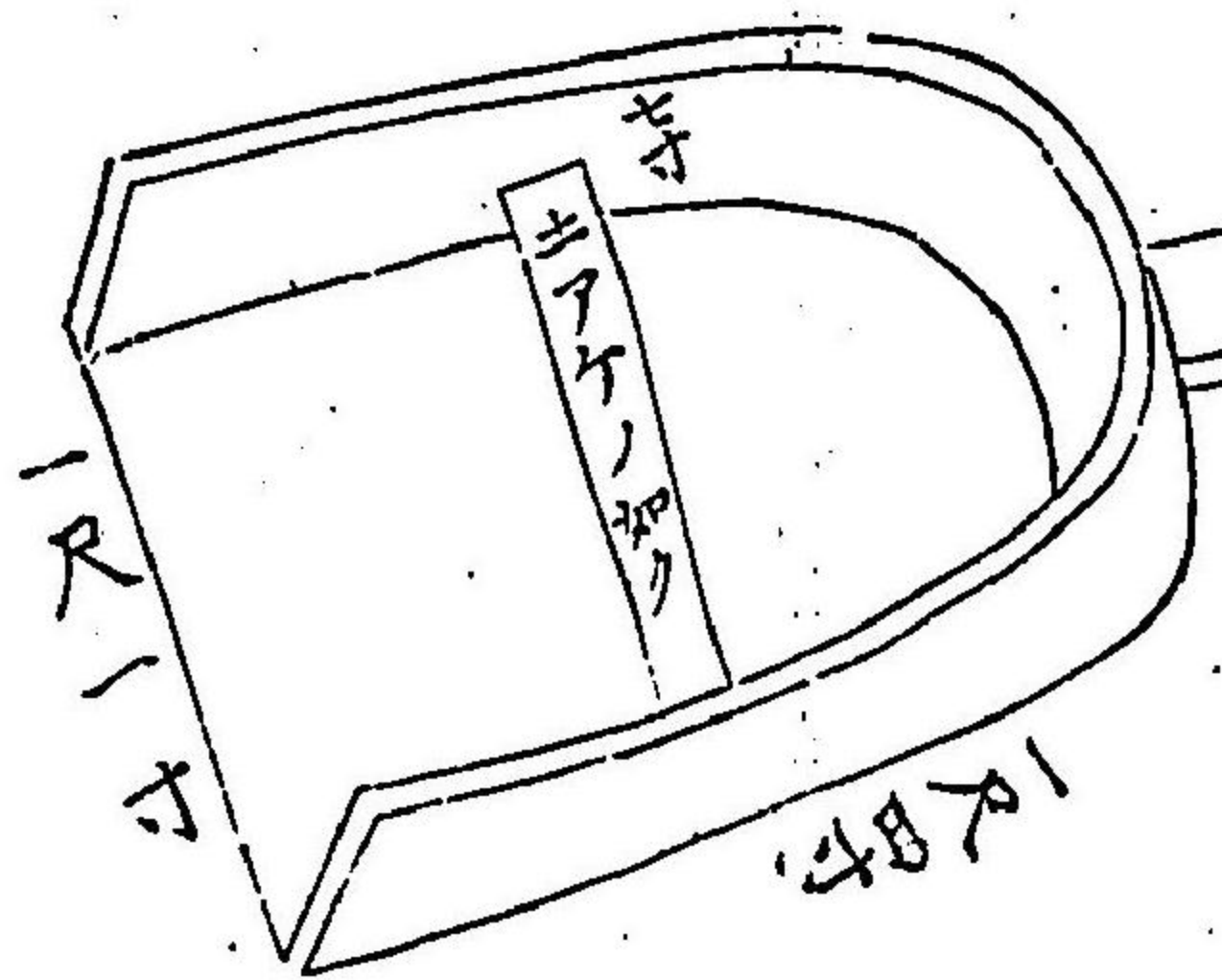
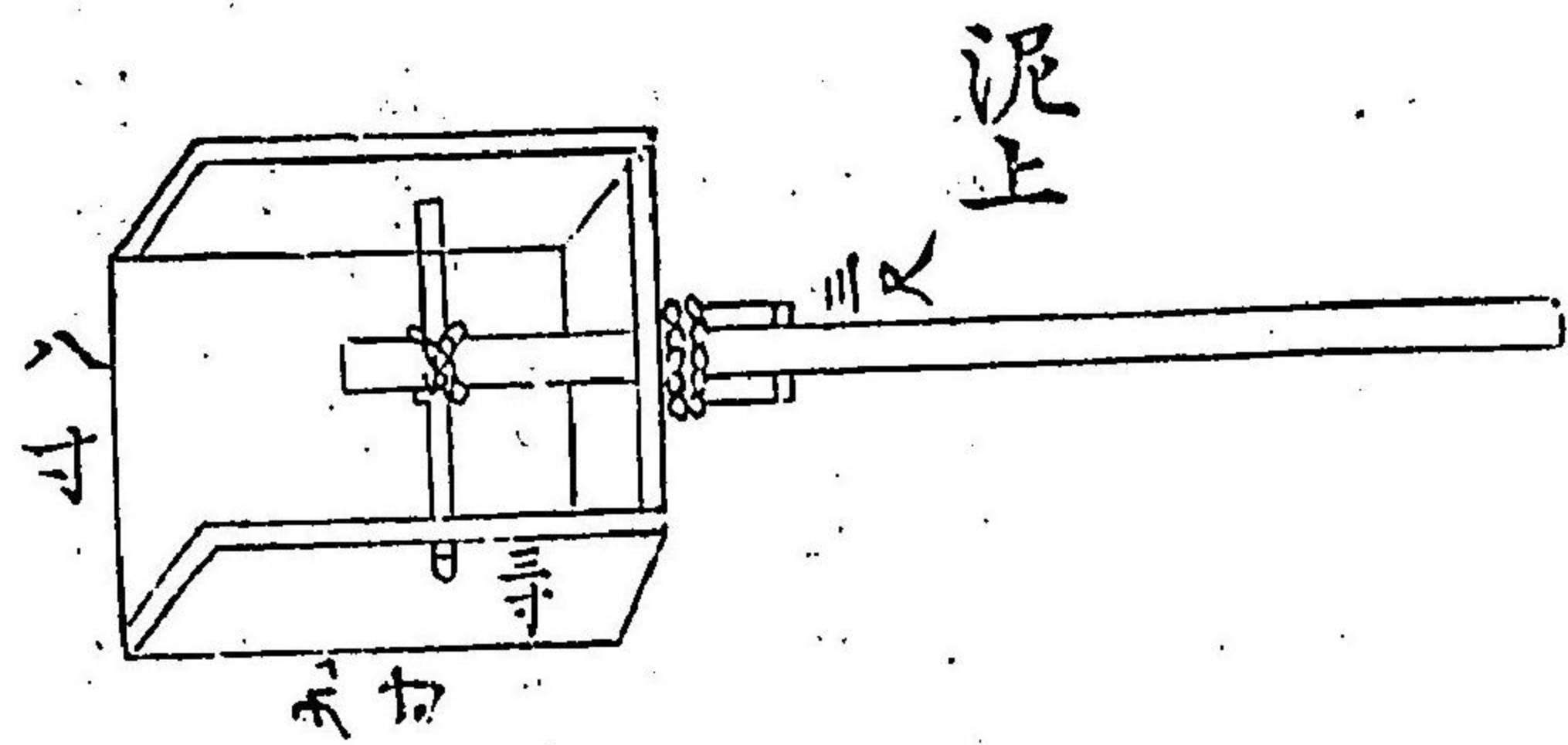
こみわけ

溜江の泥をあくる物なりちりどりの如くは箱とさして柄をつくるきり代銀壹匁七八分但江の深きは不用淺き所より用諸江村近邊より

ついでせ

是のまみをあくるためは溜の水をかゆるもの也こみわけの如くして大ききものなり或はふちを曲物とするまたり木をさしても代銀三匁五分





つとせ  
是は四尺の柄つくる

熊手

木をあるま用る代銀九分より壹匁貳三分

山刀

代銀三匁或は三匁五分

斧

代銀七匁或は八匁

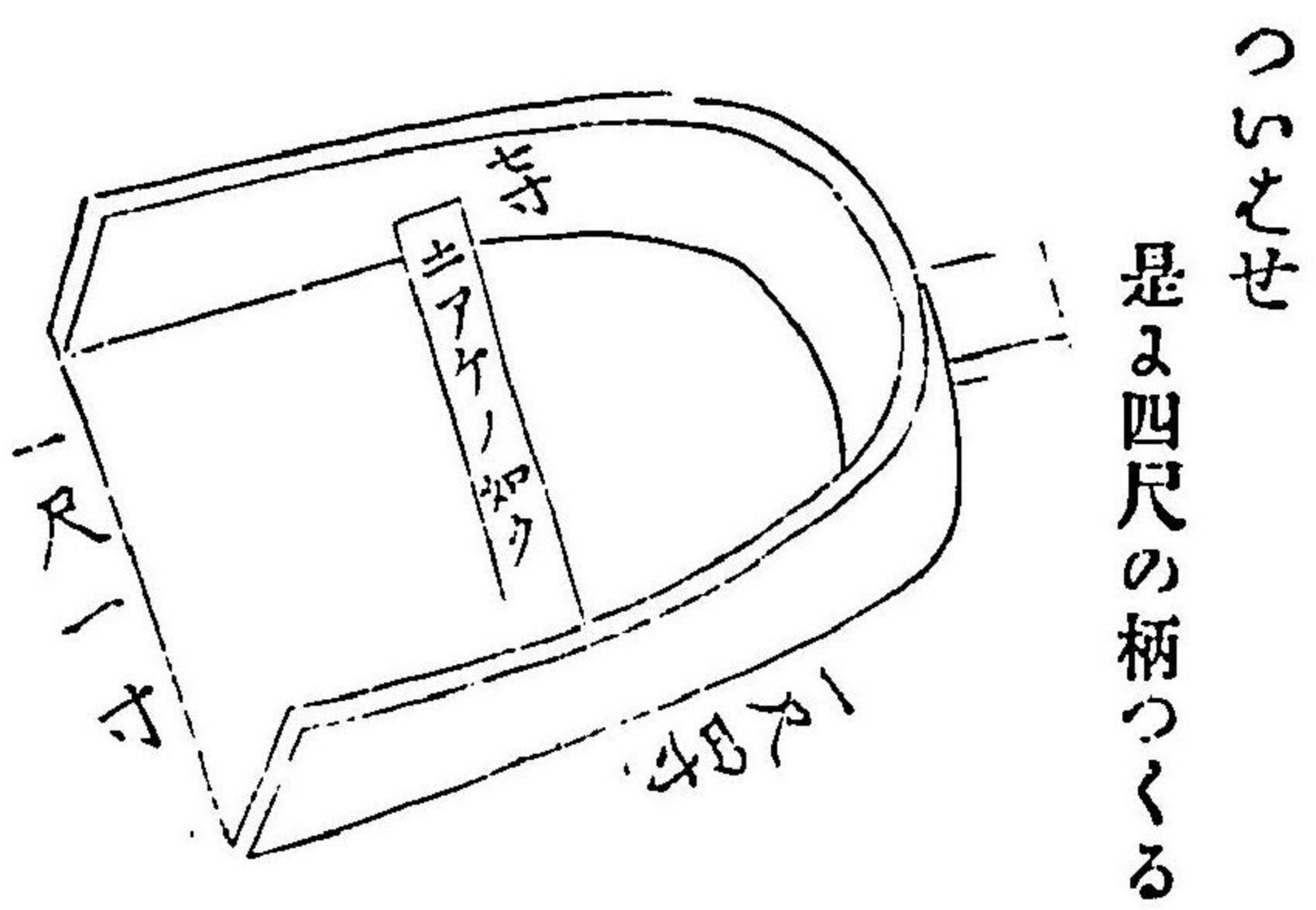
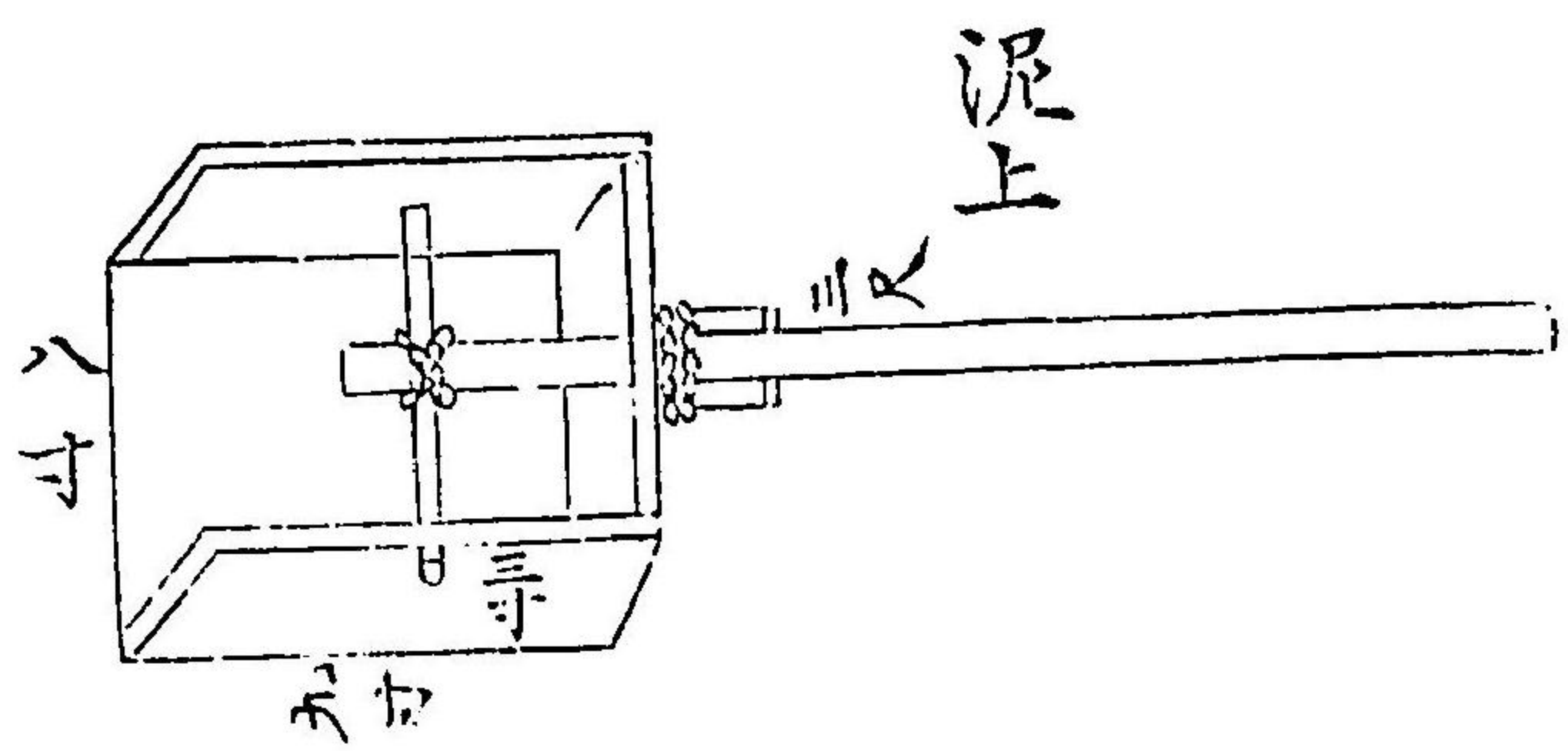
手斧

木をあるま用る代銀貳匁七八分或は三匁三分

臼咽切手斧

招うすの目をたつるま用る代銀三匁貳三分





是は四尺の柄つくる

熊手

こゑをあくるよ用る代銀九分より壹匁貳三分

山刀

代銀三匁或ハ三匁五分

斧

代銀七匁或ハ八匁

手斧

木をわるよ用る代銀貳匁七八分或ハ三匁三分

臼咽切手斧

摺らすの目をたつるよ用る代銀三匁貳三分

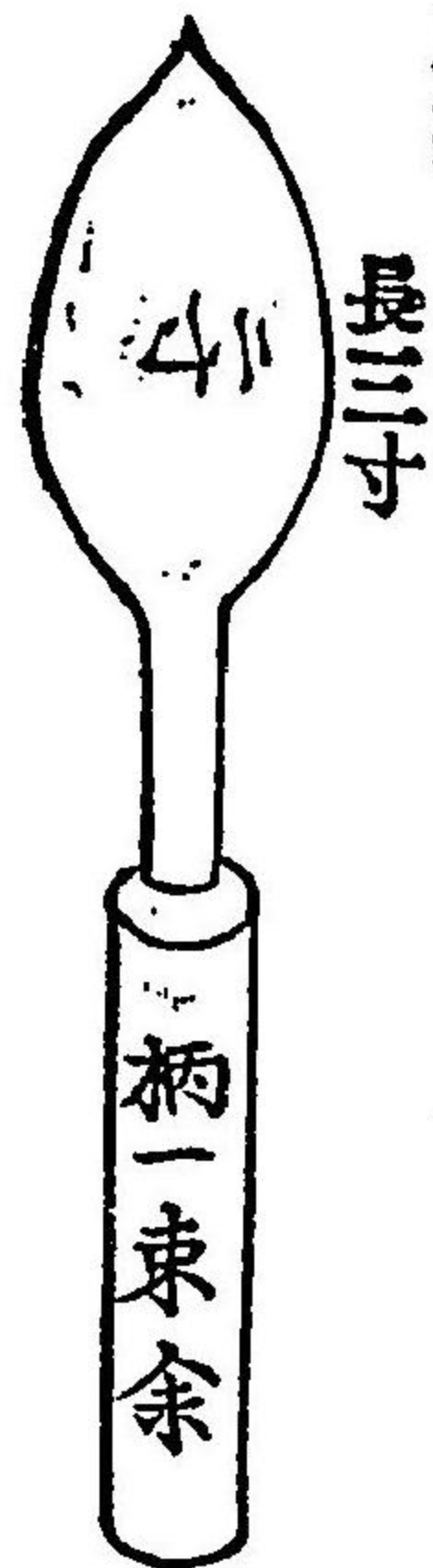




臼の咽切

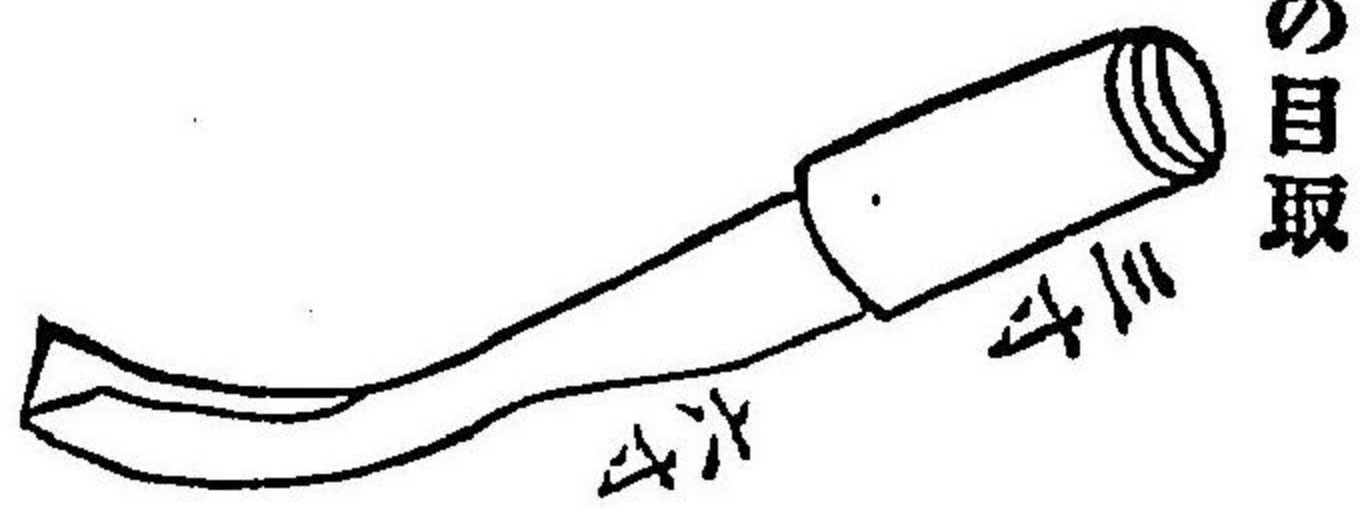
柄一尺

大豆植



長三寸

柄一束余

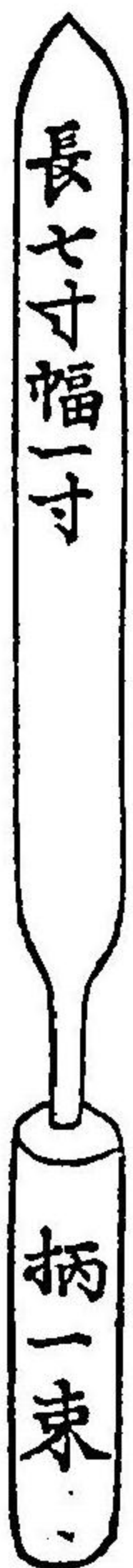


臼の目取

柄一尺

柄一尺

麻の葉落



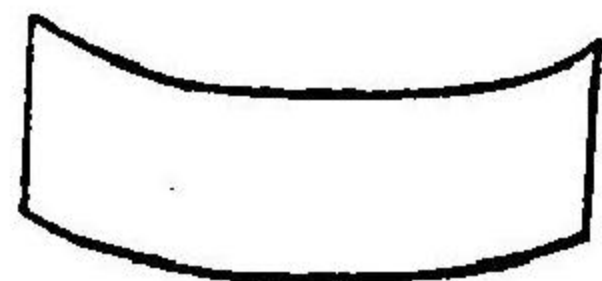
長七寸幅一寸

柄一束

芋引金

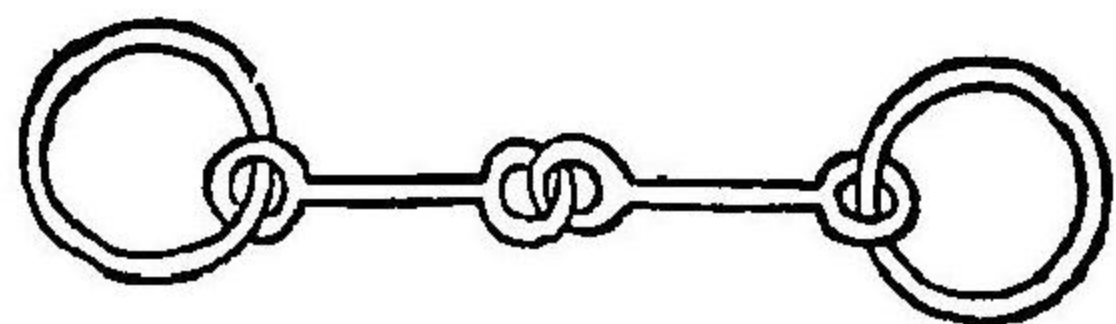


三寸

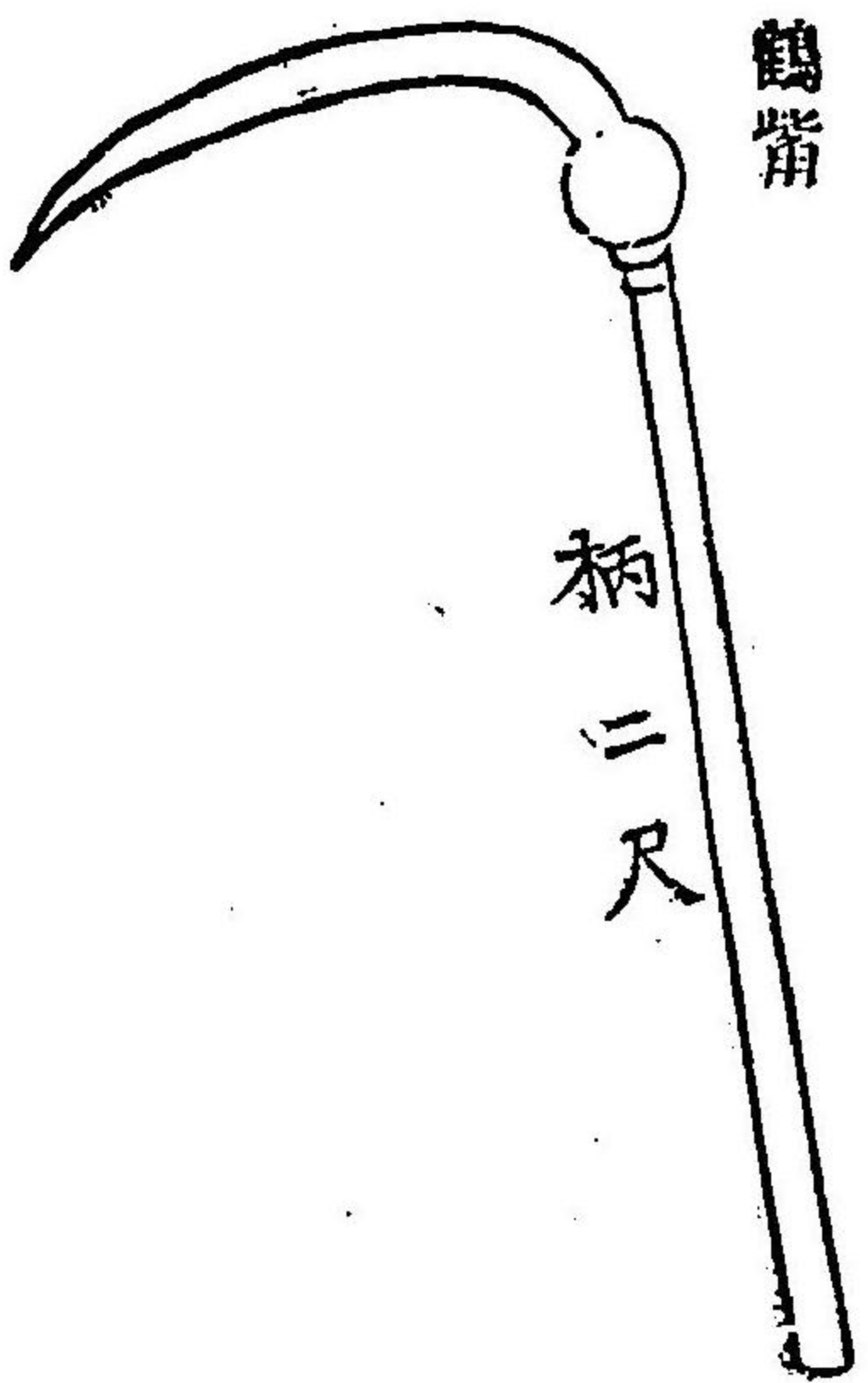


火打の如くして  
横へ柄をしこむ

田轡







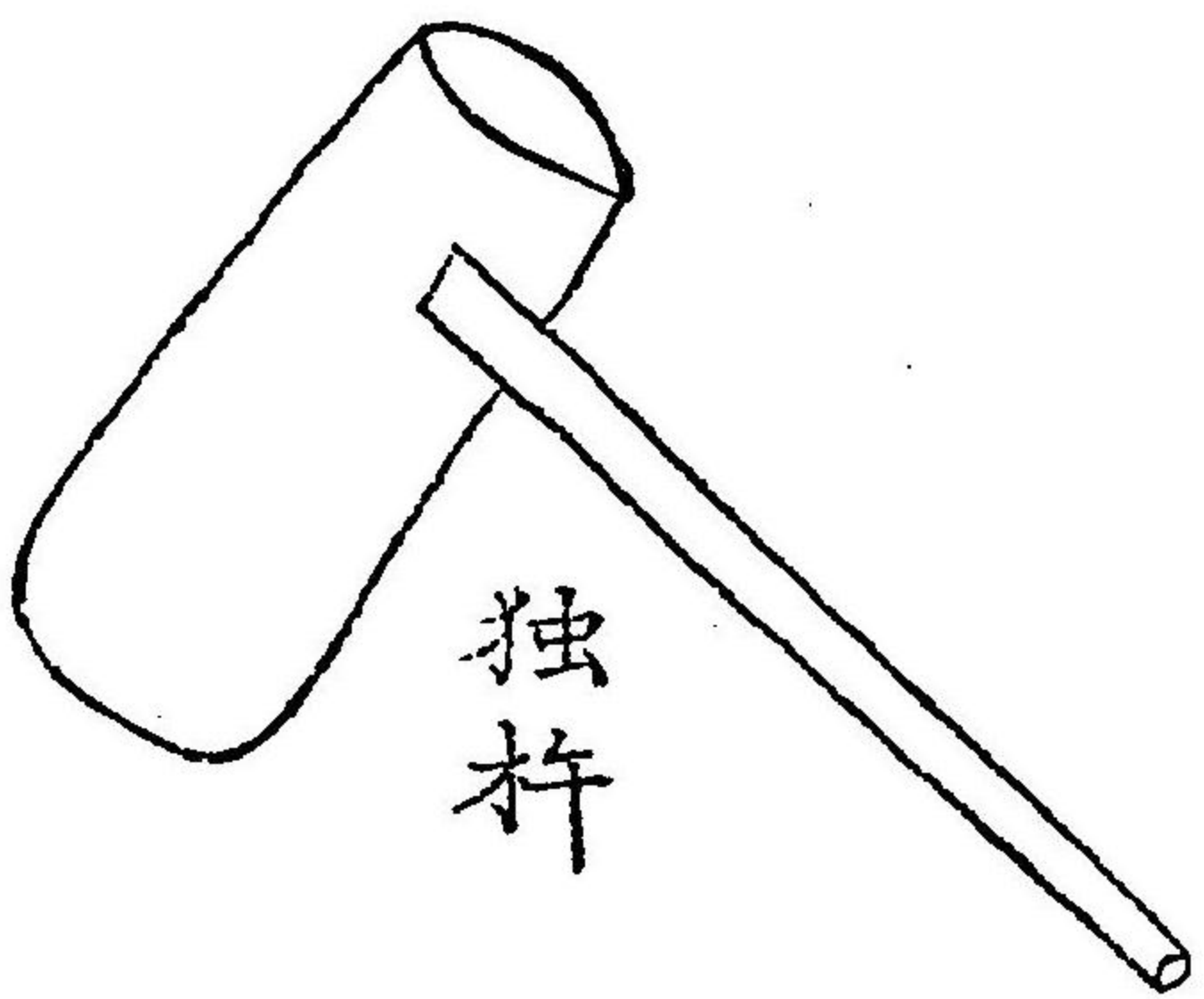
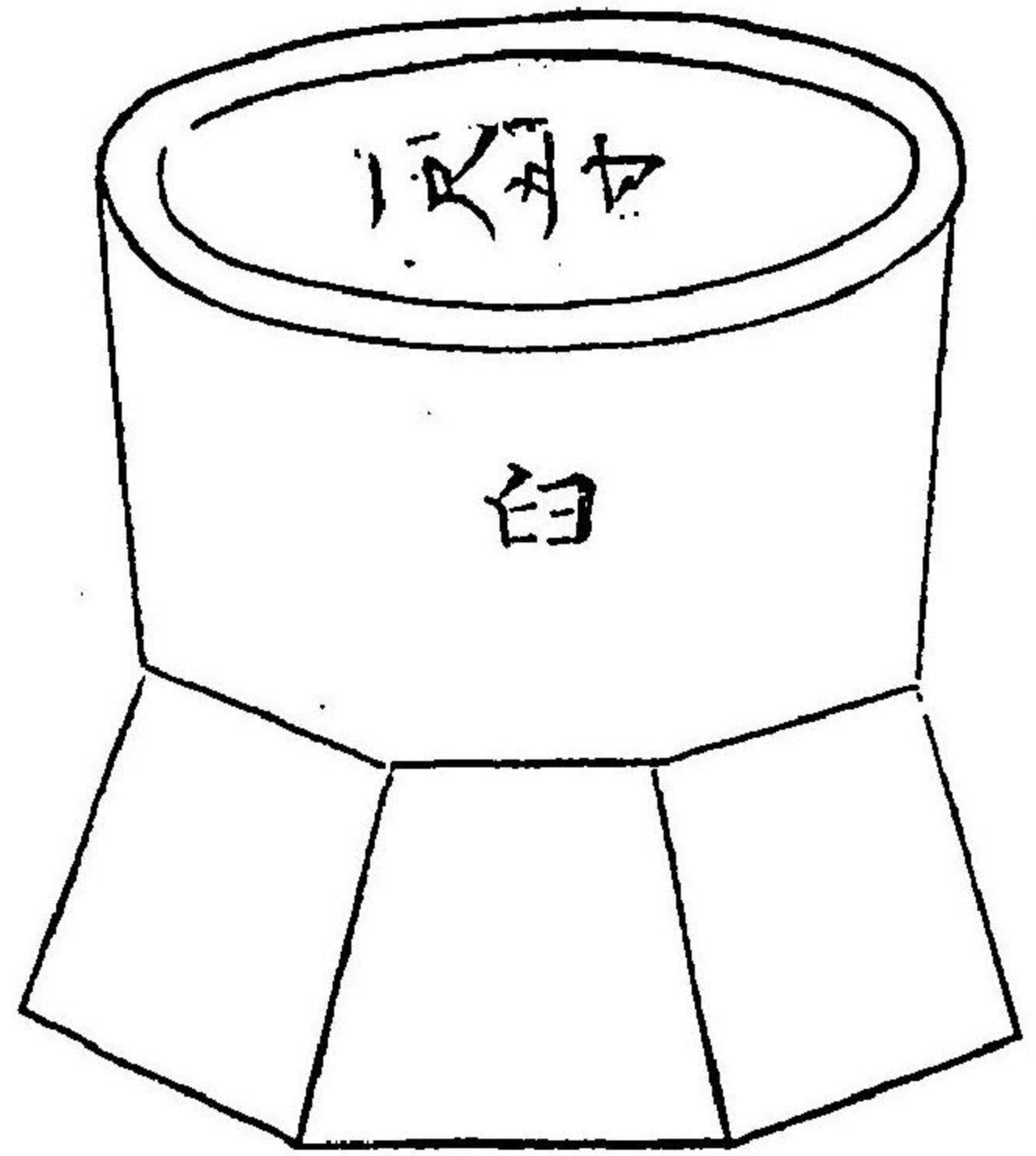
發切書農耕稼春秋卷七之下

白

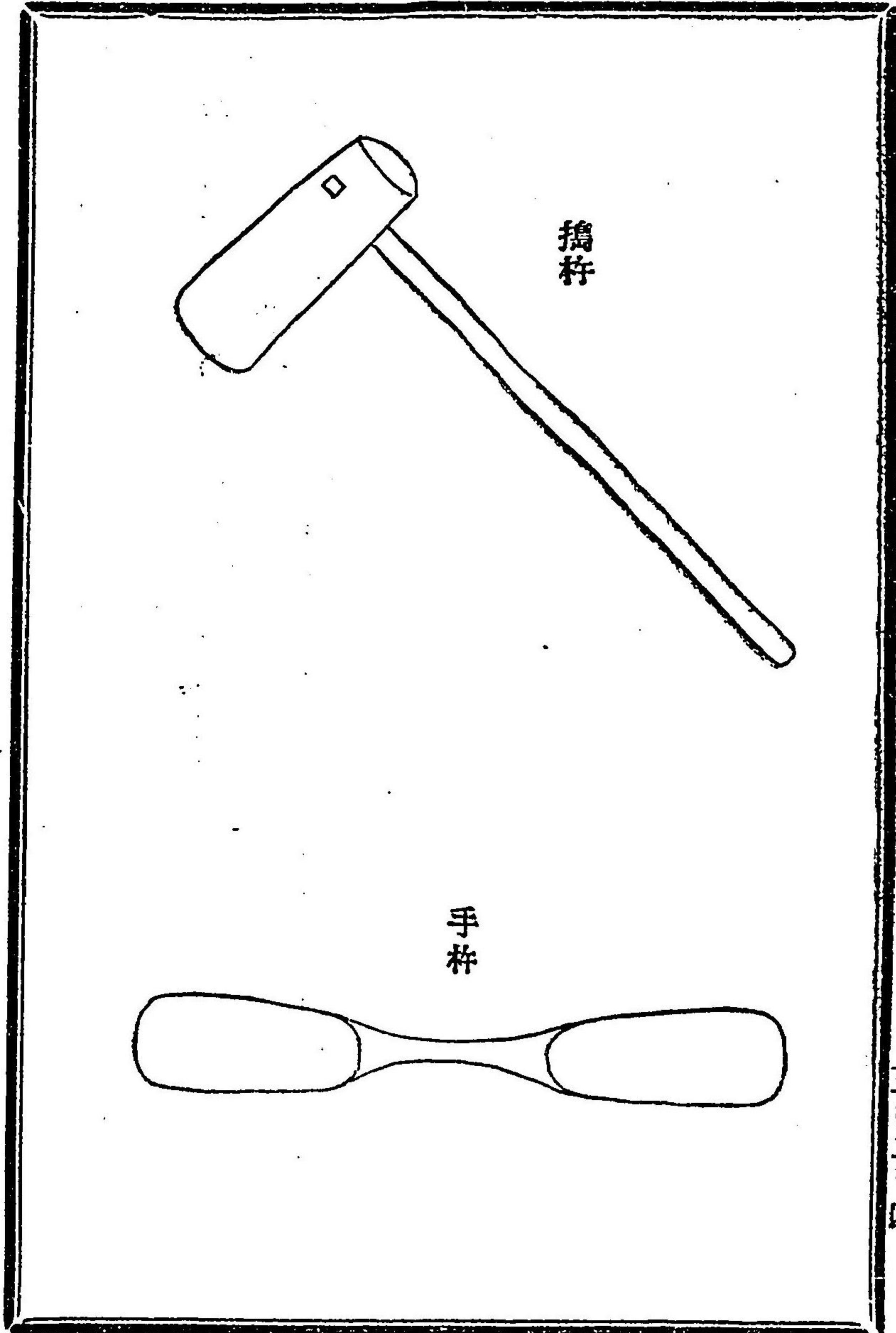
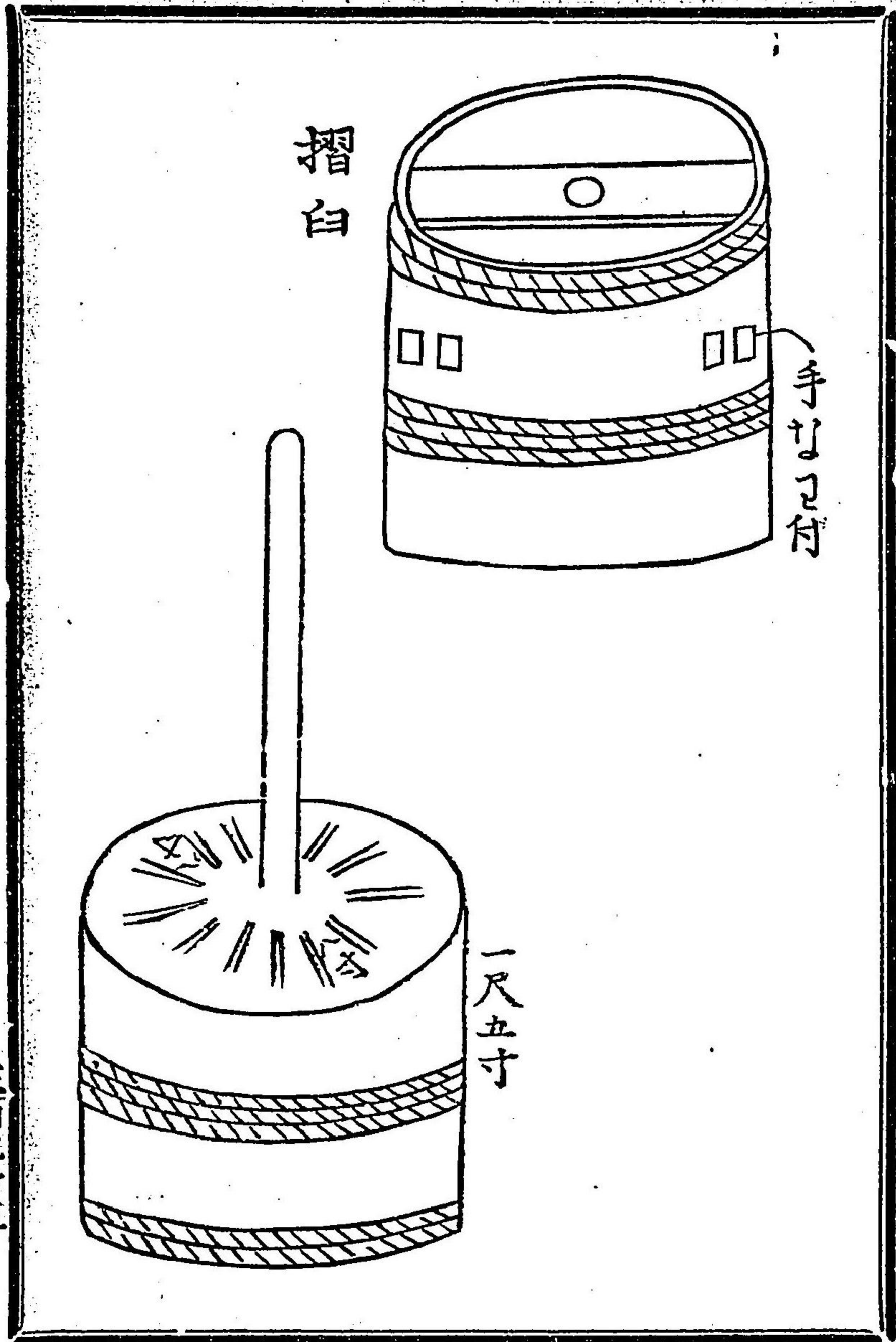
半俵かち四拾目或ハ三拾五匁也

杵

米をまぶけ粉をかつ杵一丁代銀五六分也獨杵ハ三匁貳三分





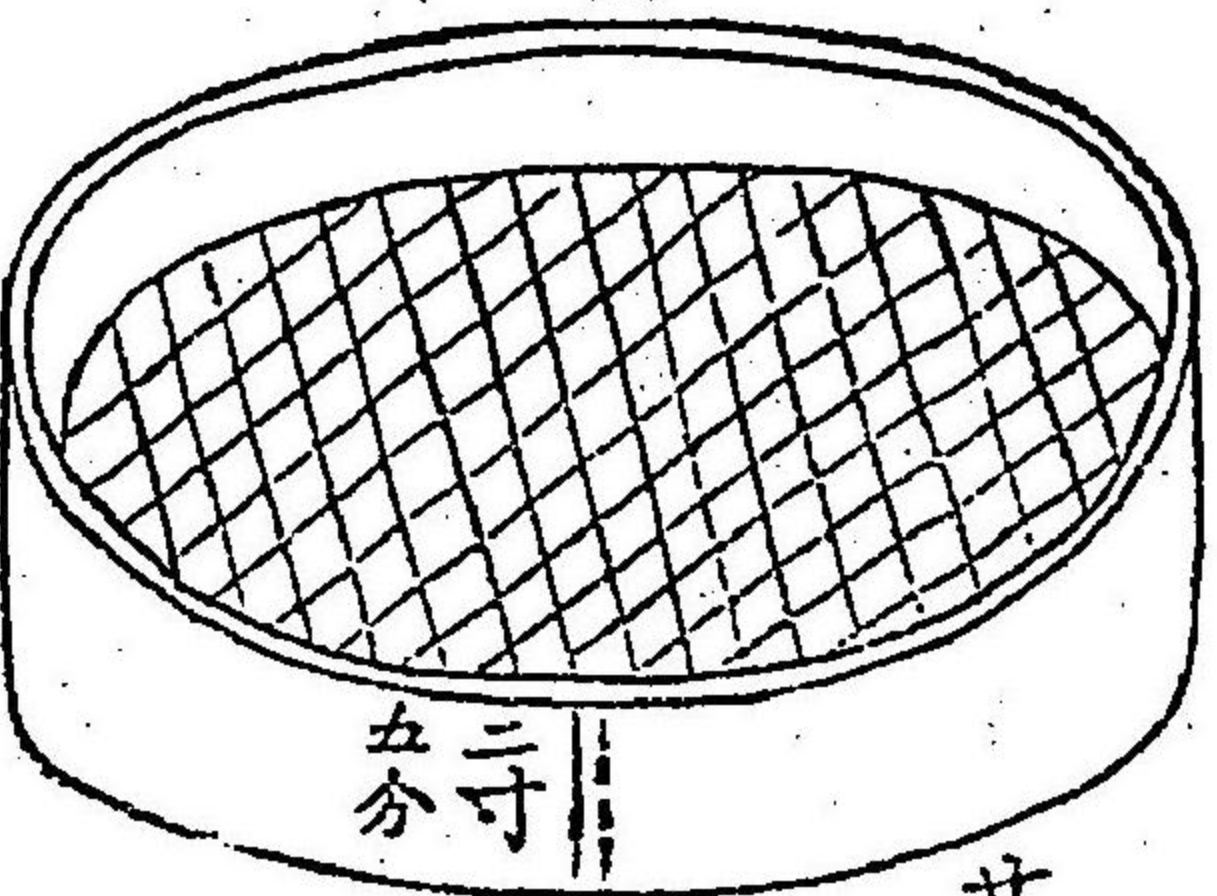




粉ふるい籠

ふちを曲物として細き藤にて組也代銀壹匁或壹貳分也  
但ふちなし目籠もてもふるふ也目籠ハ代銀八九分也

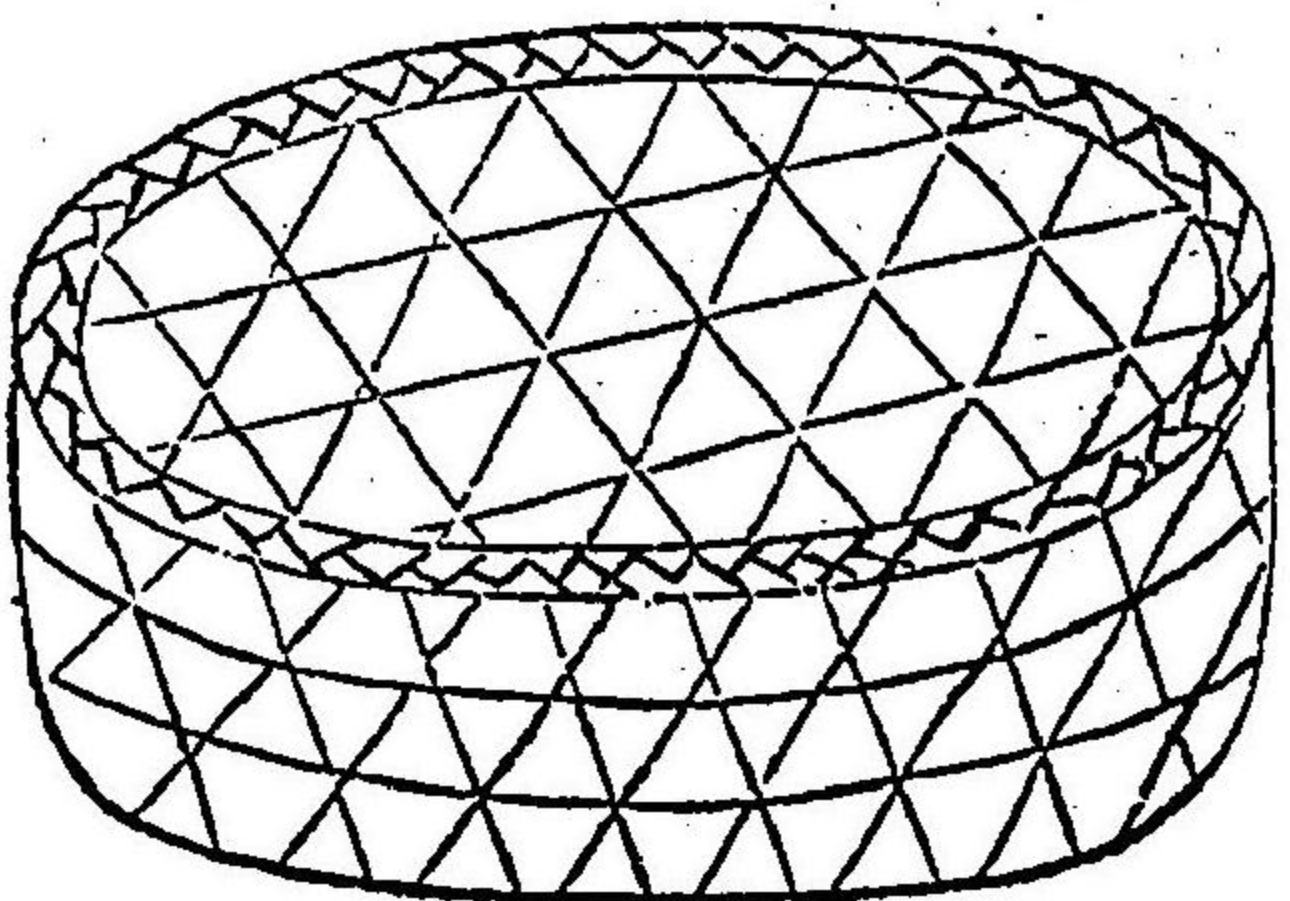
粉籠



三寸  
五分

サシ渡一尺三寸

目のやと  
七分



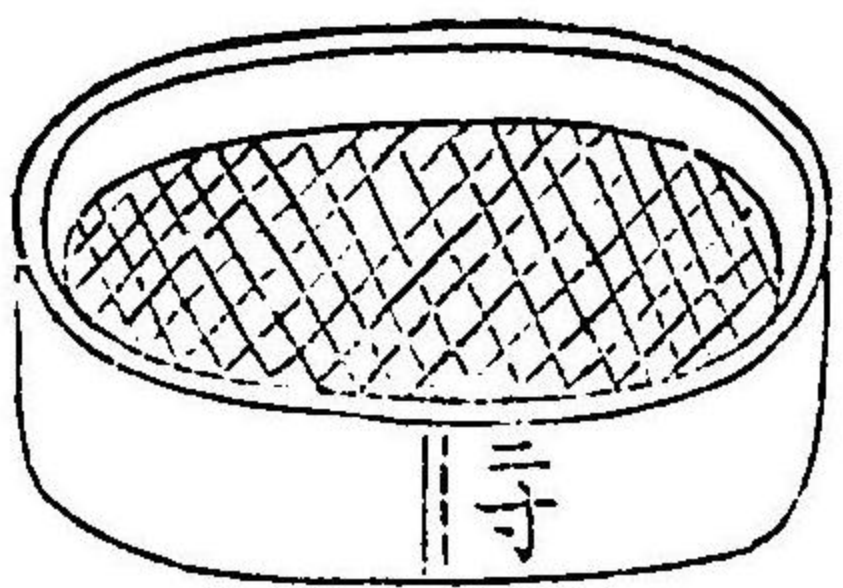
米籠

縁と曲物にして麻糸を通す或ハ竹の下骨よりぬいは繩を

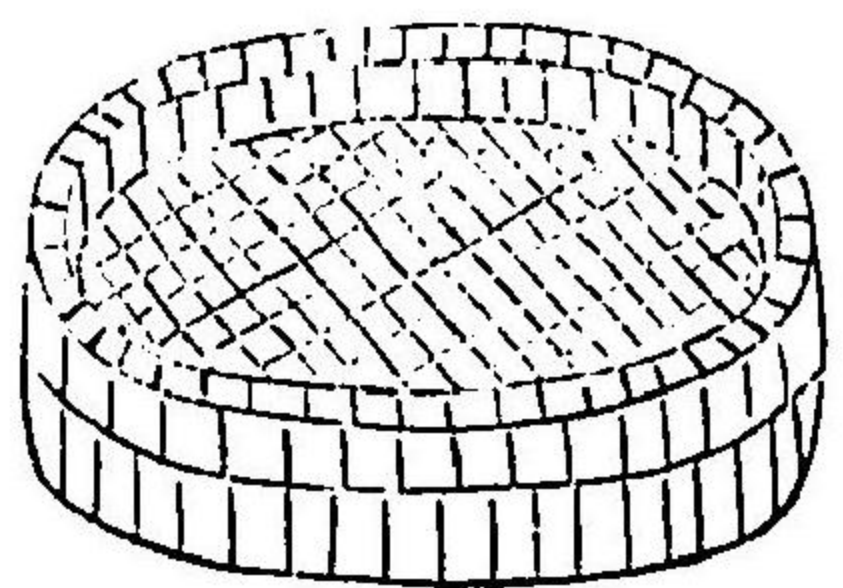
組てもする也小米籠の代銀壹匁五分より粉とかし壹匁  
三分也粒の大小より目の廣き狭きを用る但ぬいは繩  
ハ下直也

米籠

指渡一尺一寸



三寸

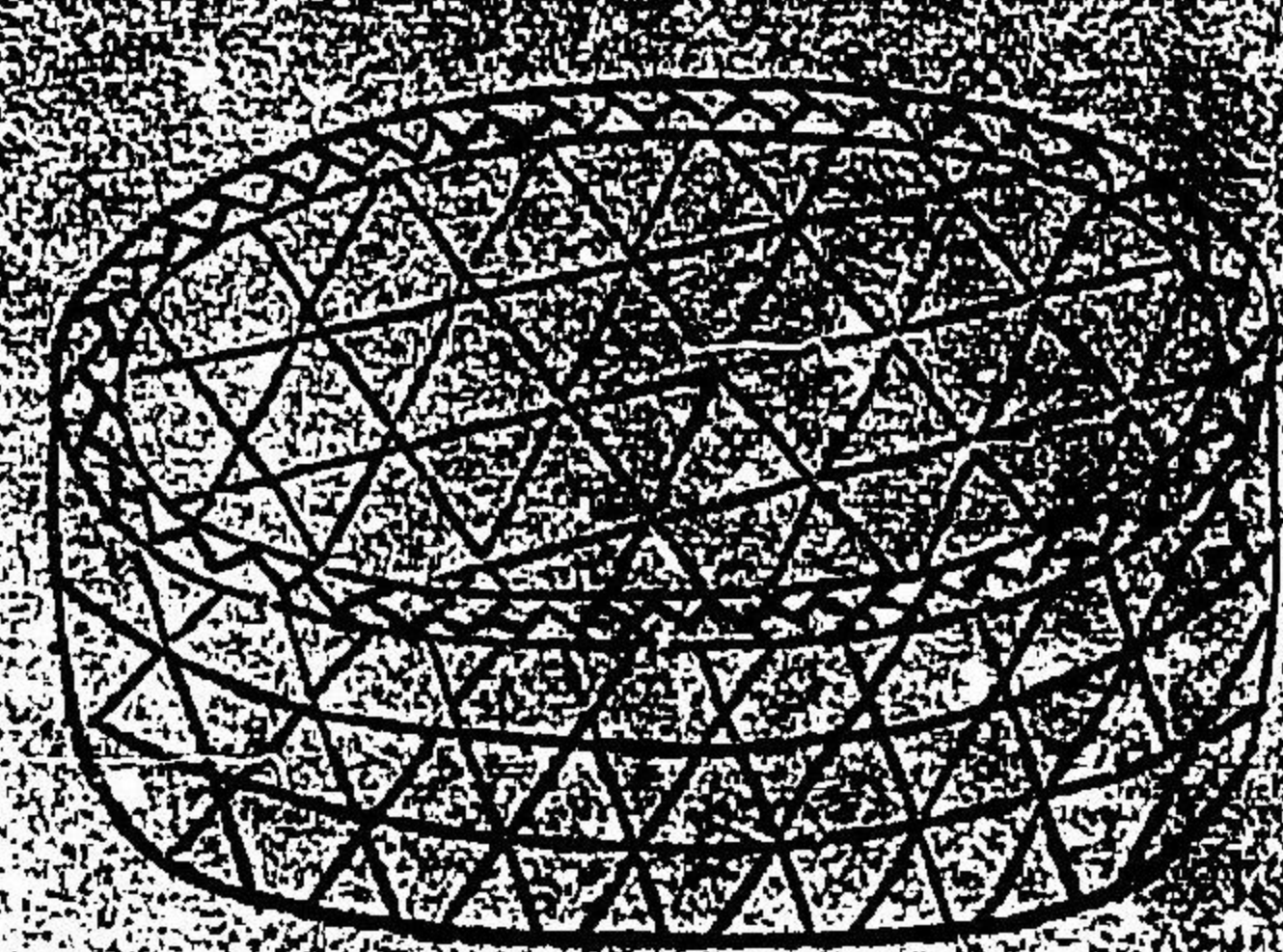
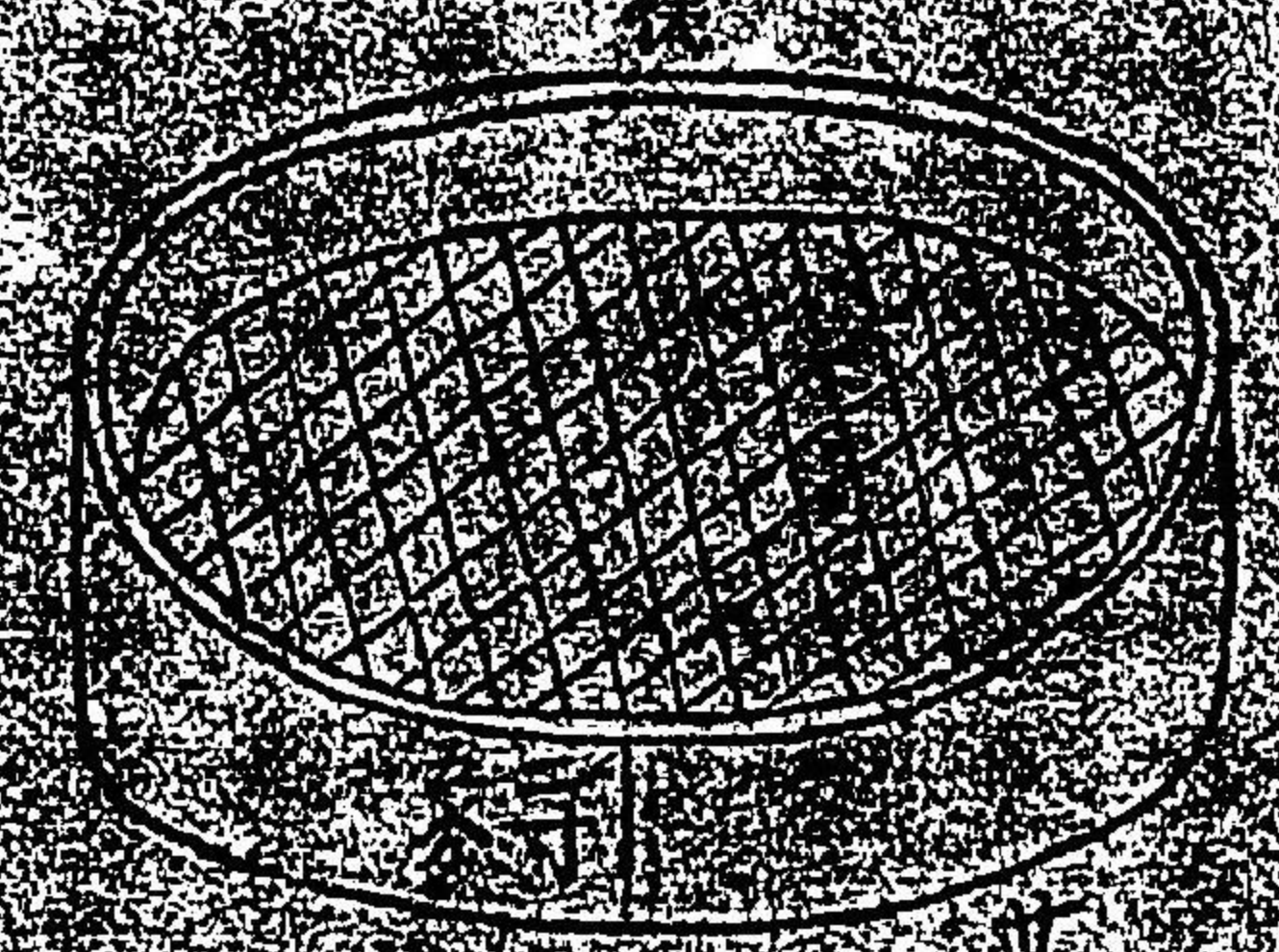


箕

糟芥を簸るよ用る竹と藤にて組なり代銀四分或ハ五分



此の籠は、米を篩ふるに用ゐる。其の目、代銀四分、或は五分也。但し、此の籠は、米を篩ふるに用ゐる。其の目、代銀四分、或は五分也。

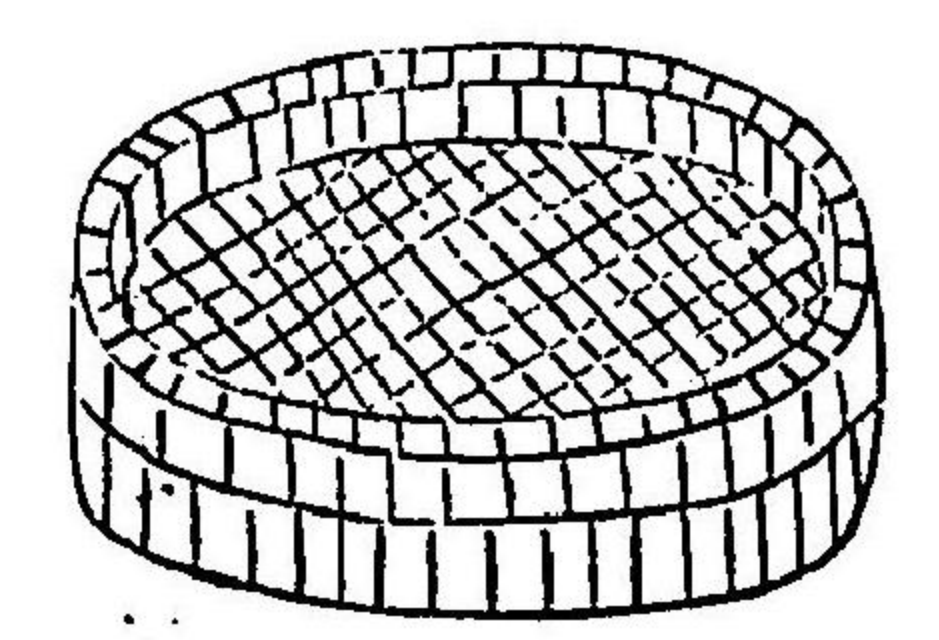
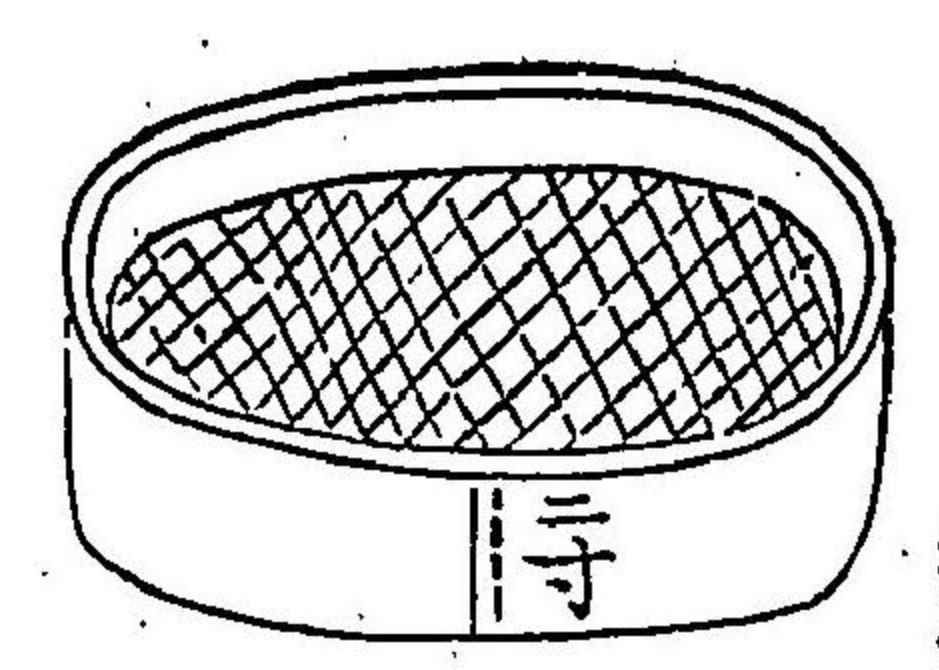


目  
 代銀四分  
 或は五分也

此の籠は、米を篩ふるに用ゐる。其の目、代銀四分、或は五分也。但し、此の籠は、米を篩ふるに用ゐる。其の目、代銀四分、或は五分也。

組てもする也小米籠の代銀壹匁五分より粗どかし壹匁三分也粒の大小より目の廣き狭きを用る但ぬいほ細の下直也

米籠  
 指渡一尺一寸



箕

糟芥を篩るに用る竹と藤よて組なり代銀四分或は五分



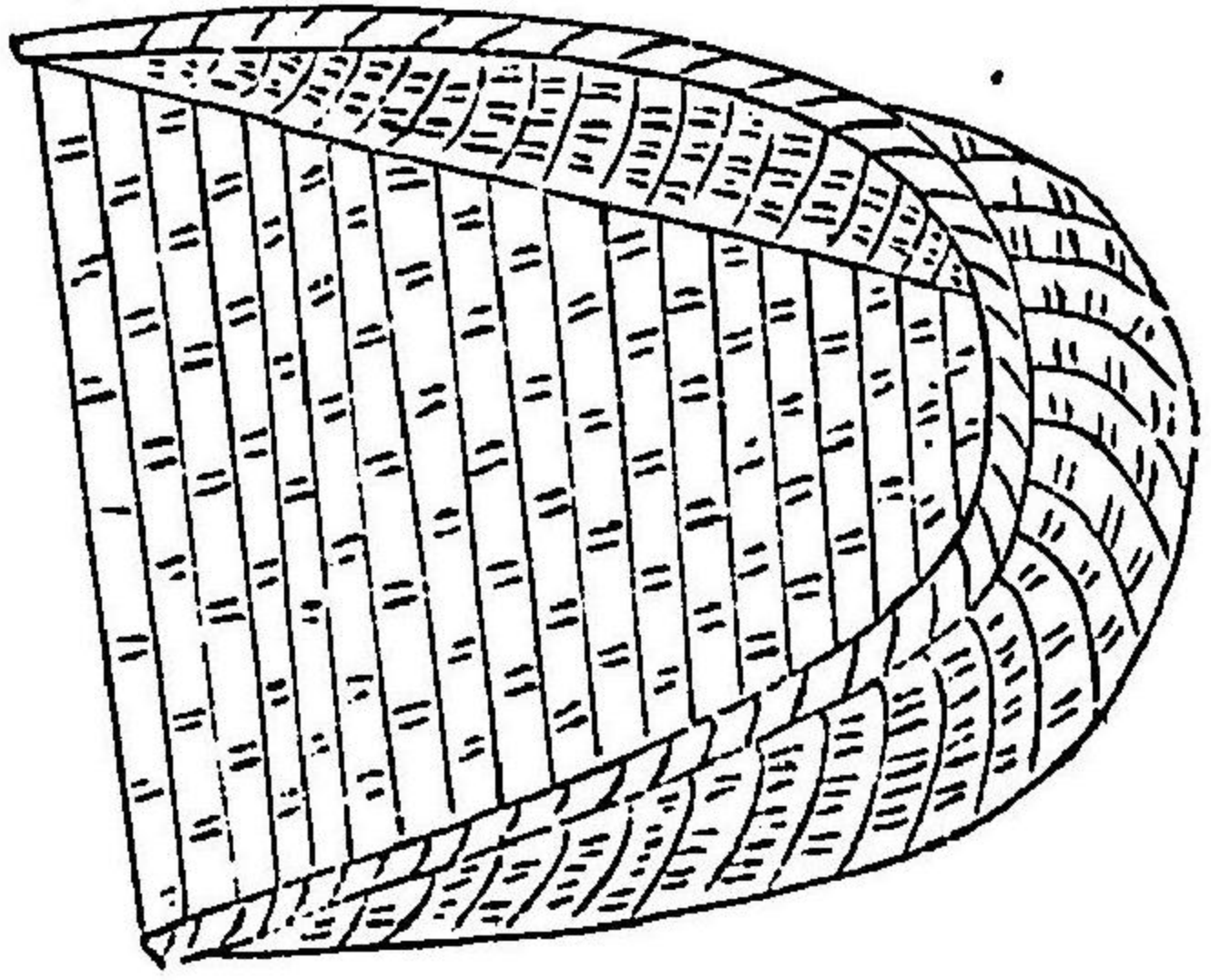
糟のうちの粉を取る用る代銀壹匁貳分或は壹匁五分圓  
き曲物なり

ゆるわ

ゆると

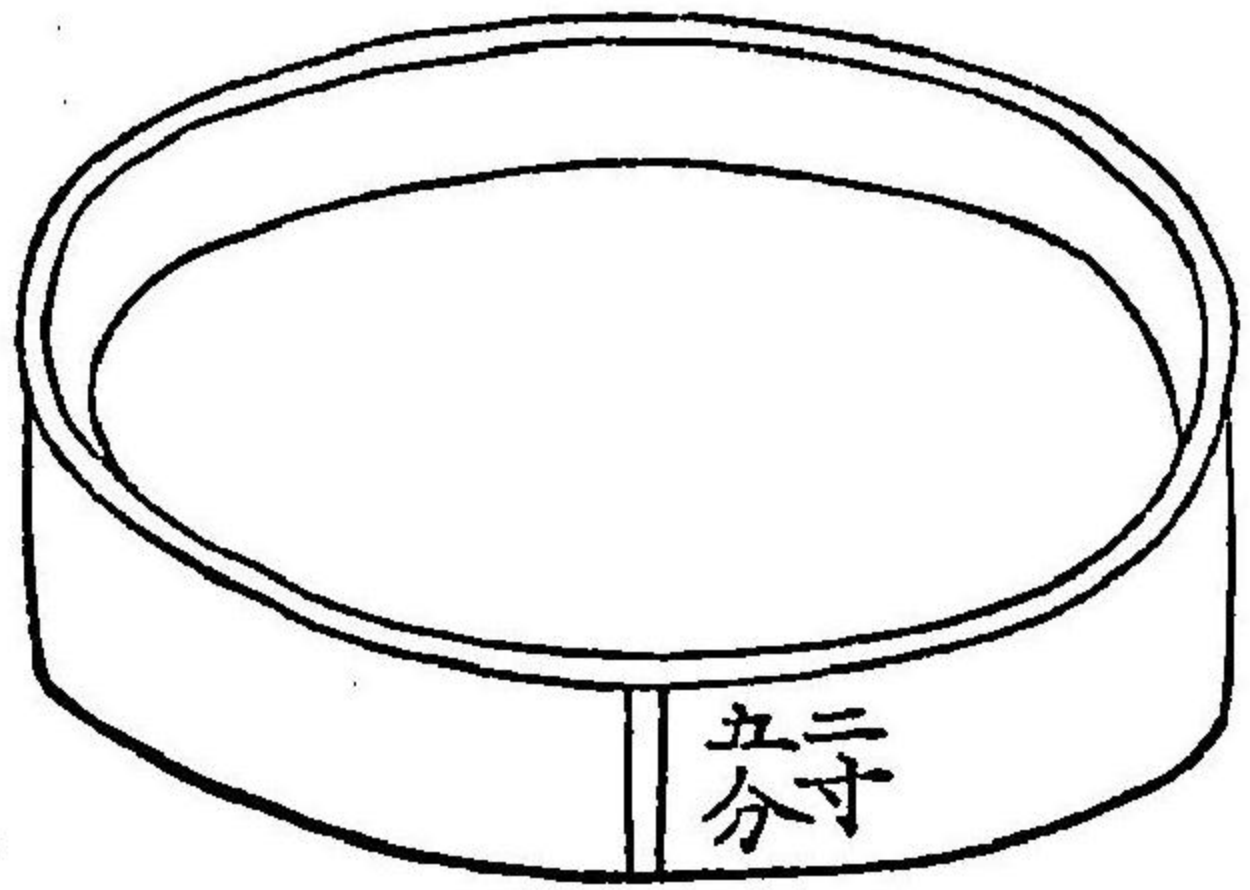
指渡一尺四寸

箕



こすとし

二寸五分

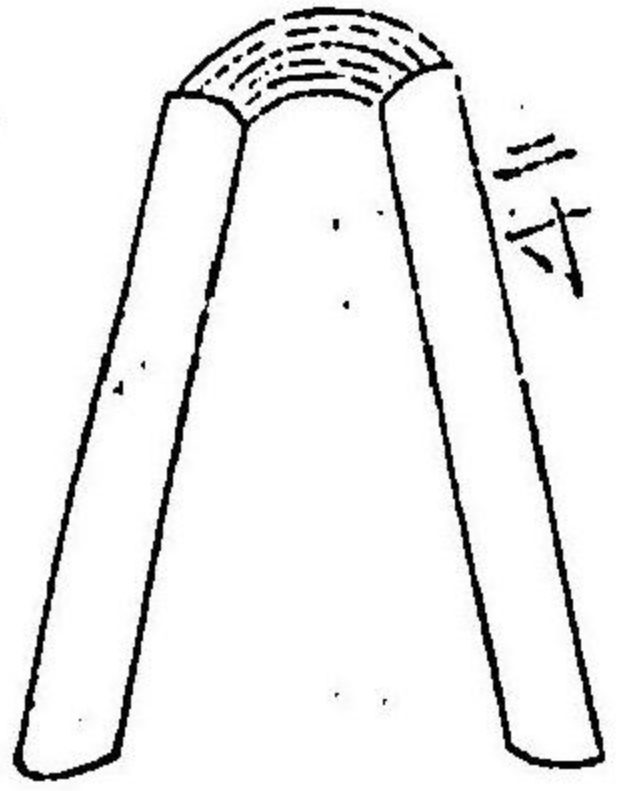


籾をこくよ用る物也竹を管の如く切てぬいほどさして  
つく也鉄よてもする

綿操

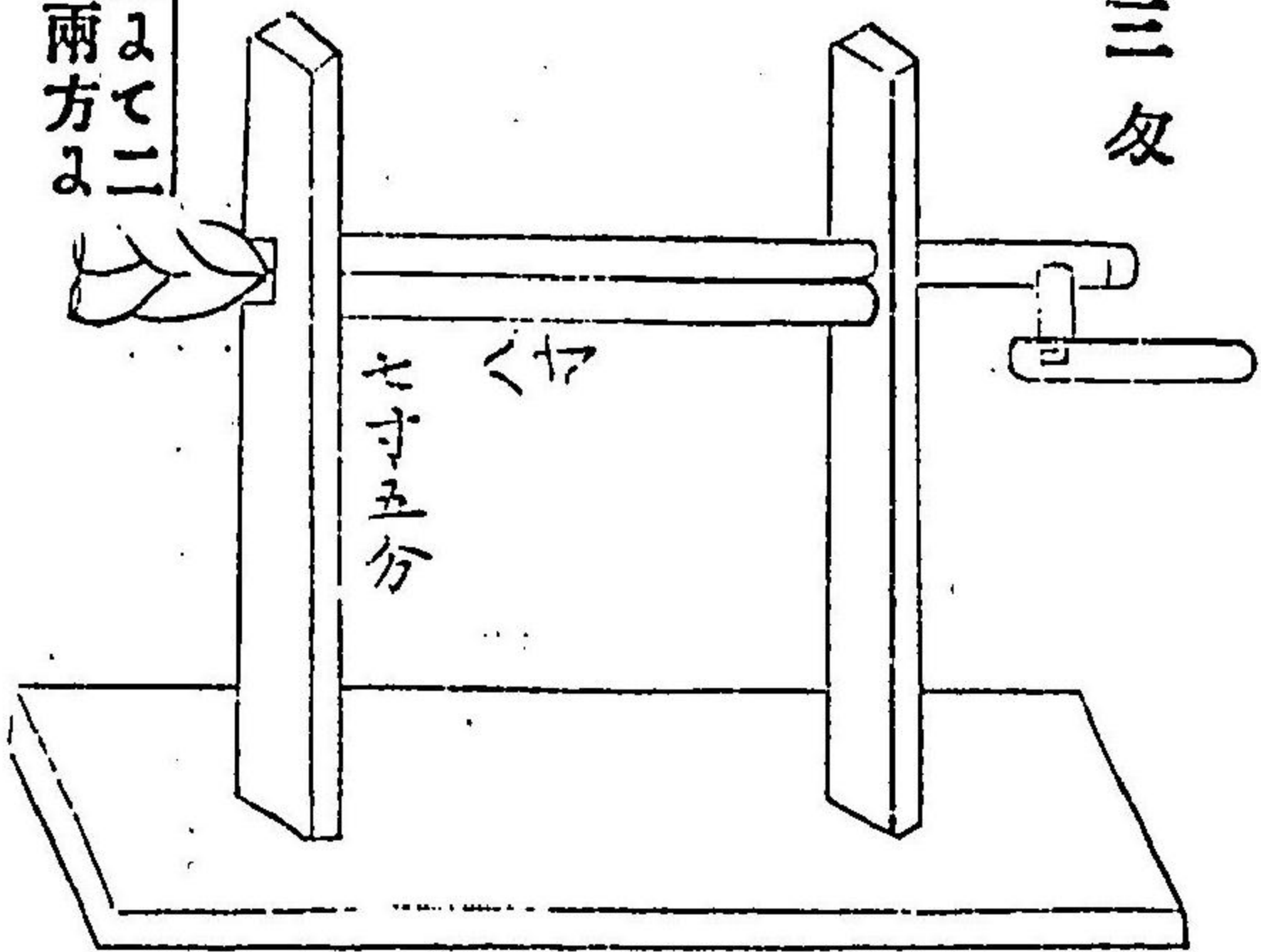
木綿のたねを取物也代銀三匁  
五分

おとし



綿操

此端を繩目の如く切形と付る是よて二  
本共よ車の軸の如く廻る也或は兩方よ  
取手を付て二人しても操也



くハ  
七寸五分



摺

ままさらへは芥をさらゆるよ用代銀四分但よこすかわ  
とかくハ八九分組子數多し

箒

米を集むるよぬ

草箒

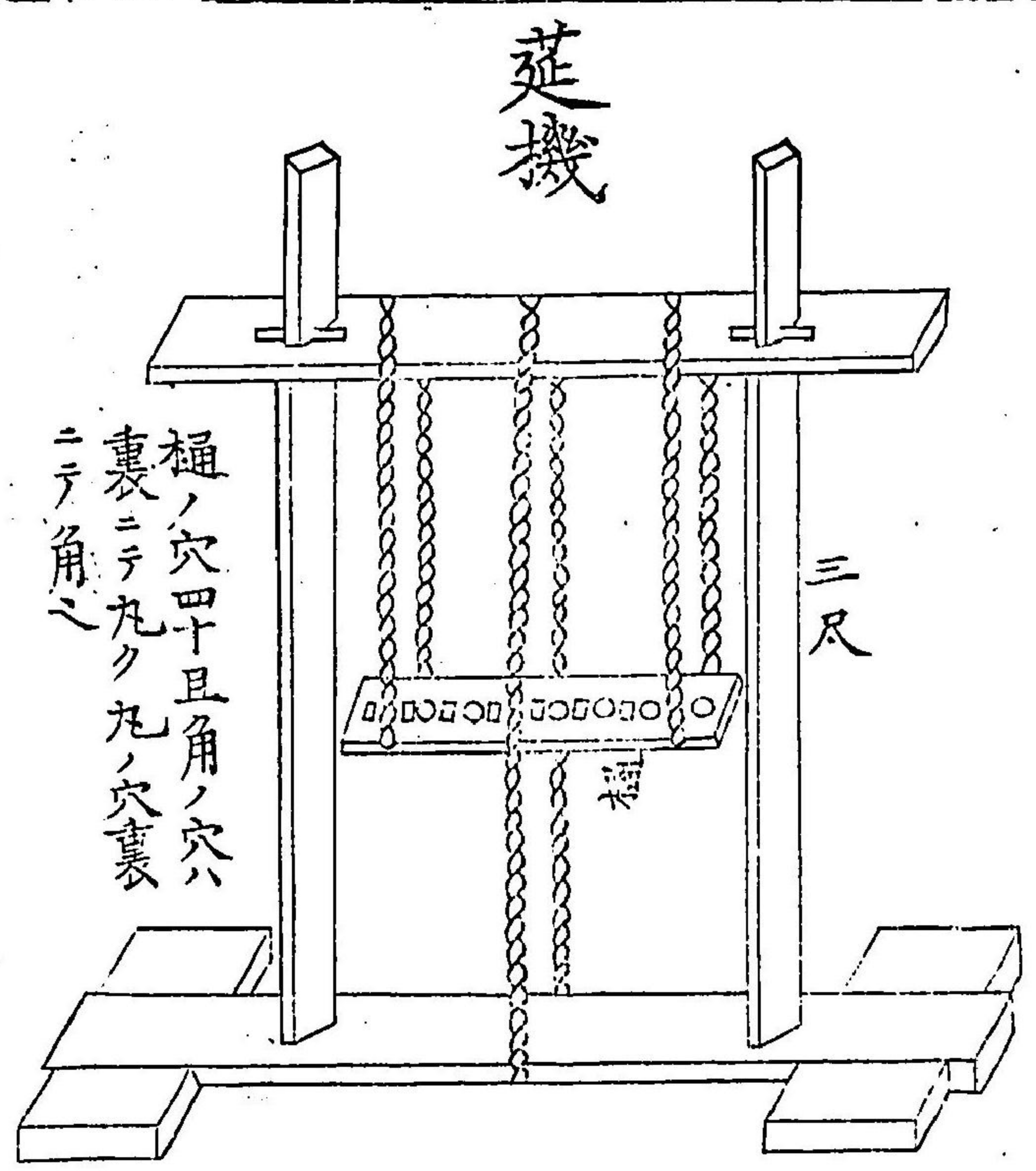
藁箒

いはの箒を  
用る

摺



莖機



桶ノ穴四寸且角ノ穴ハ  
裏ニテ九ク九ノ穴裏  
ニテ角ノ

三尺

張木

角ノ上

指竹

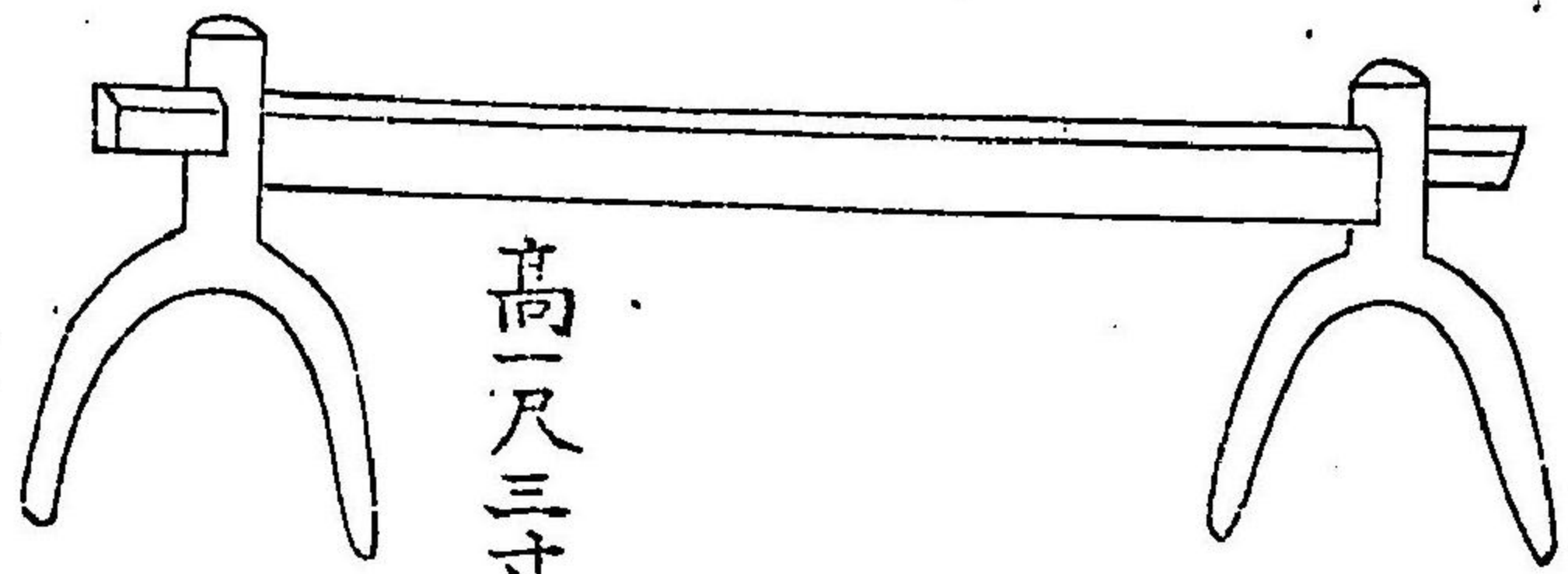
四尺

榎  
す  
り  
か  
木  
銀  
よ  
分  
五  
分



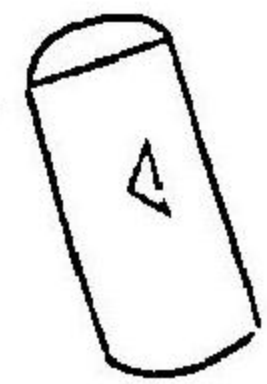
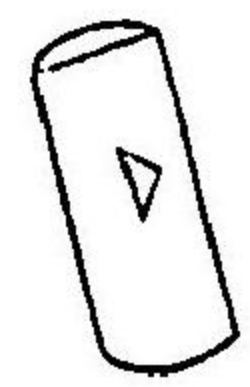
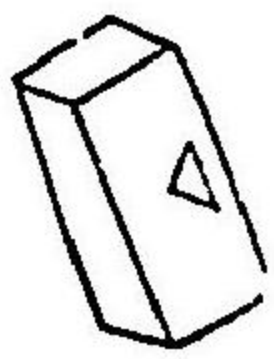
菱板を編板かり

編板



高二尺三寸

つちのこ



敷編はよよつて  
多少あり



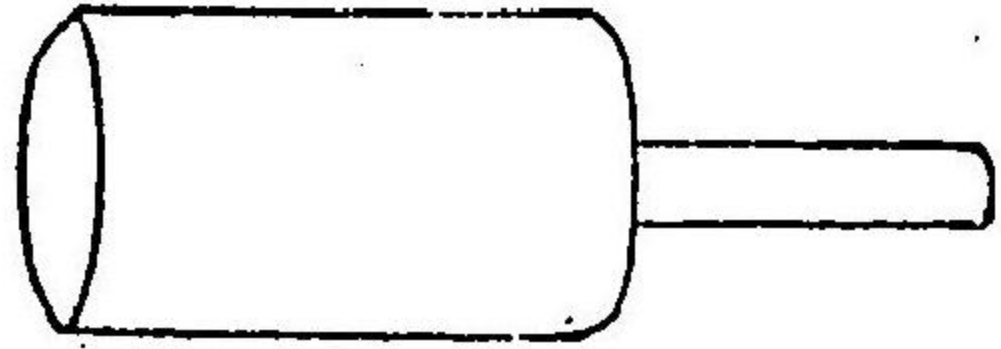
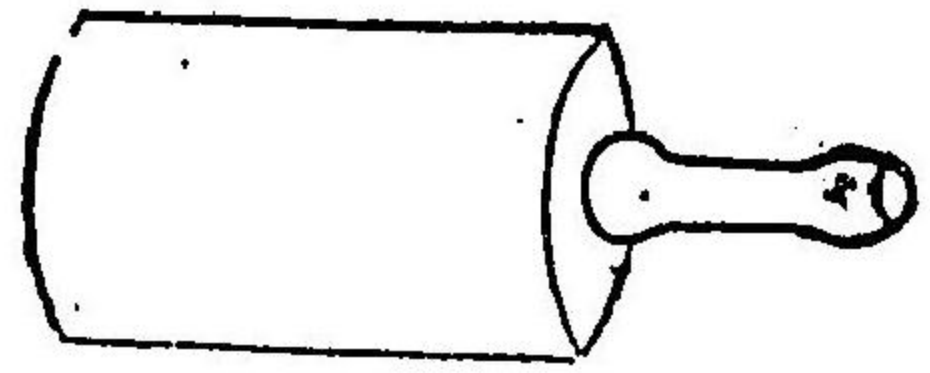
槌

藁とらつち也

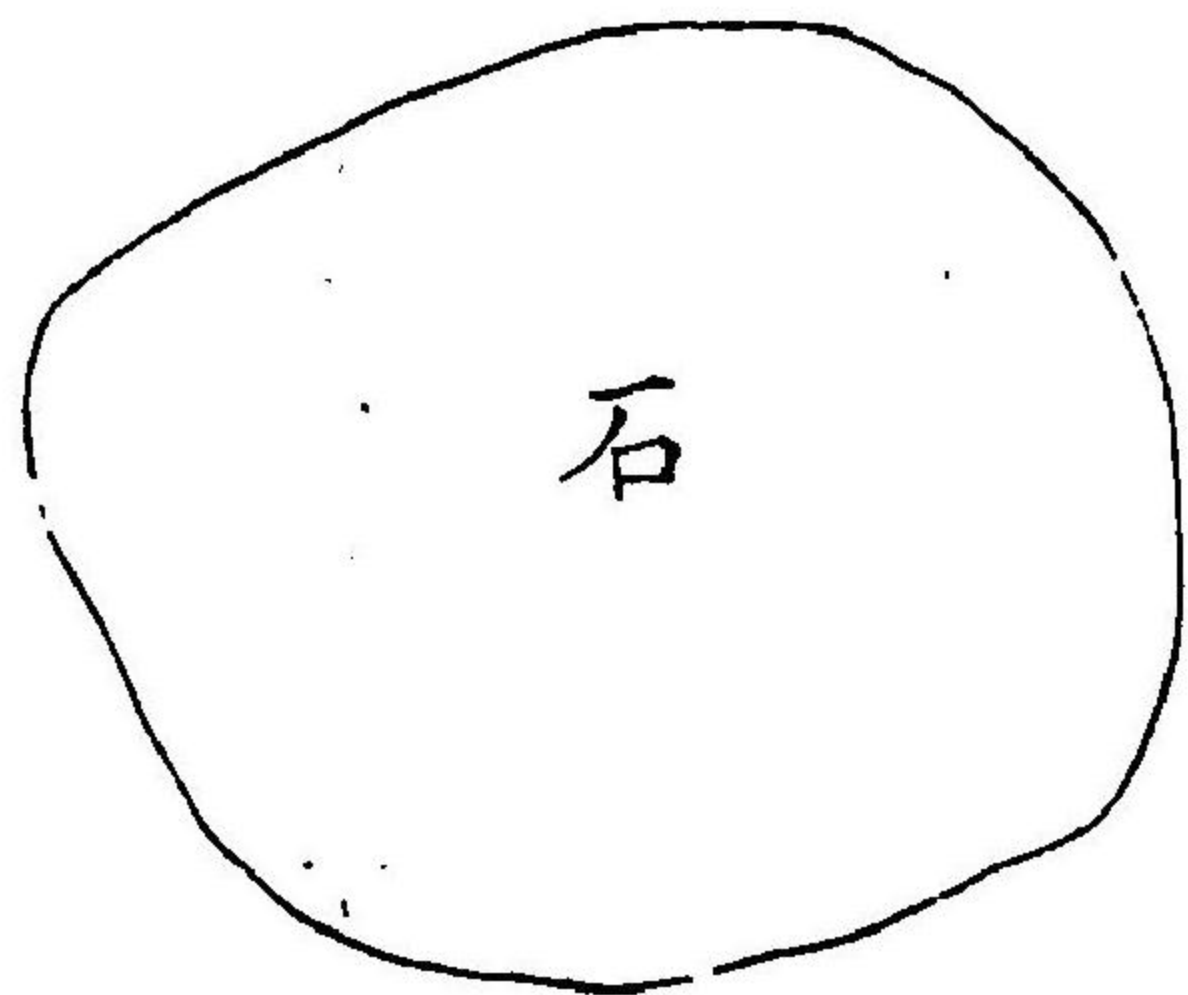
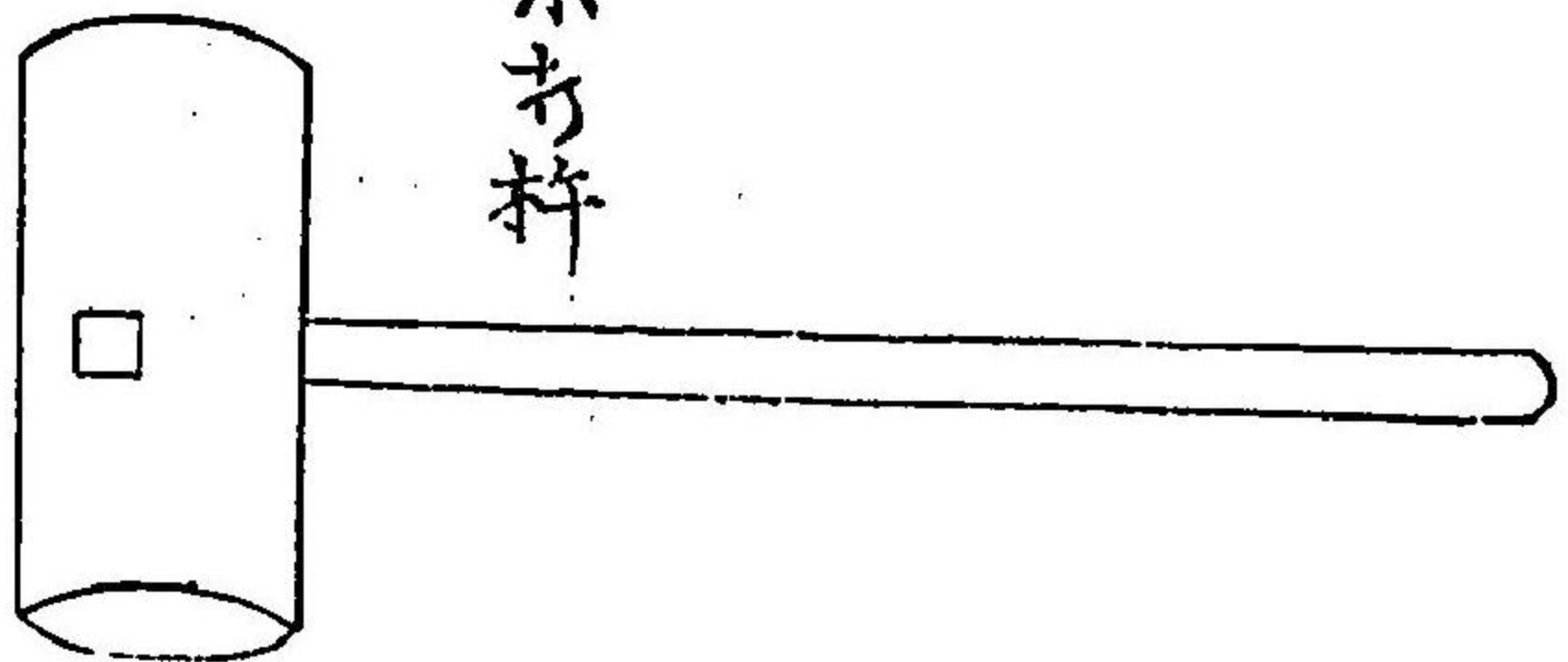
てらふ石

藁をうつ石也

槌大小



藁お杵

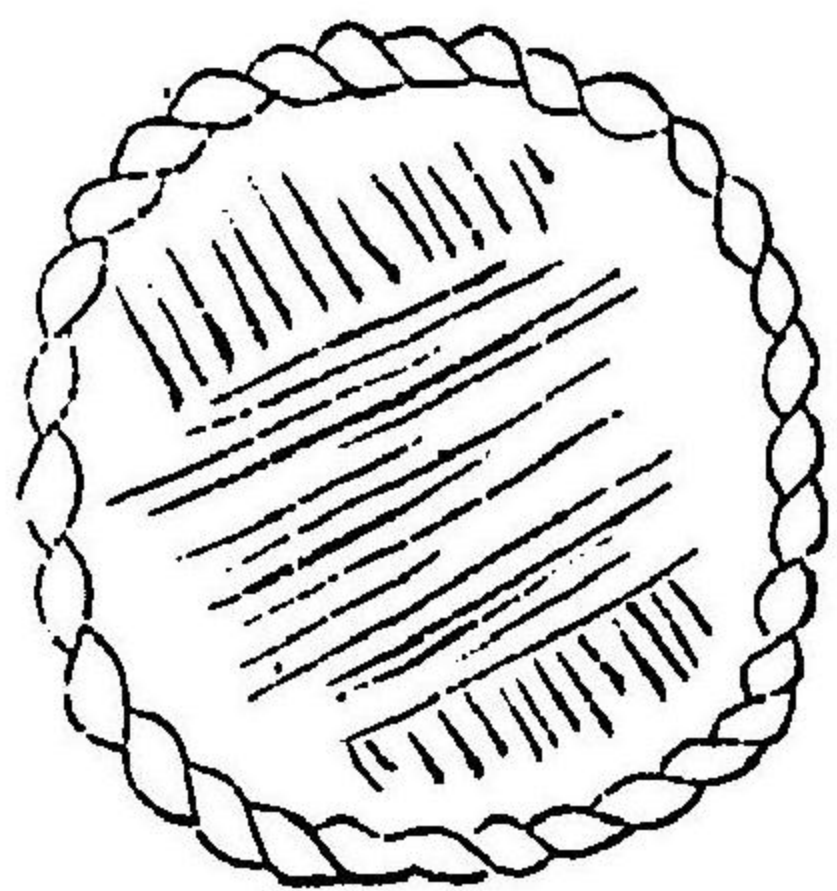
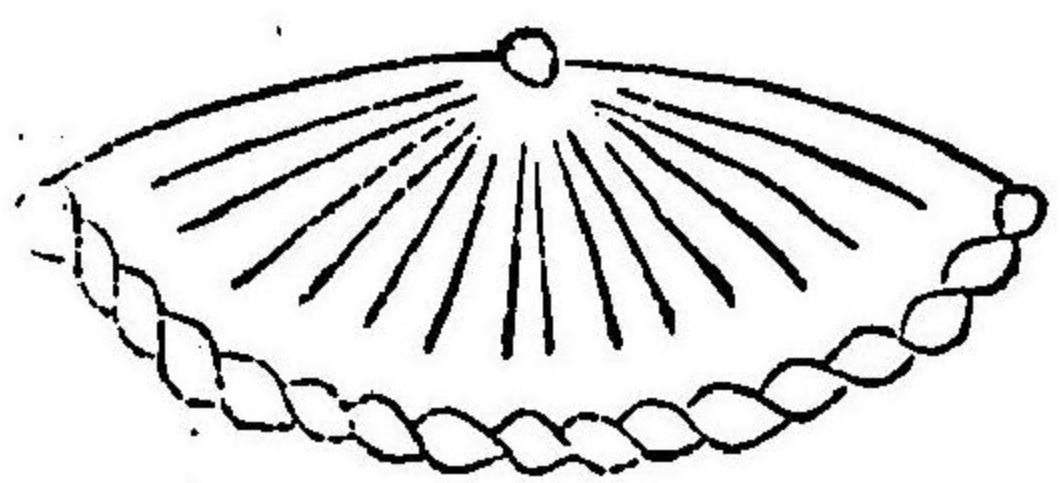


石

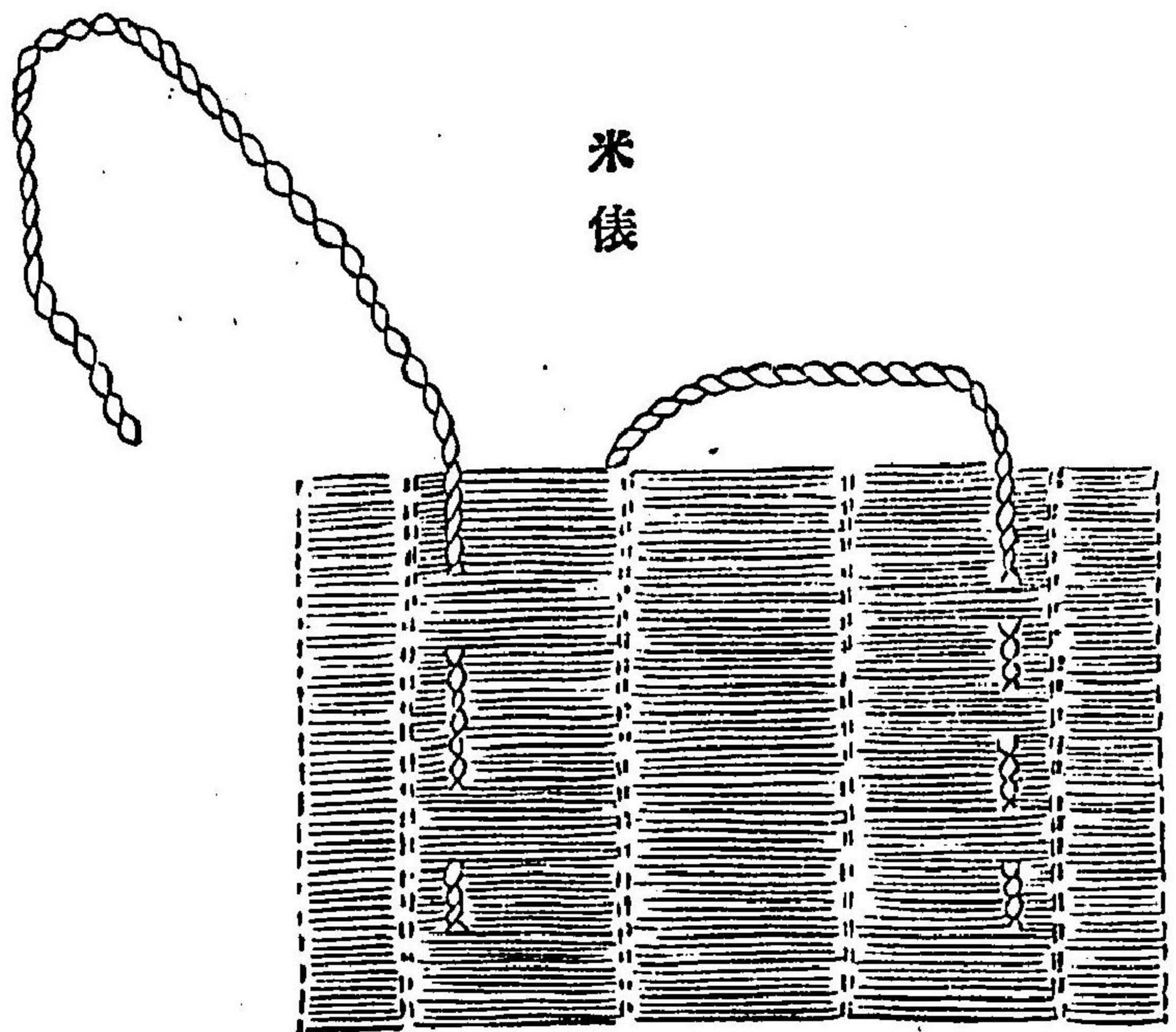


俵

米を入るたわら一ツ又藁八わぬいは縄九尋又て四はよ  
 わひなりさわらの藁貳把又て一ツを組也  
 結なわの兩のひうちよ四尋横の五所よ十尋立の十文字  
 に七ひろ半たるくさり八尋也  
 さん俵二色有



米俵

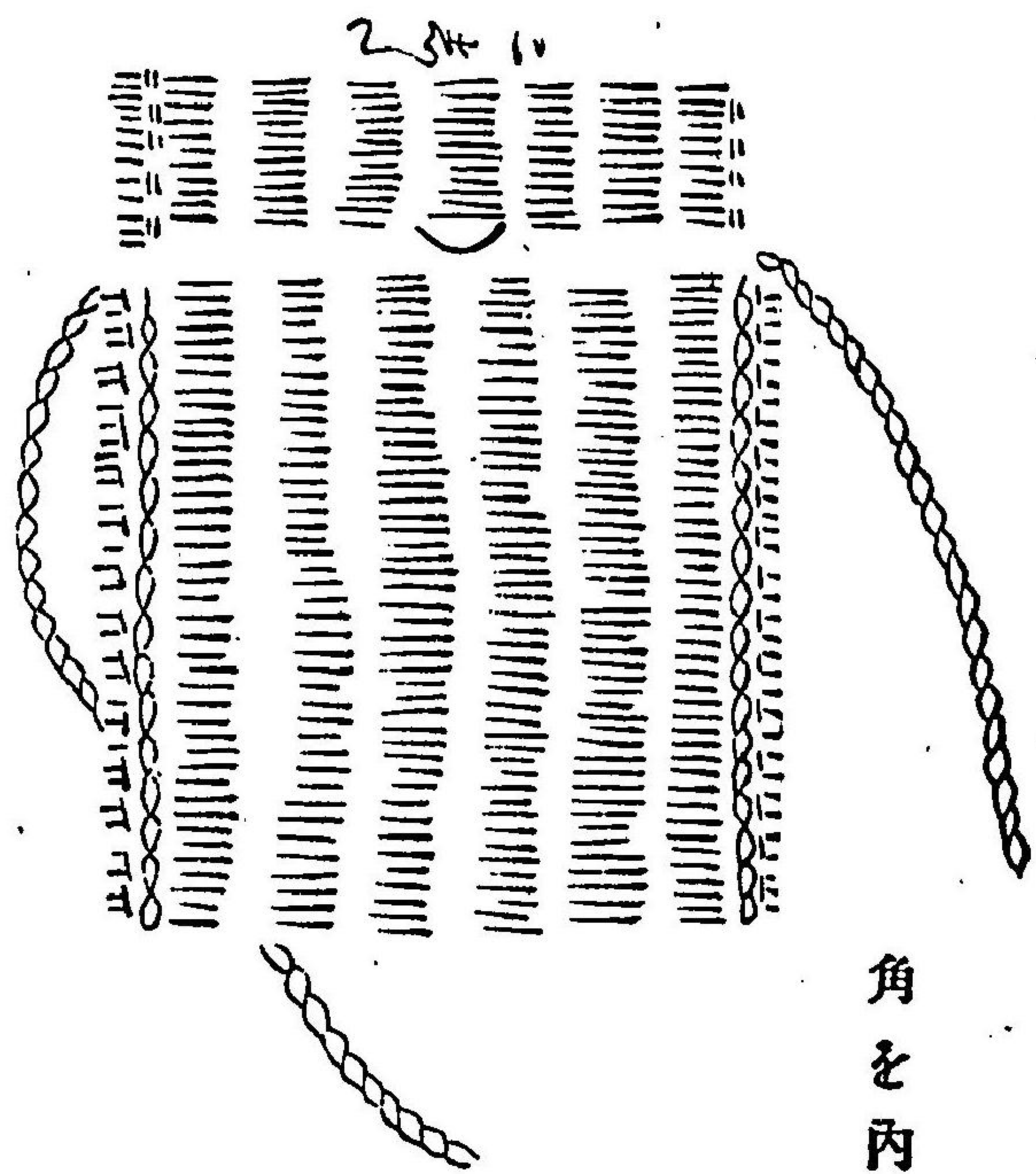




屏

かまそのなたねを入るむしろの端より太繩を當て細な  
わを以てとつ  
る也

屏

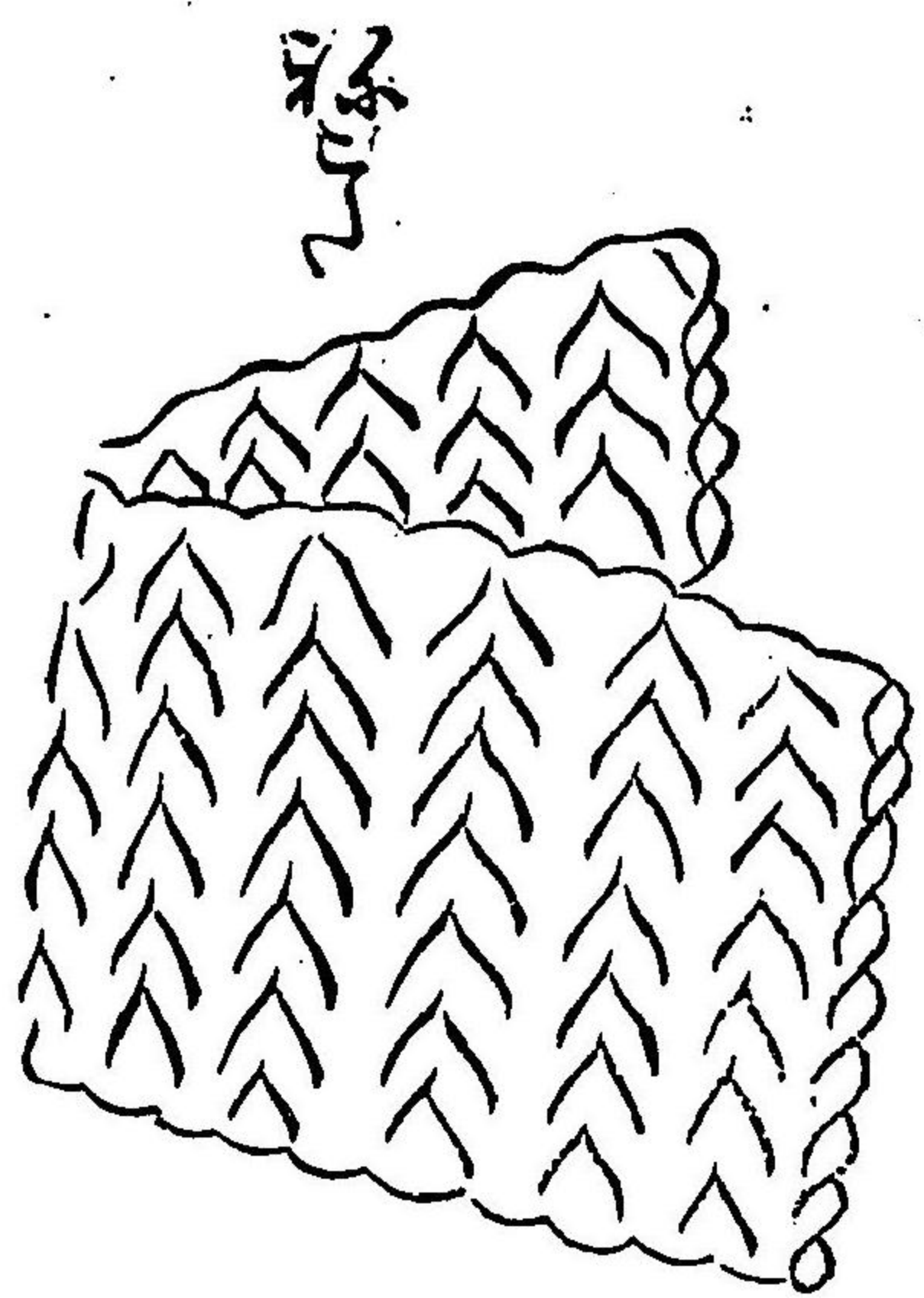


角を内へ折込

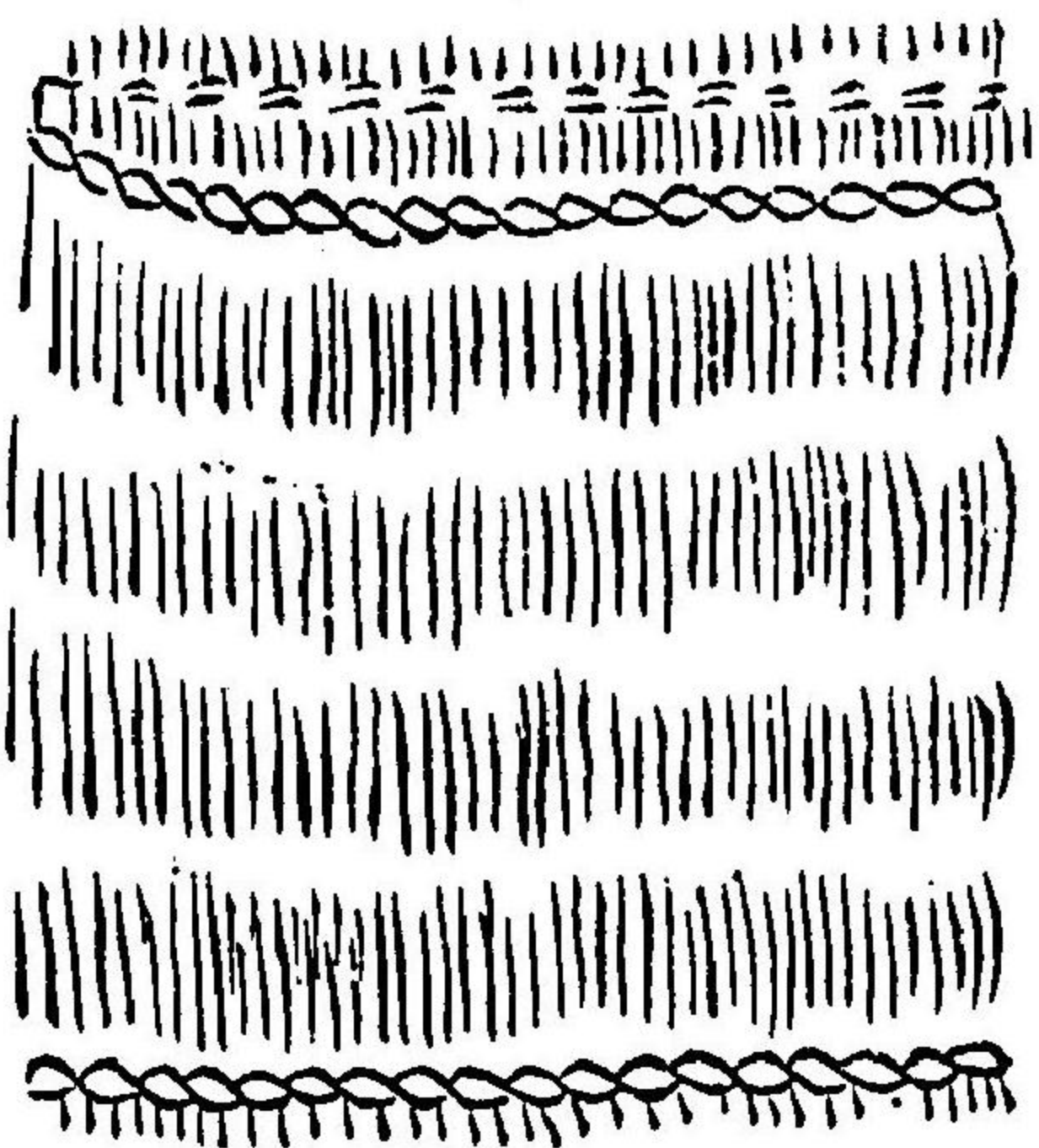
蕙

幅三尺の間よ合蕙たて繩十九目たつるあり一目といふ  
ハ二筋也一枚よよて繩四拾貳尋蕙八把或ハ十把入物也  
ねこた

幅三尺に入目よてなわをたつる蕙十五わ入もの也



蕙





手籠

藁にて編也。は縄のぬいは縄よて四はまあむ口のさし渡し一尺五寸但大手籠なり

馬いゆみ

ぬいは縄よて編也。幅一尺長一尺貳寸七はかくる

旅いつみ

大たと藁十束を縄百尋よして幅一尺五寸長二尺五寸にあむ但十二は掛る大さとわら十束入

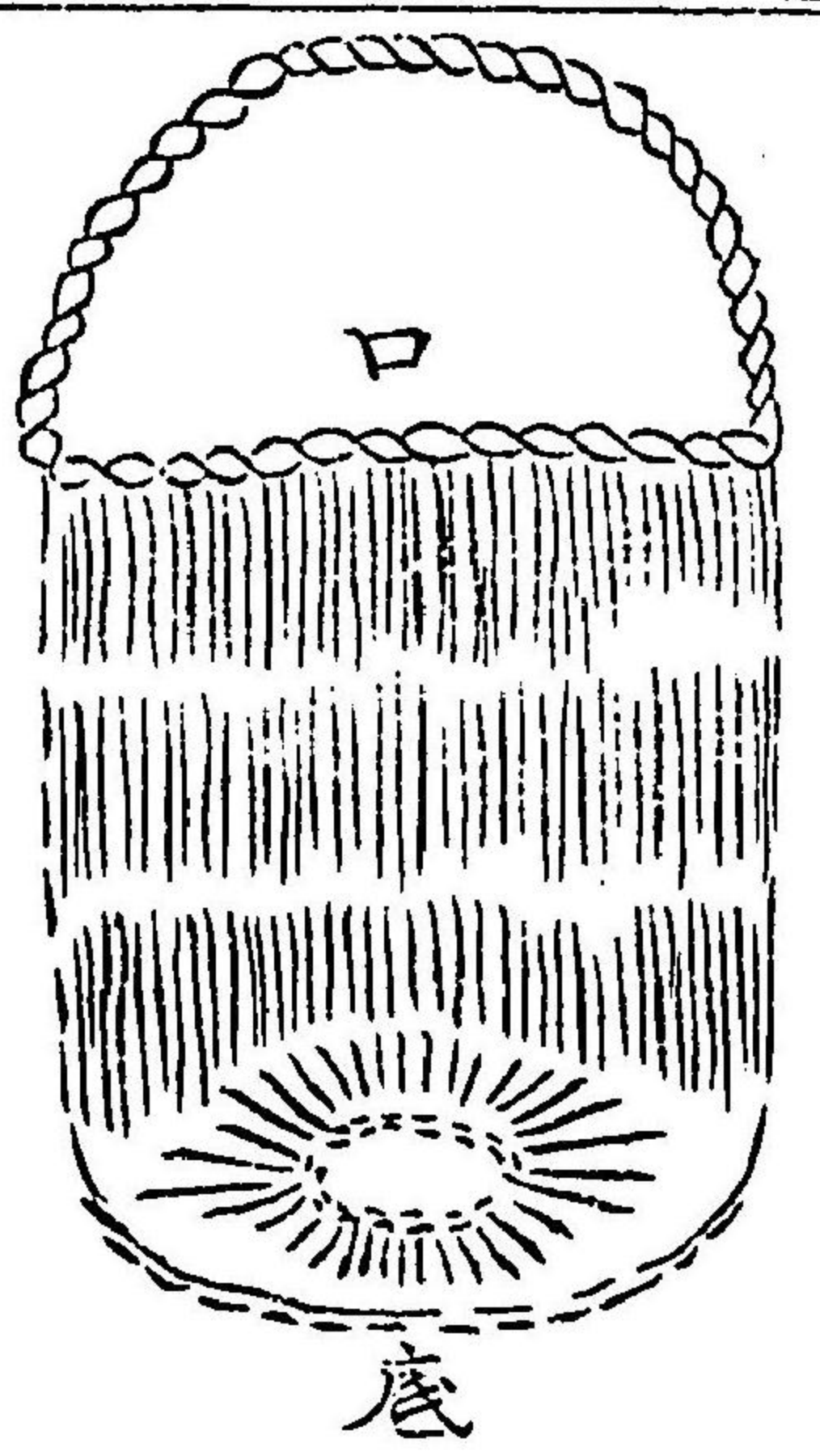
たんぼいゆみ

わら縄六十尋よてはなわぬいはなり廻三尺長一尺壹寸六は懸るなり但六十尋入

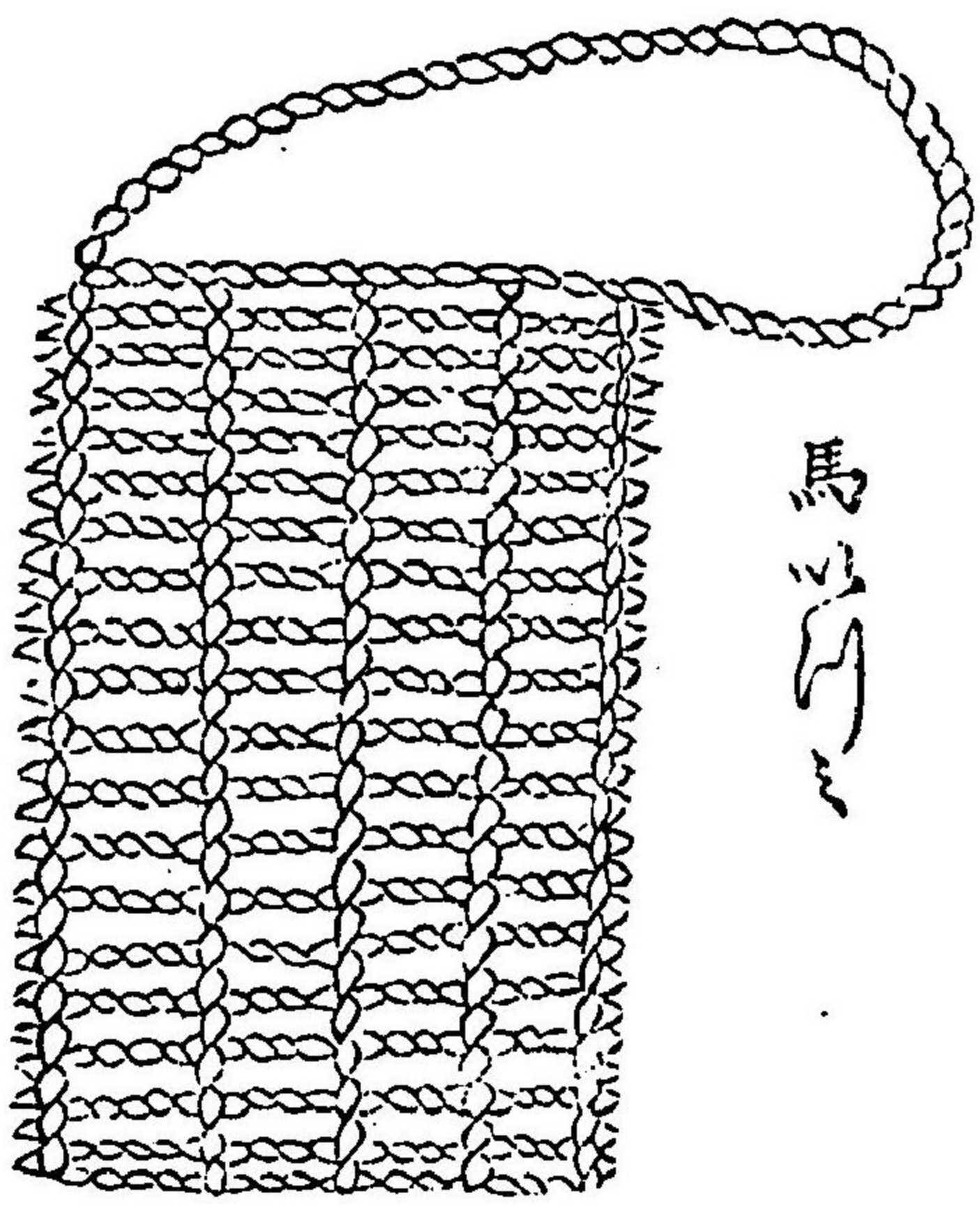
大いつみ

藁縄六十ひろよて廻六尺長一尺五寸にあむ

手籠

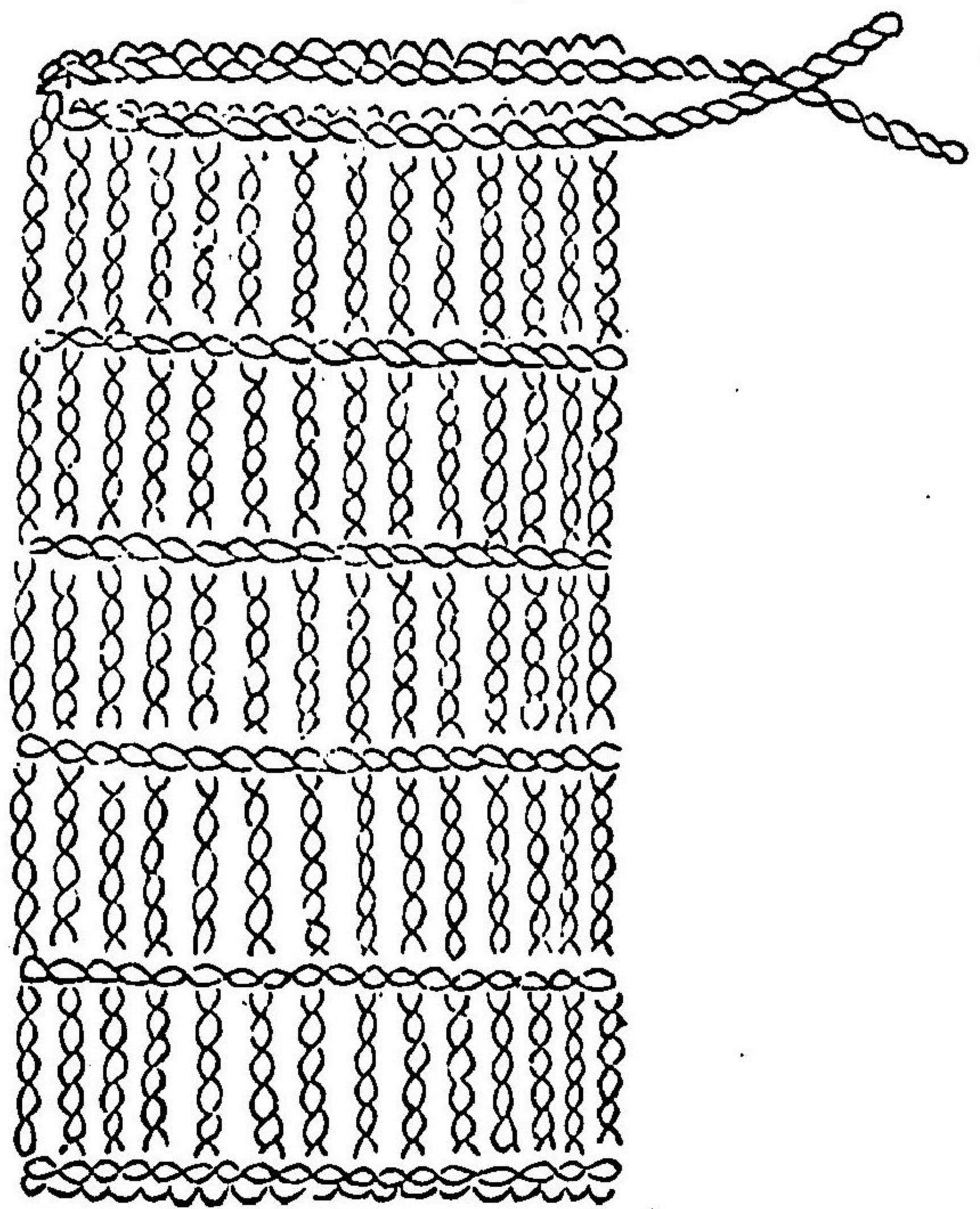


馬いゆみ





旅のつみ



たんはいつみ大いけみ是よおなし旅い  
けみどの一日又二日も遠方馬遣時大  
豆等入る其外田方へも昼飼時入る

持籠

藁繩六十尋よて六はよあむ也幅貳尺五寸長三尺五寸也但  
二人持なり但壹荷よ六十尋入

ふり持籠

藁繩五十尋よて一荷編なり一尺貳寸四方よして四は掛る  
也但一人してよなふ手繩五尺つゝ入

とね持籠

竹よて幅一尺長一尺二寸わら繩よてあむ也但兩方よ手繩  
を四筋付て深き江の土を二人してとね上る也手繩六尺余  
ひきすり持籠

藁よてあむなり或は藁よてもする幅三尺五寸よ横木を付  
て三尺四方よ編なり但横木よ繩をつけて一人或は二人し

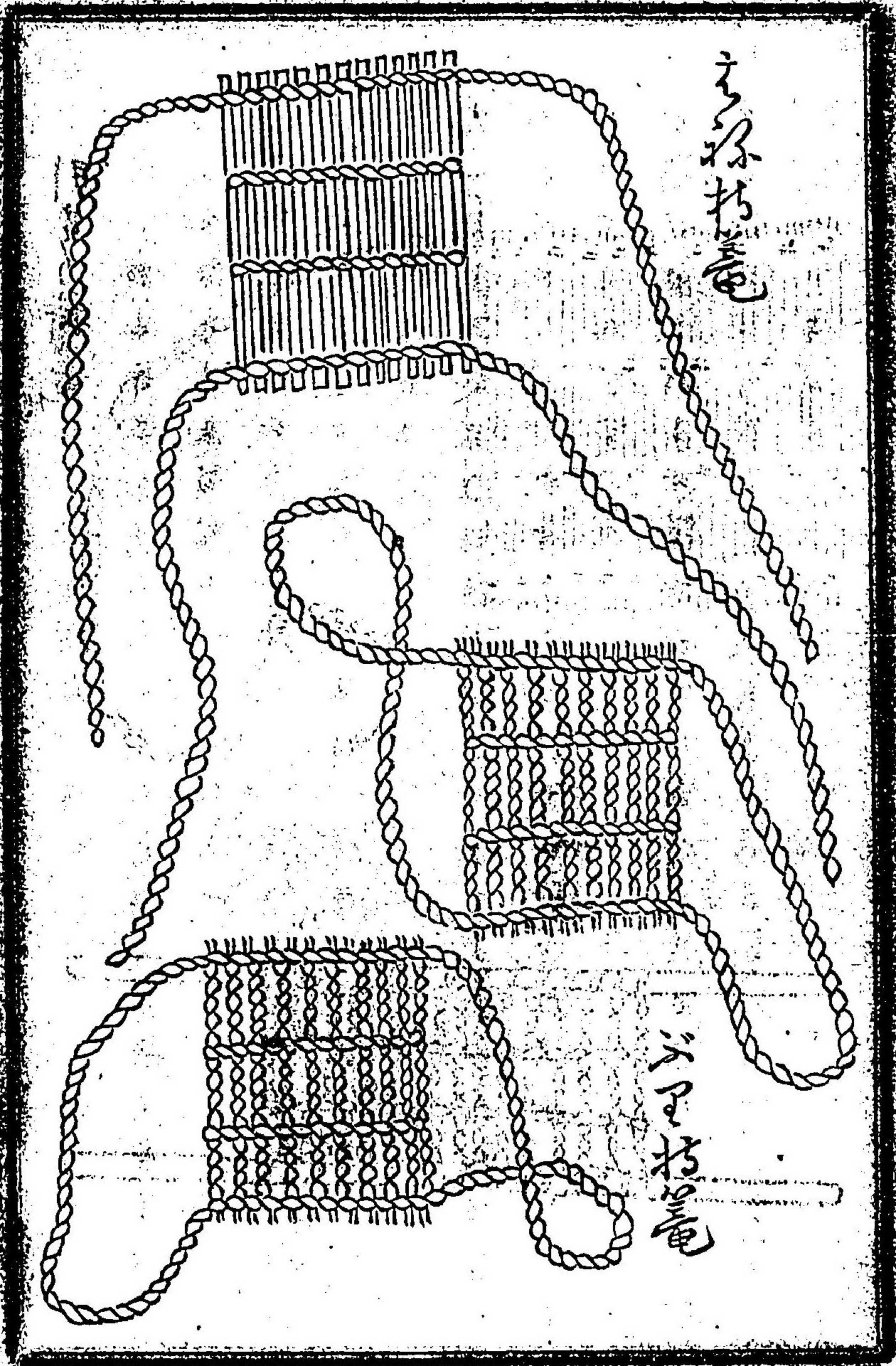
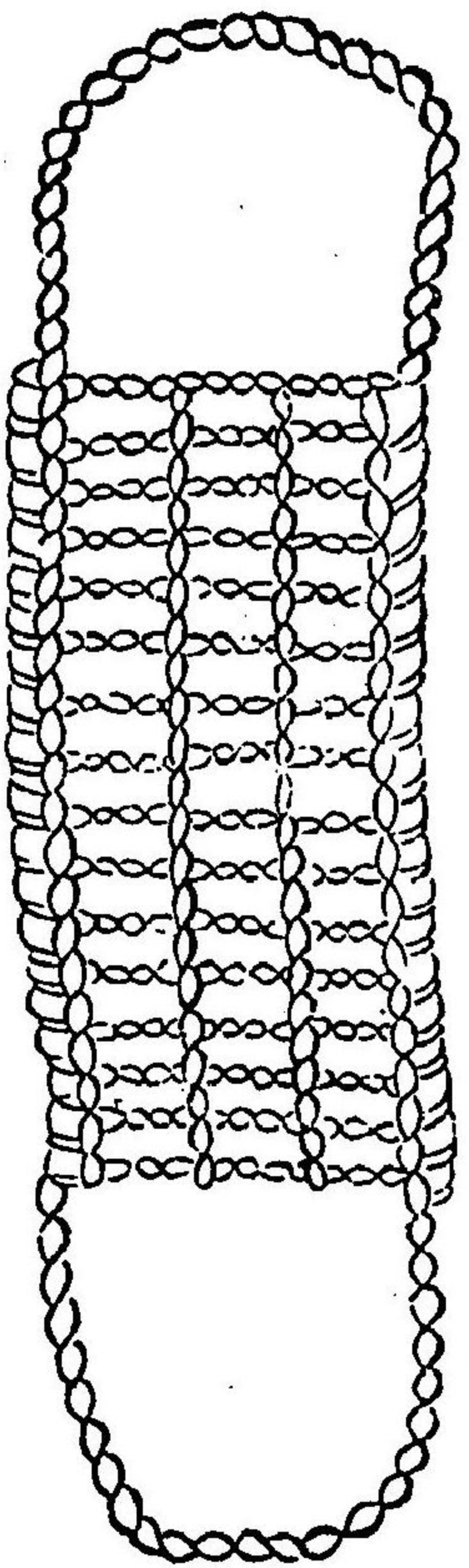


てひく也兩方よ長一丈斗の繩と付る

手持籠

太繩九十尋よて幅二尺五寸長三尺よあむ兩方よ木を通す  
但長八尺三寸たかね三把入

持籠



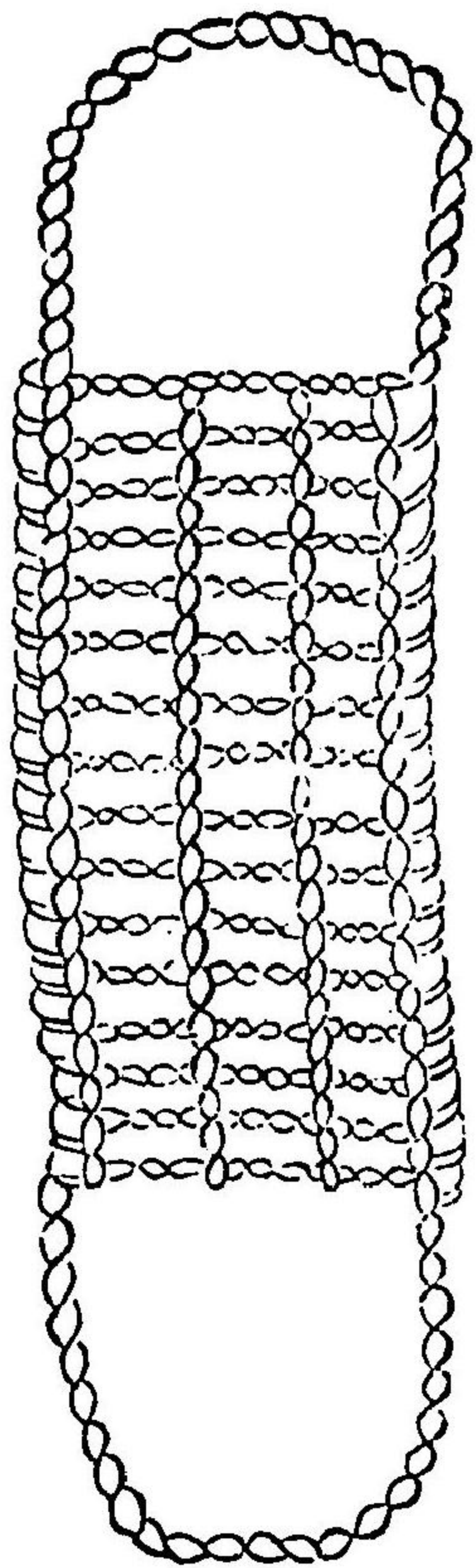


てひく也兩方よ長一丈斗の繩と付る

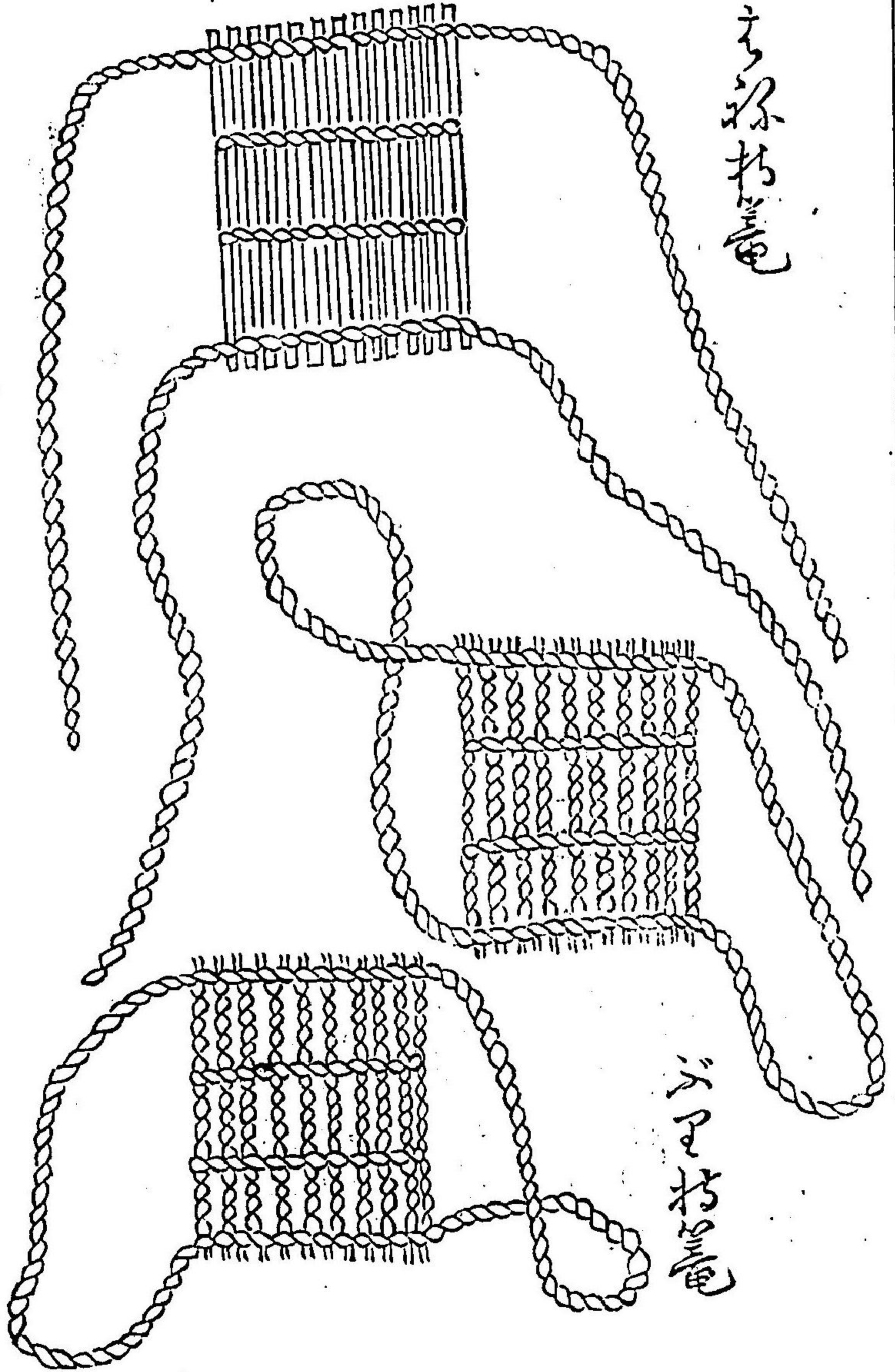
手持籠

太繩九十尋よて幅二尺五寸長三尺よわひ兩方よ木を通す  
但長八尺三寸九かね三把入

持籠



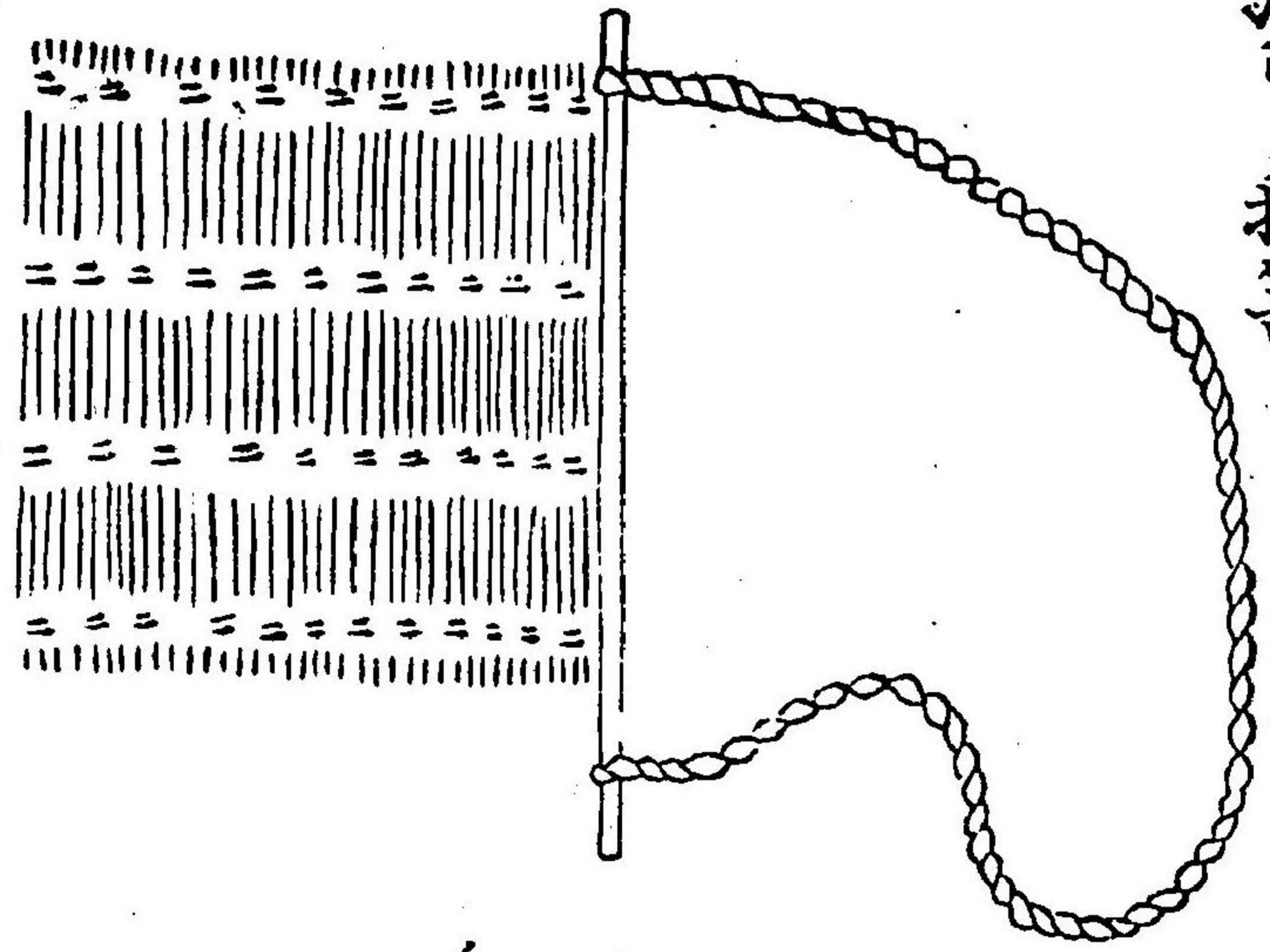
ちんねり籠



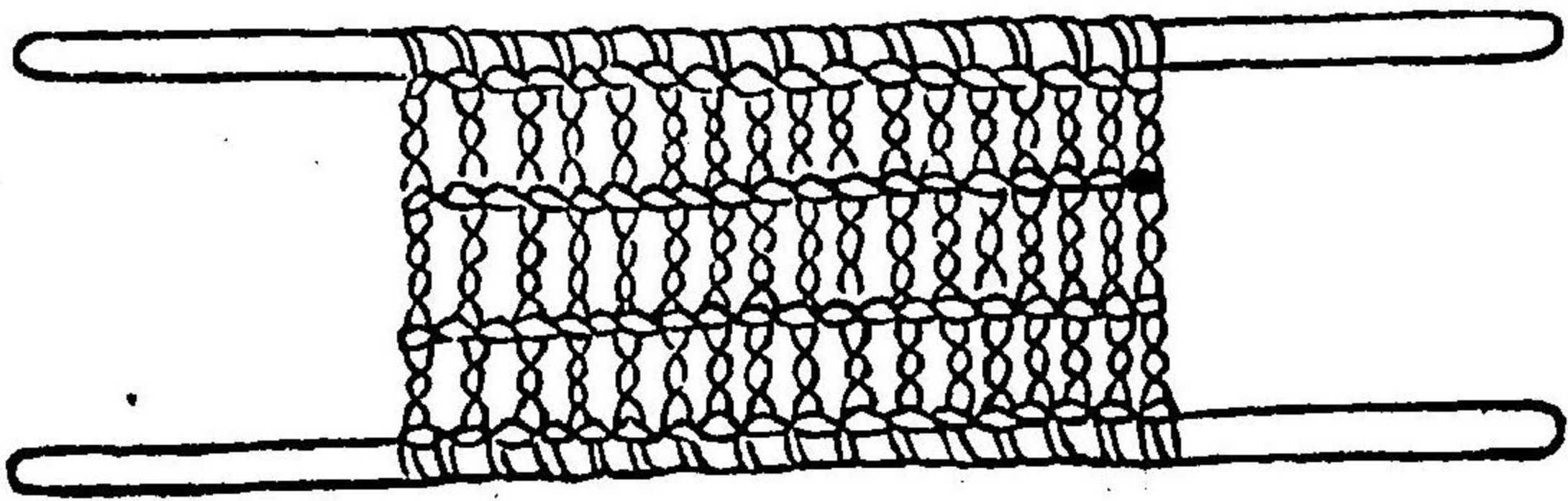
ちんねり籠



引き持籠



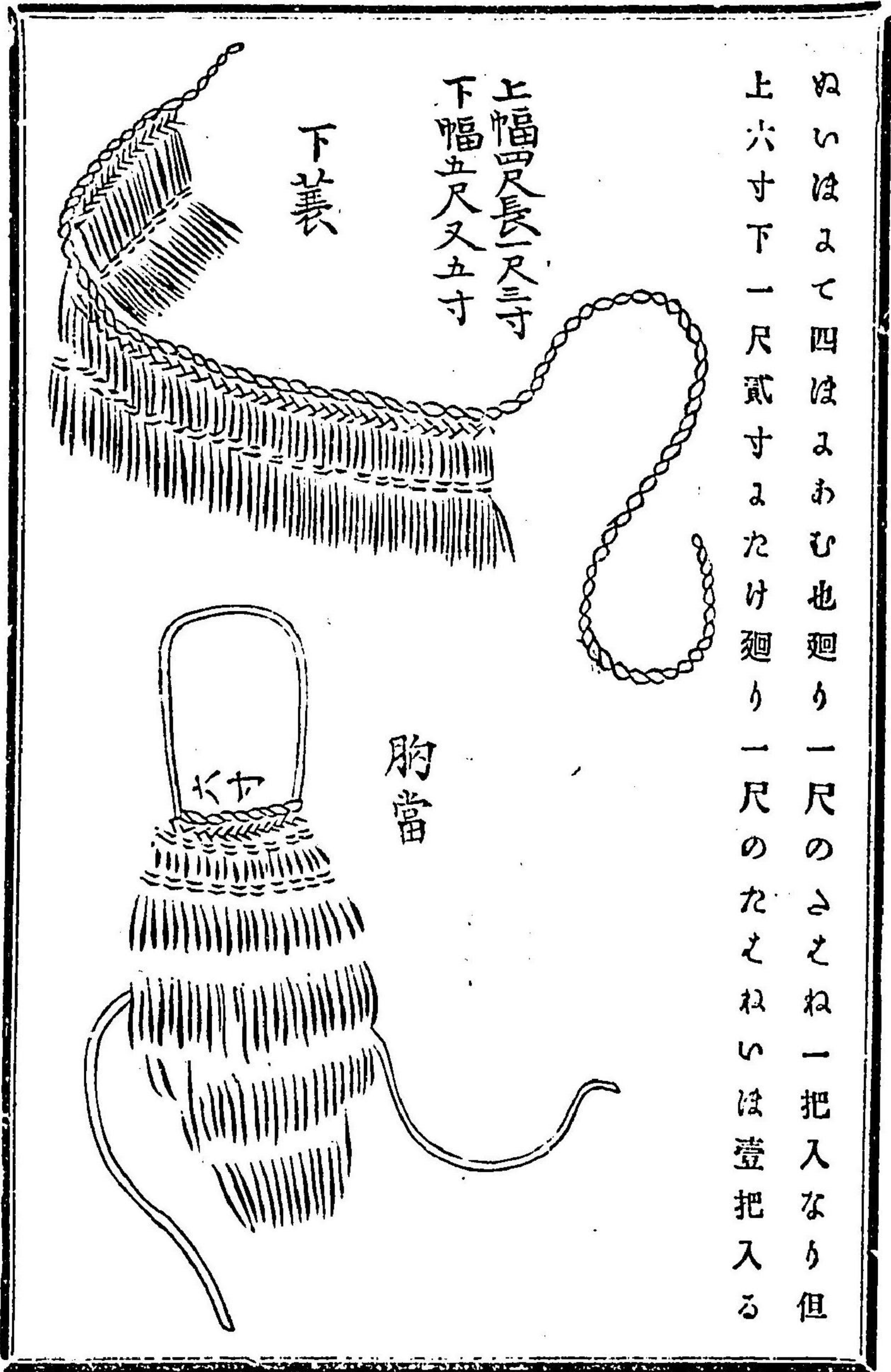
手持籠



とんどり

籠よて編の土は十二は也あみはぬいはにてあむ廻り壹  
尺程のたえね一把よて一ツのはなわあり籠の大たえ三  
束半入ものなり  
ぬいはよてあむの十五は十六はかくるなり編はともよ  
廻一尺ほどのたえね七把入なり七把には大束のわら三  
十五束はとぬくなり







ばか  
ぬいほよて四ほ或は五ほに編なり廻一尺のたえね一把  
入もの也是の泥田をうつ時股よとくなり

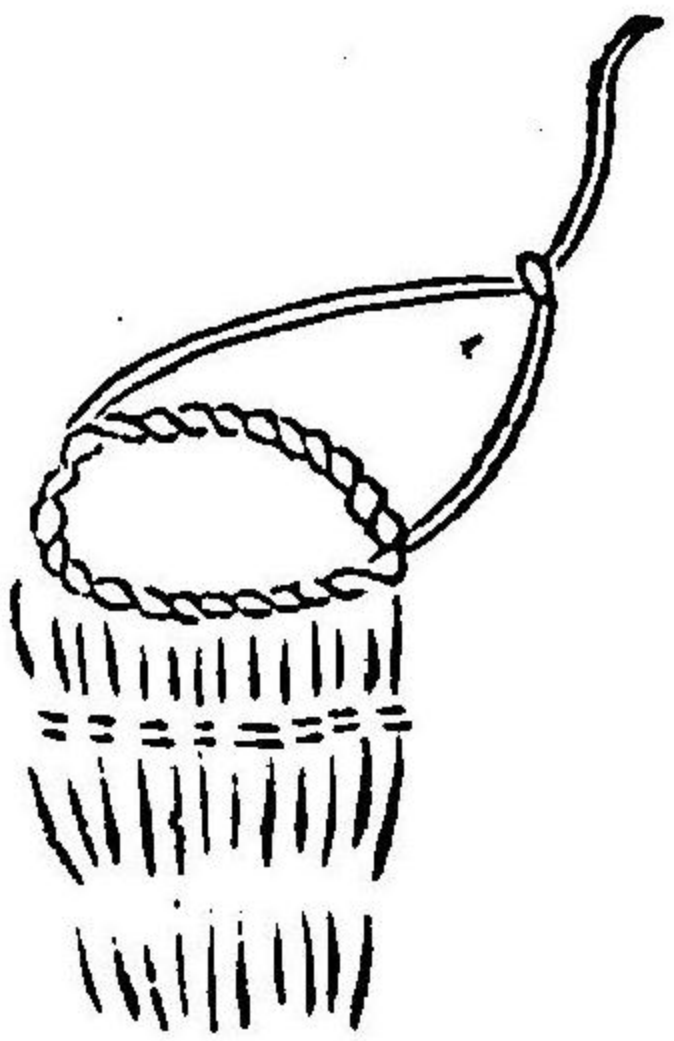
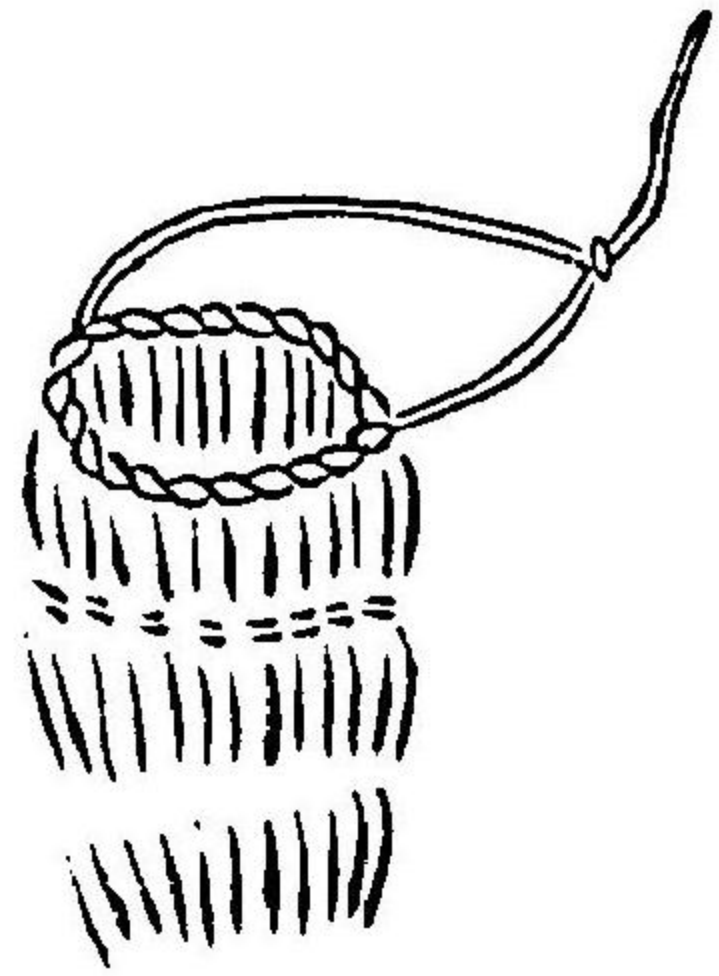
まぐ

藁よて編なり稻蒔時手よかけ用る

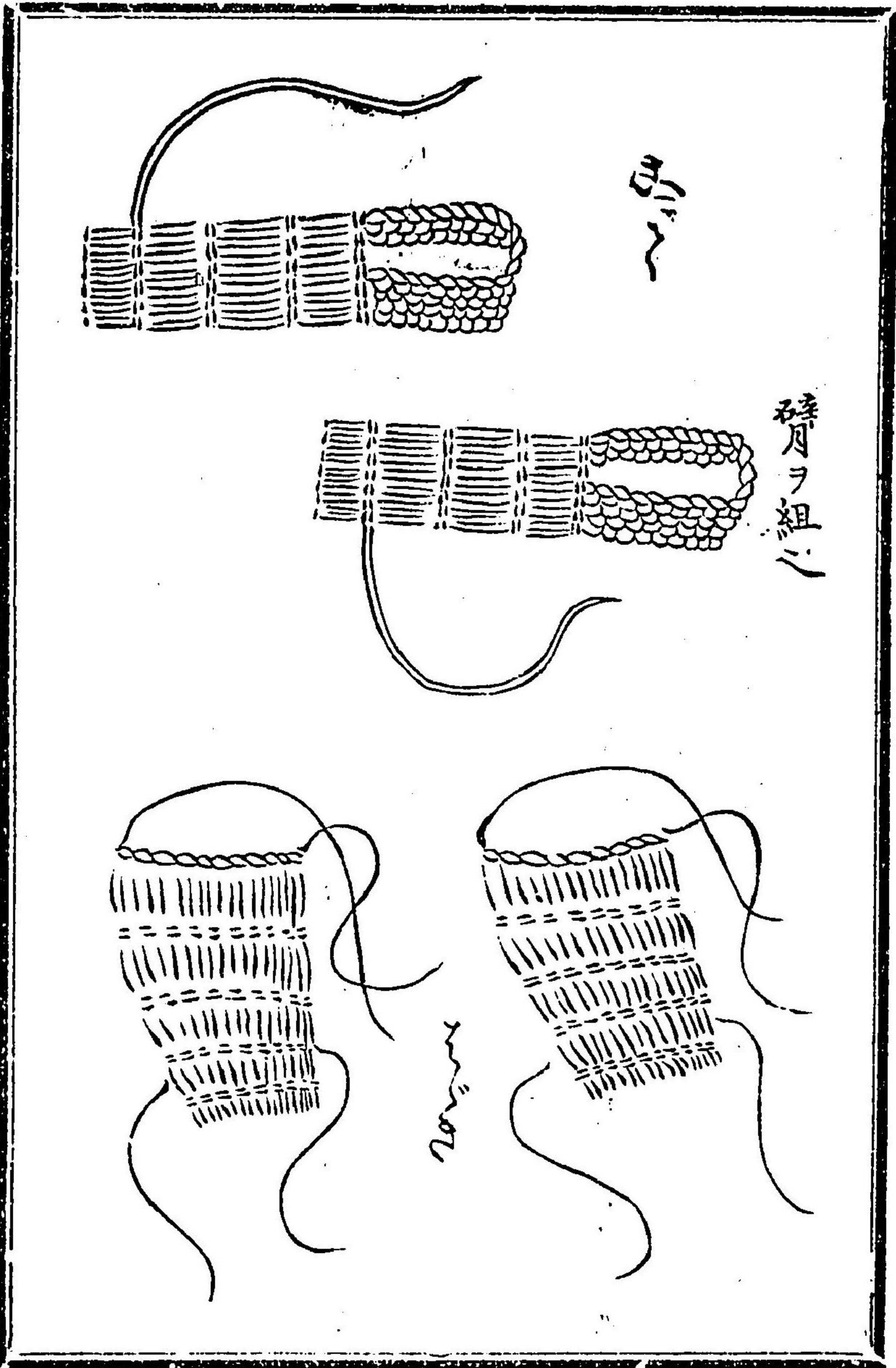
といき

わらぬいはがまなとよてあむ也ほの何ほよてもかくる  
大かた六ほよして上とゞ一尺貳寸長九寸

ばか



長六寸余  
廻り二尺



群月ヲ組



脊當

藁をぬいは縄よて五は或ハ七はかけて編わら八把程入  
ものなりわらハ不打とあむ但藁八把ほど入る

ねこかへ

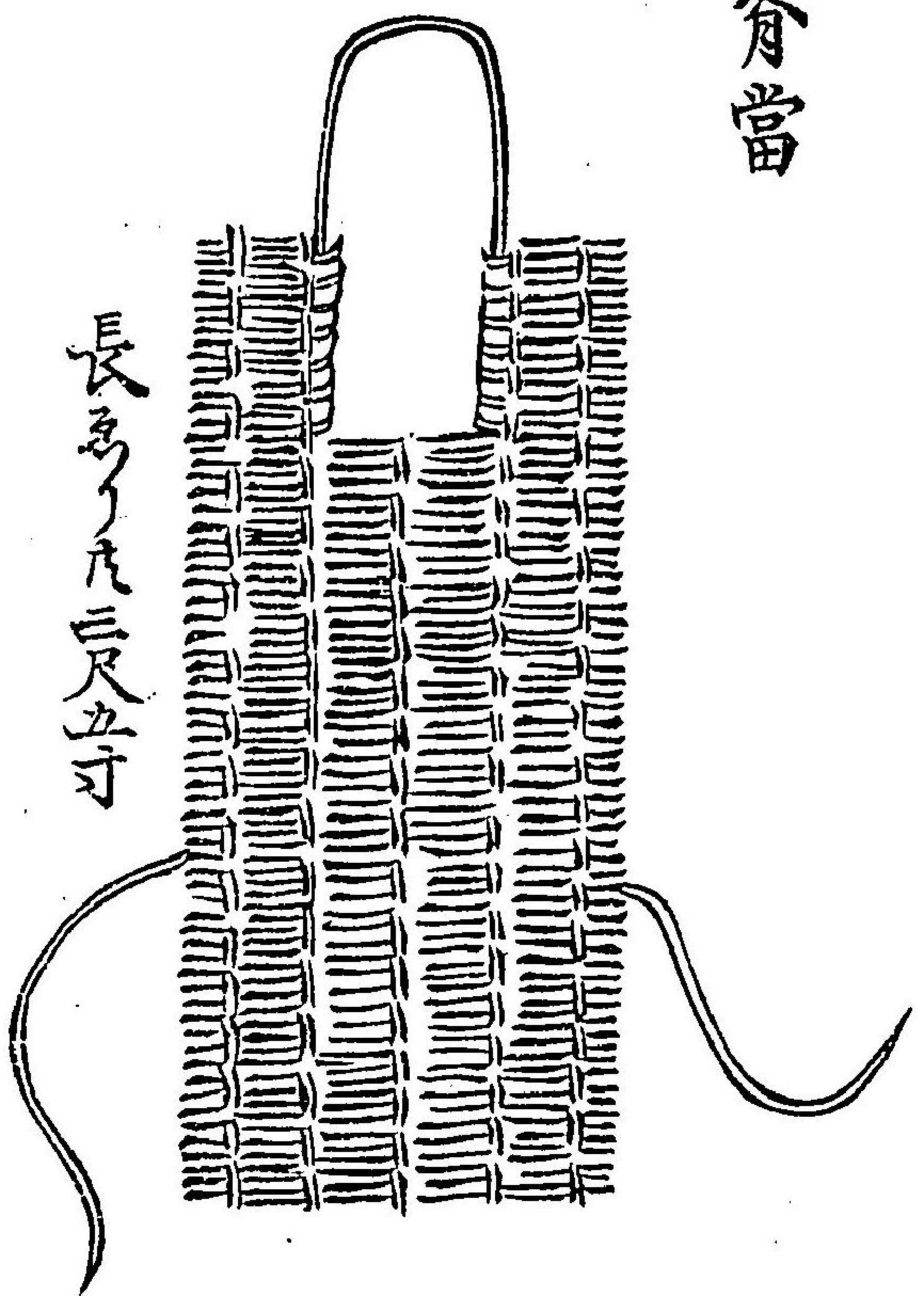
太き縄を十四筋よて、打わらに、厚く組也藁ハ大束二  
束入もの也立に太縄を十四筋入くくむ成ほど厚くかた  
く大たわら二束程入

牟月蔭

田を植る時さおとめのさる物なりわら貳束入脊當の如  
くよしてあつくあむなり所により常のこもよくも用る  
但ゑり付こもにして五はあみ長ゑりとも三尺五寸はし  
ひけ共に貳尺五寸ぬいは縄よて編わらは打て切はうよ

してあむ大たわら貳束入る但雨降の時用る

脊當

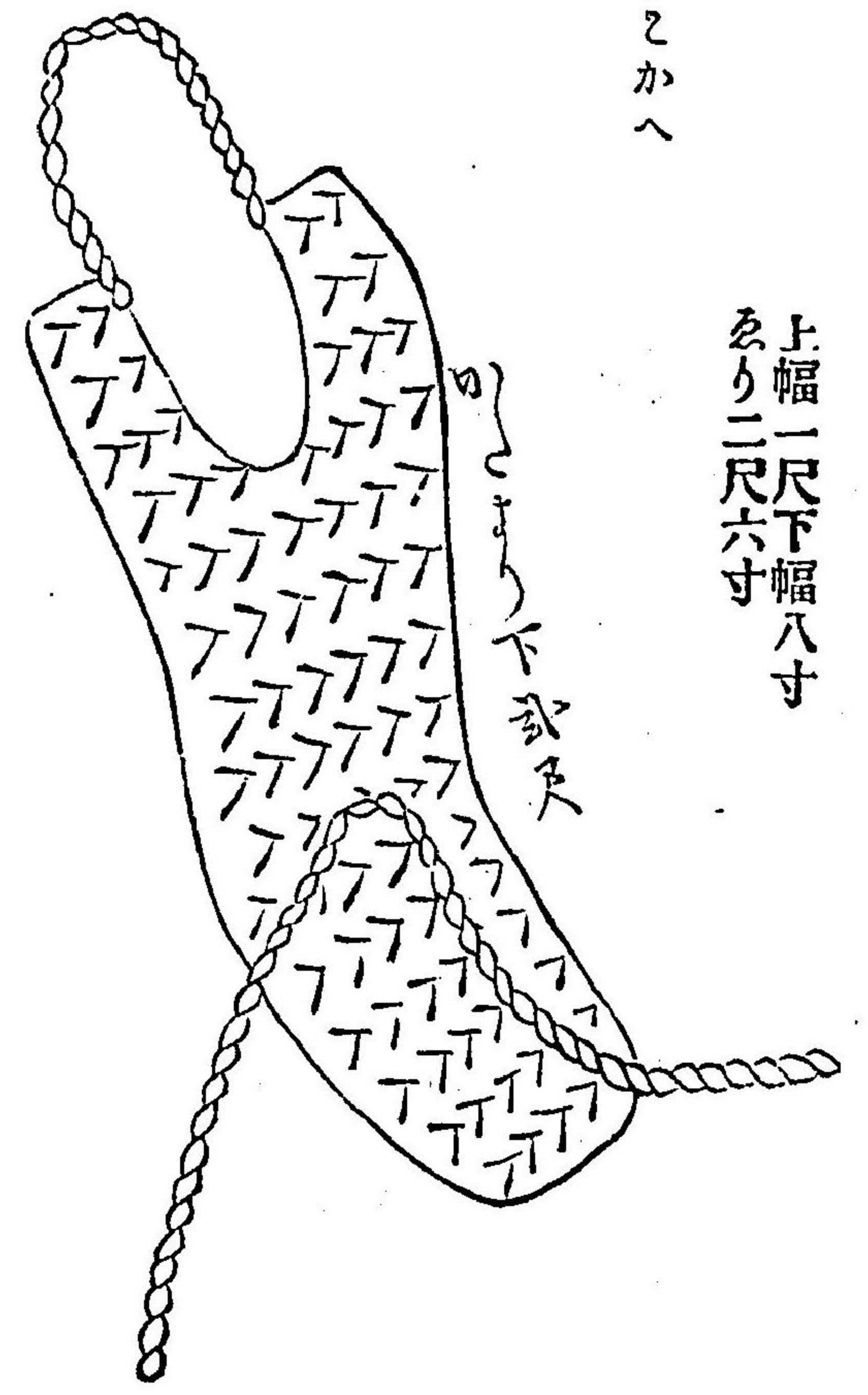


長き九尺五寸

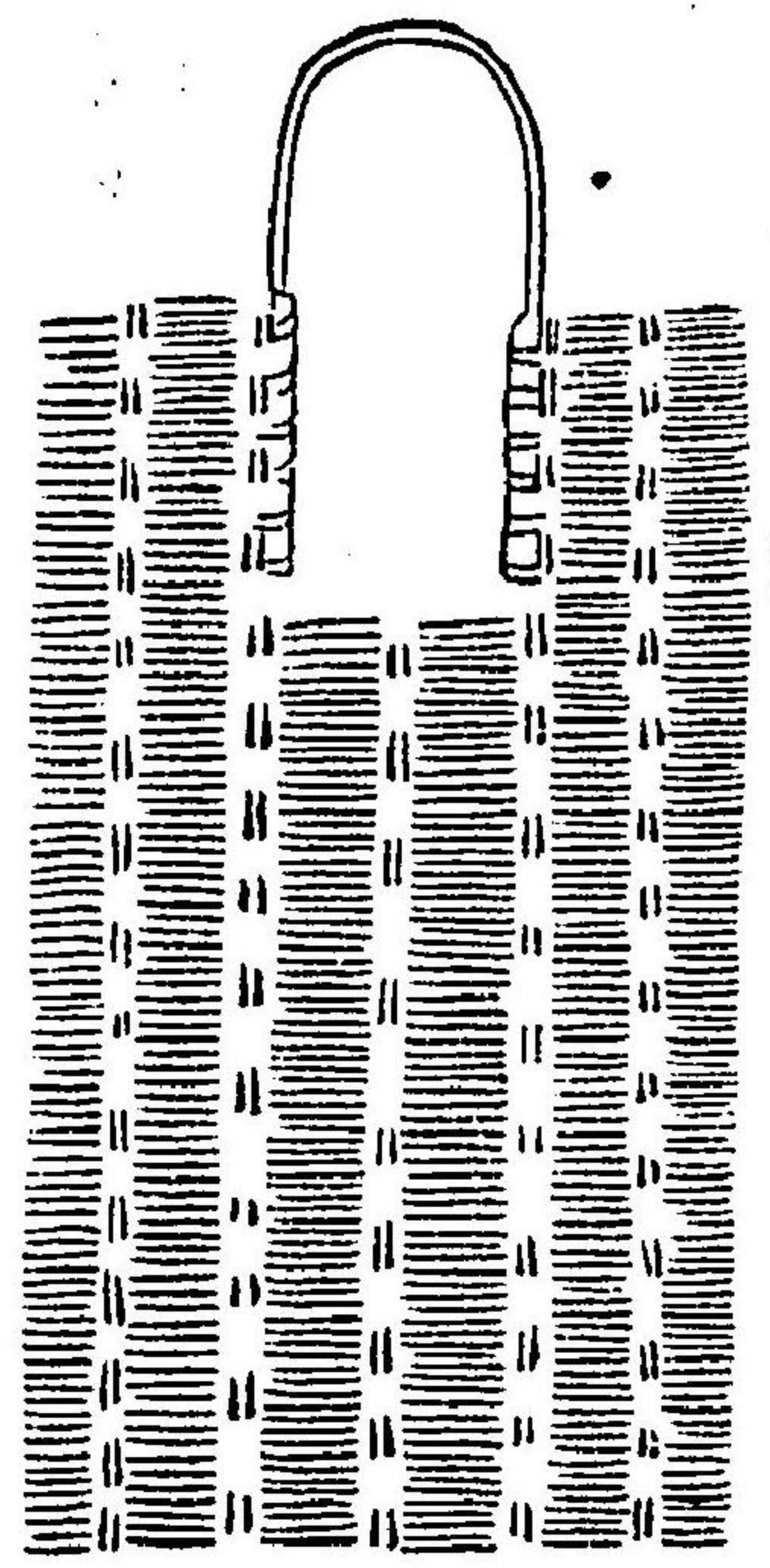


上幅一尺下幅八寸  
あり二尺六寸

ねこかへ



さつき蔭下女着



鼠指

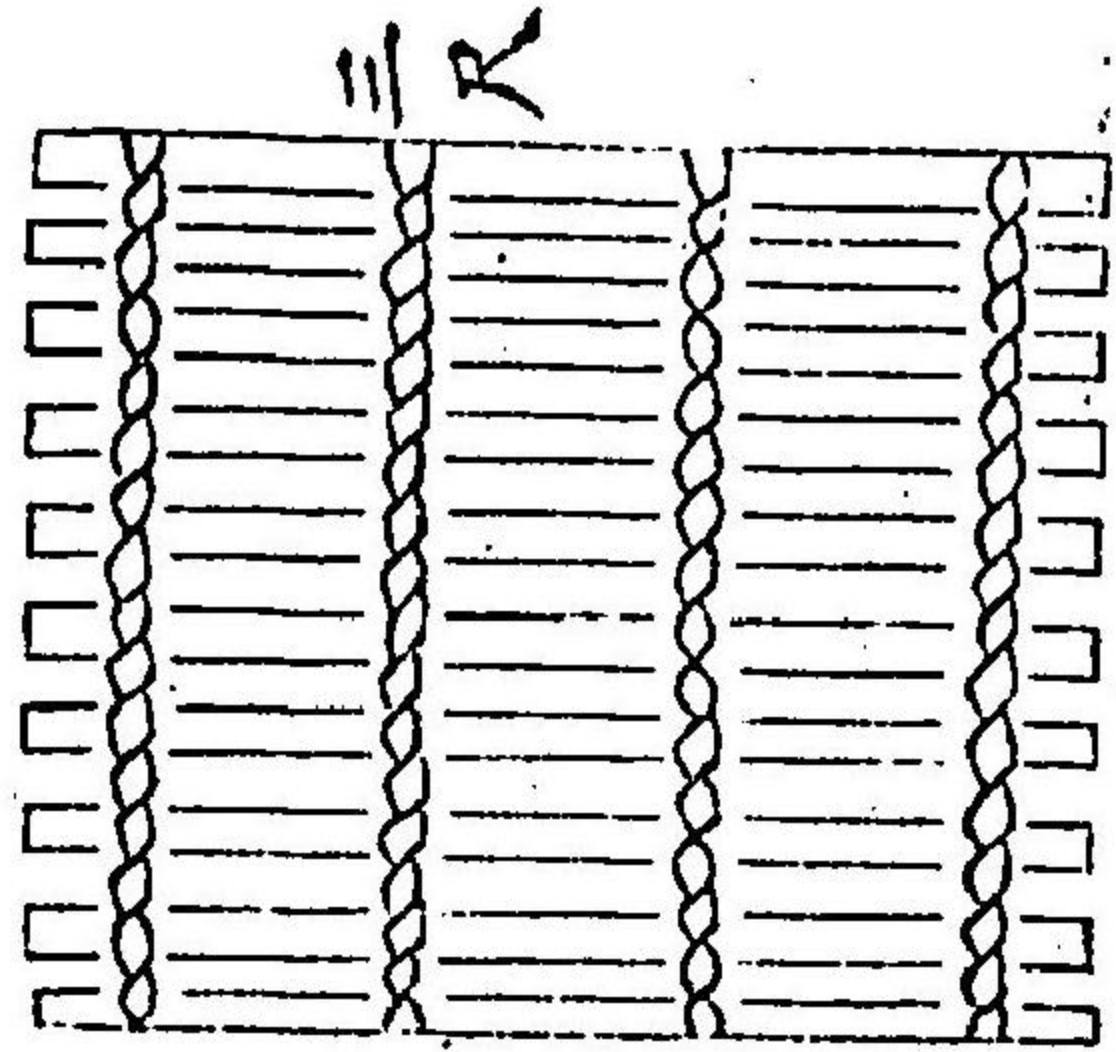
長一尺二三寸角又打なり柄は櫛みて長六尺又仕込是の  
ねつみうくろもちの畔を破るゆへよ上より指なり

土豹止

うくろもちのあせを損るよよつて竹或はすゝきにて簾  
をわみく畔又埋ぬるなり



土豹止



風さし

柄ハヤラカシノ木

先ハ欵

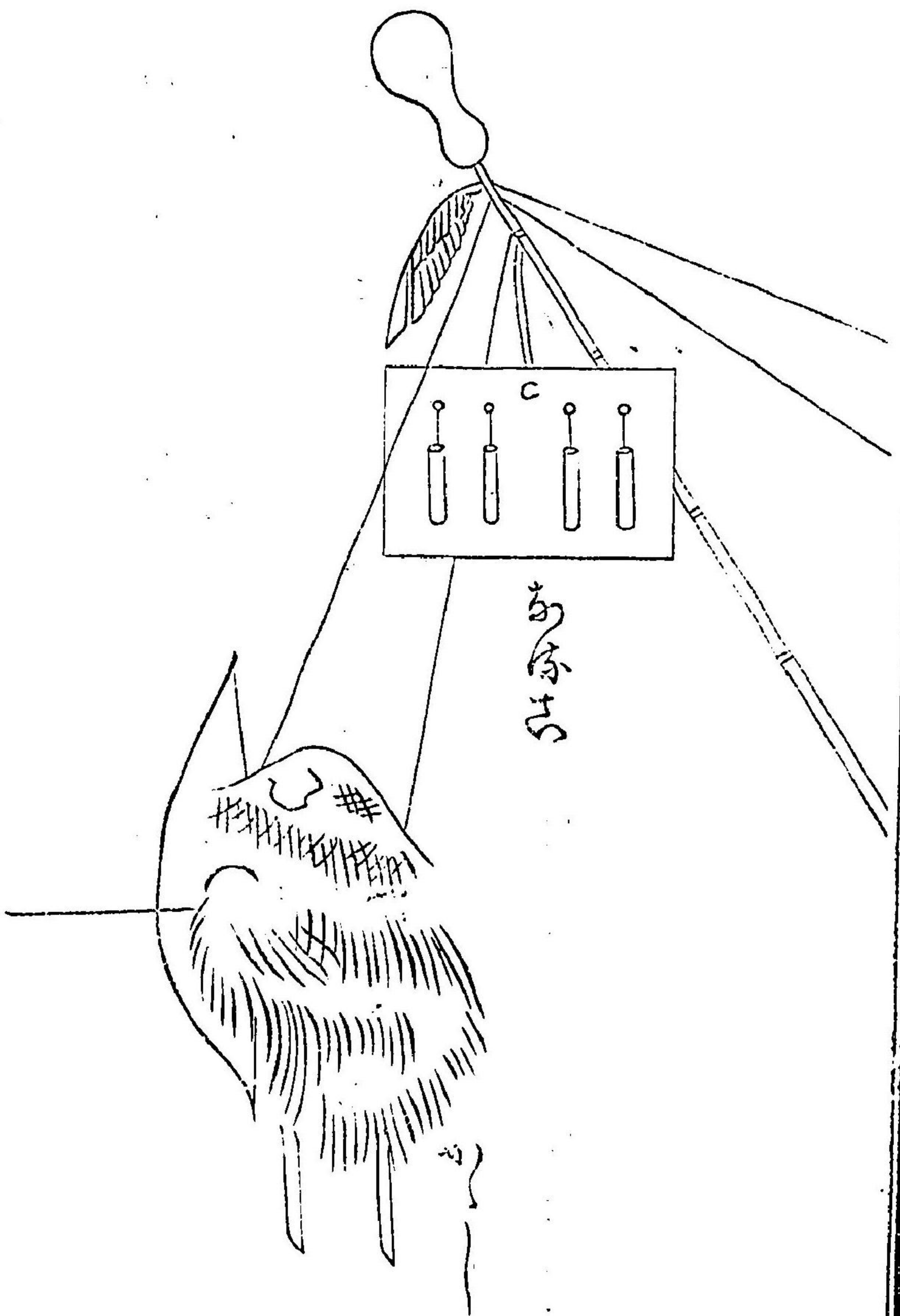
かし

鳥威なり胴大方わらみて拵へ其上に古笠古蓑みて人形をつくる高さ三四尺計

なるこ

管をきりて板を付る板なる程軽きかよし惣して鳥類のおとし品とは死鳥死けの物鳥の羽又は麻から亦是糸よかみを切付又ハ竹竿何みても黒白を初常に見馴る物をまの板五六寸又横幅七八寸但板のすきは風よてうこさなる能きなり





此一部者石川郡御供田村居住之十村役土屋又三郎通世  
 して直心といひける者の編まる物也元祿の半頃か改作  
 奉行園田左十郎と云者罪出来の時不調法の品有く禁籠  
 し園田落着之刻は籠舎は一年計經く御救免十村投は被  
 召放平百姓も成けるか無程通世しける是を算用場の奉  
 行共へ一應不達との答にく百日計遠慮しくゆるされ享  
 保四年正月に病死歿ハ七十八歳かと覺るの由或人語り  
 ける當年去人も借て寫して直心か心意を盡して編たる  
 もの故賞感の餘り毫を染る者也  
 享保四年厚秋仲旬

勅諭 耕稼春秋卷之七大尾



# 勸農叢書出版書目

- |       |         |                     |
|-------|---------|---------------------|
| ○勸農叢書 | 百姓傳記    | 洋裝合本<br>全三冊         |
| ○勸農叢書 | 養蠶絹飾    | 和本圖入<br>全二冊         |
| ○勸農叢書 | 栽茶說     | 全寫生圖入<br>全七冊        |
| ○勸農叢書 | 魚鑑      | 同圖入<br>全二冊          |
| ○勸農叢書 | 耕稼春秋    | 洋裝圖入<br>全二冊         |
| ○勸農叢書 | 農家心得草   | 和本圖入<br>全壹冊         |
| ○勸農叢書 | 栗樹栽培法   | 和本圖入<br>全一冊         |
| ○勸農叢書 | 田圃驅虫實驗錄 | 全上<br>全二冊           |
| ○勸農叢書 | 救荒便覽    | 洋裝圖入<br>全一冊         |
| ○勸農叢書 | 再種方     | 和本<br>全一冊           |
| ○勸農叢書 | 老農茶話    | 一名二度稻，記<br>全<br>全一冊 |
| ○勸農叢書 | 縣令須知    | 洋裝<br>全二冊           |
|       |         | 近刻                  |

其外逐次出版



明治十八年十二月廿三日出版届  
同 十九年二月出版



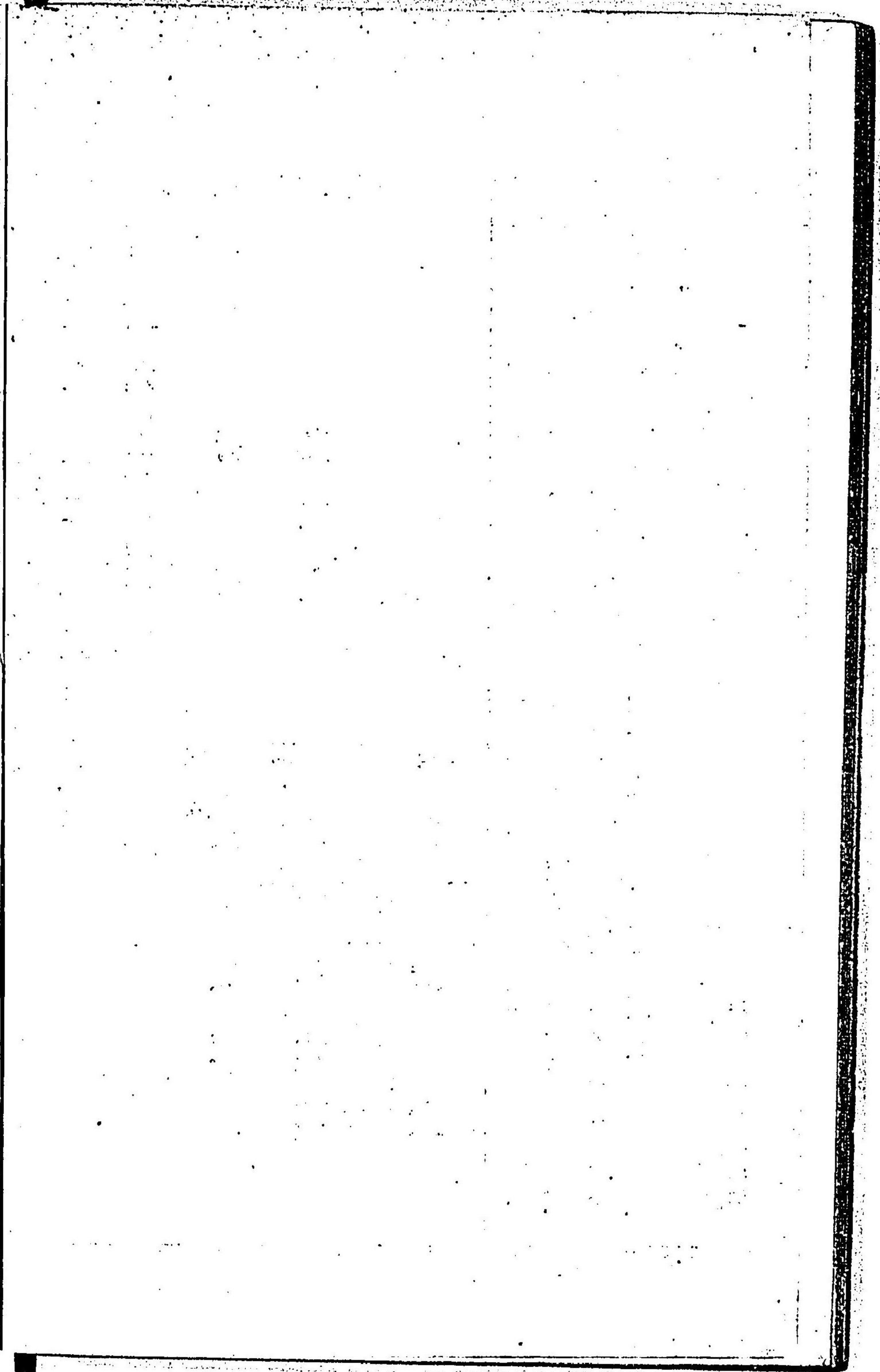
著 者 故 人 土 屋 又 三 郎

出 版 人 東 京 書 肆 穴 山 篤 太 郎

發 兌 農 書 肆 有 全 所 隣 堂

勸農叢書ハ篤志諸君ノ賛成ヲ得テ規約ヲ設ケ同盟員ヲ募リ毎月一次内外ノ農事ハ  
勿論工、商業、山林、水産、博物等ニ關スル古書ニシテ其版既ニ絶ヘクルモノ其未タ版  
木アラザル寫本及ヒ新ニ著述譯纂セシモノ、最モ世ニ有益ナルモノヲ現今著名ナ  
ル諸大家及ヒ弊舖等ノ積年珍藏中ヨリ採編出版シ同盟員ヘハ定價ノ半額ヲ以テ頒  
布スルモノナリ

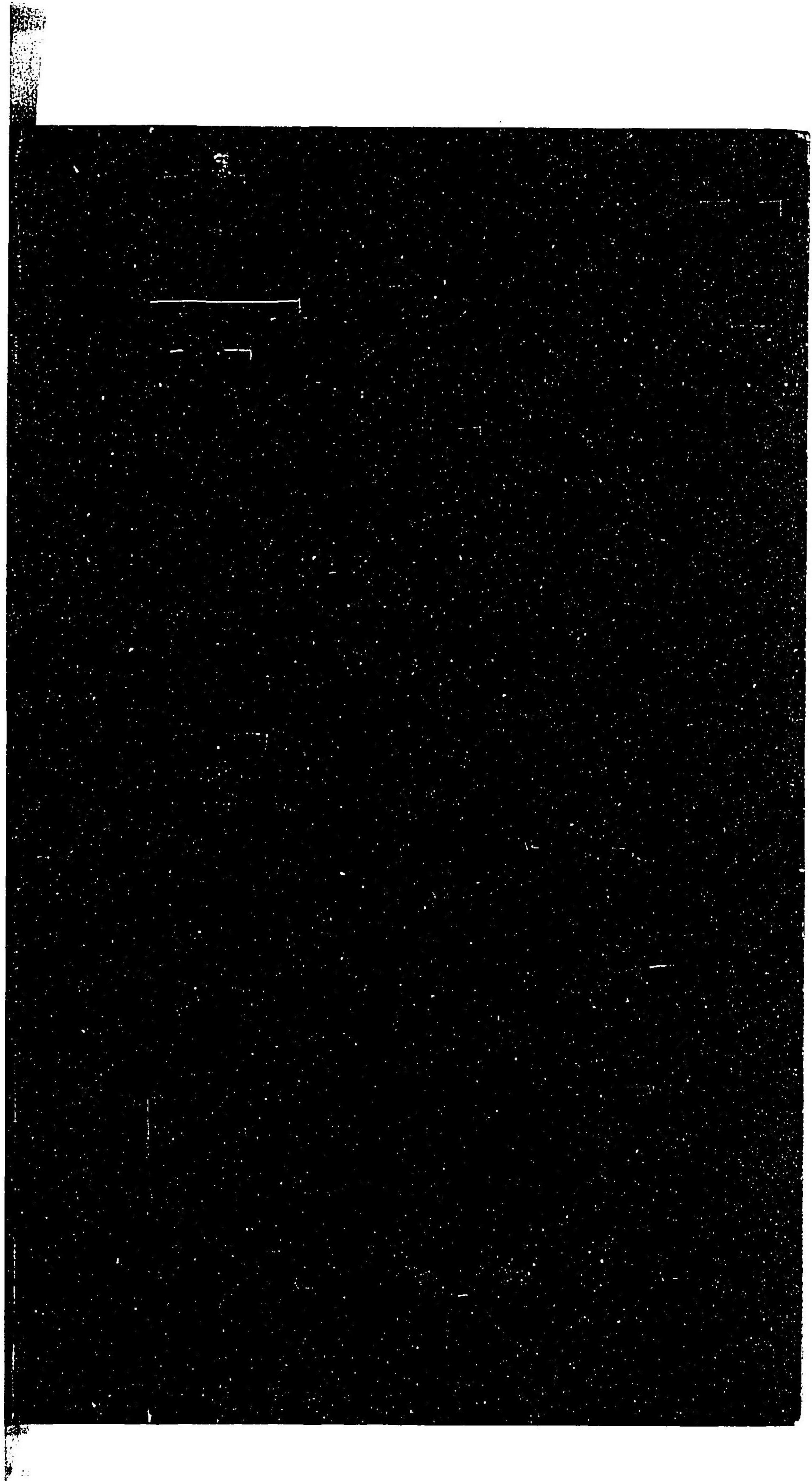






30  
149







30  
149



35.1224